無彩色の森

馬場駿

目次

一　亀裂　三
二　彷徨　八五
三　混沌　一四七
四　奔流　二〇七
五　散華　二六二
あとがき　三一八

一　亀裂

1

朝の六時に目覚めた。珍しく小用で何度も起きるということがなかった。アルコールを止め、就寝前の飲み食いを止めたおかげかもしれない。横になったままビニールクロス貼りの白い天井を見ていたら、設置されている火災感知器が右に左にと僅かに動いた。「うそだ」と目をこすってみる。なぜか薄っすらと涙も出ている。傍らのティッシュペーパーをとって目頭を押さえた。歯はすでにボロボロだが、どうやら目にも劣化がきたらしい。

窓のカーテンが外の光で明るく縁取られている。波城広志は、ゴムが緩んだパジャマを左手で抑えながら、のそのそと起き上がってカーテンを開けた。目の前の丘陵は木々の若葉で明るく色づいている。真っ直ぐに延びた二車線の道路には、すでに十数台の車が行きかっている。通勤途上の人たちの足もせわしい。マンション三階から見下ろす街はすでに活気を呈していた。この輝き具合が、いまの波城にとっては精神的に何ともきつい。

「葉光市か、砂絵のやつ」と、この市名について思い出した。

すでに東京都下のこの街には陽の光たっぷりの市名が付いているのに、初めてここから外を見渡した娘の砂絵は木々の葉が光る街だと言って、勝手に葉光市と名付けて悦に入った。

「たしか今頃の季節だったな」と大きく背伸びをしてみた。

尻をかきながら中廊下に出て隣室の襖を静かに引いた。居ない。「やっぱり」と掌であくびを抑えこむ。

本人が語らないので詳しくは知らないが、妻の邦子は宝飾品の営業スタッフだという。なんでも成果によって報酬が支払われるだけで、現在は社員というわけではないらしい。勤務時間も一定していない。

それでも仕事は仕事だ、六十五歳だというのに羨ましくもある。なぜか邦子は、ここ一か月ほど早朝に出勤をすることが多いが、時間帯からして屋外の営業が出来るわけがないという疑問がある。波城は意味もなく頭を激しく掻いて髪の毛をくしゃくしゃにした。

四畳半という狭い部屋に陣取ったパラサイトシングルの砂絵は三十歳。外泊したり一日中寝ていたり生活はめちゃめちゃだが、出て行かれたら老夫婦の息が詰まることは想像に難くない。気配がしなかったのでたぶん昨夜は帰宅していないのだろう。「間違いがあったら」などと心配する歳でもないので胸騒ぎもしない。

波城は和室の隣にある部屋のドアを勢いよく引いた。

「オヤジ、ノックぐらいしろよ」と下着姿の砂絵がにらんだ。

元は収納スペースだった。いまも半分はベッドという名の荷物が占領している。床は散らかり放題だ。ゴミ女とも言えるが、セミヌード姿はなかなかのものだ。

「居たのか、悪かった」とドアを閉めようとした時だった。

「何膨らませてんの、その歳で朝立ち？　糖尿じゃなかったの」

「起きたときからずっとだ、お前の裸は関係ない」

毎度ではないが、熟睡した朝にはかなりの頻度で奇跡は起きる。もっとも熟睡そのものが月に一、二度なのだが。

「いいけど、収めるのに青少年の真似はやめろよな、気持ち悪いし」

砂絵は肌の露出をどんどん減らしながら、変顔を作った。

「知らないのか、前立腺肥大の予防には不可欠な作業だぞ」

「どこの誰の学説よ、まったく。いいから閉めて、ここでやったらマジで殺す」

「やるか、バカ。それより帰ってくる時ぐらい電話

しろ」

「帰れないときだろ、ふつう！　それでも親か」

娘の声を消すようにしてドアを閉めた。愚にもつかないこういう会話がわが子とできる。波城が「早く嫁に行け」と口にしない理由だ。和みが自分を包み込むのが分かる。そんなふうに感じる自分は病んでいると、波城は気づいてはいる。

顔を洗ってコップ一杯の水を飲み、自室に戻った。じつは波城、自室のノートパソコンで四日連続同じ画面を出して見詰めている。

ネット情報なので半ば疑いながらも戸建で販売価格が総額六十万円という点に興味を持ったのだ。但し現地はかなり遠い半島の中だ。顧客を釣るための目玉で、店頭に立ったとたん「予約済みになったのでこちらではいかがでしょう」というありふれた仕掛けかもしれない。それならそうで構わない、とにかくいつもながらの気鬱な空間から逃れられるだけでもいい。「やっぱり行こう」と声に出して布団をたたみだした。

午前八時、玄関の壁にぶら下がっている温度計を見てから戻って、薄手のウインドブレーカーを羽織った。案内された物件が雑草などで荒れているかもしれないので、下もジーンズに履き替える。靴は毎朝の散歩に使っているものを選んだ。

「オヤジ、どっか行くの、珍しいじゃん、そんな格好して」と砂絵がマグカップを片手に出て来た。

「たまには出るさ、トカゲだってたまにはアスファルトの上を歩くし」

「なんだそりゃ」

「砂絵こそ出かけるのか、また男の処へ。けっこうおしゃれしてるじゃないか」

「止めてるわけ？　父親として」

「バカ言え、背中押してるんだよ」

「ありがと」

「夜遅くになるけど帰るから」

「気が向いたらでいいよ」と真顔で砂絵がうなずいた。

小さいころから鋭い子だった。特別な嗅覚を持っ

ているので油断できない。
「そうだな」と応じてから玄関を出た。
「本気なのか」と、地下駐車場で車に乗ってから自分に問いかけた。物件が実在し案内をされて納得もしたら、ほんとうに購入する気があるのかという意味だ。
「邦子や奴らが賛成するかどうかだな」娘も息子も「奴ら」で一括りにしてみた。特に長男の孝之は融通が利かず水平思考も苦手な男だ。大学院まで出してやったのが失敗だったのかもしれない。しかも専攻は臨床心理学。真四角な人間は角が四つ、ふつうの四倍も人にぶつかる勘定になる。
一旦かけたエンジンを切ってドアを開け、右足を出したところで、また動きが止まった。ためらうこと自体、気持ちが半端だ。いつごろからだろう、決めたはずのことを覆すことが多くなったのは。
「無理だ」と気持ちが揺れだした。地図を見ての概算だが最寄りの駅から六キロも離れている。商店街も遠そうだ。しかも、現地あけび台分譲地の中の目指す物件が標高百メートルと書いてあったから、海岸に近い駅からのアプローチの大半が坂道だ。車という足を失えば生活に支障をきたすのは目に見えている。あと一年で七十、掛け値なしの高齢者だ。第一マイカーは走行距離十五万キロ、運転免許も高齢者規制が厳しくなりそうなので、両方ともその寿命が迫ってきているのだ。
「いや、いま決断しなければ、早々に老後破産になる」
波城は、自分を鼓舞するかのように大きな音を立てて車のドアを閉めた。

2

「これでなみきさんですか、珍しい名前ですね」
髪を七三に分けた現地の不動産屋の青年は、波城が手渡した住所、氏名、電話番号、メールアドレスだけのシンプルな名刺を一瞥したあと、微妙な笑みを浮かべて「どうぞ」と言った。手のひらではなく

人差し指でソファーを指してだった。のっけから名前にケチをつけられ、さらに「すわれ」と命じられたに等しい流れだ。こちらは蔑みもあらわに数秒間青年の顔を見てやった。

腰かけながらあらためて見渡せば、かなり手狭な店内だった。

「いまは事務所なんか小さくていいんです、全国ネットですからパソコンでほとんど済んじゃいますからね、ご心配なく。宅建取引業者票はお客さんの後ろの壁です」

こちらの胸中を見透かされたようだ。案外勘は鋭いのかもしれない。実は波城、免許票入りの額は事務所に入ってすぐ反射的に確認をしていた。元は買取屋として不動産業界の片隅に居たのだ、当たり前のこと、番号前のカッコの中の数字は(1)だった。つまり営業開始から五年未満、加えて店の小ささで多少信用できるかどうかを疑い始めた。鋭い男なら抗議されたと感じ取るだろうと思い、反り返るようにして背後の業者票を見るしぐさをしてみた。当然のように大口が開く。あえてしたエチケット違反だ。

「ははっ、けっこう体柔らかいんですね」と口を斜めにして微笑を返してきた。

青年は波城の不機嫌さに気づいていないらしい。

「電話で確認した物件なんだけど六十万は本当なんだね？　広告通りなら土地は八十坪もあるし、建物も延床で三十二坪、築三十六年とまあまあだよね」

するとこの若造は露骨に顔をゆがめた。

「坪で来ましたか、今は平方メートルでお願いしますよ、いちいち三・三倍してこっちの物件情報と顧客の念押しの一致を確認するなんて、かったるいじゃないですか。ネットでも物件のお気に入りが現在十人を超えてます。注目されてます。疑うならこちらとしても勧めませんけど」

「ただの確認だよ、君はいちいち引っかかるみたいだね」

「安いから遠路ここに来たはずなのに、なぜ安すぎるんだと波城さんが不満げだからですよ。それって当社に対する疑惑の表明でしょ、嘘だろこれってい

う。素直に物件見せてくれで済む話です」
何でこうなるのか。波城はいらだってきた。
「社長さんはいないの、この時間」代われと言いたかった。午後二時だった。
「目の前にいますが」
一瞬息を吸ったきり吐くのを忘れて若造の顔をしばらくの間見つめた。
身分を口にしたとたん落ち着いたのか若すぎる社長は、概略と断ってから、低価格の理由を並べ始めた。まず敷地は傾斜地であること。次に、建物の三分の一程を改装中に住人が腰を痛め、重症だったので入院したこと。つまり買主が自費で改装を完了させる必要があること。最後に、調査したところ一階部分の屋根の一部に雨漏りがあること。
「雨降ってたんだ、調査した日って」少しからかい気味に言った。
「天井板が一部腐ってたんで」
「ああ、それで」
「あと、買い取り後にこれだけの出費が必要になります」と、デスクから物件情報を取り出してきた。受け取って読むと、あけび台自治会入会費四万円、年間管理費五万円となっていた。
「大丈夫ですか」と生意気に若造が目玉を大きくしてこちらをのぞきこんだ。
「失敬だな、君は。それくらいの金はあるだろ、普通」
「ええ、確かに普通ですが、質問自体も」
無礼この上ない。目じりがビクッとしたが、ここは我慢と波城は自制をした。
「覚悟はしていたさいろいろ、それでも分譲地だから安すぎるし。現場を見せてくれないか」
本当は来る途中の車の中で、低価格は何か事情があると踏んでいたので特に驚かなかった。住人の自殺や殺人事件などが絡む事故物件でなければいいと思った。
「きょう、これからですか」
「できれば」自分の気が変わらないうちに動き続けたかった。

若造は、返事をする代わりに先ほどのデスクから地図らしきものを出してマーキングをした。
「これ分譲地の明細図です。自分で見てきてくれますか、僕も一回でたどり着けましたので楽勝だと思います」
「一人で行けって何。だいいち外観だけ見たってダメだろ、買いたいから見たいわけだよ、僕は。物件は更地じゃない、戸建てだ」
「一時間後に別の現地案内が入ってるんです。成契したとしてですよ、こっちが手数料二十一万で、波城さんの方は三万です。ダブったらねえ、当然どっちが優先か」
六〇万掛ける〇・〇五。そうだとしてもそこまで言うかと、波城は心底あきれた。
「わかった、いい、一人で行くから、現地のカギを出せ」
「あ。大丈夫です、簡単に中に入れますから鍵無しで」
「客に泥棒の真似をさせる気か！」と、ついに怒鳴ることになった。
「外壁が一部無いんです、改装途中ですから」
そう言った後で若造は、またフッと小さく笑った。こんなところを買うんですかとでも言いたいのか、どうか。
「すてきな物件だな、意地でも見てくるよ」と波城は嫌味を言って立ちあがった。
「いったいこの国はどうなるんだろう、教育がなってない」
波城は腹立ちまぎれに、身の丈に合わない嘆きを口にした。長いドライブのあとで疲れているのかもしれない。苛立ちからハンドルを何度も叩きながら、別れたばかりの不動産業者を罵り続けたあげくの台詞だった。
土地勘はいいほうなので、クネクネと曲がった分譲地内の道もほとんど迷わずに現地に着くことができた。最寄り駅からたった数キロなのに、街の中心部とは別の世界だった。

目的物件の外観写真は御多分に漏れず新築時のもので現状とは大分違うが、すぐに確認できた。階段の先に平屋部分があり、奥に二階建ての部分がある。平屋の一部外壁が剥がされ、真新しい間柱が数本突っ立っていた。これでは改装ではなく改築だろうとため息をついた。確かに侵入可能ではある。

階段下の駐車スペースは土のままで少し波を打っていた。雑草たちも当然育っていて花らしきものを付けている奴もいる。釘など尖ったものは落ちていないと確認できたのでバックで車を押し込んだ。降りてやや上に目をやると、真横の梅の枝で野鳥が遊びまわっていた。

「メジロだな、あの子は」

詳しくもないのに決めつけて小鳥の姿を目で追い続け、波城は勝手に和んでいる自分に好感をもった。

「こんな弾んだ感覚、何年ぶりだろう」

あとは自分一人で改装できるかどうかだと、波城は少し錆びが出始めた軽量鉄骨製の階段を上りだした。

波城が出て行ったあと夢叶不動産のサッシ戸を開けて「ただいま」と入ってきたのは、若い女子事務員の西尾涼香だった。

社長の叶裕が顔も見ずにデスクで「どうだった」と聞いた。

「気に入ったそうです、マンションの方。明日出直して来ます、若夫婦なのでノーショウはないと思います。そっちはどうでした？　午前中に電話があった六十万の例の物件」

「ああ、自分で見に行かせた。また同じだよ、老後破綻した爺さんの自分探し。冷やかしに決まってる。俺に言わせりゃ精神的マスターベーションだよ、おっと、レディの前で失礼」

「別にぃ、女だってやってますから気にしないでどうぞ」

一瞬叶は固まったが、すぐにニヤリとして続けた。

「いったい何人来たと思う。買う気も買う金もねえ

のに、でかい態度で。電話での反応二十本、案内まで一したのが五人。もう、たとえ契約できたとしても赤字だよ、実際」
「わたしも嫌いです年寄り、男でも女でも。上から目線でくるし、すぐ切れて怒鳴るし息臭いし、長く生きてりゃそれだけで偉いのかって感じ」
「ほとんどクソだからな、世の中の。老害あって一利なし！」と叶の顔がゆがんだ。
「わたし、両親と同居する形の結婚、ぜったいしない」
「なんだ、きょうは気が合うな」
「たぶん合うのはこの話題だけだと思いますけど」と西尾は首をすくめた。
「結婚する気はあるわけだ」
「ほんとは無いです。いろんな不純物が付いてくるじゃないですか」
「不純物？」
「義務的なセックス、妊娠、出産、子育て。相手の両親、親戚との付き合い、夫の勤務先への気づかい、極めつけは必ず来る老人介護」
「西尾にとってはセックスも不純物か。お前ほんとに女か？　ふつうに可愛いけど」
「そのとき楽しめればいいんじゃない？　セフレで充分」
セックスフレンドさえいればいいという部下、叶は肩をすぼめた。それでも宅地建物取引士試験を一回でパスしたというから、案外できる女なのかもしれないと、改めて西尾の横顔を見つめた。
「確かにこれからもずっと悲惨だな、俺たち若い者は、高齢者優遇、若者冷遇で。年金だってそのころまであるんだか、無いんだか」と叶は珍しく深刻な顔を作った。
「いま自分も若者の中に入れませんでしたか」
「まだいいだろ若者で。俺二十八だぞ」
ここで西尾は、自分の事務椅子で背伸びをして小さく笑った。叶社長の奥方が一回りも違う四十歳なのを夫人本人に聞いて知っているのだ。
「で、社長。現地で下見してもらってる安物件、い

ちおう書類揃えておきますか」
「いい、戻ってこないよ。こっちはもう最初から名刺も渡してない」
西尾は叶からは見えないだろう右の眼の端をビクッとさせた。
「そんなじゃあ、ここも危ないかな」
「西尾、聞こえたぞ」
「まあ、独り言なのに」
叶は女には甘いらしい。小さく首を振っただけで怒らなかった。
「書類で思い出したんですけど、まだ新しいくらいなのに何でインテリアだけじゃなくて外壁まで変えようとしたんですかねえ、共有名義人の奥さんが病院で死んじゃって、六十代の旦那さんがすぐに持ち分の相続登記をしてＤＩＹしだしたって感じでしょ。で、なんと重症のぎっくり腰、結局おじいちゃんのご乱心ですかねぇ」
西尾が珍しく物件の裏事情に興味を示したので、叶は少し驚いた。同時に、病院で売主が、壁から剥がし裏庭に出したクソ塗れのコンパネを急いで処理してほしいと頼んできたときの顔が脳裏に浮かんだ。コンパネは一か所にきちんと積んであるからと。やってくれれば売却時の六十万円全額をくれるという。つまり法定の手数料は手数料として、そのほかに個人的な依頼の報酬を支払うという形でという意味になる。叶にしてみれば、この裏話がなければゴミ物件の仲介など馬鹿馬鹿しくて請けたくはない。
「そんなこと、知らないほうが営業しやすいだろ？違うか」
「やっぱり、そういうことですか」
「どういうこと想像して言ってんだ」
「最初に応対した社長だけは秘密みたいなもの知ってるって、そういうこと」
「いいから仕事しろ」
「手は動かしてます」
「お前、面白い女だな、一緒にいて飽きない」
叶の目が天井を見上げたままで止まった。

しばらくして西尾が「ここ、お礼言うとこですかね」と作り笑顔で返した。

波城が外階段の踊り場まで降りてきたとき、「あなたも不動産屋さん関係の人ですか？　工事とかの。だったらお願いが」と階段下に居た主婦から声が掛かった。ゴミ袋を下げている。四十絡みというところか。

「いえ、買い手、購入希望の下見です、こんにちは」と波城は、さらに降りながら応えた。何か情報が得られるかもしれないと思ったのだ。「けっこう下見の人、来るんですかね、ここ」

婦人は「五、六組かな。この状態見たら、やっぱりやめようって気になるわよ、大工さんに頼めば百万、二百万なんてすぐだし」と言った。どうやら話好きらしい。

「どんなご夫婦だったんですか、住んでた人」

「死んだ人の悪口とか嫌だからやめておくわ。うちもすぐ引っ越しするし。ただ、あれが老後の夫婦の暮らしだとしたら長生きしたくはないわねぇ」

「もしかしてここで亡くなったとか」

「いえ、救急車で運ばれて病院で」

婦人は搬送されるのを見たという。

この二つでも十分に有意義な情報だった。死亡していたら救急車は搬送しない。つまりこの物件内での死亡者はいないことになる。

「そうですか。でも景色いいじゃないですか、空気も風もさわやかだし」と波城は話題を変えた。

「それが臭くなったから逃げ出すことにしたの、もっとずっと田舎の方へ。お隣のうちまで十分以上歩くみたいな環境の。主人、自宅で出来る仕事だから」

「臭いって、ここ浄化槽設置ですよね」まさか汲み取り式ではないだろう。

「あらやだ、営業妨害になりそう。お住まいになったら、お宅の周りにキンモクセイやクチナシを植えることをお勧めするわ、お部屋の花瓶にはユリの花かしら」

言葉はきれいに並べたが、かなり辛辣だ。香りが

きつい花ばかりではないか。
「ごめんなさい、お邪魔しました」絶妙の間をとってから婦人が会釈をした。
「ありがとうございました」
礼に値するかどうかは難しい会話だと波城は思った。
それにしても臭いの元は何だったのか。ざっと中を見ただけだったので気になった。
多少迷ったが、いまは迷うこと自体がストレスになるので引き返すことにした。
再確認すべきは臭いだけなので真っ直ぐに外壁を取り去った部分に入った。隣家にまで届く悪臭とは何か。原因がここにあるから外壁まで撤去する必要があったのだろう。そう思った。十畳ほどの広さで床が剥がされ、かなりしっかりした根太だけが規則的に並んでいる。「気を付けて見回れば良かったな」と頭を掻いた。隣室に当たるキッチンとの境近くの根太二本が外されている。波城はしゃがんで隣室の床下を覗き込んだ。懐中電灯はないが、幸い部屋の中にまで陽が射し込んでいるので確認に支障はない。
「コンパネだな、十二ミリか」色からして古材らしくバラバラに突っ込んであった。ただ五枚しかない。壁のほかに洋間の床材にも使っていたとしたら少なすぎる。問題の臭いだが確かに、曰く言い難い妙な感じではある。隣家の婦人が困り果てるほどだとは思えなかったが。
「まあ、買ったら引き出して小さくカットすればいいか」
波城は立ち上がって、入ったところとは違う方向から建物を出た。裏庭になる。
「ん？　ポリタンク、十リットルだな、まだ新しい」
目に入ったので寄ってみた。明るい空にかざすと、極少量だが液体が動く。恐る恐る蓋を回して緩めるとムッと臭った。波城には中身の正体がすぐに分かった。
「液体塩素だ、次亜塩素酸ナトリウム。ということは井戸？　おい重要事項になる水道水は嘘かよ」薬

は上水道に使われる滅菌剤なのだ、それが必要だということは何を意味するのか。波城はギュッと蓋を閉めるとポリタンクを放り投げた。

「あれは洗濯機？」と投げた先の低木の間に白いものを見つけた。近づいてみると錆びはなく破損があるようにも見えない。

「なんでこんな捨て方を…」波城は振り返って建物を裏側から見上げた。

3

結局買う決心がつかず波城は不動産屋に寄らずに帰って来た。

翌日、ジャージに着替えて波城がキッチンに入ると、テーブルの上にカレーライスが出ていた。バスルームの方から洗濯機の働く音が聞こえてくる。午前十一時、朝食というより昼食に近い。半島からの帰路は正直なところ運転するのがきつかった。

「おーい邦子、生野菜はないのかー」と大声を出した。

「ごめん、切らしてる」とタオルで手を拭いながら邦子が出てきて「わたしもコーヒーブレイクにするかな」と目の前に座った。

「一度聞こうと思ってた」とスプーンを持つ波城。

お気に入りらしいカップにフリーズドライの粉を入れてお湯を注ぐ邦子。

「うーん、この香り」と笑顔になった老妻を見て、また迷いが生じた。三十一と二十七、四歳離れた二人で、特別不思議な事情もなかった結婚なのだが、共働きだったせいもあり、日常生活に直結することは別にして、お互いに過去も含めプライバシーについては詮索しないという暗黙の了解が最初からできていた。いま妻に聞こうとしている内容は、もしかしたら一応平穏な日々を一気に突き崩してしまうのではないかと。いや、逆にそれが密かな望みなのか。いまの波城にはそんな気もある。

「いいわよ、あらたまって何？」

「これ、何キロカロリーだろうね」とカレーとライ

スをしっかり混ぜてみる。どうやらすでに冷めきっている。

「八百ってとこかな、ご飯の目方にもよるけど」

時間稼ぎに二、三回カレーを口に運んでから、やはり聞こうと決めた。「あんなに朝早くから…」

「いいのよ、私の仕事だから、あなたは寝てても。気にしないで」

「ジュエリーの営業だよな、無理だろあの時間から外回りって」

邦子はゆっくりと瞬きをして、唇を噛んだ。

「会社だって開いてないだろ」

「そういうこと…。何を疑ってるのか、はっきり口にしなさいよ、男らしくもない」と、まだ熱いだろうにコーヒーを一気に飲み干した。

言えなかった。六十五歳の妻に外の色恋は考えにくい。

「情けない」とカップを置いて黙った邦子。

それでも新しい人間関係は作れるだろうと思った。茶飲み友だち、片想い、それならあり得る。口にして外れれば夫婦は終わる。少なくとも心の関係は。いや違う、口にしなくても疑った時点で半分は終わっているのだ。なぜ聞いた、それが解かってて。波城はまたカレーを頬張ることで答えられない自分を正当化した。

邦子は右の手の甲で目元を拭った後で、鋭い目に変えた。

まさかこんなことで泣いたのか。波城は少しだが動揺した。

「いくら残ってるのか言って、退職金。正直に」

突然の反撃だった。そっちがそうならこっちも、そんな感じだった。

「知ってるだろ、マンションのローン残金千百万を全額支払って」

「いっぺんに払えば住む場所の心配は無くなる。そうだったわよね。でも残り九百万のはずなのに、もうそんなには無いんでしょ」

「現金では確かにな。だけど資産は現金と預金だけじゃないだろ」

「株だ、投資だって言うんでしょ」
「ああ、分かってるじゃないか」
「ここ一年ほど、証券会社とか、信託銀行とか、通知が何も来ないんだけど。分かるはずないって思ってた？」
　いい機会だと思い、ある意味観念した。「じつは大損してもう全面撤退してる」
「大損て、どれくらい」
「六百万、になるかな、だいたい」と責められる前にうなだれた。
「嘘よ、いくら素人でもこの株儲からないって分かった時点で売ればいいんだから。それくらいは知ってる。お得意様に株で産を成した人もたくさんいるんだから。いったん六百万つぎ込んだって言うんなら解かるけど、損失額だなんてあり得ない」
「なんとか老後の資金、増やそうと思って」
「だから、あり得ない。女遊びとか賭け事とか、いろいろ混ぜての損なんでしょ」
「女遊びって、バカか」
「じゃ言ってみなさいよ、説明してみなさいよ」
「信用取引とか商品取引とか海外投資とか、いろいろな」
　最初は百万の投資だった。株価が上に伸びている銘柄を漁って百株ずつ五、六銘柄。ところが買ったとたんにみんな下がった。あわてて損切りをした。その後も、ほとんど勉強もせずに売り買いを繰り返したので、「買えば下がり売れば上がる」の繰り返し。現実の損失は膨らんだ。結果、生意気に株価が下がっても利益が出るという信用取引に手を出した。しかも効果を狙って千株単位で。下降トレンドと判断してカラ売りをした銘柄の群が高騰し始めた時期に、たまたま株価のチェックを怠ったため、期限が迫って買いを入れた時の損失は悲惨な金額になっていた。さらに、よせばいいのに損を取り戻そうと素人であることを忘れ、ハイリスクながらハイリターンを見込める取引に没頭することになる。そう、二年間も。つまり波城は投資ではなく、言わば賭け事に負けたのだった。

邦子は絶句した。投資家の顧客が言っていた、相場の怖さを知らないうちに手を出すと大火傷をする取引。目の前で夫が並べたものは正にそれだったのだ。

「すまん」と頭を下げながらも波城は、胸のつかえがとれたような気になっていた。

邦子が自分のカップを手にして立った。

「じゃ、たった三百万なんだ、残り」

「ああ、だから」ここを売って小さな生活をしようと言いそうになった。頭にあるのは六十万の物件だった。元不動産屋として推定をした、工務店を使って改装しようとすれば、住めるようになるには諸々合算して三百万はかかると。しかし改装を自分の手でやれればその半分以下で済む。一旦存在を疑った水道設備も、帰りがけに隣家の婦人に教えてもらって誤解は解けている。

それでも、結局言いだせなかった。このタイミングは最悪だと。

「ここの管理費や修繕積立金だってバカにならないのよ、どうするの」

力のない声でそう言ったあとで、邦子はシンクでカップを洗い始めた。

大声で罵倒された方が勢いで話を進められたかもしれないが、それほど甘くはなかった。波城からは邦子の顔は見えない。とっくに洗えているはずなのに、蛇口から出る水の音が止まる気配は無かった。

元気だった洗濯機は、とうに止まって静かになっている。

「何かあったとは思ったのよ、急においしいもの食べようだなんて誘うから」と砂絵は、中トロをつまんで口に入れた。

場所は邦子が契約してくれそうな相手にクロージングをかける誠寿司だ。仕事でたびたび使うので板前も勘定の際に手心を加えてくれる。

「で、オヤジをガツンとやったの」

「できないでしょ、もともと広志の退職金なんだし」

「ちょっとかあさん、今でも下の名前で呼び合って

るの、オヤジと」
「変かしら」と首を傾げた後で「誠さん、わたしにウニちょうだい」と言った。
寿司屋にまで下の名前だった。
「ちょっと素敵じゃない、年寄っぽくなくて」と砂絵はニコッと笑った。
「いまのマンション、夫婦の共有なのよ、ローンも同じ負担。それなのに退職金で残金全部払ってくれちゃったわけ。理屈から言うと残りの九百万は広志が自由に使っていいの、違う?」
「なるほど確かにそうなるわ。板さん、わたしホタテね」
「あいよ、お嬢さんはもてるだろ、白目が真っ白できれいだ」と板前が調子づく。
「なんだそりゃ」と砂絵は、手のひらで板前にバイバイをしてみせた。
「でもどこかで期待してたの、老後の蓄えの一つとして。勝手よね、考えてみれば」
「夫婦なんだから、それ普通ね、うちのご両親がちょっと飛んでるだけ」
「たしかにルームシェア並みの感覚かも」と邦子は苦笑した。
「しかも兄貴やわたしを産んでもずっとだから」普通なら子どもが出来れば夫婦の生活費は否応なしに一体化する。
邦子は反射的に大きくうなずいた。
「だけどかあさんはだいぶ貯めこんでるんじゃないの、営業長いし、朝から晩まで一所懸命動いてるし」
「あんたに褒められても、気持ちとして微妙だけど、ありがと」
「はいはい、それも確か。ご迷惑お掛け中です」
邦子には誰か気の置けない相手に話してしまいたい秘密があった。身内で選ぶとしたら、夫でも長男でもなく横にいる砂絵になる。生活力はゼロに近いが、この子には周囲を温かくする何かがあると感じていた。懐が深いとでもいうのだろうか。
「真面目な話、蓄え少しはあるわ。でもね、それを

ドンと失う爆弾抱えてるの」
　砂絵が珍しく鋭利な目をした。「ジュエリー系の不良契約かなんかね、それ」
「当たり。鋭いわね。品物渡して支払いがまだで、相手が行方不明。その支払い期限が来月末なの、信用しすぎちゃったみたい」
「まさか立て替えたとか？　いくらなの」
「ありがと、立て替えって言ってくれて。三百万」
　砂絵はため息をついた、やはり本当はすでに立て替えて会社に払っているとすると、母親のいわゆる支払期限とはそれを返してもらう約束の日のことだということになる。
「それ、預金の何パーセントになるの？」
「六十パー。破綻へと急降下ね、我が家も。広志の退職以来、いいことないなぁ」
「年金は？　こうなると俄然貴重だね」
「広志の厚生年金だけと言ってもいいわね、わたしは国民年金だから」
　砂絵は気づいた。どこでもいいから就職して助けてと言っているのだと。別に無収入なわけではなかった。演劇の裏方の手伝いをしている。不定期というのが玉にキズだが、そのお金でイラストの勉強をしていた。コミックの「ベタ」をやっている友人からヘルプを乞われることもある。要するに、世間の目ではフリーターに近い。
「会社に事故が知れれば代金を支払い済みとして扱ってくれたとしても嘱託契約は切られちゃう。やってはいけない売り方なの」
「それで早朝から隣町でコンビニ店員、だったのね」
「何で知ってるの、わたし誰にも言ってない」
「偶然よ、店の制服でパーキングに出て来たところを見ちゃった、朝帰りのとき」
「嘱託の営業って勤務時間云々より成果だからやれたんだけど」
「オヤジ、知ってるの？」
「なんだかわたしのヨロメキを疑ってたみたいだけど、言わなかった」
「嬉しそうに聞こえるけど、何それ」と砂絵は、邦

子の顔を覗き込んだ。
「親をからかうんじゃないの」
「結婚相手、オヤジの弟の方にしておけばよかったわね、年下だし、ちょっと渋いものね、彼。いま六十だっけか」
「良治さんは無理よ、スキがなさすぎて飛び込めない。だからじゃないの、若いころ早々に離婚になって、ずっと独りで暮らしてるのは。そんな気がする」
「へえ、そうなの」
「いいのよ、広志ぐらいが。ぜいたくは言わない…」
邦子はカウンターに頬杖をついて、遠い目をした。
「そうそう聞いてもしようがないけどどんな人なの、持ち逃げ状態の人って」と砂絵は雰囲気を察して、話を元に戻した。
「七十五の品のいいおばあさん。お宅も広くてね、庭の植木の手入れも完璧で、疑う余地無しのお客さんだったのよ」
「そうなんだ。突然消えてしまう高齢者、最近多いんだってね、なんか事件に巻き込まれたんじゃないかな」
砂絵は事件性があった方が邦子の気持ちが救われるような気がした。
「疑うのも何だけど確率から言うともうダメだと思ってる。連絡がないんだもの。かといって窓から忍び込んでは無いでしょう?」
「一人暮らしなの?」
「そう。旦那さんの遺産で暮らしてる」
邦子が肩をすぼめて小さくなった。
「きっかけになりそうだな、寄生虫卒業の」とカウンターに両肘をつく砂絵。
邦子は自分の娘の横顔をジッと見て、初めてきれいだと思った。
「転がり込むの?」
「うん、いい勘ね、男の処。プロポーズはされてるんだ」
「砂絵のことだからいると思ってたわ。でもお金無いわよ」
邦子はすぐに結婚式の費用のことを思った。

「理由はいま聞いた、だから出て行く。とりあえず就職や結婚よりも早く親の負担を取り除けるから。いまのわたしにはそれしかできないしさ」

砂絵は察したのだ、より小さな生活を実現するために二人はマンションを売るしかないと。そうなら自分はその決断の邪魔になる。両親は出て行けとは言いづらいだろうと。

「ねえ、孝之にも相談したら。万一のときに少しは出すかも」

「あの子はだめよ、嫁操縦のドローンみたいだから。人間の温かい心をどこかに置いたまま育っちゃったしね」

「臨床心理学専攻なのに？」

「ううん、そんなだから心理学」と邦子が口を押さえて笑った。

黙って聞いていた板前が「彼女、何か握ろうか」と声をかけた。

「あ。そうね…カッパにする」

「あいよ。それと酒が要るんじゃないかな、そんな気がする」

「板さん、好き。なんか和むわぁ」と言って砂絵は邦子の顔を見た。

「お酒。二号徳利でいいわ。砂絵も平気でしょ、お寿司屋さんでビールを頼むのは失礼なんだって、お寿司の味が分からなくなるから。お客さんに聞いた話だけどね」

「高齢の人だな、きっと。まだいてくれたか、そういう人が」と板前が微笑んだ。

「よし飲もう、お酒。わたしが持つわ、かあさん。わたし千円持ってるし」

「千円て何、砂絵…」

邦子と板前が同時に笑い出した。

4

「先生、じゃあ、死ぬまで薬を離せないわけですか？　完治しない病なら意味ないじゃないですか、治らないなら治療とも言えませんよね」

なぜか今回から主治医が高齢の医者ではなく若い医者に変わったこともあって波城は、嫌味ともとれる質問をした。服用をし続けているのに、直近一、二か月の判定数値になるヘモグロビンＡ１ｃが上がり続けている。ついに、これ以上の数値が続くと合併症が起こりやすいという七の台を超えて八・〇と大台にのっていた。いままでの生活習慣を棄てなければ薬効がないというなら通院を止めたいと申し出るのは、どちらかというと医者への言いがかりに近い。そんなことは百も承知だが、日々募る苛立ちが言わせるのだ。

「カロリー制限も守っていませんよね、この結果からみるに」

「皿に盛った野菜に飯とわずかな肉か魚で千キロカロリーになりますよ、一日一食で終わりの生活。どうして守れるんですか、それでいて歩け、運動しろ、地域で人との交流も図れという。何なんですかね、先生ならやれますか、どうです？　無理でしょ」

初診から既に五年も経っている。同じ病院で同じ医者、処方も同じだった。話は今回も患者である波城に問題があるということで締められた。

そもそも肥満からの発症ではない。恒常的寝不足、公私の両面での長期間のストレス、外回り中心の不動産営業でのスポーツドリンクの多飲等々が主因で、初診での所見では予備軍でしかなかった。だとすれば、昨今の悪化は二年に及ぶ事実上の「引きこもり」だと推定される。波城には分かっていた、結局、全て自分自身の問題なのだと。

「どこの病院に行っても同じですよ、生活を変えないと」

医者はカルテにいつもと同じ薬名をしたためてから言った。ミミズが這ったような横文字だが同じ薬だとは判る。

だから分かっていると、反射的に靴底で軽くではあるが床を蹴った。

彼は一瞬白目を剥いたが、指で眼鏡をクッと上にあげて小さくため息をついた。

「糖分摂取とカロリーの制限では多少の幅は許容

済みですよ、家族と日常生活を送っているわけだし、あなた一人だけ常に別メニューというのも難しいのは解かります。でも投薬していてのこの悪化はこちらも納得がいかない、原因はほかにありそうですね。いっそ入院しますか、この数値のさらなる上昇はかなり深刻になるので避けたい」

自主的な食餌療法の失敗は明白だった。他の発症原因も改善はされていない。

「このまま悪化が進めば、いずれは人工透析、さらには肝臓疾患、心筋梗塞、脳梗塞の恐れも大きくなります。いっそ入院しますか?」

「自分で何とかします」と波城は無意識に頭を下げていた。入院は絶対にしたくなかった。

「出来るんですか?」

医者が口元で笑ったような気がした。

なぜ売主は外壁を含む工事を自分自身でやろうとしたのか。なぜ戸建ての売値が六十万という破格の安値になったのか。波城は自分の手で調べたかった。現場調査をして不審に思ったのだ。不動産屋の説明では納得できない評価額だった。売主は飯坂寿郎、一九四八年生まれの七十歳、そこまでは叶社長もすぐに教えてくれた。ただ、本人に会いたいと言うと難色を示し入院中だからと譲らない。ところが「買う方向で動いているんだから」と強く迫ると一転連絡をとって本人の承諾をとった。現在はベッドの上で会話程度なら可能だという。「買う方向」というのは嘘ではない。すぐにではないにしろ一家が早晩資産処理の必要に迫られる時が来る。妻子が納得しないなら自分の持ち金だけで計画を進めよう。転ばぬ先の杖を総費用百五十万で収めてみせる。そう決心したのだった。

現地の不動産屋も病院もそれぞれ駅から比較的近いので今度は車で行くのは止めた。

売主の入院先の溝端病院は市街のど真ん中にあるようだ。

時間厳守を言い渡され面会者として個室に入った。

「夢叶不動産さんのところから来ました。波城広志と申します、初めまして」
軽く頭を下げながらベッド上の売主の顔を見て仰天した。まるで骸骨なのだ。
「飯坂です。たしかに嬉しい名前の業者さんでしたね」と上体を起こす。
あわてて寄ると波城は、売主の背に手を回して上体を支えた。
「すみません、何ですかねぇ、ただのギックリ腰ではなかったようで、もうすぐ一番近い大学病院へ移されるんです」
「お話を伺ったらすぐに失礼しますので。こちらこそすみません」
波城は言葉通りに急ごうと思った。患者の口臭が異様にきつかったこともその一因だ。「一点だけなんです」とベッドサイドの丸い椅子を尻の下に引き寄せる。
「現地は見たんですね」
「ええ、改装中の床下にいたるまで」
「値段ですね、そうすると」
「ええ、なぜあそこまで下げたんですか？　いえ、私は現役時代不動産買取業で営業をしていましたので。安いのは助かりますが、一応理由をと思いまして」
かなり長い沈黙があった。売主の顔が強張っていく。
「どうやら裏までお話しするしか…」
波城は即座に「お願いします」と言って、何が出てくるかと身を固くした。
「事情を聞いても買ってくれますか」
「え、ええ、そのつもりです」そう応えるしかなかった。
「外壁や床まで壊して風通しを良くする必要があったんです。痴呆になった妻の汚物で悲惨な状態になっていましたので…これが理由の全てです」
「下のお世話、でしたか、ご主人がご自分で」
それで液体塩素での消毒が必要だったのだろう。
「重症だったんですね、ずいぶん」

「二階のロフト、あの間取りは珍しいでしょ」
「え？　ええ」
がらんとした倉庫のような部屋だった。波城が扱った物件にはこの種のものは無かった。
「柄にもなく私、油絵をやってましてね、アトリエとして使っていたんですが、恵美子が、あ、妻の名前ですが、ベッドで私を呼んでも聞こえなかったりするんです。耳もだいぶ遠くなってますから」
彼は、何かを思い出したらしく、急に眼に涙をためて黙った。
「大丈夫ですか？」
「ちょっと最初の出来事を思い出しまして。すみません。コーヒーでも飲もうとアトリエからキッチンへ降りた時です、汚物の匂いがして、ドアを開けたら恵美子が壁に自分のクソを塗りたくっていたんです。尻も丸出しでした。恵美子って大声をあげたら振り返ってニッコリ笑って。正直、ゾッとしました」
彼はゆっくりした語りで続ける。
すぐにお湯を沸かして、汚れた寝間着を剥ぎ、濡れタオルで夫人の体を拭いたという。ベッドから下りての行為だったのがせめてもの救いだった。壁の汚れを拭き取り、消毒するためにはかなりの時間が必要になる。消毒にはキッチンにあった市販の塩素系洗浄剤を水で薄めて使ったらしい。その結果、夫人にしてみれば、夫が長い時間自分のそばに居てくれる、とこうなる。この日から、何度呼んでも夫が来ないとなると同じ行為を繰り返すようになったという。
波城は、話を聞いていて夫人は本当に痴呆だったのだろうかと疑問を抱いた。
「おいくつだったんですか、奥さん」
「一つ年上の七十一。頭が壊れるには早すぎますよね」
小さくうなずくしかなかった。
「じつは定年前の二十五年間、海外に単身赴任をしていましてね。恵美子は都心で、ずっと事実上の独り暮らしだったんです。私たちには子どももいませ

んしね、かわいそうなことをしました」
　舅、姑に気遣う必要もなく子供の世話をすることもない。居れば煩わしいかもしれない夫は海外にいる。都会生活で近所付き合いもない。経済的な苦労はなく、愛情の出口が無い中で独り暮らしていた夫人は、たしかに幸せだったのか、どうか。
「五枚ぐらいでしたね、床下のコンパネ」過去の話は切り上げてやりたくなった。
「あ、ええ。救急車を呼ぶことになった当日の汚物は簡単に拭うだけで、洗うことも消毒することもできませんでしたので、翌日に汚れた部分だけを剥がして一旦裏庭に出してから本格的に現場を解体し始めたんです。必死でした。汚損されていないコンパネは業者を呼んで持って行ってもらいました」
　結局話は、彼自身によって戻されてしまった。
「失礼ですが、全くの素人の作業とは思えませんでしたけど」
「もともと好きで、若いころは実家を改装したりしていたんですよ」
　それで同じように器用な買主も出てくるだろうと思ったわけか。波城は「なるほど」と大きくうなずいた。
「現場でコンパネを見た時は汚物の臭いはしませんでしたが」
「叶さんに消毒と廃棄処理を頼んだんです」
「そうですか」
　ポリタンクの液体塩素は夢叶の若造が使ったのだ。そういえば、液体塩素は一般的には入手しにくい。ドラッグストア経由の注文だろうか。波城はそんなことを思った。
「まだあったんですか、本当は完全に処分してほしかった」と彼は唇を噛んだ。「…世間様には知られたくないですからね」
　自分の世間体のためだろうか、死者の名誉のためだろうか。いや、夫が最後に示す妻への愛情かもしれない。波城はそんなふうに思った。その想いが結局、売主の妻の死因を聞き出すのをためらわせた。
「でも、あの日の、汚物だらけの壁や床と、汚れた

恵美子の衣類が、救急隊員や医者の疑念を振り払ってくれたんです」

「え？」と波城は目を見開いた。死因へのこだわりがシンクロしたのだ。自然に口に出た、「奥さん、痴呆でも認知症でもなかった。そんな気がしますけどね」と。

なぜか彼の目から涙が、一気に溢れだした。

「私が殺意を抱いたのは救急車を呼んだあの日じゃないんです」

飯坂は、ベッドの横からタオルを取ると涙と鼻汁で最悪な状態になっている顔を拭って自白を続けた。

「アトリエまで悪臭が上がって来たので、またかよと腹が立ちましてね、ドカドカ音を立てて階段を下りたんです。ベッドのある部屋は開いていて恵美子は居ませんでした。徘徊かと慌てましたが、音で解かりました、バスルームの隣の洗濯機を動かしていたんです。見に行って驚きました。全裸で糞まみれのパジャマや下着を洗ってたんです。回っている水は真っ茶色でした。これを脱水して干してまた着るつもりかと、恵美子の肩を摑んで目を見たときです。殺したいと思いました。恵美子は冷たい視線で、まるで挑むような感じでした。波城さん、私が何をしたって言うんですか？　慣れない外国暮らしで二十年以上も頑張って、給与は東京本社から口座をもっている日本の銀行に振り込まれて、あいつは使い放題で！　やっと自由時間が出来たんですよ、何の恨みがあってここまでするのかって切れるでしょ、普通！」

「飯坂さん、声大きすぎます。もうやめましょう、まずいですよ、この話」

「いいんです、逮捕された方が。覚悟は出来てますから。いや、むしろ捕まりたいんです。本音です」

波城はたまらずに目を閉じた。見続けるにはあまりにも醜い姿だった。

―あれが老後の夫婦の暮しだとしたら長生きはしたくないわねぇ

物件の隣家の夫人の言葉がよみがえった。眼を開

けると、飯坂老人の目がまっすぐに自分の目を見ている。

「殺したのは私なんです」

飯坂は流れ出た涙と鼻汁を今度はタオルではなく袖口でぬぐった。

「最後のあの日、私が、壁から落ちた大きな糞を拭い取って、情けなくって涙ながらに恵美子に顔の前に突き出したときでした。あいつが穏やかな顔でうなずいたんです。病気なんかじゃない、正気だった。私には殺してと声まで聞こえました。気づいたときには恵美子の口の中に汚物を押し込んで…ハッと我に返って救急車を呼んだのはその直後でした。だから事故じゃないんです」

波城が堪らずに立ち上がると彼はゆっくりと左右に首を振って、「あなたも逃げますか、わたしは現実から逃げましたが」と、やっと聞こえる程度の声で言った。

「いえ、物件は買うことにしました。お話、ありがとうございました」

目の前に居る彼は自分が行きつく究極の姿かもしれない。波城はここに居てはいけないと思い、一直線に病室を出た。

5

珍しく波城がスーツに着替え、「夕方には帰るから」と言って朝早くから出かけた日に、波城孝之に電話を入れてマンションに呼んだのは、邦子ではなく砂絵だった。

緊急の家族会議だと脅したせいか、普段から無沙汰気味の長男も仕事を放りだしてやってきた。「ちょっとだから来て。オヤジやかあさんを引き取るのも嫌、二人の扶養もできない。もしそうなら都合つけて飛んできて」が、渋る孝之への脅し文句だった。

「少し飲む?」

邦子があらましの情況を孝之に聞かせたところで、砂絵が言った。

「車だ、バカ。じゃオヤジが三百万でおふくろが二

百万、たった五百万が老後資産てことか」
「あと、このマンション」と邦子。
「売るんだ、そこまで決心してるんだ」
孝之が腕組みをして天井を見上げた。決して声を張り上げたりはしない。
「少なくともわたしはね。さっき言った通りでトラブル起こしちゃったし」
「一緒に行ってやるよ、その婆さんのところへさ。冗談じゃないよ」
「それがねぇ、タカ。殺されちゃったのよ、強盗に。いま警察が捜査中」と砂絵がうなずく。
「捜査中って、おふくろ、まさか」
「いい勘ね、たしかに疑われたわよ、容疑は解けたけど。でもさ、親を疑うって、それは無いでしょ、タカ」と　砂絵は唇を尖らせた。
邦子と砂絵は、寿司屋に出かけた翌々日のテレビニュースで事件を知った。二人とも声を失ったものだ。邦子は自分が容疑者になるかもしれないなどとは考えもせずに所轄警察署に飛び込み、ジュエリーがなかったかどうかを聞いた。死亡推定日時にアリバイが成立しなかったなら、この日の家族会合も不可能だったろう。
現場には宝石も三百万という現金も無かったという。警察が邦子の主張の裏をとるために勤務先事務所を訪ね、結果、立て替えでの代金納入を会社に知られてしまった。おそらく嘱託契約は解除だろう。邦子はそう思い、覚悟を決めた。これで仕事も失うことになる。
「ところでさ、なぜここにオヤジ居ないの」と孝之がしごく真っ当な疑問を口にした。
「とりあえず三人でタッグを組むというか、意思統一というか、ね、かあさん」
「怒ると思うのよ、ほらこの前、一千万以上出してるし」
「かあさん、そういう問題じゃなくて、極端に言うと生きるか死ぬかなの」と砂絵。
「ま、七十歳未満二人の老後資金五百万は、蓄えゼロと大差ないかもな」

邦子は頭のてっぺんまで二人に見せてうなだれた。
「タカ、ずいぶんクールじゃん。オヤジは君にずいぶんと金を使ったんだよ、高校、大学、大学院、みんな私立じゃん。ちょっとは真剣に受け止めてよ、金喰い虫だったんだからさ」
「解かってる。けど、三十まで親に扶養されてる砂絵に、言われたくはない」
「だから出て行くわよ、いまさらだけど」
「ちょっと待って、言い合いさせるために来てもらったんじゃないのよ」と邦子は立って、「コーヒーでも飲む?」と言った。
「わたし、ココア」
「砂絵、お前やれよ、お嬢様じゃあるまいし」
「かあさん、いい、わたし淹れるから」
「オヤジは反対しないよ、保証してもいい」
「え?」と邦子と砂絵は同時に声を出した。さらに邦子は椅子に腰かけ、砂絵は振り返って目を瞬かせた。
「言い切ったわね、じゃ直接オヤジにも言えるわけだ、タカは」
「ああ、長男だしな、仕方ない」
「孝之、理由を聞かせて。砂絵、飲み物はこの話の後にしましょ」
孝之は、メガネのフレームを指で押さえてから二人の顔を交互に見た。
「と言うか、おそらくオヤジは同じことを考えてると思う。ここを売らなければこの先暮らしていけなくなるってことをね。彼はさ、元不動産営業だよね、買取屋だ。つまり自宅とか土地を業者に売らなければならないほど窮地に陥った理由とか事件をたくさん見て知ってるんだよ。その事例の中に今回の自分が当てはまっていると気づかないはずがないんだ」
「そうかぁ、なるほどね」
「じゃ何で言い出さないの、わたしに」
邦子はそう言ったとたん、このキッチンで夫に貯えの残高を問いただしたシーンを思い出した。

「このマンションが夫婦共有だからさ、自分の単独名義なら、とっくに動いていると思う。それと、自分のせいだという自責の念もある」
「そうよ、かあさん。オヤジはかあさんの蓄えが減った今度の事件を知らないわ」
「知ったとしても同じだよ、オヤジは自分に責めを負わせるのが好きなんだ、人に責任を押し付けるのが下手でさ、けっこう損ばかりしてる。退職した理由もそうだったろ？　会社はその性格をトカゲの尻尾切りに利用した」
「へーえ」と砂絵が、掌で孝之の顔を煽いだ。
「なんだよ」
「さすが臨床心理学」
　邦子が嬉しそうな顔でうなずいた。
「砂絵、オヤジの部屋のパソコンのぞいたことあるか？」
「あるわけないじゃん、気持ち悪い。きっとエロのお気に入りばっかりだわ」
「オヤジもそう考えて、安心してパスワードの類を目立つところに掲げてると思うよ。留守の間に試してみな。生きるか死ぬかの問題なんだろ」
「いいわ、わたしが頼んだって言えばいい、広志にバレたらだけど」
「ということで、もう行っていいかな。仕事、抜け出して来てるんだから」
「かあさん、いいの？」
「うん、困ったらまた、来てね」と邦子は立って紙袋を手にした。
「これ持っていきなさい。ケーキ買っておいたの、三つ」
「だから仕事中だって」
「車で通勤でしょ、中に置いといても大丈夫よ、ロシアケーキだから」
「はいはい」
「タカ、一ついい？」
「だからいいって全部でも、ケーキお前が食べたいんだろ」
　砂絵が違うと掌を振った。「先のことだけど、少し

は援助できる？　老父母の」
「無理だな、いまでもカツカツの生活なんだ、マイホーム、車、もうすぐ終わるけど奨学金の返済、支払いばっかりでな。美穂は六歳、これから金がかかる一方だし」
「分った、悪かった、はいはい、行って」また掌で煽ぐ砂絵。
「郁美さんによろしく、貰い物ばかりしていて申し訳なくって」
「砂絵…」
「何よ」
「いまのオヤジの気持ちがわかるのは臨床心理学のお陰なんかじゃないぞ。俺にも守るべき妻子がいるからだよ。急いで仕事に戻るのもそのためだ」
「分ってるわよ、それくらい」
「そうか、ならいい」と孝之が微笑を返した。
　孝之が出て行き、金属製の扉が遠慮がちなスピードで閉まった。
「砂絵、パソコンできたんだっけ」
「あのねぇ、わたし何でも、やれば出来る子なんですけど」
「ごめん、でも留守ばっかりの子だからよく分からなくて」
「ごもっとも。あ、一つ考えたんだけどね」
「そうそう、ココア淹れようか。あとでパソコンのぞいてね」
　立った邦子を追うようにして砂絵は思い切ったことを提案した。
「わたし、ここを買い取ってくれるのを条件にしてプロポーズにオーケー出すわ」
「なにそれ。あきれて逃げ出すわ、その人」
「大丈夫。わたしにメロメロだから、彼」
「うそでしょ、信じられない」と邦子が笑う。
「ずっと一緒に居るかあさんはね、気付かないのよ、この女としての魅力に」
「はい、それまで」と邦子は、コーヒーカップとココア用のマグカップをテーブルの上に置いた。娘の気持ちだけは嬉しかった。

「一般に売りに出すというと暮らしの繋ぎが何かと難しいのよ、買い手が私たちの身内なら引き渡し時期についても、引っ越しについても何かにつけて便利」
「何してる人、彼氏」
「趣味で絵をやりながらのデイトレーダー、投資家の類ね、まだ一億程度の小金持ちよ。昼間は株に集中、夜はお絵かき」
「そんなじゃ、抱き合う時間もないじゃない」
「その点はご心配なく、その気になると時を選ばず、場所を選ばずの人だから」と砂絵は胸を張ってみせた。
「いくつぐらいの人なの？」
「一回り半上かな、四十八」
「ええっ！」
邦子が動転したのか、ポットでカップに注いでいたお湯を溢れさせた。
「いまは普通よ、かあさん。こういう関係」
砂絵は、そう言うと笑顔で卓上布巾を手にした。

6

四メートルほどの幅員をもつ路地そのものは数年前に訪ねた時と変わらなかったが、周囲の建物はそれぞれ改装され、その一部は高層化されて雰囲気はだいぶ違っていた。ＪＲの線路があって行き止まりという処に立って右側の、「ハーバーコーポ」という賃貸アパートを波城は見上げた。鉄骨造りで四階建て、防火構造だがかなり古い。その二階の一ＤＫの部屋に実弟の長塚良治が居る。波城姓でないのは、三十歳で妻の氏を夫婦の氏とする結婚をして、二年後に離婚した際に復氏しなかったからだ。以後六十になる現在まで独身を通している。
「相変わらず本と雑誌に埋もれているなぁ、ある意味安心したよ」
波城は、聞かれもしないのに簡単に家族の無事を話した後で、あらためて部屋中を見回してから上着を脱いだ。夏でもないのに部屋の中がかなり暑い。

「日帰り？」と良治がすぐ、冷蔵庫から缶ビールを二缶取り出しながら訊いた。都下の波城宅からは比較的近いので距離的には聞くまでもなく日帰り可能だが、何か用事のついでに立ち寄ったのかもしれないからだ。

「床、抜けたりしないだろうな、本の重さで」と波城は微笑した。

「一応床はコンクリだから大丈夫。昼間からだけど、久しぶりの対面だからいいでしょ」

「ああ、何よりの歓迎だよ、近くのビジネスホテルに予約してある。あした思い出の場所に行きたいんだ。もう施設そのものは無いんだけどな」

「お互いの健康に乾杯」と良治が音頭をとった。来ないかと誘えるレベルの部屋ではないが来てくれればそれはそれで嬉しかった。

二人してビールをあおる。喉が小気味よく鳴った。

「小四の後半に入所していた学校みたいな療養所のこと？」

「うん。何だか無性に訪ねてみたくなってね」

「兄貴の聖地巡礼ってとこか。そういう場所が心にあるって、ある意味いいよな」

「ま、六十年も前のことだけどな。広い落花生畑だったけど、いまはたぶんビルだらけだろう」

「タバコは？」とセブンスターを手に取って灰皿を前に出す良治。

「やめた、とっくだ。子どもが大きくなってから嫌がってな。飲んでる間、テレビつけていいか、もう一缶ぐらい飲むんだろ」

すぐにでも意見を聞きたいとは思ったが、自分の中でためらいは残っていた。何か無関係な音があった方がいい。沈黙して逃げる時は特に便利だ。そう思った。

良治は笑いながらリモコンでテレビを点けると、キッチンに足を運んだ。タバコの紫煙が後を追いかけていく。

「本当は紫乃ちゃんていう人が懐かしいんじゃないの、兄貴は」

「鋭いなお前は、こいつはやられた」

「さんざん聞かされたからね、高校に入ったら一年だけ偶然その子と同じクラスになった、大学出て就職したら経理課にまた紫乃ちゃんがいた。これは神のなせる業とか言ってね」

良治は追加で持ってきたビールを足元に置くと、トンボ採りのときのように人差し指をくるくると回した。

「わかったよ、もういいからその話は」

波城は明日、現場で独り思い出に浸りたいと思っていたのだ。

「何かあったんじゃないの、今日来たのは」

「ま、とりあえず飲もう」

夢叶不動産の仲介で六十万円の戸建てを買った。もう契約書を交わし全額を支払っている。問題は、マンション売却についての邦子や子供たちの反応だが、同意が得られないときは家を出る気でいた。邦子が後日売却して老後資金を得られるように共有持分移転に必要な書類や実印を置いていくと決めている。そんなことをこれからゆっくりと話そうと思っていた。

「あれっ、この取材に応じている喪服の女性、義姉さん、邦子さんじゃないの？」

良治が指差したテレビ画面を、波城も見入る。「声でかくしてくれる」

「…小坂さんは、この広いお宅にずっとお独りで暮らしてらして、心細かったと思います。今日は近所の方が告別式だと教えてくれましたのでご焼香をと。ええ、立派なお葬式で少し驚きました。こんなに大勢ご親戚の方がいらしたんですねぇ」

「ありがとうございました。独り暮らしの高齢者を襲い殺害した犯人はまだ捕まっていません。警察は強盗殺人事件とみて捜査を進めています…」

「ありがとう、もう消してくれていいよ」波城はそう言うと首を傾げた。「つきあいがあったのかな、邦子は」

「面倒みるのは嫌、介護はもっと嫌。だけど相続が開始したらぞろぞろ出てくる親族たち。義姉さんのコメント、短いけど寸鉄人を殺すレベルのヒットで

すね、参った」
「プロのライターとして真っ青ってわけか」
「全く、その通り」
良治は旅行雑誌や高齢者向きの雑誌などからの依頼を受けてルポしたりコラムを書いたり、出版社からの校正作業を請けたりして生計を立てているらしい。もっとも長い間会っていなかったので現在の実際の収入源は、波城も知らない。
「いい人と結婚したね、兄貴は」
「ああ、そうだな。そうだよな」唐突に涙が滲んできた。
「何があったのか、言いなよ」
目の潤みに気づいたのか、一呼吸おいて良治が言った。
「タバコの煙が沁みただけだ」
「もうとっくに消したよ」
「優しくねえな、ごめんとか何とか言って、かばえよ」
「飲んだビールが目から出てきて、の方が面白い」
ふたりして小さく笑った。
「俺な、じつは離婚してやることにしたんだ」
波城は、売却に賛成されても自分は去るべきだと思い始めている。迷いはむしろ、このことに起因している。だから口にしたのかもしれない、後戻りできないように。
良治は手にした缶ビールをじっと見詰めながらしばらく黙っていた。
「離婚してやることに…か」
「夫婦二人が子どもに迷惑をかけないで生きていくためなんだ」
「もう平穏な生活でいいんじゃないかな、波瀾万丈って歳じゃないと思うけどな」
「すでに平らじゃない、滑り落ちてる。老後資金が二百万とちょっとしかない。このレベルだとゼロと一緒だ」
「僕は五十万もないけどね」と良治は特別驚かなかった。もともと金自体に頓着しない人生を選んでいる。

「独身で子どももいないお前とは違うだろ」
「…そうだったね」一瞬眉をひそめた。
「すまん、そういう意味じゃないんだ」少し慌てた。非難がましかった。
「義姉さんはどうなの、結婚前からの特有財産とか、その後の預貯金とか」
「全然。聞いたこともないし、当てにしてもいかんだろ」
「でも夫婦だからさ。現にいまのマンションだって兄貴が買って夫婦の共有名義でしょ、そう言ってたじゃない」
「それとこれとは違う。お前だって直美さんと別れる時、持ってるものを全て渡して素っ裸になったじゃないか。あれ、男のプライドじゃなかったのか」
「まあ、そうかな。でもあれは若かったから」
「年齢じゃないって。心の問題だろ。お前の、還暦に達してのいまのこの部屋、この暮らし、金銭的にはあの時の決断の結果だろ。それでもお前は胸を張って凛として生きてる。とてつもなく広い交際範囲を心の財産にしてな」
　良治は離婚する際、せっかく買ったマイホームを妻の長塚直美に譲渡している。ローンを完済しなければ譲渡できないため、自分の持てるものを全て金に換え、それでも足りない分は波城が貸し付けた。波城は良治の潔い決断に心が震えたものだ。
「美化しないでよ、現実はもっと醜い。それとさ、自分の経験から言うんだけど、兄貴の想いや決定には大事なものが入っていない。邦子さんの気持ちがそれだよ」
「後悔してたんだ、お前」
「そこの処だけだけどね。兄貴、悪いことは言わない。邦子さんと相談してから決めなよ。結論や結果が同じでもそうすべきなんだ、少なくとも一度は愛し合ってたんだから。憎みあって別れるんじゃないんだから。それとも、もう話し合ったとでも言うの、違うでしょ、そうならここには来ていない。違う？」
　理性的に事態を捉え、賛成してくれる相手が欲しかった。同じような経験をしている良治は最適な存

在だったのだ。良治の言うとおりだった。

「直美と別れたのは、彼女が邪魔だったからだよ」

波城が黙っていると良治は仰天するような言葉を吐いた。

「直美は自分が思い描いた結婚生活や、自分の欲求を基準にして来る日も来る日も僕に干渉したんだ」

ローンは早めに、出来れば四十までに完済したい。子どもは二人で女の子、男の子の順に三十五までに。週に二三度は外食をして、セックスは週三回以上で、年に二回は旅行して、両親にも年に一度ぐらいは温泉旅行させてあげて。朝はパン食で、夕食は一緒にしたいので七時が「門限」で…。良治は指を折るようにして語り続けた。

「直美にも彼女の両親にも欠けているものを発見して、僕は真っ暗になったんだ。僕の都合や想いや生き方への配慮が何もないってね。いつしか僕は直美を捨て去ることを夢見るようになっていたよ。もしもずっと一緒に居たら、きっと彼女を殺していたと思う。殺す代わりに持っているものを全部吐き出して家を出たんだ」

「よせ、聞きたくない」

「知りたくないだろ、兄貴。だから、僕自身思い出したくもない自分の過去を、いまの兄貴に告白してるんだ」

目の前に良治の苦痛に満ちた顔があった。

「兄貴がやろうとしていることは、もしかしたら同じなんじゃないか。いま問題なのは直美と邦子さんが同じだとは思えないってこと。だから話し合って」

波城は急に笑い出した。

「話し合えば何とかなるのか。生きざまに関することは駄目だろ。お前もあのときそうだった。違うか？　俺のために矛盾したことを言うな、らしくもない」

良治は胡坐を解いて立ち上がると小冊子を取って来た。赤い付箋が付いている。

「僕のコラムだ、そこ。開けてみて」

「何だよ、急に」と開いてみた。『あなたも陥る老人禁錮刑』と題されている。

「それあげるよ、帰りの電車でゆっくり読んで、考えてくれる？」
「そうするけど、主旨だけでもここで聞かせてくれ」
良治が口にしたまとめは簡単だった。
人のためにと生きて来た人間、生きがいを求め、それを心の糧として働き続けた人間、彼らには年老いて独り暮らしをするのは無理。それは老人禁錮刑ともいうべき日々だからだ。身内を含め人に迷惑をかけないことを誇る人間、人の世話になるのを恥としてとらえる人間、年老いた彼らが密かに望むのは自死。
「なるほど、それで俺はどっちだ」と意地悪い質問をしてみた。
良治の返事は率直かつ辛辣だった。「どっちも。両方に当てはまると思う」
「だから家族を捨てるな、独りになるな、か…」
「兄貴はね、年の割にはって、あえて付けるけど、真っ直ぐすぎる、優しすぎる、人を信じすぎる。そういう老人が独りで歩いて行けるほど、世の中、優しくないと思う。どうせ、邦子さんに全部渡して離婚、そう考えているんでしょ」
「ありがとう」もう細かな事情や数字は言うまいと決めた。
「どういう意味？　それ」
「来て良かったってことさ」波城は心からそう思った。これで先に進めると。

私鉄の三堺駅で降りて波城は、線路を左に見る広い道を西へと歩いた。小学四年生の秋に入所するために母絹代と歩いた道は線路の反対側だったような気がする。しかも凸凹な舗装路で、施設に近づいていくと砂利道になっていた。沿線には土がむき出しになっている処もあり、雑草が元気よく生い茂っていたという記憶もある。
行き交う車を見ながら日光を浴び続けていたら額に汗が噴き出て来た。まだ五月なのに異様に暑い。
「何でここに来たかったのかな」と改めて自分の心を覗いてみたりした。「何となく」そう言うしかない。

とにかく足だけは前に進んだ。

昭和三十二年、波城がいま立っている辺りに公立の結核療養学校があった。あまりにも都市化が進んでいるので不確かだ。「あったと思う」が正しい。「何学園」だったか、六十年も前のことだから施設の正式名称すら忘れている。

波城が生まれた二十二年の肺結核に因る死亡者は十四万六千人を超えていた。彼が発病した二十七年の調査では死亡者数は五万五千人と約三分の一に減ったが、患者の数はそれほど減っていなかったようだ。波城は大人になってから偶然戦後の結核治療史に触れることができた。戦前、戦中、終戦直後の国民の厳しい生活状態をうかがわせる数値ではある。占領軍ＧＨＱの監督下で、労咳と言われ不治の病とされてサナトリウムなどに隔離されていた時代が戦後間もなく終わりを告げる。ツベルクリン、レントゲン、ＢＣＧなど欧米の検診法、治療法が波状的に日本に押し寄せ、ストレプトマイシンなどの特効薬までが入って来たからだった。波城が入所した時期は、どうやらその途上にあったらしい。

波城が入所した治療施設は、長期間欠席をして安静と治療に専念することに因り日数不足で進級ができなくなるという事態から児童を救った。学業と治療の並行を可能にしたのだった。

記憶をたどれば、朝食後に授業、昼食のあと安静の時間というのがあって、児童はそれぞれのベッドに戻る。目的は安静であって午睡ではない。そこで先生が放送で内外の名作を朗読してくれたりした。ヴィクトル・ユゴーのレ・ミゼラブルは記憶に残っている。コゼットという女の子の名前が耳にこびりついたものだ。午後の授業はその後になる。行事としては野外活動もあり学芸会も音楽会もあって、医療行為が日々挟まることを除けば、小学校とほとんど変わらなかった。波城はこの施設に六か月入れられて完治した。

この間に一生忘れえない出来事に遭遇している。

入所して三か月ほど経ったころに火災が起こったのだ。施設は広い敷地に恵まれ、建物は木造で平

屋建だった。子どもだった波城は出火原因を知る由もない。ただ強烈に印象が残っているのは、煙と炎に追われて中廊下を逃げたことだ。目の前に倒れていた女の子の上にかぶさって助けようとしたとき、燃え落ちて来た板の直撃を受けている。結果的には前から走って来た男の先生に二人とも助けられたのだが、波城はこのとき左肩に火傷を負った。

女の子は、一つ年下の小桜紫乃、逃げる時に転んで、怖くてすくんでしまったらしい。

「しのちゃん」は園内で有名な女の子だった。裕福な家の子だったらしく、私服は明るい色で可愛らしく、種類も多かった。おとなしすぎる子だったが、母親が面会に来ると抱きついて唇を合わせる大胆さもあった。上級の園児が「あれなぁ、キスっていうんだ」と教えてくれた。後日、「しのちゃん」を連れて母親がお礼を言いに来た。言葉だけではない。膝をついて抱きしめてくれた。恥ずかしくなるほど、良い匂いがした。

火傷は比較的軽かったが、それでも古希に近い現在も痕は残っている。つまり波城は、火傷をのがれさせてくれた子として、母と子からお礼を言われたことになるのだろう。あれが命を護ってくれたと称賛される場面だったとしたら波城自身が大火傷なわけで、高齢の波城など存在していないに違いない。

「失礼ですが大丈夫ですか」

耳元で言われて波城は、反射的に横に移動してから声の主を見た。郵便局員だった。

「さっきおばさんが、一か所でずっと動かないおじいさんがいるからと。道に迷ったんじゃないかしらと。道案内なら郵便屋さんとこういうわけだと思うんですけど。そういうわけで」

ずいぶんもってまわった言い方をする人だと思った。それでも「ありがとうございます」と言うしかない。親切心なのだから。

「六十年ぐらい前にここら辺りにあった施設が懐かしくて、思い出にふけってたんです。すいません、ご心配を掛けました」

「そうだったんですか、じゃ、どうも」

「あ、半世紀以上前になりますが、ここに小学校みたいな療養所、ありましたよね」
「いやぁ、僕、まだ二十五年しか生きてないので」
確かに局員は若かった。赤いバイクを見送ってから頭を掻いた。
「大昔のことだ、現地に来てまで何やってんだろう」
波城は自嘲しながらも、また駅とは反対の方へ歩き出した。自分だけが、どこへ向かって歩いているのかを知っている。学園生活に慣れたころ、野外授業で落花生を掘り出す作業があった。そこで初めて「しのちゃん」と手をつないだのだ。
万に一つ、場所を特定できたとして何を掘り出す気なのか。
空を走る雲がまぶしい。風が出て来た。

7

電話の向こうの小坂律枝の相続人は冷静だった。
「葬儀直後にあなたの請求を受けましてね、こちらも事実確認をさせていただきました。祖母が、律枝が株式会社モダンクリスタルから宝飾品を三百万で購入したことは、担当者だったあなたのおっしゃるとおりで、探しましたら契約書はありました」
「ええ、ですから立て替えた代金をこちらにとお願いしたのですが」
「お言葉ですけどね、会社は、商品を渡し代金も全額領収済みで、領収書も発行している。この取引は書面で何の裏もなく完了していますと回答しましたよ。あなたの立て替えなどまったく知らないことだと。しかも今は、波城邦子さん、あなたは解雇されて嘱託社員でもない。いったい何を企んでいらっしゃるのかな。香典まで頂戴しているので生前お世話になっていたかもしれませんが、この件はいささか人の道に外れていませんかねぇ」
邦子は呆然とした。立て替えに関する覚書など証拠は無いのだ。作らなかった。買主を信じていたし、殺されるなど思いもよらなかったのだ。明らかに自業自得で、ぐうの音も出ない。期間がある営業評価

の故の、過った実績作りがもたらした結果だった。会社は実損がない以上、波風を起こしたくないに決まっている。

「どうしても架空の請求を続けるとおっしゃるなら、こちらにも覚悟があります。代襲相続人が数人出て当家が相続事務で多忙なうちに詐欺行為をおやめなさい。告訴だって考えていますよ」

「そんな…だって」と邦子は言葉に詰まった。

「かあさん、もうやめな、勝てないから」と傍らの砂絵が、邦子の肩を揺すった。設定で電話の音量を上げているので会話が聞き取れていたのだ。

「娘さん、ですか、いまの声」

「ええ。あの、もう少し詳しくお話しできれば」

「賢い娘さんだ。老いては子に従えですよ、波城さん」

砂絵がまた肩を叩いた。

「分りました。そちらさまもお力落としになりませんように」

「じゃ、いいんですね。ここまでにしましょう。では」と先方が切った。

「いい皮肉だったわよ、最後の台詞」

邦子は受話器を手にしたまま、なかなか戻せないでいた。

「せめてかあさんの口座からストレートに三百万が会社に振り込まれていればね」

「そんなことしたら、立て替えバレバレじゃないの」

「小坂さんから受領した代金を一旦自分の口座に入れてから送金したと弁解、も無いわよね、業務上横領容疑になっちゃうし、実際入れる現金もないしと」

砂絵が受話器を受け取り、元に戻して続けた。

「通帳に三百万の引き出しが記録されてるだけでは使途は不明だし、結局そのまま買主からですと現金で会社に納金して、小坂さん宛ての領収書をもらうしかない。せめて領収書を手元に留めていたらなぁ」

「領収書には日付があるのよ、小坂さんに話すしかないわよ。小坂さんに渡したのは立て替えた証拠と

してこれ以上のものはないと思ったから」
「あーあ、だめだ、やっぱり」
「でしよ？　規則違反をするからよ。彼女が死ねば二人の信頼関係も死ぬ」
「あはっ、自分で言ってる」と砂絵が一つ手を叩いた。
「他人事だと思って」
「思ってないわよ、わたしなんか、おかげで急いでクマネズミと結婚だよ」
「そんなにひどい顔なの？」
「まさか、わたしのセンス知ってるでしょ」
「だから聞いてるの」
「交渉に負けたくせに、ずいぶん言うじゃない、かあさんも」
「で、いつなの結婚。話進んだんでしょ、ちゃっちゃっと」
「まあね、なにしろこの美貌ですから。今度の日曜に下見に来る」
「あら、まだ裸見せてないの、時代遅れ」
「ここのよ、マンション売るんでしょ、彼に」
「まだ広志に言ってないのよね、困ったな」
「いいよ、彼氏が買うって決めてからで。タカの診断じゃないけど、サラッとオーケーすると思うよ、オヤジ」
　砂絵は波城のパソコンを覗きこみ、執拗に六十万の戸建てを追っていることに興味を持った。自分の両親は同じ危機感の下で、それぞれ違う方向へと動き出しているのではないか。兄貴はけっこう読んでいるなと見直しもした。
　ただ、いまはそれを口にしてはいけないと、砂絵は思っていた。
　邦子は邦子で、笑顔でうなずいている砂絵を不思議そうに見ていた。

8

　波城は良治を訪ねたあと再び車で買った物件に来ている。外壁を外された部分をどう改装するか。

ホームセンターの資材部と現場を行き来してイメージを固めていた。簡単に言えば屋根付きのデッキのようにしてしまうプランだ。立っている間柱を生かして床から一メートルほどの高さでそれらをつなぎ、コンクリート打ちっぱなし用の十二ミリコンパネで内外を覆う。オレンジ色のコンクリート打ちっぱなし工事に用いるコンパネで囲むデッキだ。これで野生動物の侵入を防いでおいて中は防腐剤処理済みのデッキ材をスノコ状にして打ちつけていく。もちろん板と板の間は狭くする。つまりきちんと造作するのはレストラン側の仕切りだけなのだ。強風を含んで屋根ごと吹き飛ばされないように金属製のターンバックル数本でコンクリートの基礎と屋根を連結することも忘れない。屋根の雨漏りも当面そのままにできる。なにせ本来外に在るデッキ感覚で改装するのだから。

「できたな、これで」と波城は、ニンマリとしてタバコを手にした。

そのときだった。「もしかしたら波城さんですか」と女の声がした。

振り向くとかなり若く、しかも目鼻立ちも良くて可愛いらしい感じの小柄な女だった。身長は百五十五センチというところか。

「わたし、夢叶不動産の宅地建物取引士だった西尾涼香といいます」

「ああ、はい、私波城です。女性もいたんですか、あのお店に」

「会えて良かった。どうしても会ってお話ししないとダメな事態でして、お時間もらっていいですか」

「若い女の子に嫌だとは言いづらい。そっちに出ます」と波城は外階段の方へと動いた。途中で計測用のメジャーを尻ポケットに仕舞う。

「何回かここへ来たんですが、お会いできなくて」

「それはまた、嬉しいですね」

「いえ、嬉しくないと思います。この物件、叶社長の陰謀でほかの人に所有権を移転されています。移転登記済みですので波城さんの手には入りません」

「ちょっと待ってよ、その叶さんが直接契約書を作

って重要事項説明もしてる。即金で六十万と概算の登記費用とか雑費用とか払ってるんだ。下っ端の、いや失礼、君には分からないだろうけど、それ別件の話だろう」

「わたし、業者票にも書いてありますがあそこの専任でした」

見落としたらしい。だとしたら、元プロとしては恥でしかない。

「じゃ、あの若造こそ無資格か」

「いえ、社長も取引士免許はあります。人間がいい加減なだけです」

「おほっ」と、あとの言葉を飲み込んだ。目の前の女の子の眼は澄んでいる。気の毒なほど真っ直ぐに立っている。

「今手にしている鞄にその証拠があると言うわけか。見せなさい、最新の謄本を」

「はい」と手際よく開いて、謄本を寄越した。

土地建物共に飯坂寿郎から河津一郎へ四月二十一日に移転登記が為されている。波城が契約し叶裕に金を手渡したのは同月二十三日。二重譲渡で、河津という買主が善意の第三者なら波城はもう、同物件について打つ手はない。河津という人に対抗できないのだ。

「この人との契約の担当は叶か？」

「いえ、社長の指示で私が正規に全部の手続きを担当しています」

「じゃ、そのとき僕の存在は？」

「知っていましたが、社長が言うには冷やかしだよ、どうせ決まらないと。逃げるわけではないんですけど、わたしも社長にはめられたことになります、波城さんに関しては完全に叶社長個人としても詐欺です」と、西尾は大きく肩を落とした。

「いま店に居るのか、奴は」声を荒げるのはやめた。話が本当なら、過失の詐欺というのは存在しないが専任の宅地建物取引士である以上、この子も責めを負わされる、やったのが叶だけだとしても。少なくとも共犯の容疑は不可避だ。

「まだ居るなら私が殴ってます」

「欠勤か、いや、こうなると雲隠れか」
「どこかへ逃げました。確信したのは八日前です、休業の看板を出して店内を調べまくりました。社長の自宅にはいません、管理人さん顔見知りなんでカギを開けてもらったんですが、家具なんかはそのまま居抜き状態で」
西尾は同じコーポラスの空き部屋を埋めてやったことがあるというのだ。
「事実上の、もぬけの殻」
「でした」
「君の言う通りなら当然、金は戻ってこないな」
「はい。わたし、ふつうの従業員給与でしたし、月二十二万の…」
波城はふと思った。目の前の子は、なぜ何回も足を運んで自分と会おうとしたのかと。叶担当で交わした契約書もサインした重要事項説明書も、さらには最初に渡した名刺も処分されただろうから、自宅マンションには来られない理屈だが、あまりにも必死すぎると感じたのだ。
率直にそのまま聞いてみた。
「社長が波城さん関係で廃棄処分し忘れたものが一つありました。波城さんが病室に行きますからと飯坂さんに電話したときのメモです。買う気ありの記載と訪ねて行く人波城さんのフルネーム、それと日時。無意識だったんでしょうね、だから記憶から落ちた。逆に残しておかなくてはいけないものを破り捨てていました。領収書発行のコピー、カーボンレスのやつです。たとえ書き間違えをしたとしても破らずに抹消するだけで保存することになっています。破られた最新の部分がこの物件というわけです」
「いい推理だね」と波城は思わず微笑んでしまった。お嬢ちゃん扱いできるような玉ではない。そう感じ取った。
「たぶん、この会社終わりです。いえ終わってます。こんなこと許されるわけが無いんです。きっと私も同罪として疑われ、行政処分されます。無関係なんて証明はできません。だからお願いなんです。詐欺

被害を訴え出ないでください。わたし、両親いないんです、やっと独りで生きてくための国家資格取れたんです。専任と経営者はセットで顧客に責任を負います、私も事実上ダメになっちゃうんです。ただ普通に経営難で会社がつぶれただけなら余所へ転職もできるんですけど」

「理由は分かったけど、君が自腹を切って僕に返金するわけ？　だから告訴はやめてということ…」

「ですから六十万プラスアルファなんて、そんな大金、持ってません」

「じゃあ、どうするの。泣き寝入りを要請してるってこと？」

意地が悪いことは分かっていた。それでも腹が立っている自分を抑えられなかった。あと二百二十万しか貯金が残っていないのだ。

「波城さん、わたしバージンなんです」

「何、何を言い出すんだ？」

女の子の目が射るように波城の目を見ている。目力に圧倒された。

「私を買ってください。それしかできません」

いまどきの子はここまで飛んでいるのかと、波城は言葉を失った。

丘の頂に向かって上がってくる風が爽やかに頬を撫ぜる。

「商業登記簿に役員の住所があるよね」波城は心して穏やかに言った。

「はい、代表取締役、つまり叶裕の住所はあります」

「現地へ飛んで調べたのか」

「さっき言ったコーポラスですから」

「社長の公簿上の住所もコーポラスなのか、仮の住まいじゃなくて」

「はい。四つ先の駅です。居ません、車もありませんし、スマホも家電も駄目ですから連絡もつきません」

「しかしまだ確定的じゃないな、それだけじゃ」

波城は金を返してほしかった。女の子の体で返されても困惑するだけだ。ましてや孫娘同然の年齢ではないか。

「黒い乗用車が止まって危ない感じの男が二人降りて、ドアを叩き続けてました。無関係を装ってわたし、逃げてきて」
「それ、危ない奴らじゃなくて警察かもしれないな」
どうやら九分九厘間違いなさそうだと思った。しかしまだ他の取締役がいるはずだと、波城は手がかりの存在に希望をつないだ。
「謄本、いま持ってるの？　つまりほかの取締役を知りたい」
「はい、全部事項証明ですね。代取以外は名前だけになります」と西尾は商業登記簿謄本を取り出した。
「この中の同姓の叶令子、奥さんの方は無理です。一緒に逃げたと思いますから」
「栃木憲一という人は？」
「話題になったこともありません。たぶん名前だけですその人、人数合わせの」
「それにしても」と波城は唸った。
「はい？」
「さっき聞いた河津さんへの売却代金と私への売却代金を足しても、たかだか百数十万じゃないか。その程度の金で先々不動産業が経営できなくなる罪を犯すかねぇ」
「たぶん逃げるためだけの資金でしょ。何があったかなんて知りませんけど」
「とにかく、これもらうよ」と謄本を丸めた。自分で調査しようと思った。少し熱くなっている自分が嬉しかった。
「わたしの電話番号、その謄本に書いてあります。最終連絡はそこにお願いします。告訴だけは勘弁してください」
慌てて丸めた紙の裏側を確かめた。
「番号って…ずいぶん危ないことするなぁ。君は、ここまでの流れを最初から読んでたのかい？」まるで保護者の口調だった。
「はい、大体。会えばどうなるというくつかの可能性で」
「僕に会ったこともないのに？」
「失礼ですけど、あの叶社長に簡単にだまされちゃ

った、いい人なんで」
どちらかというとバカにされているような気がした。
「分らんぞ、最近の爺は元気だから」
「でもエロはあっても、殺しは無いですよね」
ブッと吹き出した。恐ろしいことを平気で口にする子だ。
「とにかく事情は分かった。僕もかつては不動産会社に居た男だ。新登記名義人の河津さんとトラブルを起こしたりはしないよ。改修工事から手も引く」と波城は、叶に渡したと同じ名刺を西尾に手渡した。
「元プロにしては移転登記申請と同時に全額支払うとかしないで、慎重にならなかったですね。普通なら地方法務局か司法書士事務所で事務完了にしますものね」
「逆だよ、元プロだからハマった。何億とか数千万円レベルの物件の売買をやってたんだ。そうなら細心の注意を払ったよ。全額で六十万だぞ。手付と残金を分けてとか慎重を期すこと自体恥ずかしいだろ」
「そのプライド、見抜かれてしまったようですね、あいつに」
「そういう能力はあるんだ、ゲス野郎でも。勉強になったよ、この歳で」
内心忸怩たるものがあったが、ここはカラ元気に徹した。
「だから怒鳴ったり殴ったりしないんですね、助かりました」
「まあね…。」波城は、とにかくきょうは此処までにしようと思った。
西尾が深々と頭を下げた。「とにかく告訴しないでください」
考えてみれば身勝手この上ない。笑うしかなかった。
「早く宅建指導班に行って専任を降りることだ」
「はい、あした退職による変更届を一番でやる予定です」
この期に及んで屈託のない笑顔を見せられては、

波城も頭を掻くしかない。
「焼きが回ったな」
階段を降りる西尾の後姿を見ながら、自分に最低の評価を下して唇を噛んだ。

9

何年ぶりだろう、こうして一家四人がキッチンに揃った光景を見るのは。波城は、妻や息子や娘が自分に向かって思い切り口を開いているのを不思議な気持ちで見ていた。それぞれが皆、緊急事態に陥っている現状に関して自身の意見を持ち、しかも三人が根回しまで済まし、さらに砂絵などは人生で最も大事だと思われる結婚まで絡めて、実際に行動を起こしていた。邦子も仕事上の失敗から大幅に預金額を減らしたことを謝罪とともに告白している。
「オヤジ、もう何か言っていいよ」と孝之が眼鏡を指で押し上げて言った。別に波城は自分の発言の順番を待っていたわけではない。だからこそこれがユーモアになった。
四人の笑い声が引いたころ、波城は孝之の顔をじっと見て言った。
「出て来た話の全てについて了解した。賛成するよ」
「オヤジ、無理してない？　痩せ我慢していない？」
と砂絵が目をパチパチとさせた。
「無理をしてやせ我慢をして生きていく。それがオヤジのオヤジたる所以だろう、気にするな」
「なんとなく、それ、沁みるようになった」と孝之がボソリ。
前回三人で会合したときに孝之が予想したとおりになったので、邦子と砂絵はうなずき合った。
「砂絵、その彼氏、いくらで買うって？」
「だから名前は富永三郎だってば」
「広志、まだそこまでは無理よ、中古マンションの評価ってプロでも難しいでしょうに」
「評価できたから買うと決めたんだ、彼は。ここにも来たって言ったな。砂絵の頼みというだけで買うと思うのか、一億も稼いだというデイトレーダーな

んだろ、投資のプロだ」
「うん、言ってたよ、二千万までなら買いだって」
「売った。その金額、砂絵への愛情も入っていると踏んだ」
　波城の予想評価より三百万は高い。
「オヤジ、さすがだね、潔さがまぶしいよ」と孝之は大きくうなずいた。
「その代わり、交通の便とか、台所が使いやすいとか、かあさんが暮らしやすい賃貸アパート探してくれよな、頼む」
　波城は二人の子供に向かって頭を下げた。
「何だよ、自分でやれよ、もと不動産屋じゃん。オヤジ以上の目利きなんて無理だよ」
「タカ、そういう意味じゃないよ」
「じゃ、どういう意味だよ」
　しばしの全員沈黙の後で、波城は砂絵の目を見据えた。
「砂絵、パソコンを覗いたろ、お前」
「うん、心配で」
「じゃあ、父さんがこの後外出したら、二人に意味を教えてやってくれ。ちょっと緊急に出かけたいところがあるんだ」
「怒らないの？」砂絵が波城の目を見て言った。
「心配をかけてるのはこっちだからな」
「直接説明してよ。ほらかあさんも言って」
　邦子はうなだれていた。何もかも自分が原因だと思っていた。
　波城はこの段階まで、二重譲渡詐欺にあったことは口にしていない。
「父さんはだめだ、昔のことは忘れろ、とっくに焼きが回ってる」ひがみではない、本音だった。
　砂絵の目から涙が噴き出た。慌てて立って後ろ向きになった。
「砂絵、そのままでいいから答えろ、彼は、富永さんは一度に全額を支払うって言ったのか」
「できれば半分を即金で、あとは月々十万ずつ分割で」
「だめだ、株式でと言ったらそれも断れ。全額を現

金一括でと交渉しなさい。親のわがままでと理由を必ず言ってな、自分自身のお願いだなんて言うなよ」

「広志、分割は砂絵が頼んだのよ、八年も続く扶養という意味だって。これに年金を併せれば暮らせるだろうって。悪気があってのことじゃないのよ」

「うーん、オヤジに賛成かな、僕は」

「分割の途中で彼が事故死したらどうなる？　いや、彼がお前と離婚したらどうなる、扶養にと砂絵が考えてくれたのは嬉しいけど、先々のことは誰にも分からないんだ」

砂絵が涙を拭いてから振り返った。「じゃ言うわよ、いっぺんに払うと思う」

「お前、すごい自信家だな、おどろいた」と孝之は、椅子に戻った砂絵の肩に触れた。

「人柄よねぇ、彼の」と邦子が目を細める。

波城はいたたまれない気持ちになった。元はと言えば自分が投資に、いや博打に失敗したからだ。二年間の度重なる判断ミスの結果だ。邦子に生じた損害は殺人事件発生という偶発的な事故が原因で自分とは罪の重さが違う。そう思った。

「現役時代の勘が戻ったみたいだね、オヤジ。冷静な判断だ」

息子のお世辞すら皮肉に聞こえる。

「おふくろからもう一つ提案があるんだろ、言いなよ、もうそういうときだ」

「なんだ、怖いな」と波城は笑顔を作った。

「あのね、そろそろ家計を一つにしませんか、お互いに年をとったし」

「マンションの共有も終わるし、私が勧めたの。悪い子です」と手を挙げる砂絵。

「そのつもりだ。そうしようと思ってた」

波城は落ち着いた声で、続けた。「ありがと、砂絵。孝之も。頼むな、お前たち」

砂絵が小さく「だめ」と声を出した。

砂絵は波城のパソコンを三度覗いている。六十万の土地を購入したこと、さらにそれが二重譲渡となって結局法的な入手とはならず、あれこれ含めて八十万の資金を詐欺で失ったことの全てを知ったの

だった。ただし、邦子にも孝之にも告げてはいない。父親が密かに恐れているのが、身内間での権威の失墜だということが痛いほど分かるからだ。三人の提案にほとんど無条件に従ったのは、彼が自分自身、反対できる立場に居ないことを熟知していたからだ。このままではオヤジは責任を取って家を出て行く、その恐れが砂絵を言葉少なにさせている。

孝之はと見ると、腕組みをしたまま黙っていた。タカも何か感づいている、それでも言ってはいけない、ここではっきりさせてはいけない。砂絵はそう思った。

「じゃあ、外出してくる。夕飯は外でとるから」

波城はゆっくりと席を立った。

「オヤジ…」と孝之が目を開いた。

「うん？」

「借りるアパートが決まったらネットがいい環境下でつながるようにしとくからさ」

「あ、ああ。頼む」

「かあさん、車のところまでついて行ってやれば」

「そうね、若い頃みたいに」と邦子が半ば笑いながら息子に応えた。

「バカ、何でもない、野暮用だ。恥ずかしいだろ」と波城は苦笑した。

それでも邦子は波城の後ろに従った。

「タカ、気づいたの」

「ああ、まだ予感に過ぎないけどな」

「だとしたら、どうする気？　必死で止めるの」

「いや、好きにさせる。子どもじゃない。それに…」

「それに？」

「地獄だろ、オヤジは現役時代ワーカホリックだった男だから。このままいけば何をするでもなく毎日一日中部屋に籠って、まるで禁錮刑の囚人だ」

「認知症へまっしぐらかもね、確かに。分かったわ、かあさん護って戻るのを待つか」

二人は顔を見合わせてうなずいた。

「それにしても生き生きしてたなぁ、このところのオヤジ」

「何だ、砂絵、また目をウルウルさせちゃって」と

孝之が小さく笑った。

10

翌日、波城は放浪の旅に出た。真っ先に向かったのは買ったはずの六十万の物件だった。すぐに遠くへ行きたかっただけかもしれない。現地分譲地から抜け道を使って丘の頂を越え市道に出るルートの途中にこの物件があることを知ったからだ。現場には「河津一郎所有地」という小さな看板が立っていた。おそらく西尾という先日会った女の子が最後の事務として設置したに違いない。

夢叶不動産が開いていないことを確かめるため、市道に出たところで市街中心部に向けてハンドルを切った。車を横付けしたところ、店は施錠されていて入り口には「営業休止中」の札が掛かっていた。

専任宅地建物取引士といえども、専任を降り退職することはできても会社そのものを閉じることは出来ない。どこに逃げたかは知らないが、それが出来るのは代表取締役の叶裕ということになる。つまり、西尾は自分でやれることだけはすべてやった、そういうことだろうと波城は思った。

気になっているから思い出すというのは確かだが、自分にはもう関係がないとも思う。彼のためになる何かが出来るというわけでもない。第一自分は被害者だ。あれから戸建ての売主飯坂老人がどうなったのか。知りたくもあり、知りたくもなしと、波城はラブホ備えのバスローブ姿でベッドの上に倒れ込んだ。

「哀しいもんだな、働くしか能が無かった世代は。ご褒美がほとんどの場合孤独だ」ため息が出て来た。

何とも例えようのない部屋だった。丸い大きなベッドがあり三方が大鏡に囲まれている。大型のモニター。まばゆいほどの天井灯。どうやら灯りの色も変わるらしい。

カシャッと音がしてバスタオルに身を包んだ西尾がバスルームから出てきた。

「すぐする？　ちょっとアルコール入れたいんだけど」
「ビールならあるんじゃないかな」と冷蔵庫を指さした。
「わたし実はウイスキーの小瓶持ってきてるんだ」
「ほう、なかなかしぶいね」
「ミニチュア瓶あるかと思ったら無くてさ。今日のハンドバック大きいのにしたから入ったけど。いま水割り二つ作るね」
　携帯電話に西尾から会いたいという連絡が入ったのは午後四時過ぎだった。
　指定された私鉄の駅に行くと何も言わずに助手席に滑り込んできた。
「わたし約束守るから。ラブホ行こう」と明るい声で言う。
　話しているうちに彼女の真の目的が見えてきたので、泥船かもしれないが乗ってやろうという気になった。どうせ途中で逃げ出すに決まっている、六十九の老人に体で支払うなど一体何時代の話だというのか。
　道路自体詳しくないと言うと、一館だけなら知っているという。確か処女だと言ったはずなので可笑しくなった。妄想で言うならこれも面白い、テレビドラマによくある話だ。不利な証言をしそうな相手をたぶらかしてラブホの中で始末する。実に陳腐だが、実際に起こらないという保証はない。
「なにニヤニヤしてるの、波城さん」
「いや何、妄想、妄想」
「いやらしい」それでも笑顔を作っていた。
「カメラとボイスレコーダー、ちゃんと持ってきたかい」
　この質問も二通りに解釈できる。波城は少しずつ狂いだしていた。近頃にない面白い出来事を経験していると、捉え方が変わってきたのだ。
「その二つ、スマホだけで足りるから」
　ストレートに返ってきたが、この言葉も、準備万端整っていると解釈できる。
　西尾はバッグから瓶を出すと波城に手渡した。

「サラだよ、波城さんが開けて」
「君もテレビドラマの視すぎか、先回りで証明してる」
「ええ？　何を」
「わたし何も企んでませんてことだろ？」
「それが解かるってことは、疑ってたんだ。信じられない」と西尾は笑った。思いついたとしたら、そっちの方が恐ろしいと。
「ということは、その気はあった？」と笑顔を返してから封を切った。
「飲む前に見る？　裸」
「そうだね、君の本気度がわかる。水割りはご老体がつくるよ」と、ベッドを離れてグラスに注ぎ始めた。
　西尾ははらりとバスタオルを床に落として胸を張った。
「威張ってるね」と準備の手を止めて見詰めた。
「自信なさそうにしたくないの」
「おっぱいのことさ、もういいからバスタオル巻きな」
「変なの」と不思議そうにして元のかたちに巻き戻した。
「綺麗なものを見るの、ほんとに久しぶりだ。ありがと」とグラスを一つ手渡す。
「奥さんのもずっと見てないの？　カンパイ」
　カチッというグラスの音がつばぜり合いを思わせる。波城はなるべく早く西尾を帰そうと思い始めた。
「もう二十年になるかな」
「うそ」と西尾は目を丸くする。「夫婦ってそんなものなの」
「どうかな。夫婦の数だけ夫婦のかたちがあるだろうから。それより、早くスマホで証拠写真撮って録音もしなさい、こっちも脱ぐから。ラブホの室内をバックに二人が裸で一緒。それで十分抑止力になるだろ？」
「抑止力？」
「相手が核ミサイルを持ったら自分も持つ。そうす

れば先制攻撃しても同じことをされると思うから実際そうはできない。そういうこと。こんなことしなくても僕は告訴なんかしない、自分の恥を天下に晒すようなものだ。それでも人間なんて何時どう変わるか分からない。君の心配が解かるから協力しようと思ったんだ」

波城は過去に何度も騙され、何度も煮え湯を飲まされてきた。だからだ。

「やっぱりダテに人間長くやってないよね、バレてたんだ」

「それ褒め言葉でいいよね」と笑った。

「うん、でも、じゃあいいやって言えない。写真撮らせて」

「それでいい。そうでなくちゃダメだ。いい人ってだけじゃ、コンクリートジャングルで生き延びることはできない。どんな演出でも応じてあげるよ、万一君がこの年寄りを陥れるために使ったとしても、僕にはもう失うものなんかないんでね」

「コンクリート？　それ波城さんの発想なの、すごい」

「まさか、君が産まれる前に流行った言葉だ。もう少し飲むか？　酒に強いならだが。俺はどのみちここに泊まる。車なのにいまアルコールあおっちゃったからね」

「うん、飲む。でもその前にスマホで撮らせて。波城さん、ブリーフは着けてていいからね」

波城は意味深長に受け取って、「ありがと、助かる」と笑った。

「なぜ動画じゃないのかな」その方が迫力はあると思った。

「写真の方が演出だってこと、バレにくいでしょ、一瞬の切り取りだから」

「なるほど」と舌を巻いた。

西尾は何度か首を傾げながら鏡を利用する方法を発見したようで、バスタオルを投げ捨てると、二回危なげな絡みを作って撮り、それで終わりにした。どんなふうに写ったのかは不明だ。見せてくれというほど好き者でもない。

「何だか、ごめんなさい」と四十五度で頭を下げた西尾。小振りの乳房が揺れた。
「いいから、もうその綺麗な体、隠しなさい。こっちこそ一生ものの得をした」
半分本気でそう思った。訳もなく涙目になった。数秒後西尾も、もらい泣きなのか、顔を崩して裸のまま抱きついて来た。
「このシンクロは何…」波城は西尾の頭を髪の毛の上からポンポンと軽く叩きながら、娘砂絵のことを想った。この子への気持ちも大して変わらないと。
おそらく独りで一つの資格を頼りに生活設計を立てているのだろう。資格を汚さないで大事にしようという想いが半端ではない。さらに自分が契約を担当した河津という顧客をトラブルに巻き込ませたくないという配慮も垣間見える。世代の違いで生じる違和感は別として、決していい加減な子ではない。そう思った。
「そろそろ帰りなさい。タクシー代は払わせてもらうよ」と波城はゆっくりと西尾から体を離した。「まだ午後八時だ。こういうところから女の子が一人出て行っても危ない連中がちょっかい出すこともないと思う。次の仕事場、早く見つかるといいね」
西尾は、うなずくと脱衣した処へと移動した。車に乗り込んできたときの元気はどこへやら、後姿が寂しげに見えた。「あの子もそれなりに孤独だな…」
西尾を部屋から送り出した後、ベッドに横たわり灯りを消した。
「あの子は、すれた小悪魔なのか、それとも独り生きることに必死すぎる乙女なのか」
いずれにせよ、自分の世界には無縁の子だ。そう思った。
心身の疲労感が待ってましたとばかりに襲ってくる。「何やってんだかな、俺」
目を瞑ると、いろいろな「なぜ」が浮かんできた。
低い木々の狭間に捨ててあった洗濯機が、想いの中でクローズアップされてきた。なぜ飯坂寿郎の妻殺しの自白を黙って聞けたのか。対象物件が殺しの現場だと聞かされてもなお、買い取る契約をしたの

はなぜなのか。最後まで六十万物件の買い取りとその失敗を家族に話さなかった真意はどこにあるのか。あれほど弟良治に夫婦で話し合ってからと意見されたのに黙って家を出てきたのはなぜか。妻や子は、どうして三人でこれからのことを決めて、最後に自分に告げたのか。

自分にとっての「飯坂寿郎のいう汚物塗れの洗濯機」とは何だったのだろう。弟の良治はいま頃になって真実を告白した、「殺す代わりに持っているものを全部吐き出して家を出たんだ」と。別にそれに倣ったわけではない。今回の行動は、少なくとも「殺す代わり」にではないからだ。では何なのか。

「何だろうな」波城は急激に睡魔に襲われた。

11

「こう何回も仕事中に呼ばれたんじゃあ、クビになっちゃうよ。まあ、父親の容体が良くないのでと嘘ついて上司の許可をもらってるけどさ」

孝之は、父親が置いていった一切の書類を見終わった後で肩を落とした。

砂絵が横からホットコーヒーのカップを差し出した。

邦子はといえば、孝之が駆けつけてきてからも、ほとんど黙ったままでいる。

「容体悪化か、言い得て妙だわ、それ」

「砂絵、お前何か隠してるだろ、パソコンから得た情報だよ」

「バレたか、でもさあ、言えば余計険悪になると思ったのよ。オヤジのプライドだってあるだろうし。まさかの家出は、文字通り想定外よ」予想はしていたのでこれは嘘になる。

「家出じゃない、離婚とそれに伴う退去なんだ。事態を軽いものにすり替えるなよ」

孝之は波城の自署捺印済みの離婚届を持ち上げて揺すった。

テーブルの上のほかの必要書類等は、実印、印鑑証明書、最寄りの司法書士への白紙委任状二通、波

城邦子宛の共有持分贈与契約書、戸籍謄本などで、諸届で想定されるものは網羅的にと言っていいものだった。
「孝之、どうしたらいいの、かあさんは」邦子が顔を上げて言った。
「まずだけど」
「え？　タカ、もう何か考え付いたの」と砂絵の目が丸くなった。
「この置手紙というか、指示書というか、とにかくオヤジは、離婚届の証人については良治叔父さんに頼めと言ってる。かあさん、あしたでもあさってでもいいから叔父さんと会って来てよ、彼はすでに何か知らされているんだ、きっと」
「わたし、一緒に行く」
「おう、そうして。こんな感じの母さんじゃ心もとない、頼む。俺はダメだ、これ以上仕事抜けたらクビになる」
「かあさん、叔父さんの住所、電話番号分かるよね」
「年賀状がいつも印刷されてるタイプのものだから。ちょっと広志の部屋見てくるね」
「砂絵、離婚よりマンションの単独名義化とマンション売買契約が先になると思う。富永さんに伝えといてくれないか。代金の二千万と国民年金でこれから先を生きていけと、かあさんに言ってるんだから、オヤジは」
　邦子が外している間でしか言えないことを孝之は小声で言った。
「同感。かあさんが離婚に応じるには少し時間がかかると思う」
「ところでパソコンからの情報って何だったんだ、途中で話が曲がっちゃったけど」
　邦子が戻って来た。「あったわ、ずっと同じ住所なのね、良治さん」
「まだ独り者だったよね」と孝之。
「たぶん、これからもずっとだと思うわ、男は一人が好きだから」
「む。奥が深い」砂絵が即座に反応した。
「お前に奥が解かるとはね。早くパソコンの」と孝

之は、邦子から葉書を受け取りながら、砂絵を急かした。
「おといも留守に覗いたわよ。かあさん、オヤジだけど、実は百キロ以上離れたところに諸経費込みで総額八十万の中古物件を買ったの」
「じゃ、そこへ一人で移ったってこと?」
「ううん、不動産屋に騙されちゃってさ、物件はほかの人のところに移転登記されて、しかもお金は返ってこないというお粗末。業者はもう逃げて、いないみたい」
「じぁあ、残り二百二十じゃないの。たったそれだけのお金持っての家出ってこと?」と邦子は顔を曇らせた。
「家出じゃなくて、離婚とそれに伴う退去! 中高生と一緒の家出とは覚悟が違うの! この書類見れば解かるよ、それがさ」
「わたしたちも捨てられたか、オヤジに」
「広志は違うってば! 砂絵だって解かってるでしょ、そんなこと言わないで」
「砂絵、オヤジの置手紙の中にこんな文章がある。同じものを読んでも女と男じゃ、感じ方が違うと思うんだ。いいか、ここだ。君たちを捨てるなんて言葉は私には使えない。使う資格が無いのだ。力の有る者が無い者に対し、保護している者がされている者に対してこれを為すときに初めて、捨てると表現できるものだからだ。三人が三人ともすでに私より力があり、私の保護も要らなくなっている。真逆になったのだ。だから今回の私の行為は皆の邪魔にならないようにと、離れていく、ぬけていくと言うのが正しい捉え方だと思う。だから決して、捨てたと責めないで欲しい。さらに付け加えれば、決して探さないで欲しい」
砂絵の目から涙が流れだした。
邦子はテーブルの上で砂絵の手を握り何度もうなずいた。
同じ場所で親子四人が話し合った日の午後と、その翌日に外出し、翌々日の朝に同じような外出着で普通に出て行った波城。邦子が波城の部屋で置手紙

などを発見したのは、午後十一時になっても帰宅しないという異状に気づいてからだった。
「でもオヤジ、ここ売って、別荘風の中古買って、小さな生活に移ろうとしてたんだよね、いろいろ考えてくれてたんだよね」と砂絵は声を詰まらせた。
「それでも去った。もっと早く四人で話し合っていればなぁ、後の祭りだけど」
孝之が腕組みをして目を瞑った。

12

長塚良治宅を訪問する際に降りる駅の真ん前に『ワゴントレイン』という大きな喫茶店がある。駅で電話を入れ娘と二人で来たと邦子が言うと、部屋が狭すぎるとのことで急遽決まった待合わせ場所だ。もちろん先に着いたので、人出入りが少ない一番奥の席に陣取った。店内は黒、灰色、白の三色が基調となっていて、落ち着いた雰囲気だった。
ＢＧＭはクラシックのピアノ曲だった。
「砂絵、これは、何て曲なの」と邦子が小声で聞いた。
「たしかショパンの、ワルツインアモール。いつか富永が聴いてた」
目の前に、持ってきた資料を点検している良治の顔があった。不思議なものだと邦子は思った。兄弟なのに背丈の違いだけでなく顔付きも夫広志とは全く違う。書類をめくる所作も的確で速い。「良治は速読できるんだ。あいつの頭の中を一度覗いてみたいよ」と言っていた広志。
「すみませんがタバコ、いいですか？　一服だけにしますから」
言われて初めて気づいた。一番奥のスペースは喫煙できる空間だったのだ。
「どうぞ。砂絵も平気よね」
「婚約者が愛煙家なので大丈夫」
良治が笑顔でタバコを銜え、百円ライターで火を点けた。
「おめでとう、あの小さかった女の子がねえ、お嫁

さんか」
「何年前のことですかぁ、もう三十ですよ」と砂絵も微笑む。「叔父さんはもう結婚しないんですか」
「還暦だよ、僕は。もう無いでしょ」と煙を吐いた。
「老いらくの恋とかあるじゃないですか」
「砂絵、失礼でしょ」と邦子があわてた。
「砂絵ちゃん、結婚て一体何だろう。考えたことある？」
女子店員が来て、トレーから三者三様の飲み物を置いていった。ホットコーヒー、紅茶にフルーツパフェと。
「好きな人と一緒に暮らす、で始まる…うーん」と詰まる砂絵。一言で済むとは思えなかった。
「同棲生活、性生活、育児と扶養の生活、経済生活、セックスを卒業した人間同士の共同生活、老後の相互介護の生活。そうやって分解していくうちに、僕の場合どうでもよくなっちゃってね。一度懲りたからということもあるけど」
「さっきつまずいたのはね、ＬＧＢＴが頭をかすめたからなの」
レズビアン、ゲイがありバイセクシャルもトランスジェンダーもある。それらを一括してまとめる結婚概念は見つけにくいということらしい。
「なるほど世の中が大きく変わったからね。飲みましょう、義姉さん、冷めますよ」
他愛もない会話をしながら良治は、頭の中で整理をしていた。その上で二人の女性を前にして、甘い見通しを語るのは止めようと決めた。邦子が焦れているのも分かった。
「良治さんはどう思いますか、今回の広志の行動」
横で砂絵が大きくうなずいた。聞きたいのはそこだ。
「あくまでも僕の意見にすぎませんが」
「もちろん、そのために来ました」
「兄貴は自分が死んだものと仮定してすべての処理をした」
砂絵が持つスプーンからサクランボが落ちた。
「どういう意味ですか、離婚とそれに伴う退去、孝

之はそう表現していましたが」
「僕のいうのは根本的な動機、孝之君の分析は実際の行動。今回の兄貴の場合、捜しても、たとえ見つけたとしても帰りません。なにしろ死んだんですから」
「広志の手持ちは二百二十万です。余所で独り生活するには厳しすぎます。砂絵の相手がいまのマンションを二千万で買ってくれますから、アパートでも借りて二人で小さく暮らせるんです、十分じゃない金額ですけど二人とも年金が入りますしね。それでも死ぬんですか、どこで死ぬつもりなんですか」
　いつもながら邦子の頭の中には生活費のことしかないらしい。「かあさん、声大きいよ。だいいち、そういうことじゃなさそうなの」
「義姉さん、これから死ぬために出て行ったんじゃないんですよ、死んだから出て行ったんです。死に場所ですか？　実社会の中で家庭の中で、その両方で、です」
「家庭の中でって、それは何なの？」
「わたし解かる、いま解かった。二年近く居たオヤジのあの部屋、棺桶だったんだ。それが一時的に生き返った、六十万の物件で。土地建物を買うからじゃない、自分でやれるものを見つけたからよ、わたしこっそり現場、遠かったけど見に行った。改装よ、これから住む家を自力でなおすことで本格的に生きたかったのよ、でもそれはフッと消えた夢。それによ、家族三人は自分たちで全部決めてからオヤジに告げた。やっぱり死んでたって感覚。それでもオヤジはあの棺桶に戻りたくなかった、そうでしょ叔父さん、オヤジは死んでさまよってるってことでしょ」
「ありがと、そこまで解析してくれて。本当はもっと複雑かもしれない。でもそれは本人だけが解かっていればいい」
　邦子が大粒の涙を一つ、手にしたティーカップの中に落とした。「広志の想いの中にわたしはいないんだ」
「僕は昔、結婚生活の中で呼吸ができなくなった。

自分が事実上死ぬ前に妻を殺せば正当防衛だとさえ思った。でも実際の僕の行動は違った。持っているもの全部を妻に、恵美子に渡して離婚した。妻を殺す代わりに家を出たんです。兄貴の場合は違う。すでに自分が死んでいるのを確認して消えたんです。僕の動機は残酷だけど、兄貴のそれは生きているもの者への配慮だ。こうやって揃えた書類が僕にそう教えてくれます」

「じぁあ、その離婚届の証人欄に署名してください」

「かあさん、何言ってるの」

「承知しました」と良治はペンを取り出し、空いている隣のテーブルで書きだした。

「叔父さん、待って。かあさん、今日の目的は違ったでしょ」

邦子は体ごと固まり、良治はペンを走らせ続けた。

「解かんない、男って。さっぱり」良治から離婚届を受け取って、邦子はつぶやいた。

やはり話し合わないままに波城夫婦は終わってしまった。良治は、無念で仕方が無かった。結論は同じであっても「心の澱」の残り方が違うと思うのだ。

「男の心の闇は、実は男同士でも解からないし、自分でもよく見えないんだ。女と違って男には生きている実体がないからね。何かに自分を写し撮ろうと必死になるしか能がないのはそのせいなんだと思う。女と違って男は存在が抽象的なんだ」

「叔父さん、弟として想像するとして、オヤジ、出て行ってとりあえずどこでどう暮らすの。教えて」

「心の動きは分からないけど、想像できる寝食については簡単だよ」

良治は言う。

大都会では「食」の方は全く心配がない。コンビニ、ファミレス、スーパーマーケット、デパ地下。中には試食巡りで食いつなぐ猛者もいると聞く。

「寝」も同様で、手放さない間は自分の車、二十四時間営業の個室カラオケ、ゲームセンター、スーパー銭湯、交通機関の待合室、空港ロビー、カプセルホテル、一人宿泊のラブホ、素泊まりの旅館、さら

にはシェアハウス。しばらくの間は自分の車を利用すると思うが、近いうちに処分するはずだ。大都会では邪魔でしかなく、あれやこれや散財の元にもなるからだ。

「そんな暮し、ほんとに出来るのかな、オヤジ。六十九だよ」

「現にやってるよ、僕は、それに近い暮し。帰る前に僕の部屋覗いてごらん。狭いからここで会ったけど、寄るだけなら三人ぐらい立てるスペースはある」

「そんな思いまでして何をしたいんですかね」と邦子が力なく言った。

「かあさん、失礼よ」

「広志のことよ」

「もしかしたら自分探し？　かな」と砂絵。

「その言葉も古くなったね。自分の中にしか自分は居ないんだから、チルチルミチルの青い鳥と一緒だ。もしかしたらだけど、兄貴を生き返らせるのは愛情の出口かもしれない」

「愛情の出口？」と砂絵がすっとんきょうな声を出した。

「うん、仕事でも、趣味でも、人でも、獣でも何でも。いまは何かに自分を映さなければ自分が見えなくなってると思うから」

「それ、家族じゃダメだったの？」と邦子は訴えるようにして言った。

「さっき義姉さんは言ったよね、広志の想いの中にわたしはいないのかって。兄貴はその広志の部分を邦子に入れ替えて、同じように寂しかったんじゃないのかな。大きな決断をする前に、相談しなかった点ではお互いさまですね」

「あ、それわたしのせい」砂絵はゆっくりと自分を指差した。

「違う」と邦子は首を強く振った。「わたしだってば」

「それと義姉さん、さっき僕が分類した、セックスを卒業した人間同士の共同生活段階ですけど、その年齢に達してから兄貴のものを一度でも口に含んだことありますか」

砂絵がピクッと肩で反応した。

「いえ、単なる好奇心ですが」と良治は露悪的に言うと真っ直ぐに邦子の目を見た。
邦子が手で口を覆って泣き出した。義弟は刺激的な言い方をしただけで、実は、長期間夫婦の間に目に見えない亀裂があったことを指摘した。そう受け取ったのだ。
「…かあさん」
訪れた沈黙の中で、砂絵はスプーンを手にして独りパフェをつついた。

二　彷徨

1

一日が長いのは自室に籠っていても無目的に車を運転していても同じだった。違うのは緊張感だ。一つ運転操作を間違えれば命を失い、あるいは見ず知らずの人の命を奪ってしまう。前に居る車を追い、後ろの車に追われる。ある時は急に前車が停止し、ある時は横から自転車や人が飛び出す。時折信号を無視した車が進路を妨げもする。それらを無事に切り抜ける時の小さな興奮。スピード違反を機械的に捉える装置オービスの存在に気づいて急に速度を落とす自分も小さくて面白い。波城は、初めての道を走り続けることで、以前は退屈な移動手段だった車の運転という行為の中に張り合いや救いを感じていた。
夜眠るところも家を出ようとした初日は西尾と入ったラブホテル、二日目はレンタル駐車場で車内、三日目は国道に面した道の駅で車内、四日目は観光名所近くの道の駅で車内と泊り続けた。闇雲に独りにこだわった「旅」をしていたといえる。観光地では車から離れて歩き回って時間を潰し、疲れればその都度銭湯や立ち寄り湯で手足を伸ばしている。
五日目、半島の県道を走っていて見つけた路肩付近の広い空地に車を入れる。なぜか芝生になっていたからだが、目の前に広がる真っ青な外海も停まった動機の一つだ。車の行き来が気の毒なほど少ない

地域だった。
午後一時、波城は、途中ホームセンターで買っておいたブルーシートを車の後ろに敷いた。同じ場所で入手した寝袋を取り出し、代用枕をつくって横になる。アイマスクもした。
「大の字になるの、久しぶりって感じだな」と声に出してもみた。体の節々が痛い。助手席から後部座席にかけて毛布を使って寝床のようにしたのは、運転席をリクライニングしただけでは安眠できないと知ったからだ。四日目になって必要なものを買いあさったのは「学習」の成果ともいえる。
陽光を浴びていつの間にか眠りに落ちたらしい。
子供の声が聞こえて目が覚めた。アイマスクを外して起き上がると、三十代と思しき夫婦と六つぐらいの男の子、それに二つか三つぐらいの女の子が楽しそうに弁当を食べていた。
「すいません、起こしちゃいましたね」と父親の方が会釈をした。
「いいですね、ご家族で」
「ここにするきっかけは、息子が誰か倒れてるよって、あ、失礼」
「たしかに倒れてました、歳で体のあちこち痛くて」と波城は笑った。
「車停めて眠ってると分かったとたんに和みましてね。じゃ、ここでお弁当ってことに。海もきれいなんで」
母親が微笑みながらうなずいて、女の子におにぎりを一つ渡した。
似ている。波城はチクリと胸を刺されたような気がした。かつてはあった家族の、邦子、孝之、砂絵との和みの日の姿がそこにはあった。それに母親は「紫乃に似ている…」
「おじちゃん、はい」と近寄りながらおにぎりを差し出す女の子。
「ありがと」と受け取ってから「いいんですか？」と母親に確かめた。コンビニで弁当は買ってきてあるが、理由はそうではなく幼児に向かって拒絶や遠慮は適切ではないからだ。

「よろしかったらどうぞ。こんな素敵な場所、教えていただいて嬉しいです」と、走って帰った女の子を抱きとめて彼女は言った。

笑顔が若い時の紫乃にそっくりだと、波城は心の中で再びうなずいた。

「嘘みたい、波城君と一緒の高校で、一緒のクラスって信じられない」

初めて入った一年五組の教室で、しかも同級になった生徒たちの前で小桜紫乃は、両方の手で波城の右手を握った。

小顔でぱっちりとした目に長めの睫毛、薄めの唇。黙っていると寂しそうに見えるのだが、笑顔に変わったとたん明るさが爆発的に広がる。きっと頬っぺたの作りが違うのだ。波城は小学生の療養学園時代からあこがれていた。

周囲の目をまったく気にしない紫乃の「波城君好き」という言動は、学年中の評判になったが、堂々としていて明るいという二人の関係を悪く言う者は出てこなかった。羨ましがっている。そんな感じのからかい方も日が経つにつれて消えていった。

ひと月後、部活は波城が剣道部員、紫乃が演劇部員になっていた。

「運動はいつから大丈夫になったの？　わたしは五年生からだけど」

紫乃にとって波城の剣道部は意外だったらしい。

「同じ。だけど実際にスポーツが好きになったのは中学からだね」

「じゃ、中学も剣道？」

「じゃなくって、柔道。ほら、うちってあんまりお金無いから」

たしかに剣道は金がかかる武道具揃いだった。面、胴、籠手、垂、胴衣、袴、竹刀と合計で五、六万は予想したと告げた。

「でもどっちも武道だからいいじゃん」と紫乃はあくまでも屈託がない。家が裕福なのだ。父親が若くして市会議員で、ゆくゆくは市長を目指していると言っていた。それも自慢ではなく残念なことにとい

うニュアンスだった。何か物を作る父親が理想だったらしい。

「紫乃の演劇部って何？　ああ、学園でやった学芸会のヒロインか。あれで勘違いしたってわけだ」

主役は波城だった。そういえば、劇中でも手をつないでいる。

「勘違いは確かね。でも、何もかも学園にもっていかないで。ママなのよ、お勧めは。もともとわたしが引っ込み思案だったから。意外でしょ」

「ああ、今じゃクラスのムードメーカーなのにな」

大変な変わりようだった。「しのちゃん」時代はおとなし過ぎて、真っ直ぐに相手の顔を見ることすらできない子だった。それでも学芸会では完璧にお姫様役をつとめた。驚いた記憶がある。

高校生活も慣れたころ、紫乃が突然質問してきた。

「ねえ、波城君、大学どこに行くの」

どの大学を受験するのかとは言わない。どちらかと言うと、希望通りにどこでも入れるという前提で訊いている。そんな感じだった。紫乃に対する波城の想いも同様だった。

「県内の国立かな。夢は見たくないし、私立は金がかかるし、目指すとしたらだけど」

それだと一校ぐらいしか思い浮かばないはずだ。紫乃にも分かるだろう。そう思った。

「そうなんだ。じゃあ、高校だけでまたお別れかな、わたし都内の女子大に入れって決められているのよ、進路」

「自分で決めないのかよ、驚いたな」

「パパは娘を自分の思い通りにする気だから。ママは違うけどね。その妥協の産物で男女共学のここに入れたの。ほらここ昔は女子高だったでしょ」

紫乃は肩を揺すって笑い出した。確かに妥協点が微妙で笑える。

「でもいつか、自分の思い通りに生きるんだ、わたし」笑顔の後で凛とした表情を見せた紫乃は、波城の心を突き刺した。紫乃のこと好きだ、本気でと。

「また、どっかで偶然会ったりしてね、大人になって」

「うん、ぼくもそんな気がする」
「とりあえず三年までよろしく」と紫乃がまた、握手を求めて来た。
素敵と言えるほどに、おもしろい子だった。
二人の交際は特に濃密なものにはならなかった。ただ、煙の焦げ臭さと炎の熱さが共通の記憶として生き続けていた。幼い二人が火事の際に重なったのは体だけではなかった。だから偶然の遭遇はこれからもずっと続く。二人ともそう思っていた。
突然体が振動した。

眼を開けると真っ青な空に綿飴のような雲が浮かんでいた。大型で重量級の車がそばを通ったらしい。体を起こして四人家族が居た方を見た。誰も居なかった。彼らの車も無い。
右の掌にご飯粒が一つくっついていた。もらったおにぎりを食べた後、気を失うようにして眠ったらしい。数日続いた質の悪い睡眠が原因に違いない。
それにしてもと思う。女の子は何のためらいもなく笑顔でおにぎりを持ってきた。見ず知らずの自分に。決して無条件に安心できる相手ではなかったろう。信頼は母親に対するものだった。ミッションを終え、小走りに母親の胸の中に戻った姿がそれを物語っている。「親子はそうでなくちゃな」と言葉に出して想いを閉じた。
「きょうは素泊まりできる旅館を探そう」
波城はブルーシートを畳みながらそう決めた。

2

こんなに道幅が狭くていいのかと疑問になるほどの路地の向こうに、夫東山博行の妹美佐が独り住む木賃アパートがある。路地脇の鉢植えの花を一つ一つ鑑賞しながら紫乃は歩く。壊れそうになるまで気が滅入ってしまい、気さくな話し相手のところを訪れたのだ。紫乃は六十八、美佐は六十六と歳も近い。
鉢植えから上に視線を移すと二階の窓が開いて

いて、ちょうど美佐が布団を干しに出て来たところだった。
「いらっしゃい、芋羊羹あるよ」と元気な声が掛かった。
「いいタイミングでしょ、また来ちゃった」
美佐は童話を創っていて、何作かは本になっているという。夫を四十歳のときに亡くして、以来独身を通している。話の間口が広いので、紫乃は聞き役に徹することが多い。何よりも手足を伸ばして寛げるのが嬉しい。
「またクソ兄貴が何か無理難題を、かな?」
「ただの息抜き。お邪魔しまぁす」
八畳一間しかないのだが、かなり広く感じる。家具がほとんどないのだ。畳の上に丸い食卓、窓の右側の壁にくっつけるようにして大き目の文机。踏み込み口兼用のキッチンには食器棚と冷蔵庫、目につく家具らしきものはそんなところだ。
「いまね、目をあけたモグラくん、書いてるの」座布団を出して美佐が言った。
「人目を引くタイトルね。でも目がつぶれそう」
「うまい。でも、ご安心を。サングラスさせるから。お茶にする? コーヒーもある」
「じゃ、コーヒー。昨日もほとんど寝てないの」
「オヤジの介護か、ごめんね、押し付けちゃって。認知症、ひどくなってる?」
「九十だから無理もないけど」小声で答えた。
「施設は順番待ちでしょ、紫乃ちゃんのお母さんは運がいいわよ、すぐに入れて」
「と言うより、東山では入れる気なしの入る気なし。在宅介護で押し通すみたい。それに今、中小の建設会社、景気良くないみたいだし、つまりうちも」
「足、崩せば。誰も見てないし。わたしなんか猛暑日はほとんどフルヌードだわ。もっとも見たい人もいないか」美佐はあくまでも豪快だった。
「もうちょっとこのままで。最近、正座の方が楽なの、お行儀が良いんじゃなくて」
「あー、腰だ。そうかもねぇ。はい、ミスマッチだけど芋とコーヒー」

急に紫乃が笑い出した。
「何よ、思い出し笑い？」
「ううん、会ってこういう会話から始まる。年とったなぁって」
「言えてる、なんか寂しいね。下の世話って嫌でしょ、自分の父親ならともかく」
「自分の父親なら余計ダメかも」
「なるほど、そうかもね。実の娘にされる方も」
美佐は現実に父親の介護から逃げていた。だから紫乃の言葉は一つの救いだった。
「美佐ちゃん、この話題、いまは止そうよ」
「あ。うん、飲み食いしてる、食事中と一緒だもんね、糞尿は無いわ」
「じゃなくて、お芋だから」
「もう小ぶりだけどね」と美佐が返す。二人は同時に噴き出した。
「でもここに来た時ぐらいこんな風にいろいろ笑って吹き飛ばしていって、せいぜい。そんなことでしか協力できないし」
「すごく気持ち的に助かる。誰にも言えないのよ、不寛容なお城だから、我が家は」
正直なところ紫乃は疲れ切っていた。七十歳になる夫博行は車椅子生活、義父敏弘は要介護、さらに実家の母九十二歳の小桜朱美は特別養護老人ホーム、いわゆる特養に居る。この三人の補助、介護、見舞いだけでも目が回るのだが、これに主婦としての切り回しが加わるのだ。老いたとはいえ元経理で数字にも強い紫乃は、家業東山建設の経理のチェックすら求められていた。この日のように家を出て来て帰宅した夜は、夫が癇癪を起して暴れ、時には殴られもする。当然殴り返せる力関係だが、紫乃は敢えてそれはしない。ストレスはあれやこれやで爆発しそうになる。美佐のところへ来るのは、いわば緊急避難なのだった。
「でもさぁ、どうなのかなぁ、長生きって。自分で食べて、排泄出来て、持てて歩けて、聞けて話せて、そうじゃなきゃ生きてるって言えないじゃない。人の介護受けて迷惑かけっぱなしで。そうかと言って、

わたしも自分で自分の命を始末できそうもないしね。紫乃ちゃんはどう思う?」
「自分で始末できない段階で何にも分からなくなっちゃうのは怖いわね。判断できるうちに何とかしないと」
「ああ、そうだったわね、悩むことすら出来なくなってしまう自分、それがあったわね。たしかに怖いわ。あ、食べて羊羹」
「ありがと、いただく。わたし、下の世話だけはされたくないなぁ。現実にしているからかもしれないけど。そうなる前に何とかして死にたい」
「あ。また芋から下の話に戻しちゃったね」美佐が会話の暗さにストップをかけた。
今度は二人とも笑えなかった。
紫乃は義父の腰回りを微温湯で清潔にする作業が一番堪えた。悪臭までが蘇り、吐き気を催して口を押さえた。同時に涙が勢いよく溢れ出た。
「ごめんね、ほんとはわたしだよね、オヤジの世話係」
美佐は涙の意味を察して頭を下げた。
「いけない、いけない」と紫乃は首を振って、手の甲で涙を拭った。
「いまさらだけど、結婚相手、間違えちゃったよね。兄貴じゃないほうが幸せだったと思うよ」
「人生の時計は逆回りしない構造なのよ」紫乃は小さく笑った。
「やり直しもきかないし。でも逢いたくない? あの彼氏に」
美佐は昔、紫乃の母親に聞いたことがある。博行との結婚式の前日までプロポーズされるのを待っていた別の想い人がいたと。会ったこともあると。
「いやよ、こんなお婆ちゃんになって。二十代の綺麗な記憶を大事にしたいわ。心は青春に戻せても、老いた体は戻ってはくれない」紫乃はそう思っている。
「彼も相当お爺さんだと思うけど、もう無理かな」
紫乃は自分の右手で自分の左手首を強く握りしめた。汚物に染まったこの手では、もう彼の手を握

ることはできない。そう思った。
「そうだ、近くの菖蒲苑に行こう、まだ開花していないかもしれないけど、池だけでも見る価値あるわよ。童話のモグラの穴もそこで見つけたの」
一気にコーヒーをあおった美佐が、すっと立って紫乃を急かした。
「行こう、ちょっと待って」気遣いは嬉しかったが、羊羹がまだ残っている。

3

砂絵は婚約した富永三郎の部屋に居た。母親の邦子が精神的に参っているので、なるべくマンションに居てやりたいのだが、肝心の富永を放っておくわけにもいかない。
富永は相変わらず株のデイトレーディングに集中している。それでも前場終了の十一時半から後場開始の十二時半までは寛いでいて、昼食もこの時間に済ます。砂絵が居ないときは出前を取ったりカップ麺とビールにしたり簡単に済ませているらしい。
砂絵としては一緒のときぐらいと手料理を出しているが、本人は旨いも不味いも言わない無反応派なので張り合いがないことこの上ない。
「君もどうだ、いける口だろ」と富永が珍しくブランデーを手にしてキッチンのテーブルに着いた。
砂絵は「どういう風の吹き回し？　もちろんいただく」とグラスを二つ運んだ。
「久しぶりに買ったばかりの千株が窓を開けて急騰してね、お祝いだ。前場だけで二十万以上儲かった。銘柄選びが当たった時は爽快極まりない」
二時間半で二十万以上の含み益。いや富永の場合、売って利益を確定してしまうので含みではない。
「はい、乾杯、おめでとう」と応じながら、ふと自分の時給九百円を思い出す砂絵だった。
「ところで、悪いんだけどさ」
「うん、何」と砂絵は頭の中から万札を飛ばした。
「結婚は婚姻届提出だけ、結婚式も新婚旅行もしないけどいいかな？」

「もちろん、わたしはそういう考え方好きだし、いまの我が家の情況じゃ、サブがやろうって言ったら遠慮しようと思ってた」
「そうか。マンションの売買契約は孝之君が作った内容でオーケーした。すでにお母さん一人の名義に変えてあるし。一括払いで二千万、支払い場所は司法書士事務所に決まった、移転登記申請書類の完全性を俺に確認してもらいたいということらしい」
「ありがとうございます」砂絵は感謝の心のままに頭を下げた。
「よせよ、夫婦になるのに変だろ」
「そういってもらえるとなおさら」それでも笑顔は作った。
「これでとりあえず砂絵のお母さんは大丈夫になったわけだ」
富永は満足そうな顔でグラスを干した。
ブランデーが苦く感じるのは砂絵だけらしい。
「うちのオヤジはもう、戻らないと思う」
「僕もいま、それを言おうと思った。君たちを捨てたんじゃない、お父さんは理性的に家族の輪から抜けて行ったんだから強い覚悟だ」
「どうして男はそんなふうに解かるの。タカもそうだけど何だか不思議」
「いいよ、女は女の発想と解釈で。もともと特性は違う」
「女はバカだからってこと?」
「性の優劣じゃないよ、特性の違いだ。極論すれば金玉と子宮の違いだから、こだわらなくていいと思う」
「すごい説明だわ、でも何だか解かりやすい」
「砂絵」と富永は急に真剣な表情になった。
「なに…」
「例えばだけど、お父さんが下の世話が必要な要介護状態になったとしたら、砂絵は毎日してあげられるか」
「何でそんなこと聞くの」
「このことが究極的なものだからだよ。ここで答えなくていいよ。ただ、自分の中で正直に答えを探し

てみて。そうするとお父さんの決断の意味が、全てではないけど、解かってくるような気がする。あ。もう少し注いで」

砂絵はブランデーのボトルを手にしたところで動きを止めた。「できない。たぶんだけど」そう言ってから、ゆっくりと注ぎ足した。

「だから俺は金に固執するんだ。老後とは限らない、突発事故だってそういう事態は起こる。いざというときに身内を犠牲にしなくて済むように、お金を払って嫌で大変な作業をプロに頼めるようにって。だから一億でも二億でも足りない。そんな気がするんだよ」

「そんなこと言わないでよ、サブのためならやるよ、介護」

「いや、愛とか思いやりとか親族の義務とか、そういうレベルのことじゃないんだ。もっと残酷なものだ。相手を想えばなおさらのこと、同じ重さで自分の心身も壊れていく。だから必要なのは理性であり金なんだ。介護の共倒れを防ぐにはこの二つしかない」富永は口から火でも吐くような勢いで語った。

始めて見る富永の姿に砂絵は涙目になった。

心の奥底を見透かされた。確かに自分は彼の金を利用したのだ。その上で思う。ほとんど失ったに等しい両親の二千万の金は、今回の売却代金で元に戻せる。それなのに父親は離婚を選択し家族の元を去った。不十分ながらも金銭的には解決したのに、なぜなのか。

富永の弁舌を聞いているうちに謎の一部が解けていくのを感じた。

富永の目覚し時計が鳴った。十二時半、後場が始まった。

「写真だけ撮ろうな、結婚式用の貸衣裳で」と富永は立った。

「うん、ありがと。かあさんも喜ぶと思う」

「見たいんだよ、砂絵のウエディングドレス姿。婚姻届出したあとですぐ行こう。写真館予約しておくよ」

「ごめんね、うちのことでいろいろ、ごめんね」

砂絵は富永の胸に飛び込んで謝った。

4

波城は家を出て西尾と会った翌日にガラパゴス携帯を解約し、スマートフォンを購入した。捨てる前に確認した着信履歴には、孝之から一回、砂絵から四回留守電が入っていたが、内容は確かめなかった。邦子の連絡は無い。たぶんそれだけ衝撃が大きかったのだろう。邦子は家族割の特典も使わずに別会社と契約をしていて、当然機種も違っていた。解約に関する影響はまったくないだろう。これで家族のこちらへの連絡手段は無くなった。覚悟の上の放浪なので悔いはない。

数日の放浪は心理面だけではなく、物理的に独りになったことを体に染み込ませたかったからだ。放浪の先に自暴自棄の自死があるならスマートフォンは要らない。カレンダーばかりを見詰め、何も起こらない、何もできない、張り合いもない、誰の役にも立たない。そんな毎日を一気に捨てて、死に至るまでの間、世間の目にはめちゃめちゃに映ろうとも、奔放に動き回ってみよう。いろいろな経験をしたい。波城はそう思ったのだ。だからこそパソコン機能を持っている小さな機器は不可欠だった。

「さて、いよいよ車を手放すか」波城は車内泊に飽きてもいる。いや、それよりも車があることで拘束され、新しいことが何も起こせないと知ったのだ。

都内に戻る前にトラック運転手相手と思しき食堂で、近くに中古車を引き取る店が無いかと女主人に聞いた。

「小さい業者ならあるよ。ときどき社長がご飯食べに来てるから知ってるけど、良い人間だよ、商売の中身のほどは知らないけどね」と簡単な地図を書いてくれた。

「ありがと。おかずはこの横に並んでる十種類を自由に取っていいんだね？」

「そう言えば、あんた初めてだね。同じ料金だよ、

全部摘まんでも。それとご飯のおかわりは二杯までなら追加料金無し」

「ラッキーだな、そりゃ」と波城が仕切りの付いたプラスチック皿を手にしたときだ、「次です。地方都市の溝端病院屋上から患者が飛び降り自殺をしました」と壁掛けのテレビが言った。「溝端病院」の名で画面にくぎ付けになる波城。

「警察によりますと、死亡が確認された患者は飯坂寿郎さん、七十歳、無職で、同病院整形外科で入院治療を受けていました。屋上には本人のものと思われる遺書があり、その内容や筆跡鑑定から自殺と断定されました。直前に認知症だった妻の恵美子さん七十一歳を亡くしており、自身の脊椎の状態も思わしくないこともあって、前途を悲観しての自殺とみられています。遺書の末尾には、恵美子すまなかったという文言があったそうです、老々介護の顛末、何とも痛ましいニュースです」

「妻殺し、本当だったのか」と、心の中で言葉にした。夫人は本当に、彼が殺意を抱くほどの酷い病状だったのかどうか。それは一緒に暮らして介護をした当の本人にしか分かるまい。少なくとも第三者の波城には、彼の行為を心の中で裁ける何ものもなかった。病室での彼の、涙と洟でぐしゃぐしゃになっていた顔が、この上もなく哀しいものとして思い出された。

「お客さん、後ろの人が困ってるよ、早く動いて」

「ああ、ごめん。ニュースがちょっと知ってた人だったので」

女主人にそう言うと、背後のお客にも頭を下げた。顔を上げると、目の前に凛々しい顔の長身の男が立っていた。粗末な服装が何ともアンバランスだった。

「暗いニュースばっかり流すなよ、バカテレビ」と女主人が画面に毒づいた。

県道から川沿いの道へと左折して信号が二つ。教わった八子神モータースはすぐに見つかった。軽自動車を中心に並んだ中古車の値札を横目で見ながら奥へと進むと事務所らしき十六畳ほどの大きさのプレハブがあった。

波城に迷いはない。サッシの引き戸を開けると開口一番、「車、買い取ってくれませんか」と申し出た。
「盗難車じゃないだろうな」と半ば笑いながら老事務員は眼鏡を外して立ち上がった。
「のっけから凄いですね」と波城が返す。
「あんたもね。売り急ぎに気を付けろというのは、買い取る際のセオリーだから気にしなさんな。白で普通車か。どうして近くで売らなかったの、ここは都内じゃないよ」そう言いながら、顎で、外へ出るよと合図をした。およそ客商売とは思えない言動だ。確かにナンバープレートは中からも見えるが。
「あー、中の荷物どうする気だったの？　買い取られたとして手で全部運ぶの？」
「決まったら、契約する前にこの車で処分してきます、それでどうですか」
「まあ、人気車だし、ハイブリッドでタイヤもしっかりしてるし、車検もまだついてるわけだし、値段次第だけど悪くはないよね。車検証と免許証、コピーさせてもらえるかな、えーと何様だっけ」
「すいません、波城広志です。波のお城でナミキです」
「ヤシガミです、八つの子の神様、ああ、看板に書いてあったわな」と苦笑いをした。
経営者だと分かっただけでも名乗りあった価値はある。
「じゃ、中で話そう、細かい点検はそれからだ」
本当は気持ちのいい人間なのかもしれない。波城は自車の中から車検証を取り出しながら、そう思った。経験では初対面の印象が良すぎる相手の方が危なかった。
「値段を決める前に簡単に事情を説明してくれる」
「はい？」
「だって自分の車を売るなら、中を片付けてきれいに洗車して、見栄えを良くして持ってくるもんだ。それがあの状態だよ、ホームレスの住処と違わない。訳アリと勘繰るのが普通だろ。違うか？」
まったくその通りだと思った。ドジの踏み方が笑えるレベルだ。ここでは売れないかもしれないと小

さく肩を落とした。事情か、どうすると、頭の中で自分に問いかけた。
「爺さん、聞いたっけ？」
「だから波城だって、さっき」
「いや、名前じゃなくて、年齢」
「おじいさんの社長から見ても、俺はジジイかなぁ」
「同じ臭いがするんだ、多少若めに見えても。第一いま、免許証コピーしたところだし。ああ、車検証ともども返しておく」と八子神は座れと手招きをした。
「なんだ、見て解かっていて聞いたんですか」
「まともな質問に答えないからさ。いじるしかないだろ、黙られりゃ息が詰まる」
息が詰まる…波城はふと、砂絵との軽口の叩きあいを思い出した。あれは楽しかったと。
「言いなよ、そろそろ。こんなとこまで来て車売る事情ってやつをさ」
波城はついに折れて、十分ほどで概略を話した。
「みんなそうやって家族からも身を引いちゃうんだな、不思議な世代だ」
「みんな？　ですか」
「ああ、この先の河原の灌木が生い茂ったところ一帯を歩いてみな。都心と違う景色にびっくりするから。まるで乞食村って感じで十数人が棲んでる。たぶんだけどな、ほとんどの奴は自分を責めて自分で選んだ生活だよ。世の中や人のせいだと開き直れない立派な心根の持ち主だ」
今度は弟の良治の言葉を思い出した。独りになりたがる。自死を選びたがる。そういうタイプが存在するという。兄貴はその両方に該当するとも言った。
「買ってもいいけど、一か月後にしな。車はここに置いといてもいいから。もちろん車中に寝泊まりしてもかまわない。ひと月経っても家族のところに帰りたくないと、気持ちが変わらないなら二十万で買うよ。それ以上欲しいなら他を当たってくれ」
「出かけたり、どこかほかの処に泊まって、何日もここに顔を出さなくても？」
「ああ、好きにしていいさ、波城さんの人生だ」

「良かった。とにかく何か行動したくてね、社長には無縁な精神世界でしょうけど」と片頬で笑った。
「会ったばかりで何が判るんだい。河原の住人と五十歩百歩だよ、うちも」
「またまたぁ、並んでる中古車全部で一千万は軽くいくじゃないですか」
「ほう、速いね、計算が」
「当てずっぽうです、感心したような顔しないでくださいよ」
「暇で困ったら、土日にここで体を動かしなよ、現役時代は何してたの、仕事」
「不動産関係ですよ、買い取り営業」
「いいね、ぴったりだ、土日だけは五、六組お客来るし、退屈はしない」
願ってもなかった。それなら平日はあちこち未知の世界をうろつける。
「賃金は払わないよ。その代わりうちのばあさんの三度の飯は食わせる」
「助かります、それで十分です」おふくろの味は価値がある。
急に八子神が肩を揺らして笑い出した。
「あんた、変わってるなぁ」
「そうですかぁ、社長には負けますけど」と波城も笑いの中に入った。

ひと月はここに「定住」できるとなると少し気持ちの余裕ができた。
辿り着いた当日、八子神社長に銭湯の場所を聞き、タオル一本を手に一キロほど歩いた。運転ばかりが続いたせいか腰が痛い。歩くことが治療にもなった。銭湯は斜陽だと思っていたが、入ってみるとまだ午後三時なのに五人も客がいた。一人は別だったがあとの四人は髪や顎髭の感じから普通の勤め人とは思えなかった。まだ五十代後半と踏んだ。それに揃いもそろって肋骨が浮き出た胸をしている。差別の目ではない。自分も近いうちにこうなる。そんな感覚だった。
「あした行ってみるか」と波城は、髪を洗いながら

小さく声に出して言った。

決して小さな川ではない。河川敷が荒れていて、社長の言う通り低い木に覆われていた。もっともこの場所だけがたまたまそうなのかもしれないのだが。沿道から下りるまえに見下ろしたところ、ブルーシートやシルバーシートが木の葉の波の中に点在していた。

別に蔑んだりからかったりする気はない。ただ、自分の行きつくところを垣間見たかっただけだ。それを差別意識というなら、それは用語の問題だと波城は思った。

「それにしても」と元不動産屋が顔を出す。川面と河川敷の高低差からみるに、台風や集中豪雨に見舞われれば、仮設テントも住人も一気に流されてしまう。それが解からない人たちでもあるまい。なぜ平気なのか。

そんなことを考えながら河川敷に下りて歩き出した。

一つ一つに特徴がある。覗き込むことはできないが、傍を通りながら興味深く観察をした。入口の幕が開いていて中の人が見える時がある。見えたのは「四軒」ほどだが、全員が新聞や本を読んでいて、これには驚いた。

「珍しい場所で散歩ですね」と後ろから声を掛けられ、「しまった」と思いながら振り向くと、食堂で頭を下げた相手だった。

「どうも、きのうは失礼。いや、実は僕も最近ホームを失ったので」

路上生活者をホームレスと一括りするのは正確ではない、ハウスレスなら納得だが。ハウスを持ちそこに住んでいながらホーム、家庭という本来濃密で温かいはずの人間関係を喪失している人間は無数にいる。それでも、いまの自分はホームレスでいいだろう。波城はそう思った。

「視察ですね、こういう生活の」

「あ、まあ、どう暮らしたらいいのかを、参考までに…」

目の前の男の体格は、銭湯にいた人たちとはレベルが違う。怒りで襲われたらこちらはひとたまりもない。かなり逞しいのだ。

「来ますか、私のハウスに。もう少し先ですが」頬に笑みが見える。

「いいんですか、ちらちら見ていても、もう一つ分からないので」

「たしかに」と言い、「どうぞ」と前を歩き出した。

「長いんですか、ここは」と不躾に聞いてみた。怒られたら土下座でもしようと。

「まだ半年、ここでは新参者です」

歪み一つない笑顔に救われる思いがした。

「半年とか一年とか、とにかく暮らせるということは…」知りたいことの一つだった。

「収入源ですか。各人いろいろですね、知ってる限りでも、資源ごみ回収、主にアルミ缶です、内緒ですけどまだまとめられていない段ボールも。単発仕事の斡旋人に手数料をとられての日雇い。これも天引きでなくバックマージン手渡しという感じだそうです。以前の住所で履歴書を書いてパートで働いている人もいますし。そうそう車で通勤している人もいますよ」

「いま現在は車、僕も持ってます。ひと月後にはご飯に変身しますけど」

「すごいトランスフォーマーですね」

「失礼ですけど、あなたは？」

「私ですか。とりあえず支障があるので、謎ということでご勘弁ください」

会話が切れたところが、ちょうど彼の文字通りの仮設住宅だった。

「本や雑誌がいっぱいですけど、電気がないんですね」

「当たり前ですよ、ここ河川敷ですから。電気窃盗したくても電柱がありません」

確かにバカな質問だった。

「日の出とともに起きて日の入りとともに一日を終える。それが基本になります」

「そうですよね、歴史的にも電気のない時代の方が

ずっと長い」
　またオフロードな応答をしてしまった。
「そのことに気づいたときに私は、こういう生活に入りました。一度、便利って本当は何だろうって頭を抱えてしまって」
「独身ですか」また、失礼かつ無意味な問いを発してしまった。
「今はってことならそうです。妻子は私に呆れて出て行きましたから。もう何年も前ですけどね。あ。コーヒーでも飲みます?」
「沸かせるんですか、お湯をここで」
「缶コーヒーですよ、一箱単位で買い置きしています、もう中毒ですね」
「あ。でもそれ、缶コーヒーって、便利なものですけど」
　顔を見合わせて同時に笑い出した。
　文字通りの小屋の中に二人並んで座った。
　いわば路上生活をしているのに、隣にいるこの謎の中年男からは何の臭いも襲ってこなかった。波城は、コーヒーを飲みながら、目の前の川面に反射している陽の光を見て、和んでいた。
「ほんとうはみんな、満足に食べていないんです。一日に一食、二食は当たり前で、時々都内の公園でＮＰＯの食事支給を利用しています。もっともそれを口に出して言う人はいませんけどね」と男がボソリと言った。
「さっきの収入源だとそうなりますよね、不安定だから」
「ただ、高齢者の場合だけですけど成長するための栄養って要らないわけなので、かえって健康にはいいかもしれません。ありついた食事が、この上もなく美味しく感じられますしね、これ実感です」
「ですね、現役時代は体の要求で食べるんじゃなくて、習慣的に時間で食事をしていましたから。しかも有難みも感じずに」
「それで糖尿病になったり」と男は顎を撫でた。
「それ、すでに持病です」気を使わせまいとして笑顔は作った。「それに、糖尿病って、睡眠不足やスト

レスが長く続くことでも発症しますよ」
「あ、そうなんですか」
飲み干すのが、二人一緒になった。
「こんなふうに、ここの人と話したりするんですか」
「いえ、ほとんど口を閉ざし、自分を閉ざして暮らしていますから無理です。例外的に多少とも外とつながってる人とは話せますけどね。一メートルしか離れていない隣の人とも会話が無いなんてザラでしょ、きっと」
「うーん、やっぱりコンクリートジャングル、大都会の中での孤独に慣れてるんですかね。一説には山の中の一人より人混みの中の一人の方が孤独感大きいって。そうなのかなぁ、困ったとか助けてとか互いに言い合えない社会の縮図？」
「そうだとすると地方から出て来て都会で頑張って来た人の方が、挫折すると孤立しますよね。故郷に帰れなくなって、いや電話連絡すらできなくなって。孤独に慣れていない分、落差で身動きできなくなる」
「だけど都会より田舎の方が人間関係、濃くないですか。家族の連帯も強いでしょ」
男が反応しない。波城は自分の言葉が軽かったかもしれないと少し悔いた。
「そうでしょうか」と男はようやく口を開いた。「濃密な社会、人間関係だからこそ、落ちたら帰れないですよ、心も体も故郷と向き合えない。そんな気がしますけどね」
しみじみとした口調に波城は、男の心中の地雷をうっかり踏んでしまったことに気づいた。男は、自分のことは「謎」ということにしておいて欲しいと言っていたのに。
波城はそろそろ頃合いだと思った。
「またお話聞かせてください。ごちそうさまでした」
波城が空き缶を手にして立ち上がると男は、「缶、もらいます」と手を出した。「集めてる人がいるので」
「じゃ、また、あの食堂で会いましょう」
「ええ、その日の金に余裕がある時に行くだけですが、ぜひ」

少し風が出て来た。
波城は、苦い気持ちのまま白髪混じりの頭を撫ぜた。
辞去した後、一旦元来た方向へ歩き出した波城は、すぐに引き返した。ちゃんと小屋が無くなる端まで歩こう。そう思ったのだ。
男の小屋を通り過ぎた時、左側で男が「うん」と嬉しそうにうなずくのが見えた。

5

長塚良治は旧市街にある株式会社鼓吹社に出向いた。日本で二番目の大都市の中心部とは思えないような枯れた場所にある。兄波城広志がアパートに訪ねて来てから二十日ほど経ってからのことだった。
建物は外壁が薄墨色にくすんでいるほどに年季が入っている。加えて自社ビルにもかかわらず自ら使用しているフロアは四階部分だけで、あとは他社に貸し出している。出版業の斜陽さ加減が分かろうというものだ。良治が三十年ほど前に初めて来たときは、四つのフロアすべてが鼓吹社使用だったのだから。
四階建てだが一応エレベーターは完備している。良治は降りると真っ直ぐに一番奥の区画に足を運んだ。
「よお、君がここに来るなんて久しぶりだな」
声の主の机上には「編集長　大久保満夫」と表示板がある。
良治が「なんだかみっともないな」と評した「看板」だが、とても編集長には見えない風貌なので必須なのだとか。外来の客への配慮だと聞いたことがある。
「ちょっと時間もらえる?」挨拶抜きで良治は応接室を指差した。
「おう、いいよ」と大久保は立ち上がり「用があったらノックしてくれ」と一番近い机の部下に指示をした。

「応接室と言ったって半分倉庫だ、ミニスカートのかわい子ちゃんがお茶です、なんて芸当もない。まったく落ちたくはないよなぁ。最近は主力雑誌『鼓吹』も返本の山だ」と愚痴りながら良治のために折りたたみ椅子を出す大久保。
「もう少し大衆に迎合したらどう？」
「よせやい、そうしたいに決まってるだろ、フーテン老人の性欲、灰になるまで女は女、老いらくの恋で防げる認知症、若返えるための爺の自慰、どうだ？　まだ企画はあるぞ」
「はいはい、もう結構。みんなどこかの週刊誌にあったような気がする。第一ここの会長が許しっこないんだろ」と良治が笑みを浮かべた。
　大久保は大げさに肩を落とした。「うちは啓蒙雑誌だ！　低俗は許さんぞってな」
「でも売れなきゃ倒産は目の前だ」
「まさに。それで何だ、本題は？　深刻なのか」
「深刻というのは違うなぁ、問題の本人は凛々しい確信犯なので。実は兄貴がね」
「ほう。君も肉親の話をすることがあるんだ」
「蒸発した。ほとんど全財産を老妻に渡して」
「何だ、年は違うけど、それって昔の良治のまんまじゃないか」
「同じじゃないけど、まあ、外から見れば似てるかも」
「まさか捜してくれなんて話じゃないだろうな」
「昔大久保さんに頼まれて書いた僕のコラム、憶えてる？」
「あなたも陥る老人禁錮刑だろ。あれは良かった、現実に、君が書いたとおりになっているし。まさに先見の明ありだ」
「兄を捜すのが目的じゃなくて。兄の言動を通して老人破壊とか無縁社会を、独自の目で解析したいんだ」
「その無縁社会って某放送局の番組じゃねえか。その記事をうちの雑誌でか？」
「ええ。駄目ですか、真実がベースじゃ」
「じゃなくてさ。君の今までのイメージからは想像

もつかない。だって身内ネタを金にするんだろ、結局」

「身内ネタはそうだけど、別に稿料くれとは言わない。経費も持ち出しでいい。広く問題を訴えることに意義があるんだ。それと、これは兄貴が知ったとしても、騒ぎも反対もしないと、弟として保証する。本名を使わず仮名で貰くんだけど創作ものと違ってインパクトが違うと思うんだ」

「うちの雑誌だと専門的な処へ行くと必ず注釈が入るぞ」

「それもお願いしたいくらいだから。ほら、来月初めに満良会の定期飲み会があるだろ、そこでメンバーに協力についての確約をとって欲しい」

「わかった、身銭を切ってまで世間や国に何か言いたいわけだ。その心意気に惚れた。企画は通すよ。まだ、家族の問題でしかないが、実の兄貴が動いていく中で、きっと問題の核心に触れるものが次々に出てくると予想した。そういうことらしいな、良治」

「本気の目をすると、別人みたいにピリッとするね」

「豚じゃねえから、おだてても木には登らねえよ」と大久保はニヤリとした。

「で、そこからだけど」

「まだ続くのか、そろそろあっちへ戻ろうかな」と立ち上がるふりをした。

齢五十八、この鬼編集長と言われた男は、かなり茶目っ気がある。

「経費を自分で持つには金が要る。他の仕事を回してほしい。どんな文章でも引き受けるから」

「君のそういうとこ、好きだなぁ、現実的で。良し、じゃ手始めに頼む。タイトルは任せるが、二千字程度で二回連続。ラブホでほんとのラブは育つのかがテーマだ。どんな文章でもいいはホントだろうから、楽しみにしているよ」

「いいだろ、請けた」

「おい、大丈夫か？　女がいるなんて聞いたことないぞ。たのむから男と入るのはやめろよな、君のそういう姿は想像したくない」大久保は半分笑っていた。

「バカにしなさんな、この歳でもできる女ぐらいはいるよ。ルポの味も欲しいんだろ」
「参った。君は凄い。じゃ、そういうことで。こっちの締切りは守れよ」
運良く探し出せたとしても兄広志は家庭には戻らないだろう。他人には無思慮に見えても良治には分かる。兄貴は死に場所、死に方を探しに彷徨を始めたのだ。引き戻すのではなく、弟として消息は掴んでいたい。例えば病気、交通事故、原因は何でもいい、彼が手術を受けようとしたときに必ず「身内の承諾」を求められる。そういうときぐらい弟を頼れる、或いは警察や病院からそれを求められる存在でいたいのだ。専門家の意見を聞きたいが、身の上相談では相手の心を動かすことはできない。幸い大久保を中心とした満良会は医師、弁護士、ケースワーカー、区の福祉課員が揃っている。良治が所縁のある鼓吹社と大久保を思い出した所以だ。
ビルの外に出ると良治は、喫茶店ワゴントレインで会った日の別れ際に聞いておいた砂絵のスマホに連絡を入れた。
「ああ砂絵ちゃん、先日は驚かせたね、長塚良治です。弟として兄貴の追跡を始めます。それでね、資料として兄貴のパソコンを借りたいんだ。そう、自分の部屋で分析したいから、もらっている厚生年金額にいたるまでね。近くまで車で行くから。…うん、着いたらまた連絡する。義姉さんの了解も取ってくれる？　うん、会って砂絵ちゃんにもあらためて聞きたいこともあるんだ、よろしくね」
妙な話だが、久しぶりに高揚している自分がいる。良治は第三者の目で、それを不思議だと思った。

6

「週末に二台売れた、こととしては画期的だな。まあ、とりあえず一杯」
八子神社長がビールを注いでくれた。目の前には奥さんの手料理が並んでいる。
着いた翌日から順次売り物を洗車した。と言って

も大量の水で本格的に洗ったわけではない。それぞれの車の状態に応じて埃をはたいたり、拭い取ったり、タイヤ周りを水洗したりと気遣い程度の作業だった。それは車種と価格を頭に入れるためでもあった。とにかく頭を使いたかったし体も動かしたかった。波城が売ったのは「弁当箱」タイプの軽自動車で四十五万の商品だった。もう一台は社長が接客を担当している。

「うーん、うまい！」と波城は一気に飲み干した。

ご飯に、肉じゃが、青菜のお浸し、梅干しに味噌汁。見方によれば夕食として質素だが、放浪の身にとっては何よりのご馳走だった。

「あとは自分のペースで手酌な、波城さん」と、ビール瓶が目の前に来た。

「ありがとうございます。社長、やっぱり軽は出ますね」

「うん、一家に一台じゃなくて郊外に通勤する家族が居ると一人一台になるしね、妻が働きだしたので、なんて話もよく聞く。まだ運転下手だから最初は中古でという就職したばかりの女の子もいたな。いずれにせよ維持費を考えると軽だな、誰が考えても」

「もう長いんですか、この商売」

「いや、死んだオヤジの跡とっただけだよ、もとはネクタイにスーツのサラリーマンだ」

「想像しにくいですね」と覗き込んだ。

「おい」と笑って、「あんたこそ、ホームレスの真似なんて似合わねえよ、やめな」

「しっかりしていて円満な家族の輪から抜け出てきた…ビール、いただきます。だからもう帰る場所はないんです」

我ながら上手いまとめ方だと思った。自分は邪魔しかできない存在になりはてたのだから。

「真似じゃないというわけか、だけどなぁ、死に場所探しはまだ早いぞ。そういうのはな、いまの俺みたいな人間のすることだ」

やはり訳ありかと波城は、また飲み干した。

見ていると社長は毎日、午後になると小綺麗な作業着に身を包んで車で出かける。資金繰りに行くの

だろうと直感で分かった。奥さんもこうしておさんどんはしているものの、社長と一緒の姿はついぞ見ない。
それにしても「死に場所探し」とは社長も鋭い。そう思った。
「ごはん、いただきます」
「きょうも車じゃなくて河原で寝るのかい」
「ええ、ホームセンターで買ったパッと一気に張れる簡易テント、けっこう便利で、例の河原の一番端っこで」と夕飯を頬張り、「ニューフェイスなんで」と締めた。
「やっぱり可笑し気な人だな、あんたは。楽しそうなのがいい」
八子神社長は体を揺すって笑った。
「ところで駐車場の一番端に置いてある軽トラですけど」
「あれは売れないだろ、荷台に錆は浮くはドアに擦った傷はあるは」
「でも値段付いてますよ、十一万」
「たしかに付けてはいるが。買い手に目途でもあるのか？」
「私が買います」
「いいけど、何を始めるんだ」
「河川敷の人の何人かが空き缶とか段ボール収集で食べてるみたいなんです。軽トラがあれば効率よく稼げるじゃないですか」
八子神の顔が急に引き締まった。
「あんたも競争相手として参戦するわけか」
「いえ、共同で使ってくれと言って寄贈したいんです」
「バカか、あんたは！」
八子神の唾が勢いよく波城の顔まで飛んできた。
「バカはひどいなぁ」とさすがに色を成した。
「彼らが泣いて喜ぶとでも思っているのか？　逆だ。侮辱されたと激怒されるだけだ。それが解らないなら、家族の処へ帰れよ、無理だ、無縁社会じゃ生きられん」
「バカにしてじゃないんです」

「あんたの内心がどうとかじゃない。いいか、見ず知らずの人間からほらよって車をもらって喜べる彼らなら、とっくに故郷に帰ってるし、身内に助けてと言ってるよ、もっと言えば他人や役所をだましてでも楽をして生きようとしてるよ」

波城は絶句した。想像もしなかった視点だった。

「このあとおもちゃみたいなテントに帰ったら、川の瀬音でも聞いて、彼らがどういう想いでテント生活をしているのか、じっくり考えることだな。彼らはあんたと違ってホームレスごっこをしてるわけじゃないんだ。重い自己責任てやつを背負って耐えて、自分の二本足だけで生きているんだよ」

「ごっこ、はさすがにひどいな」低い声で抗議をした。

「じゃぁ、正直に答えろ。貯金はいくらある。赤の他人のためにポンと十万出せるくらいだ、言ってみろ」

波城はいつの間にか拒めない立ち位置に居た。

「二百万ちょっと」

「年金は月当たりいくら入る」

「振り込まれる額の半分だから十万とちょっと」

「いい年をして素直な男だ。人間の良さは認めるよ、いまどき珍しい」

「褒めたり貶したりはもういいでしょ。だから何なんですか、満六十九でこれっぽっちの貯金なんてゼロとイコールでしょ、年金だけじゃ普通に暮らせないでしょ、同じじゃないですか、彼らと。あと少ししたらそうなる。バカになんてできませんよ」

「彼らのほとんどは、貯金も年金もゼロだ、毎日が崖っぷちなんだ。だからかまうのはやめろ。これ以上アドバイスはしない。どうしてもそうしてやりたいなら、こっちも商売だ、売ってやるよ。タダでやっても彼らは軽トラ置くところがないだろうから、うちの敷地に置いといて出し入れ自由でいいよ。優しくするならそこまで考えろ。ただし結果がどう出ても自分でケツはもってくれよ」

「分りました。買わせていただきます」

波城はまだ、人の心というものを信じていたかっ

た。できれば集い、協力し、利益を分かち合えるという姿を。

それにしても八子神社長の興奮ぶりは納得がいかなかった。いったい何が彼をそこまでいきり立たせているのか。

午後九時過ぎ、懐中電灯を頼りに河川敷を歩いた。とはいえ、半月は出ているし、対岸の街の灯は川面に漂い川と岸との境界線を明確にしてくれている。さらにソーラーランプの灯がわずかにブルーシート張りのテントから微かに漏れてもいる。足元は決して危なくはなかった。

たしかに現在の自分は、車で動き回り、携帯型のテントなどを購入し、銭湯に入り、街道筋の食堂で腹を満たすこともできる。それは威張れるほどではないけれど、社長が言う通り金を持っているからだ。彼が言いたかったのは、だからといって思いあがるなということだろう。自分は純粋に慈善の気持ちから発想したのだろうか。波城はしだいに胸を張れない自分を感じ始めていた。

最後の小屋を過ぎて数十歩。「うん？」と首を傾げた。

「無い」超小型で折りたたみ式の、買って間もないテントが見あたらない。

盗まれた？　新規に買っても七千円程度のものでしかない。まさかと思う。風に飛ばされたか？　中の四隅に河原の石を置いていた。だから、それも考えにくい。

波城は言葉を失って立ち尽くした。

八子神社長の抑えた笑い声が聞こえるような気がした。

「なんだ、やっぱり風かぁ」

やむなく駐車場に戻ろうと体を翻したとき波城は、水際に近いところまで移動している自分のテントを見つけた。一時でも住人たちを疑った自分が恥ずかしかった。

しかし近くまで十メートルほど歩いて、その想いは消えた。中に誰か居る。急に覗き込んでは襲われ

る可能性が高い。外から声を掛けた。
「このテントの持ち主だが、君は誰だ」
一瞬テントが揺れて若い男の声がした。「こうして川面を見てると落ち着きます」
人様のテントを勝手に動かし潜り込んで「落ち着きます」も無いものだとあきれたが、声が驚くほど穏やかで、なぜか和みの中に入り込んでしまった。
「それは良かった。貸した甲斐がある」
「ありがとうございます。いま出ます」と大きくテントを揺らして背が高い痩身の男が姿を現した。
「少し眠ったりもしました、まだ明るい時間でしたが」
「この辺りに棲んでる人?」フラッシュライトで相手の胸元へ照射した。顔に直接ではまぶしかろうと思ったのだ。青いTシャツに光の輪ができた。かなりまともな顔つきだった。
「いえ、初心者のホームレスです。全部、何もかも、失くしてしまったので」
「僕も似たり寄ったりだけどね」
「テントがあるじゃないですか」
「もしかしたら羨ましがられてる?」
「ええ、かなり」笑うと、可愛い感じが前面に出てきた。
「今夜、このまま使って眠ってもいいぞ。僕はこの上の一キロ先に車があるから夜露はしのげる」貸してやるのも豪気だ。それもいいなと、突然ひらめいた。
「あははは、天と地の違い」
「しゃれたな今。テントが織り込まれてる」
「面白い人ですね。声を掛けられたときは、これはボッコボッコに殴られると覚悟しましたけど」
「あの第一声は覚悟したなんて声じゃなかった。余裕たっぷりで」
「ほんとですか、嬉しいな」と青年はまた笑顔をつくった。
「じゃ行くよ、おやすみ、青年」とライトの照射を一旦止めた。
青年は頭を下げてから「あした、テントは元の処

へ戻しときます」と言い、「半月は盈虧の半ば。運不運も今日の月と同じですかね」と粋な言葉で締めた。

「エイキは月の満ち欠けだ。実にうまいな、青年」

昔、たまたま弟の良治に習って「盈虧」の意味は知っていた。彼がコラムの中で使っていたのだった。

二人はしばらくの間、並んで顔を上げ、月を見て動かなかった。

「あなたで良かった」心に染みるような声だった。

「え？」

「会えた人が…」青年はゆっくりと体の向きを変えると、また頭を下げた。

「盗られたなんて思ってないよ」

「ありがとうございます」

「じゃ」と波城は、ライトを点けて歩き出した。

何となく心が、温かいもので満たされたような気がした。

7

「砂絵ちゃん、ここ、ここ、こんにちはぁ」と良治は、約束のバス停の前で立っている砂絵を反対車線から大声で呼んだ。

砂絵がノートパソコンを抱えて小走りで近寄って来た。

「悪い、間違えて反対側を走ってきちゃった」

「大丈夫、来てすぐのタイミングだったし」

「乗って。地図で見たけど、たしかこの先二キロぐらいの処に公園があるよね」

「うん、小さいけど池もある」と砂絵は助手席に乗り込んだ。

後部座席は、にわかに詰め込んだらしい雑誌や新聞や資料のようなものが氾濫している。これでは女性は誘えないなと、砂絵は頬を緩めた。

「濃淡の緑が綺麗な街だよね、ここ」

「うん、だからわたし、葉っぱが光る都市で葉光市ってここの名前変えちゃった」

「あはっ、砂絵ちゃんは総務大臣か」

二人で笑ったあとでしばらく沈黙が続いた。

「この前はほんとにごめん。ちょっと言い過ぎた」
「うん、怖かった、最後の方、かあさん泣いちゃうし」
「君は逆にパフェ突ついてたから、この子は凄い、大丈夫だって確信した」
「ひどいなぁ。わたしは叔父さんのイメージが壊れてショックだった。こう見えてもか弱いんです！」
良治は「そうなの」と小さく笑った。
「ここ、左折でパーキングよ」
ハンドル操作で、砂絵の笑顔が見えた。「いい顔してるね」
「うれしい、美人ていう意味じゃないでしょうけど」
池には桟橋のように張り出した施設もあったが、その手前の細長いベンチに二人して腰を掛けた。
「どう、進んでる？　義姉さんのアパートの件」
「孝之と一緒にネットと現地不動産屋で調べて、少し前に引っ越しも終わりました」
砂絵はそう言うと、ハンドバッグを開けてメモを取り出した。
「さすが孝之君は素早いね」
「これ、かあさんの新住所と携帯番号。ガラケーなの。叔父さん、主にわたし、タカは慎重すぎるし女目線の部屋探しに向いてないの」
「なるほど、今回の場合義姉さん用の住まいだからな」と良治はメモを見た。
この後、二人の沈黙が重なった。
目の前で「パパ、この上のぼりたい、お池の水の上に行きたい」と五歳ぐらいの女の子が父親の手を引いている。
「ほんとに死ぬって思ってるの？　オヤジ」と砂絵が前を向いたまま聞いた。
「ああ、すぐか何年も先か、それは彼の想い次第だけどね」
「よく冷静でいられるね、叔父さん」
「僕は兄貴じゃないし。兄貴は僕じゃない。単純な理屈だ」
「結局オヤジにはわたしたち家族が見えないんだ」
「見えてるから選んだ道だ、何度も言うけど」

「そこのところ、よく分かんないのよね、だって妻子のこと思ってたら」
「タバコ、いいか？」と良治は、砂絵の了解を待たずに火を点けた。「砂絵ちゃんが七十歳近いお婆さんになったら、たぶん、理屈抜きで解かると思うよ」
「でも自殺なんて簡単にできるのかなぁ」砂絵の正直な疑問だった。
「自殺じゃなくて自死だ」
「同じじゃないの？」
良治は説いた。自ら理性的に選ぶ自死、自ら裁く自裁、自ら決する自決。これらには前を向いた強い意志と哲学的なものがある。単純な自殺とは違う。誰にも批判されない、蔑まれもしない、むしろ敬意をもって評されるべきもの、そういう説に賛同していると。
「叔父さんの話、ときどき解らなくなるのよね、わたし」
「そうか」と良治は面白そうに笑った。
自分なりに区別はできると良治は言う。自殺は死ぬ前、視野が狭く暗くて感情的。反対に自死の場合は広い視野を維持して明るく理知的。だからといって結果は死亡だから、外見にはまったく同じに見えると。
「あ、それだと判り易いわ」と砂絵は大きくうなずいた。
「ところで、マンションには移ったの？　新婚さんは」
「プロの清掃屋が入って、天井や壁なんかも直すところは直すの。そうそうネット環境が整ったらすぐに移るって富永は言ってる、株のトレーダーなので」
「ちょっと意外だな、砂絵ちゃんは漫画家とか画家とか、そっち方向の人と結婚すると思ってた、だいぶ前の兄貴の話でなんだけどね」
「でも、全然違う世界の人の方がいいかも」最近は自分にそう言い聞かせている。
「なるほど」
良治は話を聞いていて、もう自分はいなくても大丈夫だ、むしろいないほうが無事に済むと、実兄の

波城が確信した理由が解かったような気がした。
「叔父さん、今日、これからどうするの？」
「君を元居たところで降ろしたら、自分の部屋に帰ってパソコンで兄貴のデータを分析するつもり。何とか追跡を可能にしたい」
「出来るの？　糸の切れた凧みたいな人の追跡なんて」
「正直なところ分らない。でも兄貴の思考回路は昔と大差ないと思うんだ。別の言い方をすれば、解りやすい」それに良治はもうすぐ開かれる「満良会」の知恵にも期待をしていた。
砂絵は、すかさずクスッと笑った。「ワンパターンね、たしかに」
「ここの所轄署の生活安全課に行方不明者届は出してあるから義姉さんにも伝えといて。自殺の恐れがあると申告して特異行方不明者にしてある」
「捜索願とは違うの？」
「ほとんど同じだ。八年ほど前に新しい名前に変わった。出しても積極的に警察が捜してくれるとは限らないけどね」良治は、子どもが誘拐されたおそれなどとは当然扱いが違い、高齢者の場合は少し対応が甘いはずだと予想している。
「オヤジがどこかで万一のときはってことね」
「そういうことだ。また何か、君に協力を頼むかもしれない」
「うん、きっとね。わたし結婚しても縛られない妻なので、いつでもオーケーだから」
「ほう、さっそく尻に敷いたか」
「まさか、彼にわたしを縛る気が無いだけ」
「それほど強く愛されてない？」
「あたり！」
大きな声で同時に笑いだした。
桟橋の上の親子が驚いたらしく、二人がいるベンチの方を振り返った。

8

偶然に耳にしたニュースではない。あの日から毎

日午前八時までに八子神の駐車場に来てカーラジオに耳を傾けていた。番組はこの時間になると「気になるニュース」を取り上げてキャスターが持論を熱く語っていたからだ。

この日はどんよりとした雲に覆われ、河川敷を出たころには霧雨が降り出した。大して濡れないと高をくくっていたが、愛車のドアを開けたときには衣服がかなりハッキリと濡れていた。後部座席からタオルを取り、髪の毛をぐしゃぐしゃにして拭ってから下に移して顔を拭いた。普通は逆だろうと、波城は苦笑いをした。

いつものキャスターが、担当のアナウンサーに注目ニュースをと振った。

「五月二十三日に東京湾海上で発見された水死体の検案結果が発表されました。警察によりますと二十五歳から三十五歳ぐらいの若い男性で、事件性は無く、入水自殺とみられています。発見当時海面にはバックパックだけが浮いていて、水中の遺体との間は白いロープでつながっており、バックパックの中には空気をたっぷり閉じ込めたポリ袋が入っていました。また、そのポリ袋の中には自筆と思われる遺書があり、死んだことを誰にも知られないのは辛いからと、水の底に沈まないうちに早く誰かに見つけてほしい旨の文章が含まれていたそうです。遺書の全文は未公開です。溺死してから比較的短時間で発見されたため、腐乱もなく顔もはっきりしていたので、身元確認にもそう時間はかからないだろうということです。因みに氏名、年齢、住所など本人を特定できるものは何一つ無かったようです」

「彼だ」と波城は確信を持った。

簡易テントを彼に譲った翌日の昼頃に河川敷に戻ったときには、もう姿は無かった。テントはもとの位置に戻され、中の四つの重石まで原状に復していた。一番奥に大学ノート一冊が置いてあり、手に取ると中から運転免許証が滑り落ちた。

「大河内玄、オオコウチ・ゲン」…満三十五歳になる直前だった。

ノートに挟まれたメモの文章は哀しかった。

『行きずりのあなたにご迷惑とは思いますが、自殺を実行するまでの彷徨の日々の記録です。最期にあなたのような方にお会いできて和みました。ありがとうございます。田舎の両親には、音信不通だがきっとどこかで頑張っているんだろう、いつまでもそう思っていて欲しいので、絶対に知らせないでください。それならなぜあなたの元に遺したのか。すみません。読んでいただいて、けっこういつも頑張ったんだなと、そう思ってくださったらという身勝手な想いです。最終的には免許証ともども廃棄してください。どちらも公にしないでくださると信じています。失礼ですけど僕、あなたも同じことを考えている人だと直感したんです。さようなら』

ラジオのキャスターが何か非難がましく騒いでいた。ほとんど聞いていなかったが、主旨は「死ぬ気になれば何でもできる」という普通の主張だ。「逆だ」と波城は笑った。

「何もできなくなったから死ぬんだ、バカが」

手にしたノートの表紙に、波城の涙が落ちた。「それにしても若すぎるよ、バカ」

フロントガラスの向こうに誰か居る。

ノートを隠してからワイパーをかけると、傘を持った八子神社長だった。

ドアのガラスをオートで下すと顔に横殴りの雨が掛かった。涙は隠せる。

「おはようございます」

「ひろちゃん、悪いけど今日電話番頼めないかな。三度の飯は伸子に言ってあるから」

社長はこの頃、波城のことをなれなれしく「ちゃん」付けで呼んでいる。六十九歳の爺としては極めて面映ゆい。

「了解です。セールスですか、あいにくの天気ですが」

「まあね、ちょっと起死回生をはかれる大口なんだ。よろしく」

銀行参りの感じではない。ほんとにいい話なのかもと、波城もまた笑顔で応えた。

八子神は出がけに思いついて立ち寄ったのでは

ないらしい。三食を老妻に命じたというのだから。波城には、雨の中を行く後姿が心なしか寂しそうに見えた。

「どうする」と自分自身に問うた。警察に自死した男の身元を知らせるかどうかについてだ。それは、彼の信頼に応えるか、一般常識に従うかの二者択一でもある。

波城は立場を換えて、自分が彼だったらどうなのかを考えた。彼は「あなたも同じことを考えている人だと直感した」と書き遺した。つまり自死を図ろうとしている人だと。であればなおさらだ、自分も同様、ひっそりとこの世からいなくなりたい。もう一点、ラジオで報じていた「死んだことを誰にも知られないのは辛い」という彼の言葉だ。波城を疑っているなら不必要な文言になる。信じているからこそ書いたメッセージなのだろう。択一を悩むのはナンセンスだ。そう思った。

頼まれた電話番を十二時から二時間ほど抜けるべく留守電に切り替えて波城は、車で花屋に走って戻ると徒歩で河川敷の自分の「テリトリー」に戻った。時間が経っても腐らない花束の包み紙を取り去って、花束だけを川に放り投げた。泥地に刺さり空に向かって開いている傘に雨が落ちている。ゆっくりと目を閉じて合掌をした。

安らかになんて眠れるわけがないとは思う。それでも、彼にはもう自分を責めずに成仏してほしかった。彷徨の記録ノートはあの日の夜、直近のネットカフェに入り込んで全て読み終えた。途中で無性に興奮し、曰く言い難い苛立ちが襲ってきたのを憶えている。「若すぎる」それは怒りでもあった。

『五月二十日。昼。給食センターでタダ飯をいただいていたら、不甲斐無い自分に耐えられず、涙とともに急にこみ上げるものがあって飯を噴いた。ある種の生理現象だったのだが、前の席の老人がこれ以上はないという蔑みの目で僕を見た。さらに彼は言った、吐き出すほど不味い飯なら出て行って金を払って食ったらどうだ、罰当たりがと。僕は何回も周囲に頭を下げて、吐いた飯を掻き集めご飯茶碗に

戻した。僕はそれをそのまま食器棚に返すことはできなかった。だからもう一度口に運んで嚥下した。周囲の目がまた僕に集まった。そのとき僕は確信した。生き恥はこれまでだと』

三十五の「青年」の言葉だろうか。江戸時代ではない、現代なのだ。想いの引き金を引くという彼の決意の前には数か月に亘る辛酸な生活があった。それはノートからも解かる。

波城は思う、もしかしたら彼がノートに記録を残そうと思った時と自死を考えた時は一致するのではないかと。だから記録は実行できなかった日々の記録ということだ。

「やっぱりここが入水自殺した人の最期の場所だったんですね」

聞き覚えのある声に振り返ると、ホームレス初日に話した青年だった。

雨はいつの間にか、霧雨になっていた。

「ええ、彼が最後に言葉を交わした相手は僕らしい」

「それは良かった」

「え?」と小さく聞き返した。

「いえ、あなたは優しかったでしょうから」

「クソの役にも立っていない、クソジジイだ」自分自身の本音だった。

青年は柔らかな笑みを浮かべ「それを決めるのはあなたじゃない、彼だ」と言った。「あなたの花束、きっと海までとどきますよ」

「見てたんですか、ずっと」ため息混じりにつぶやいた。

「すみません、声をかけ辛くて」

それであのニュースにつなげたのか。納得がいった。

「いやかまわないですよ、むしろ自分なりの送り方ができましたから良かった」

「余計なことかもしれませんが、行為に出さず心の中で済ませた方が良いような気がします。疑うことしかできない人って多いですから。いえ、今回に限らずですが」

波城も助言の意味は理解した。確かにそうかもし

れない。
「あなたについて詮索はしませんが、ご存知だったら教えてください」
この男は意味もなくホームレスを装っているわけではない。波城は改めてそう思った。
「ええ、わたしで何かお役に立つなら」
「給食センターってどこにあるんですか、それと日比谷公園でやる年越し派遣村って何ですか」どちらも大学ノートの中の記述だった。気になっていた。
「できたら、シェアハウスとやらも」直球より変化球の方が投げやすいとの判断だ。
男は笑顔で頭を掻きながら「参りました、いいでしょう、ご一緒します」と言い、「やっぱりあなたは違う世界の人らしい」と結んだ。
いや、同じだ、何一つ変わらない。心の中で波城は応えた。

9

良治は波城を捜し出して邦子の元へ帰るように説得しようというのではない。二人はとうに離婚している。正確には届け出ているはずだというのが適切だが。自死して欲しくないというのも違うような気がする。明確なのは「兄の足跡を把握していたい」ということだけだ。その曖昧模糊とした感情を、いまこの段階ではっきりさせたくはなかった。「ひたすら行動する。それだけだ」と思った。
すでに、自殺する恐れありとして行方不明者届は提出した。
ノートパソコンの記録で、波城広志の税引き後の年金額も把握できた。正確に入力されていたのだ。不動産の営業畑だったせいか、行動のメモも簡にして要を得ていた。
あらためて砂絵に連絡をして聞いたところ預金通帳は置いて行ったらしいので、郵送を依頼した。着けば年金額も確証を得る。たぶんカードでしか下ろせない約定になっているのだろう。別に資金を奪ってしまう作戦ではない。記帳をすれば下ろした支

店コードを照合して、そのときまで居た地域にたどり着ける。ネットの金融機関コード検索で調べるのだ。

自動車税の自動振替記録も重要だ。廃車や譲渡をしたかどうかが判る。ただ、納税は一年に一度なので調査確認の貢献度は低い。

波城の携帯電話はすでに「只今使用されていません」の状態になっている。

住民登録の移転は考えにくい。女と逃げて余所で別の生活をなどという事件とはちがうのだ。

運転免許の更新はまだ一年も先だ。パソコンに免許証番号の控えは出ていたので、前住所地を管轄する警察に事情を説明してなどと考えてはみたが。

波城高広と絹代、亡き両親の菩提寺はどうか。自死を意識しているなら事前に墓参りに行きそうな気がする。これは深遠寺を訪ね住職に頼もうと思った。

最後に退職をした会社に友人知己が居るかもしれない。これも兄が訪ねるとは思えないが、そういう人がいたかどうかは分かるかもしれない。良治は、都心の株式会社冨加総合不動産本社を訪ねる予定を立てた。

ここまで来て「うん?」と良治はようやく気が付いた。「もう一つ、いや、一番大事なことを忘れていた」と、波城が療養学園跡に行った日のことを思い出したのだ。

「ある。ぜったいにある。しのちゃんに会おうとする可能性が」

良治は再び波城のノートパソコンの前に陣取った。住所、電話番号があれば最高だがと、年賀状書きなどに使うだろう住所録を捜し出しにかかった。

「あとはしのちゃんと同級だった高校の同窓会か」

今年の開催通知の有無については、砂絵に頼むことにした。波城の書類、書簡類は処分せずに段ボールに詰めて、邦子が住む新しいアパートに移したはずだからだ。ただ古希に近い年齢で高校の同窓会が毎年あるのかどうかは怪しい。それでも一縷の望みはあると思った。

邦子が移り住んでいるアパートは四世帯が入れる構造で木造二階建てだった。もちろん屋根、外壁は不燃材が使われている。出入り口は各戸別々外からで、間取りは一律二ＬＤＫだ。その内の和室一部屋には、いまだに引越用の梱包が解かれずにいる荷物が詰まっていた。

「かあさん、毎日塞ぎ込んでいないで、少し動き回ったら。体に良くないよ」

砂絵が、「オヤジ」とマジックインクで記した段ボール箱を開梱しながら言った。

「あなたは逆に家庭を放っておいて出過ぎだけどね」と邦子が返す。

「それだけ反撃できりゃ安心か、よかった、よかった」

「ちゃんと主婦とか妻とか、自覚してやってるの？」

「昼間はいないほうが株に集中できていいんだって。だからアルバイトも続けてるし」

「男の人の口と胸の中は一致してないわよ、甘く見ちゃだめ」

「富永は別なの。変なのっていうかな」

「さっきから何を探してるのよ、それ三つ目よ」

「たいしたもんじゃないのよ、良治叔父さんに頼まれて」

まさか結婚前のオヤジの「元カノ」の情報探しとは言えない。半世紀近く前のこととはいえ、いや、離婚したとはいえ老母も女だ。知って面白いはずがない。砂絵は答えを不完全にしたまま箱の中身を調べ続けた。

「わかったわよ、じゃ、スーパーへ出かけてくるから。何時まで居るの、今日は」

邦子は重い腰を上げてキッチンへと移動した。

「見つけたらすぐ帰るから！」

砂絵は最近急に耳が衰えた邦子を心配していた。おそらく目も同様だろう。今まで気持ちの張りだけで老体を支えて来た証拠だ。

「じゃあ、自分の分だけにするね。ほんとに早く帰りなさいよ、離婚されちゃうわよ、冗談じゃなくて」

「かあさんにはそれ、言われたくないわ」ここだけは小声にした。
「鍵、持ってたわよね、砂絵」
「うん、持ってる！」
手にハガキや封筒の手触りを感じた。「この箱だったかぁ」
砂絵が目的物の上に載っているあれこれを箱から出していると、玄関のドアが閉まる音がした。
「うそ、ハガキの束の一番上だよ」輪ゴムを外して確認すると往復ハガキで、まだ返信部分が付いているところを見ると欠席かもしれない。
「がっかりするかな」と素早くスマホで連絡を取る。
「おう、砂絵ちゃん、速いな」と良治の声は明るかった。
「同窓会の期日は七月十六日午後四時から、海の日だね、これ」
「ああ、兄貴の出身高校から東京湾一望なんだよ」
「それでかぁ、会場も海ホテルさざなみ会館だって。でも叔父さん、オヤジ返信ハガキ出してないけどいの？」
「出席は幹事に電話連絡でも可能だよ、普通。とにかくありがとう」
「きっと捕まえてね」少しだけ声が弾んだ。
砂絵は、波城が家を出てしばらく経ってからだが、自分がどれだけ父親が好きだったかを思い知らされた。細身で頼りなくて、お人好しで、うっかり屋で、少しエッチで、理想とは程遠い存在だったのだが。
「ほんとに死んじゃうのかな」
ハガキの束を手にしたまま砂絵は、細長くしか見えていない畳の上に寝転んだ。目が潤んできて、天井板がぼやけてきた。

10

波城はまた、小雨の日と同じような頼まれ方をした。八子神は正装をして出掛け、留守番役を快諾した波城は午前八時半という遅めの朝食を事務所の

中でとっていた。
　トレーの上には白いご飯、胡瓜の漬物、青菜の入った味噌汁、刻み葱を載せた納豆、それに卵焼きが載っている。特に感激するようなラインナップではないが、バランスのとれた朝食だと、頼まれもしないのに笑顔になっている自分がいる。
　ほとんど食べ終わるというとき、静かに事務所のサッシ戸が開いた。
「ああ、奥さん、ほんとに美味しいです、ありがとうございます」
　入って来たのは八子神伸子だった。以前社長から聞いていたのだが六十五歳、ちょうど邦子と同じ歳になる。顔はだいぶ年かさに見えるが。
「昼は自家製だけどカツ丼にするから食べて」
　そういうと、ほとんど言葉を交わしたことが無い夫人なのだが客用の長椅子に腰かけて、こちらを見詰めている。話があるという感じだった。
「僕の顔に飯粒かなんかくっついてます?」軽口をたたいてみた。
「怒らないでね、波城さん。助けてくれない?」
「はい、今日も暇ですからここに張り付いてます、大丈夫です」
「あなたは鋭いところがある人だと主人が言ってましたから、もう、うすうす感づいているでしょうけど、ここ危ないのよ、八子神は面子があって言えないでしょうからわたしが頭を下げることにしました」と、急に床に両膝をついた。
　波城はこのとき初めて気づいた。夫人の左目の横に小さいけれど赤紫の痣が出来ている。皮下出血だ。おそらく顔を殴られたのだ。
「ちょっ、ちょっと待ってください。その傷は」と立ち上がった。
「月末までに五十万、必要なんです。貸して下さい」と夫人は土下座の形をとり、「怖いところから高利で借りてまして、最後通牒が来てるんです。お願いします」
　過日八子神と交わした会話が蘇った。それで「ひろちゃん」か、この無心が狙いだったとしたら理屈

抜きで虫唾が走る。
「顔をあげてください。その眼の横の傷、まずいですよ、医者に診せた方がいい」
傍に駆け寄ると、夫人を抱き起して椅子に戻した。
「視力に影響が出ることだってあるんですから。八子神さんですね、叩いたのは」
「ヤクザですよ」と涙目で笑顔になった夫人のすがたが、この上もなく痛々しかった。今朝見た八子神の顔に変化はなかった。波城は大いに幻滅を感じた。口は悪くても心の奥に温かいものがあると信じていたからだ。妄想かもしれないのだが、何度も無心しろと迫られ、そのたびに断っていた夫人の姿が目に浮かんだ。「八子神は面子があって言えない…」それがこの傷につながるのか。波城は怒りを覚えた。
「ちょっと前から主人が出掛けているのは、大手のユーズドカー販売店に手持ちの車全部を叩き売るためです。付け値の三分の一を目標に交渉してます」
「それでも無理だな、足元を見られる」冷たく言い放った。
「覚悟しています。四分の一でもいいんです。もうダメですから。その駄目の前に来そうなのが命の危険なんです、この月末なんです。明後日です。現金化できたら真っ先に波城さんに返しますから。命、助けてください、この通りです」
夫人が頭を下げ合掌したときに、波城の心は爆発してしまった。
「やめろ！　まだ俺は生きてる、手を合わされるのは早すぎる、こっちだって死ぬ気で彷徨っているんだ。そういう人間に金は要らないだろうってか。上等だ。もう電話番なんて無意味だろう、三食ご飯付きの留守番もあなたが無心するチャンスを作るためだったと、こういうわけだ。…違いますか」最後にやっと普通の口調に戻した。
「その通りです、ごめんなさい。この通り」とまた土下座をする夫人。その体は、先ほどとは違って恐怖で震えていた。それは暴力癖のある八子神や金融業者から得た心の傷のせいだと、波城は理解した。急激に収まって来た怒り…。

「このまま待ってなさい。一番近いＡＴＭで下ろしてきます。借用証はもらいますから作っておいてください」
「八子神はいませんけど」
「あなたに貸すんです、面子が許さないんでしょ、彼は」
夫人は小さく口を開けたまま波城を見詰めた。
その姿を「意訳」できたとすれば「信じられない」なのかもしれない。波城もバカなことを約束した自分を、「信じられない」と自らからかってみた。
自分に対する憤りが後押しをした。ゼロになったつもりで、どこかに遊びがある。八子神夫妻にそこを見事に突かれたのだ。
金を下ろして事務所に戻ると、夫人は呆けたように同じ椅子に座っていた。
「借用書と交換です、どうぞ」
頼まれた五十万円の入った封筒を差し出すと、夫人は小刻みに震える手で受け取った。
「主人の机の上に封書があります。今朝主人が書いて捺印した借用書です。現金を受け取るまで用意してあることは言うなという指示でした」
「僕が借用書だけを持ち去り、現金を寄越さない場合もあると思って、用心をした。そういうことですね」清々しいほどの侮辱だと思った。
「捺印は実印でしていました」
中身を確かめている波城に、夫人は落ち着いた口調で言った。
「はい、はい。そうであることを祈ってます」印鑑証明書は添えていないのだ。信じるとでも思っているのだろうか。実質、自分への制裁金だと割り切った。相手の不誠実とか嘘は、この際どうでもよかった。
それにしてもずいぶん性格を読まれていたものだ。思わず頬が緩んだ。
「なにか変ですか、書類」
「いや、楽しみでね、この後の展開が。在庫の車が一括で売れたらどうなる、話がまとまらなかったらどうなる。奥さん、想像がつきますか？」

老婦人に嫌味を言ってどうなる。くだらないことをしている。そう思った。
「車は置かせてもらいますが、今夜から寝るのはずっと河原にしますから、そう伝えてください。お手伝いも終わりです。じゃ、失礼します」
「ありがとうございました。恩に着ます」
「もう、言葉は信じません」なぜかまた、頬が緩んだ。自嘲だった。
サッシ戸を開けて外に出ると、太陽がいつも以上に眩しく感じられた。

11

波城は正午に、八子神モータースを教えてくれた食堂に入った。列の後ろについたところで肩を叩く人がいる。振り返るとフリーターもどきの例の青年だった。
「軽トラの件、顛末をビレッジの中の人に聞いておきました」
河原に棲む人たちの区画を彼はそう呼ぶようになった。
「もういいですよ、バカなのはこっちなので」
「感動しました。車ごと逃げたホームレスがいたのに、あなたは誰も非難しなかったそうですね。ほとんど感情を取り去ったような彼らも何か感じたようです」
反応のしようもない。八子神の助言を無視した自分が愚かだっただけのことだ。もしかしたら今朝の五十万の無心の件も、軽トラ事件にヒントを得たのかもしれない。「極めつけの甘ちゃん」波城はこの部分だけを声にして片頬で笑った。
「あ。前に詰めましょう」と彼が軽く背を押した。
「浮かんだ男性、その後どうなったか知りませんか」と波城は話を変えた。
「報道は発見当時のものだけですね、知る限りですが」
「そういう場合、火葬とかどうなるんですか。知ってます?」

「最悪で事件性ありとされた場合でも司法解剖は済んでるでしょうし、いつまでも防腐保存とかしていないでしょうね。おそらく行旅死亡人として処置したんじゃないでしょうか」
「こうりょ？」
「旅行という字をひっくり返します、漢字の字面としては。官報を追っていけばたどり着けると思います」
「載るんですか、その字面で」
「ええ、ほんの短い、一行二十二字、十行ぐらいの記事ですね大体。あ、次です、番ですから、話の続きはテーブルでしましょう」
波城はこの青年の正体を知りたいと思った。なぜホームレスとして動き回っているのか。さらには、なぜ自分に興味を持って接してくるのかを。
トレーに白飯と味噌汁、サバの味噌煮、ほうれん草、とろろ芋と並べた。
青年はと見れば、おかずはメンチカツと揚げ春巻きだった。油好きなのかどうか。
「この食堂、ついに皿洗いのパートを募集しだしましたよ、おかみさん、とうとうくたびれ果てたみたいで」と箸でメンチを二つに割った青年。
「いいね、やろうかな」と軽いノリで応えた。
しばらくの間、箸と口を動かすことに集中していた波城だが、思い切って言ってみることにした。「あなたはどういう人ですか、ホームレスは仮の姿ですよね」
「お互いさまで、了解し合ったような気がしますけど」
「まず自分が名乗れ、ということですか」
「それもありますけど…いろいろ分るとギクシャクしますよ、きっと」
「波城広志といいます。老人禁錮刑を終えて久しぶりのシャバで世の中や人の変わりようにびっくりしているところです。七十歳間近の老人という職種です」
弟良治から聞いた「老人禁錮刑」をちゃっかり使ってみた。

「河原のテント生活が楽しそうに見えるわけだ」と青年は笑うと、「三田村悟といいます、駆け出しですがノンフィクションライターです」
「弟、といっても還暦ですが、ルポライターとかコラムニストとか名乗ってました。どこか違うんですか、その三田村さんの仕事とは」
「僕の方が小説っぽいかもしれません。あ、まだ一冊も出していません。それにしてもいいですね、老人禁錮刑は。たくさんの人が結果的にそうなっているわけで。それとその言葉、雑誌で読んだような気がします」
　波城は、頼りになりそうなこの青年に早速世話になりたくなった。
「三田村さん、ひと月以上連泊できる宿泊施設知りませんか？」
「あれっ、もうテントはやめるんですか、やっぱり盗難事件は腹が立ちますよね」
「いや、自分の車を処分しようと思いましてね。簡易倉庫としての車がなくなると生活用品が男はつらいよじゃないけどトランク一つ程度になる。それが原因です」
「あそこ、駐車できなくなるわけですね」
「あそこって知ってるんですか」案内した記憶がない。
「ビレッジの連中が軽トラ使いたいときに駐車場まで取りに行ってたでしょ。いろいろ様子を話し合っていましたから」
「なるほど。八子神モータースから出て行くというだけの理由です」
「宿の件、知ってますけどピンからキリまでで、予算の方は？」
「安けりゃ安いほど助かります」
「例えば物を盗まれそうな処でも平気ですか」
「もう、年寄の命しか残ってないから贅沢は言いません」
　三田村が愉快そうに肩を揺すって笑った。
「変な人だ、軽トラを盗られても平気な顔している

のに宿舎はドヤ程度でも平気って感覚が面白い」
「そんなに変かな」と首を傾げた。
「そういうところ、好きですけどね。僕、明後日空いてます。午後二時、この食堂の前の駐車場で待ってますから、波城さんは車で来てください。ご一緒します」
メンチを口に入れたせいかどうか、三田村の頬が笑っているように見えた。
「はい、間違いなくその時間に」と波城もほうれん草のお浸しを口に運んだ。

三田村との約束の六月一日、波城は車を取りに八子神モータースの駐車場に戻った。
「まとまったのか、あの話」と波城はつぶやいた。
展示されていた中古車が、すでに四分の一程度にまで減っていた。
かなりのスピードで八人乗りのマイクロが背後に迫り、急ブレーキをかけて止まった。中から六人の若い男たちが飛び出す。
「これもですか?」とその中の一人が波城の車を指差して、作業主任者らしきマイクロの運転者に大声で聞いた。一斉にかかったエンジン音が大きい。
「違う！　その乗用車だけは違う」
「いまどかす！　俺の車だ」波城はつられて怒鳴った。もう原則として自分を「僕」というのはやめる。誰の「しもべ」にもならない。そう思った。
「邪魔だから急いで」と若者は後ろの軽自動車に移った。
自車に飛び乗った波城も急ハンドルを切ってプレハブ事務所に横付けをした。
「社長！　八子神！」と呼び捨てにして走り込む。八子神の机の前に突っ立っていたのは夫人の伸子だった。
「彼はどこだ、まさか奥さんだけじゃないだろうな」外を見ると、もう一台も車は残っていなかった。
「十時ごろ来るときに乗って来たタクシーでどこかへ逃げていきました」
「逃げた？　奥さんを置いてか?」

「はい、殴られて捨てられました。あなたにお金返すように迫ったので」
よく見ると唇の端が切れているらしく血が滲んでいた。
「あとでどこかで待ち合わせ、そういうことか」
殴ったのもシナリオの一つ。そんな風に思えた。
「最後に投げつけていったのがこれです」と夫人が机の上の封筒を寄越した。
「これだけか…」十万円だった。
「一部弁済、じゃないよな。返す気がないということか。これ奥さんへの、いわゆる当面動くための金だな」
「そういう人だから、八子神は」顔が小刻みに震えていた。
偉そうに高説を吐いていた八子神を思い出して波城は顔を歪めた。
「ここの土地、まさか所有地じゃないよな」
「だったら金策だってもっと楽でしょ」
「もしかしたら、離婚も…されたのか」
チクリと胸が痛んだ。お前は八子神を軽蔑できるのか。その想いがよぎったのだ。
「とっくですよ、離婚は危ないお金を借りてすぐでした。思いやりのつもりだったんでしょうね」
法的な追及をされないようにと考えた。確かにありうる。
「それでも、ここに居つづけた…」
「出て行って何が出来るって言うんです？　女が売れる歳じゃありませんよ、六十五なんですから。そこの川にでも入りますか」
一瞬、入水した青年の顔が浮かんだ。
「これからどうするの、奥さんは」
「その奥さんはやめてもらえますか。復氏してますから八子神も勘弁、村瀬です」
波城は机の上に封筒を戻した。
「お金はあなたに貸したんです。彼の借用証書には心の印鑑証明が付いていなかった。だからあなたが返してください。いつまでも待ってます。死んで弁済を免れるなんて絶対許しませんから」

何があっても生きろという意味だが、自分自身を笑える言葉でもある。時計を見た。三田村との約束時刻まであと十五分しかない。

「じゃ、約束があるのでこれで」とサッシ戸まで進み、振り返った。

元社長夫人が両手を太ももに当てて頭を下げていた。

駐車場を出る直前、ルームミラーに映っている事務所を見た。

「死ぬ気かもな、彼女も」

波城は、自分の中で死というものが、至極簡単なもの、日常的なものとして形づけられている、そんな気がした。アクセルを思い切り踏み込んだ自分がいた。

三　混沌

1

良治が叶令子と知り合ったのは二年ほど前で、場所は横浜の赤提灯だった。

二人ともしこたま飲んで酔っていて、令子が店の奥の手洗い器の中に胃の中のものを戻した。並んでカウンターに座り機嫌よく話し合っていたから誤解されたのか、店の女将が器の中を始末して臭わないようにしてくれと良治に命じた。怒って断ることもできたのだが、良治は令子の背中をさすって「水で口をすすげ」と言い、コップを持たせてトイレまで支えた。戻って女将から塩素系の洗浄剤をもらい、ゆっくりと時間をかけて排水と洗浄をしたのだが、終わって席の方を見ると令子が酔いつぶれていた。結果良治は二人分の勘定をすませ、さらには見ず知らずの女を背負って最寄りの旅館に運び込む羽目に陥った。そこはいわゆる連れ込み旅館だったが、さすがに吐いた女を裸にして抱く気にもならず、外の格好のままベッドの上で並んで眠った。

翌朝目を覚ますと、シャワーを済ませたらしい女

は、素裸で良治に絡みついてきた。よほど良治の厚意が嬉しかったのか、ほとんど奉仕に近い丁寧なセックスだった。以来、呼び出せばどこにいても必ずやって来た。良治は教わった「令子」という名と電話番号を登録していただけで、女のプライバシーには全く興味がなかった。性的な行為に礼をしたことも、将来の何かを約束したこともない。考えてみれば不思議な関係かもしれない。

その令子がいまも裸のまま良治の唇をむさぼっている。一度終わっていたのだが、長い間肌を併せているうちに、良治の男は蘇っていた。

「する？」と令子が耳元で言った。

「ああ、久しぶりだからな」と強気を装った。じつは二度した経験などはない。

「少しの間、繋がってるだけでもいいの」

良治は言われたとおりに下になった。

「何かホッとするのよね、こうしてると」

「まったく異質な男と女がつながるのは、性交しかない、ここしかないからだろうな」

「良治は心とか想いとか信じないって言ってたわね」

「見えないものはつなげようがない。それだけだ」

「哀しいな」

「そうだな、僕もだ。お互いに哀しい人間なのかも」と小さく笑った。

「哀しくない人間なんか、大都会にいるかしら」

「どうかな、いたとしても君や僕でないことはたしかだ」

「あ。こんな話、してるからよ」

どうやら抜けてしまったらしい。

令子はゆっくりと離れてから並び直し、良治に倣って天井を見た。

「君の苗字は？　初めて聞くけど」フルネームを知りたいと思った。

「お願いが叶うっていう、叶。叶令子よ。どうしたの、急に。わたしは聞かないでおくわ、苗字って家族を連想するでしょ、だから」

「僕は長塚良治、自分の家族はゼロだ。それにして

も珍しい苗字だな。ま、最近になって一人知ったけど」
「へーえ、女？」
「名前だけで会ってはいないけど、叶裕。兄貴が詐欺にあった関係でね」
急に跳ね起きた令子。ベッドが大きく弾んだ。
「どうした」
「ううん、何でもない、人違い」と令子はまた横になった。
まさかだが、もしかしたらと良治は閃いた。
「言ってくれないか、巻き込んだりしないから、金のこともう済んでるし」
兄の波城広志はすでに行き先を決めた男だ、金は要らないはずだと思った。
信じたのだろう。令子は簡潔に説明をしてきた。
叶裕とは半年も前に離婚している。年の差婚で一年しか続かなかった。若いという以外何もない、根っからいい加減な遊び人だった。金を出して任せた不動産業も事実上倒産させ、百万程度の金を或る人に弁償しなければ事業再開はできないという。極最近無心に来たが断って叩き出した。居所は不明だという。
「その弁償すべき相手が兄貴というわけだ」良治は静かに言った。
「ごめんなさい」
「無心に応えたとしても彼は兄貴に返しはしないさ」
良治は砂絵から受け取ったパソコンで事情のほとんどを把握している。
「鋭いわね。でも怒らないって、不思議。お兄さんのこともだけど、結婚してた間に会ってもわたし、一度もあなたに報告しなかったし」
「君が何者かなんて実は考えたこともない。君と君のからだが気に入ってたから会いたかっただけだしな」失礼な話だが、本音だった。これで女の負い目を取り去れるだろう。そう思った。
「うれしい、助けてくれてありがと、良治。わたし物静かな年上が好きなの、自分がちゃらちゃらして

るからだと思うけど」
バカな女ではない。やっぱり気が付いたらしい。
令子が身を翻して唇を吸いにきた。
応えているうちに強く抱きしめている。良治はそんな自分を不思議に思った。
「シャワーしてくるね」と、しばらくくっついていた令子が、裸のままバスルームに消えた。
良治は鼓吹出版の大久保との約束について考えてみた。一刹那の歓喜を共にするだけですぐに体が離れ、想いが離れていく。それでもまた、繋がるために、その行為をするために彩り鮮やかな館に連れだって来る。性器の火照り、体液の匂い、男女の汗の混ざり合い。その中に自分を置いて何を得るのだろうか。ラブホテルが男女二人にもたらすものは果たして何なのか。もしかしたら、現場では何も見えないのかもしれない。すべてはことの事前と事後の、怜悧な分析でのみ辿り着けるような気がした。
近いうちに令子とまた会おう、良治は一度、何も考えずに女にのめり込んでみようと思った。原稿の締切りは一昨日だった。明日は徹夜だなと覚悟をした。

2

波城家の長男孝之の家庭にも少しずつ亀裂が入っていた。
夕食後、六つになる美穂が自分の部屋に戻ってからのことだった。
妻の郁美が、テレビ番組の中の家族争議にコメントを発した。「家族の一人が事件を起こしただけで、家族全体が世間の笑いものになるのよね。それなのにみんな必死でかばうのよ、バカみたい」
孝之が新聞を前にかざしたままで、笑いを抑えて言った。
「テレビの中の人とお話するのはやめろよ、まだ若いんだから」
「うちにだっているじゃないの、いい年をして家出したバカな人が」

「オヤジのこと、言ってるのか、郁美」
「そうだけど、何」と食卓を拭く力を強くした。
「オヤジはバカじゃないし、あれは家出じゃない」
「世間には通用しないでしょ、あなたの家の人だけの理屈よ。家を出て行方不明、書き置きまであったんでしょ、立派な家出じゃない」
「君の言う世間て、具体的に誰と誰だ。まだ内輪で済んでる話だぞ」
孝之は新聞をたたんで郁美の顔をじっと見た。
「聞かれたのよ、美穂に、ジイジのうちに遊びに行きたいのにどうしてって」
「だから正直に答えてやった?」
「ええ、いつまでも隠せることじゃないでしょ、まだ子どもなんだし、不思議に思うわよ、言うしかないじゃない」
「そこから世間へ拡散か。美穂がお友だちにしゃべって、その子が親に話して、親がまた別の親に言ってと、そういうわけか」
「そうみたいね、商店街でママ仲間に引き留められて同情されたわよ、みっともない」
孝之はすっと立って自分の部屋へと歩き出して言った。「それじゃ、バカは君だ」
「なんで？　何でわたしなの」
「分らないなら、掛け値なしの…ま、自分で考えるんだな」
「ちょっと待ってよ」郁美が迫って来た。
「少し」
「何よ」と袖をつかまれた。
「みそこなった」と振り切ってドアを引いた。
「偉ぶって何よ、開けなさいよ、ちょっと、何で鍵なのよ」
扉の向こうの妻の声を聞きながら孝之は、タバコを手にして火を点けた。
当初は面食らったが孝之は、父親のことを真に評価し始めている。あとひと月も経てば波城広志の信念の強さが分る。おそらく誰にも迷惑をかけずに死ぬ気だろう。自分はそこまでできるだろうか。答えは否だ。途中のどこかで自分に折り合いをつけて、

活きるではなく生きる方を選択するだろう。それを恥ずかしいとは思わない。その上でのことだが、父親に男として負けたと思うのだ。叔父の良治も同じ気持ちで、足跡を追っているのに違いない。そう思った。

机の前に座っている孝之の周りを、紫煙がゆらゆらしながら回っていた。

「オヤジのあの行為がみっともないのか、郁美には」

家族ってなんだろうと思う。自分自身、両親を安心させることはできなかった。二人が万一の時は我が家に引き取るとも、金を出して援助するとも言わなかった。もしかしたら、父親が潔くて助かったと、安堵しているのかもしれない。オヤジの歳になったとき、同じ局面で郁美や美穂が今回と同じように自分たちだけで全て決めてしまったとしたら…。

「さびしかったろうな、オヤジ」

手が無意識にスマホを操作していた。

「砂絵。オヤジの消息、何かつかめたのか、叔父さんの動きも含めて」

「まだ全然、叔父さんが、警察に行方不明者届を出して、東京、神奈川の地元新聞にオヤジ本人にしか分からない形で尋ね人広告出して、勤めてた最後の会社の総務課行って在職中の友人のあるなしを確かめて、東山紫乃さんていう小さいときからの知り合いに手紙を出したってところまでは聞いてる。叔父さんからの連絡はかなりひんぱんに来てるよ」

砂絵が興奮気味に一気にしゃべった。

「しのさん？　女の人」

「うん、叔父さんは事情知ってるみたい。女の人といっても同級生って言ってたから歳は同じはず、おばあちゃんよね。タカの方は何か見つけた？」

何もしていない。チクッと胸が痛んだ。

「ごめん、こんど叔父さんに直接きいてみるよ」

「そうして。オヤジもだけどかあさんも心配」

「あそこ、物件的にはいいと思うんだけどな」

「そっちじゃなくて精神面よ、オヤジがマンションに帰ってきたらどうしようとか、荷物も片づけもせずにオロオロしてたり、ネギ刻みはじめたと思った

ら包丁持ってボーツとしてたり」
「まずいな、その症状。砂絵、悪いな、お前一人にフォロー頼んじゃったりして」
「だって親じゃん、しかたないよ。あ。切るよ、富永が風呂から出た」
「お前だって富永だろ…」
切れたのに、スマホの画面をしばらく見ていた。
「だって親じゃん」砂絵がまた、耳元で同じことを言ったような気がした。

3

小学校時代から不思議な縁で結ばれている波城広志の想い人小桜紫乃の嫁ぎ先である東山家は、三代続いている建設会社で決して大きくはないが、地域に密着した営業で指定都市である市内では有力な業者の一つだった。紫乃の父親小桜和男が市会議員であり、市長選挙に立候補が予定されていたころ、二代目社長の東山敏弘が長男博行と紫乃の結婚をかなり強引に押し進めた経緯がある。小桜和男も土木建設業界の集票力を期待してこれに応じている。これを要するに紫乃と博行は或る種の政略結婚ということになる。
東山邸は市内の高級住宅地の一画にあり、敷地面積は市街地にしては贅沢な約五百坪、複雑な飾りを施した鉄製の門には往年の勢いが感じられる。
大門の左側に通用門があり、くぐると幅四メートルはあろうかという舗装路が玄関まで真っ直ぐに続いている。一階は中央部分に応接間、キッチン、茶の間、バスルームが集まり、その右側に車椅子生活の博行の部屋、同中央部の左側に要介護老人の敏弘の部屋がある。二階は全て女の部屋で、嫁に出ている三十八の長女ひろみ、三十五の次女佳乃、そして紫乃の三部屋がある。つまりひろみ、佳乃が来ていないときの二階は紫乃一人になる。紫乃の部屋以外の四個室は全て洋間だ。
紫乃の部屋は敏弘の部屋の真上にあたり、改装工事で両者の部屋は階段でつながっている。敏弘がイ

ンターホンで呼びだせば紫乃がすぐに階下に降りられるという仕掛けだ。この改装により紫乃は、自室に戻っても安息の時間が得られないということになった。

紫乃は姿見に自分を映すことをしなくなった。自室にあるのだが、ポリエステル生地でカバーを作って覆い隠したのは一年も前のことだ。もともと贅肉のない体なのだが、老いて痩せすぎ病人のようになっている。有難いことに顔はそれほど痩せこけてはいない。鏡に映しても普通のおばあさんがそこにいるだけだ。一度だけ着衣をすべて取って全身を映したことがある。もう女の形はなかった。それでも目を閉じれば嫁ぐ前の自分が見えた。その翌日だった、紫乃はカバーを掛けて固定している。

紫乃はキャベツをカットし、ピーマンを乱切りにして、ニンジンも赤い短冊のように刻んだ。レンジの上で、鍋が蓋を小刻みに叩いている。沸騰したようだ。火を止めて蓋を開け、適当にカットした豚バラを湯に通そうとしたその時だった。呼び出しのベルが鳴った。キッチンや茶の間にも設置されているのだ。

「紫乃、うるさいから早く行け」と茶の間から博行が大声を上げた。

「待って、手に豚の脂が付いちゃって」と肉を手離して洗剤を掌にかけた。

「紫乃、いいから行けよ、おらぁ！」

「佳乃、先に見てきて、すぐ来ますからって言ってベル止めて」

今日は茶の間には次女もいる。遊びに来ているのだ。

「嫌よ、どうせクソでしょ、それにお気に入りのかあさんじゃないと腹立てるし」

「紫乃、殴られたいのか、うるさいって言ってんだよ、くそっ、バカオヤジがぁ」

タオルを手に紫乃は、茶の間を横切り廊下に出ようとした。

「戻ったら寿司屋に電話しろ。糞を始末した手で作った料理なんか食えるか」

「佳乃、電話して」と急ぐ紫乃。
後ろから佳乃の声が追いかける。「自分でやってよ、わたしお客さんだし」
博行が佳乃に命じる気配は無い。
「お義父さん、ベル止めて」
敏弘の部屋に入るなり紫乃は両手を合わせた。そうすることですぐに止めてくれることを最近になって気づいた。
「気持ち悪い、早くしろ。拭くときは温かくしてからタオル使えよ」
義父はもうオムツなしには暮らせなくなっていた。詳しいことは知らない。排尿、排便がコントロールできないらしい。往診に来る老医師は、原因をはっきりとは言わない。「とにかく患者の希望通りに」というだけなのだ。
脱糞の量は常に少ない。その点は始末がいいのだが、男根をきれいにするため微温湯で湿したタオルで拭くときだけ義父は手を添えてくる。本当に病気なのかと疑い、自分はいたぶられているだけかもと感じるようになった所以だ。
十五分ほどで処理と清拭を終え、茶の間で受話器を手に取ろうとしたときだった。
「手は消毒したのか」と博行がとがめる口調で言った。
「しましたよ、そんなに気になるならご自分でかけたらいかがですか」
紫乃は限界までイライラしていた。
佳乃の顔がサッと変わった。
「もしもし、東山でございます、いつものお寿司を三人前おねがいします」
後ろ髪が強い力で引かれ、紫乃は受話器を持ったまま床に倒れた。黒電話の本体が足の上で弾んだ。
「車椅子から飛ぶようにして博行がかぶさってきた。「何様のつもりだ、紫乃」
顎に博行の手が掛かった。
「パパ、まずいよ、そこまでしちゃあ」と佳乃が椅子から立ち上がった。
「お前はうちの奴隷なんだよ、召使い、奥様のつも

りだったのか、ええっ！」

紫乃は応えなかった。足は萎えていても博行の上半身には鍛えられた名残がある。逃げたくても無理だと分った。どうにでもしたらと、そんな気持ちになった。もうたくさんだった。博行の掌が顎から首に移っていた。

「お前の九十二になる親のホームの金、誰が出してると思ってる。あの婆ぁだよな、結婚前お前に男がいたのを知ってて黙ってたのは。処女ぶってたお前もたいしたもんだが。一生ここで召使いをしていろ！」

確かにホームに支払う月当たりの負担は十万近い。ふつうなら義父敏弘を完璧なホームに入れ、紫乃を離婚で追い出して小桜朱美を看させればいい。しかし博行はそうできないでいる。義父が自分のホーム入りも紫乃追い出しも認めないからだ。

いわゆる男がいたというのも非処女というのも博行の勘違いだが、思い込んでいるので始末が悪い。しかしそれも母親の朱美が誰彼無しに、挙式の前日まで恋人のプロポーズを待っていたと吹聴しているのだから、誤解されてもやむを得ない。理解者である美佐も紫乃の二人の娘も、ホームに見舞いに行った際に朱美からそう聞かされたという。聞いてからは三人とも朱美の見舞いに行かなくなった。

博行の肩の向こうに見える娘の佳乃の眼が心なしか冷酷に見える。

「佳乃、起こせ」

さすがに娘の前では殴れなかったのだろう。佳乃の手を借りて車椅子に戻った。

「パパ、いまの騒ぎ、寿司屋に筒抜けだよ、きっと」

「商売屋は注文取れたらすぐに切る。心配するな」

「ならいいけど」と佳乃は受話器と本体を元の台上に戻した。

紫乃は表情一つ変えずに立つと、廊下に出ようとした。

「お前、寿司を三つ頼んだな。まさかオヤジの分を抜いたんじゃないだろうな」

「わたしのですけど」お茶漬けでも後で食べるつも

りだった。
「ふん、解ってるじゃないか。佳乃、寿司が来たら醤油ぐらい出せよ。紫乃は二階に上がるらしいからな、ひとり寂しく」
「どこにあるの」と佳乃がふくれた。
「キッチン」と紫乃が短く答えて廊下に出た。
もう誰一人家族ではないし、ここは家庭ではない。ではなぜここに居るのか。ひとりで生きていく経済力がないからだ。朱美のことがあるからだ。それ以上でもそれ以下でもない。だとすると、博行の台詞ではないが、いまの自分は奴隷ではないか。紫乃は真正面からそう思った。
和室の文机の前で紫乃は、目の前の状差しを見た。男の名前で誰だか分からないので、とりあえず差しておいた封書がある。差出人は長塚良治。
手に取って披いてみた。

『前略　不躾ながらお願いをいたします。
以前貴女様が、療養学園、高等学校、勤務先でご一緒だったことがある波城広志の弟の長塚良治と申します。一度妻の氏を称する婚姻をしたため姓は異なりますが実弟です。じつは兄、思うところあって家族・家庭から離脱し、独り思索の旅に出てしまいました。家出と世間で言われる感情的な行動とは違い、また、認知を患っての徘徊とも別の、あえて言えば哲学的な彷徨となりましょうか。直前にいろいろ話を聞いていましたので、兄の想う処や信念については承知しております。ですから私も捜し出して連れ戻そうとしているわけではありません。ただ、足取りだけは摑んでおきたいと考え、諸々手段を講じ、また人様にご協力を頂戴しているところでございます。
さて、お願いと申しますのは、もしあなた様の元に連絡、通信などがありましたら、日付とどこから電話をしてきたのか、あるいはどこから投函したものなのかだけでも教えていただければ幸いでございます。また来る七月の海の日に高校の同窓会があることを兄の遺留品の中で知りました。ついてはご

参加の場合で結構ですので、さりげなくお話になったことどもなりとお知らせくだされば幸甚です。そのときまで、その日まで存命だった、それだけの情報でも妻子は安堵すると愚考いたしますので。

以上誠に勝手ながら、伏して宜しくお願いをいたします。　草々

長塚　良治

東山紫乃様

追伸　別紙に私と兄の長女砂絵二人の連絡先を記しておきます』

「波城君が哲学的な彷徨？」口に出して言ってみた。納得とも、不思議ともいえる。

そういう人生の「始末」の仕方もあるのかと、紫乃は感じ入った。「彼らしいな」とも思った。家庭が滅茶滅茶になったから出たのではなく、おそらく自分が滅茶滅茶になる前に身を引いたのに違いない。優しい児だった。シャイな生徒だった。要領の悪い誠実な社員だった。いつも「自分のせいだ」と責めるタイプの人だった。最後の別れのときからいったい何年経ったのだろう。「半世紀？」いやそこまでは…。それでも四十年以上にはなる。

「あははは…思い出してる彼の顔が若すぎて困る。いまの自分が年寄り過ぎる」

なぜか涙が溢れ、頬を伝って下りて来た。

笑ったからか、嗚咽したせいか、胸の中からこみ上げてくるものを感じた。これで何度目か。そう思ったときに大きく咳き込み口を押さえた。掌を恐る恐る開いてみると少しだが真っ赤な血があった。

「喀血…」紫乃は自分の吐いたものを食い入るようにして見た。「再発、してる？」

「ママ、開けていい？」と佳乃の声がした。

慌ててハンケチを手にして血を拭い取った。

「いいわよ」

「ママ、ごめん」と言って入って来ると、紫乃の肩に手を触れて座った。

「パパのいる前ではきつく当たらないと後でネチネチ言われるの。根性無しで悪いけど、うちも生活費、助けてもらってるしさ」

長女のひろみも佳乃も未婚だ。もっとも佳乃には男がいるらしいが結婚には踏み切れていない。どうやら祖父母、父母の夫婦仲の悪さを日々見ていたので結婚に対する憧れなど抱けないらしい。

「パパが部屋に引っ込んだら、キッチン片づけとくから。じゃぁね」

佳乃はそう言うと急いで階下に降りて行った。

顔も見ず応答らしいこともしなかった。

「調子が良くて誠がない子」

本物の男は摑めないだろう。そこだけは自分と同じだと紫乃は思った。

ハンカチをポリ袋に包んで屑籠に入れ、広げてしまった便箋を丁寧に仕舞う。

「今度波城君に会えたら四度目の奇跡だわね」思わず口元がほころびた。

他愛もないことで救われている自分がいる。紫乃は封筒に手を合わせた。

「冨美の梢」という施設名が墨書されたフロントで手続きを済ませた紫乃は、車椅子が往来する幅広い廊下を進み、介護レベルが中ほどの棟へと向かった。

母親の朱美は、下半身が不随の上、認知が比較的明瞭な時と突然ダメになる時がある。そこで紫乃は、予定日の早い時間にあらかじめ看護師から状態を聞き、良好な時にだけ訪問するようにしていた。なぜ「まだら」な症状なのか難しいことは分からなかったが、義父敏弘の往診役の医師によると良好な時に自殺を図るおそれがあるという。昔、精神疾患の患者がそうなる映画を観たことがあるので信じた。

部屋に入ると可動式ベッドで上半身を起こした朱美が窓の外を見ていた。

「おかあさん、おはよう」紫乃は目一杯の笑顔で言った。

「今日は一人なの、あの背の高い優しい男の人は？」

博行は来たことが無い。いつも通り波城広志のことだった。朱美の中での彼は二十代のままらしい。それにしても記憶というか、波城広志へのこだわりが凄すぎる。紫乃は胸が詰まった。

「今度は、なるべく一緒に来るね。彼、忙しくてね」

思わずハンカチで口を覆った。

「早くお前があの人と結婚しないと、死ぬに死ねないのよ、わたし」

何十年も前に東山博行と結婚し、子どもも二人いるのだと何回言い聞かせただろう。母親は聞くたびにそれを消し去っていることになる。無理もないと紫乃は思う。

市会議員を辞めてまで立候補した市長選挙に敗れた父親小桜和男は、四年後の市長選挙も負けて、市議でも市長でもない、東山家にとっては何のメリットもない男になってしまった。と同時に「小桜市長二期八年」の恩恵を目論んでの政略結婚もその意義を失った。建設会社社長東山敏弘率いる東山家は結果的に、凋落した小桜家の娘を嫁にしただけになった。縁談が始まったころに女がいた息子の博行も白けて、その女を愛人として数年間囲い続けた。

目の前で痩せこけた顔を紫乃に向けている朱美は、それ以後の屈辱に満ちた日々を忘れていない。それだからこそ想いは「あの日」にまでさかのぼるのだ。

博行との挙式を明日に控えた日、小規模な寿退社の祝宴を終えた時間は午後九時だった。幹事だった波城広志が酔った紫乃を小桜の家まで送ってくれることになる。タクシーでは吐く恐れがあるので最寄りの駅までは電車を使い、あとは弱い夜風を受けながらの徒歩となった。およそ二キロの行程だ。紫乃は熱いからだと心を波城に押し付けながら歩いた。車道側を歩く波城の右腕にしがみつき、揺れる頭を波城の肩に当てて固定した。喉が渇き、鼓動が激しくなった。「はやく告白しないとうちに着いてしまう」その想いが涙を呼んだ。一度歩みを止め、波城の顔を涙目で見詰めた。それでも「抱いて」とは言えなかった。「せめてもの想い出をください」と

も。二人で玄関に立ったとき、母親が言った言葉を紫乃は忘れないでいる。

「すみません、この子が我がまま言ったんでしょ、ほんとにごめんなさい」

紫乃の中の想いを全て知っていた朱美だった。考えてみれば、職場での波城のあれこれを毎日母親相手に語っていたような気がする。朱美は一目見て、二人が男と女の関係に至らなかったことが分かったのだろう。

しばらくは談笑が続いたが、急に朱美が真剣な顔つきで言った。

「紫乃、もうすぐ自由にしてあげるからね」

遠い過去のことを言っているのか、それとも…。紫乃は目を瞬いた。

4

不思議な男が三十二歳だというのには驚いた。波城には、二十五六歳にしか見えない。その彼に紹介されて一日三千円という粗末な旅荘『あけぼの』に泊まり込んでから一週間になる。着いた日、フロントでひと月の連泊契約をするやいなや三田村を乗せ、これまた彼の紹介で車を近場の業者に十万円で売り払った。安売りをした代わり車中の荷物処理の手間賃は無しにしてもらった。彼とは業者の処を出てすぐに別れたが、名刺はもらっている。

『ＮＰＯ法人つづらふじの会　三田村悟』

電話もメールも可能になった三田村から連絡が入り、近くまで来たから立寄るという。八畳一間に布団が三組無造作に積まれている部屋で出かけずに待っていると、コンビニの白い袋を下げて入って来た。

「どうですか、居心地は」どっかと座ると、彼は特大の笑顔を作った。

「鍵のない部屋に寝るというのは何とか慣れましたね、初日は落ち着かなかったけど」

襖はあるのだが防犯上はまったく無防備だった。それでもとりあえず個室状態ではある。

「盗られるものもないですからね、ここに泊まる人たちには」と袋から缶ビールを出すと三田村は真っ直ぐに差し出して続けた。「軽トラ、あの駐車場に戻って来ましたけど、どうします？」

缶を受け取って、プシュッと波城も開栓した。「何か今さら戻されても困るけどなぁ」

「そう言うと思ったので、盗人さんにみんなのために使うように言っときました」

「あははは、ありがとうございます。で、何をしようとして盗んだんですかね」

「少しばかり大規模に空き缶を回収している連中の処で、ちゃっかり仕事をしていたらしいんです」

「仕事、ねえ。それで戻ってきたのは？」

「自分だけいい思いをしちゃ、やっぱり悪いと」

二人は、声を揃えて笑った。

「いい人じゃないですか」波城は気持ちよさそうにビールを飲み干した。

「四十なのにその彼、なんか可愛い」と言って三田村はまた二缶を取り出した。

「軽自動車税がありますし、車検もありますよ。大丈夫かなぁ」

「実は僕も念押ししました。三人で相談して頑張るとか言ってました」

「まあ、どっちもあと十か月は余裕ありますし、負担が少ない軽トラですから平気かも。そのことで来てくれたんですか」

「いやいや、いつか波城さんが言ってた給食センターに二人でと思いましてね」

「あ、すみません、嬉しいな」

「知り合いに渡りつけておきます。落ち合うのは駅ならどこでも大丈夫ですか。確定日時はのちほど連絡します」

「はい。何か持っていくものありますか」

「体だけ。荷物だけじゃなく気持ちも重くしないでどうぞ」

「これは参りました」と波城は頭を掻いた。

「そうそう、波城さんの残したテントですが、ご自由にお使いくださいって札をぶら下げておいたら、

ついこの間入居しましたよ」
「無駄にならなくてよかった」
テントという単語で波城は、自死をした大河内玄が遺した日記のことを思い出した。免許証の方は場所を選び、ライターを使って判読不能にした上で廃棄しているが、日記はまだ手元にあるのだった。誰でも入れる部屋で、しかも三人までの詰め込みに同意を与えている。金目のものではないが不安は残る。三田村にいつ保管を委託するかで迷っていた。ただ、彼はライターなのだ。人柄を疑うわけではないが、いつどこで自作に利用する気が起こるか分からない。彼が物書きのプロであることが委託をためらわせていた。
やはり同じプロでも弟良治の処へ送ろう。結局波城はそう決めた。
「ＮＰＯ法人って会社みたいなものですか、いえ、この前名刺をもらったときに聞くのを忘れて」と波城は話題を変えた。
「定義的に言うならですが、政府とか企業ではできない社会的な問題に取り組んでいる民間の団体ですね、法人格は与えられていますが、営利を目的にしていないのでいわゆる会社ではありません。やっているのは特定非営利活動になります」
「たくさんあるんですか、そういう団体」
「増えてはいますね、なにしろ格差社会になってきましたから。このままいくと貧富の差が拡大し続けて、かなり深刻な状態になる恐れもあります。もちろん貧困だけがこの社会現象の原因の全てではありませんが」
「志の高い仕事をしているんですね、三田村さんは」
「いやいや、僕なんかはまだ真似事だけです。でもこれだけは言えますよ、立派で頭が下がる人たちがたくさんいます。あなたにも会ってもらいたくて」
「ありがとうございます」
礼は言ったものの、波城には自分にその資格があるとは思えなかった。
「お礼を言わなければならないことがもう一つありました」と波城は正座をした。

「急にどうしたんですか」と慌てて三田村も膝を整えた。
「この旅館です。一日中在室していてもかまわなかったんですね、助かりました」
「ああ、確かに、意識はしました。籠りっきりもオーケーです。こうしてお客の客が勝手に出入りしても一緒に酒を飲んでも、うるさいことは言いませんしね。その代わり部屋の片づけはきちんとしないと女将に注意されますが」と言って胡坐に戻った。「以前ここに三日居続けて、ノートパソコンで原稿書いたことあるんです。ここのオーナーもある意味かなりの人物ですよ。もっともなかなか表に出てきませんが」
「いろいろ勉強になります」本音だった。
「やめてくださいよ、僕の方こそ、こういう人がまだいるんだと、心底驚いて学んでいます。あ、もう膝を崩してくださいよ」
波城はもう一つ気になることを聞いてみた。
「三田村さん、軽トラの件で駐車場にも行ってみました？」
「ええ、ほかの車は一台も無かったですけどね」
「社長がバーゲンセールをして逃げ出しましてね」
貸した金のことは話として醜いので言わないことにした。
「おばあさんが一人プレハブに居ましたね。と言ってももうすぐ取り壊されるって話です。例の食堂で土地家屋調査士二人が昼飯食ってましてね、でかい声なんで聞こえちゃったんですが」
「プレハブに社長は、いや、ただの老人ですが、一緒じゃなかったですか」
八子神がいたら怒鳴り込むつもりで聞いた。やり方が汚な過ぎると思ったのだ。
「いや、奥の方のプレハブはもう撤去されてるし、どうみてもおばあさんだけ」
やはり捨てられたのかと、波城は八子神に敵意さえ覚えた。ホームレスをあれほどかばっていた人間が、元妻をこれでもかというほど蔑ろにしたのだ。
「分りました、すみません。ちょっと気になったも

のですから」
「口が重い人でね、何を聞いても黙ってました。一度タクシー使って行ってみますか」
「よしましょう、ある意味別の世界の人たちですから、心根からして」
「まあ、僕はもう一度覗いてみますよ、あそこに軽トラを置けなくなった時のことも一緒に考えてあげたいので」
「ありがとうございます」
「それ、お礼はちょっと変ですよ、波城さん」
「ですかね…」
二人して肩を揺すって笑った。

翌々日のこと、奥の方の部屋で「誰かあ！」と大声がした。
二三度繰り返されたところで、フロント方面から女将が走ってきて「何、どうしたの」とこれも大きな声で返した。部屋の前を通り過ぎる際、波城に一瞥をくわえたので、迷いを捨てて波城も後を追って中廊下を走った。床板が根太ごと弾んでいる。
「桑田さんが倒れた、救急車呼ばないと」とツルツルした頭の年配者が女将を見上げた。「いまのいままで二人で話してたんですよ、それが急に」
「名前呼んだ？　倒れたすぐあとで」と波城。
「呼んだ、顔の処で。でも反応なし」
「おかみさん、一一九。俺は此処の場所うまく説明できない」と波城。
「わかった」と即答すると彼女はフロントに走った。
桑田という老人はぐったりとした形で横たわっていた。
「脈、診ましたか」と波城は座りながら聞いた。
「いや、そんな知識ないし。心臓ですか、原因は」
「俺も素人だ」と言ってから老人の手の、親指の付け根あたりをやや強く押してみた。
脈は感じられなかった。次いで耳のすぐ下の首筋に掌を当てた。鼓動は感じられなかった。
「心臓が止まってるみたい、ですか」と男が覗き込む。

「ええ、おそらく」
「どうするんですか」と毛のないその男が泣きそうになって言った。
「どうするって、救急車待つしかないじゃないか」無為を批難されたようで言葉がきつくなった。「違う」心の中で声がした、「心停止かどうか迷ったらすぐに胸を押すがセオリーだ」
「十分ぐらいかかるって！」足音と同時に女将の叫び声が届いた。
　波城は「まずいな」と小声で言った。長すぎる。心臓マッサージが必須だ。どうする、お前手を出すのか。心の中で秒単位の葛藤が始まった。波城は八年前になるが、普通救命講習を修了している。人の命が掛かった場面で実際にやったことは無い。第一正確には憶えていない。手を出せば途中でやめることはできない。それに万一のことがあれば遺族から責任さえ追及されかねないのだ。「どうする」とついに言葉に出した。
「できるの？　波城さん」と女将が肩に触れた。
「ＡＥＤあります？」
　自動体外式除細動機器のことだ。旅館に設置は常識になっている。
「なにそれ」
　そうだろう。知っていたら、あったら持ってきている。波城はなぜか汗だくになった。何を惜しむ。失敗か、世間体か、自分の名か、笑わせるな、全部捨てる気だったはずじゃないのか。葛藤は終わった。
「やってみます、間に合わない」と波城は姿勢を変え、患者の脇に回った。左の手の甲と右の掌を合わせ組んで桑田の胸骨の下部を、自分の上体全体を使って押しだした。もうだめかもしれない。「いち、に、さん、し…」やり始めたばかりなのに額から汗が流れ顎まで伝って落ちた。一分間にできれば百回押せと習った。右の手の甲が落ちた汗でどんどん濡れていく。心の冷や汗だ。冷たかった。頭が朦朧としてきた。人の命なんて救えるわけがない。自分の家族すら満足に守れなかったのだ。いや、違う、あのとき小さかった自分は倒れた「しのちゃん」を護るの

をためらったのか。いや、反射的だった。そうだった。お前だって人を救ったことがある。忘れるな。

「忘れるなって！」波城は時間が分からなくなった。

「替わりましょう、ありがとうございました」

肩に触れたのは救急隊員だった。

波城は崩れるようにして後ろに転がった。

荒い呼吸のままに隊員の動きを見ていた。速い、力強い。自分の措置は稚拙だった。そう思った。また後悔が生まれそうになった。

桑田の体が動いた。電気ショックだ、ＡＥＤだ。マウスツーマウスもやっている。

隊員の一人が「倒れてから通報まで何分ぐらいかかってますか」と女将に聞いた。確認だろう。「二分ぐらい？」と女将が応じると、「いえ、一分半ぐらいだと思います」と丸い頭が修正した。自分も含め当人たちは慌てていたが時間の方はそれほど経過していないのかもしれない。波城はそう思った。

「空いててよかったな、道路」ＡＥＤ担当の隊員が言った。

実際、波城も到着が大分早かった感じがした。目の前で何度目かの電気ショックが行われた。脈が確認されている。

「この人、お名前は？」

「桑田さんです、桑田次郎」と女将。

「桑田さーん、桑田さーん」と隊員が耳元で呼びかける。

桑田老人はピクッと動き、ゆっくりと目をあけた

「よし、担架入れてくれ。玄関のタタキに出たらストレッチャーな。みなさんちょっと、よけてもらえます」

確かに段差が大きく、狭い廊下に邪魔なものもかなりある。

隊員たちのてきぱきとした動きを見ながら波城は、急激な睡魔に襲われ、自分の手で自分の頬を叩いた。

「身内の方、いますか」

「いません」と女将が応じた。

「どなたか一緒にお願いします、女将さん？」

「波城さん、頼める？　このあと警察の人も来ると思うし、主人今日はいないのよ。この山崎さんは最初から現場に居た人だから聴取受けると思うし」
「分りました」警察という言葉ですぐにそうしようと決めた。まるで「逃亡者」だ。協力した方があれこれ詮索されないで済むかもしれない。
「この人、救命してくれた波城さんが付き添います」
「急ぎましょう、あ、担架の片方の一人役もひとつ」と隊員は頭を下げた。
　ついに巻き込まれた。波城は内心、臍を噛んだ。
「あ。桑田さんの国保、健康保険証預かってる。最初に頼まれたの」
　また走った女将がすぐに戻って波城の尻ポケットに保険証をねじ込んだ。過去に何度か同様のことが起こっていたのかどうか。確かに住所、氏名、年齢は大事だ。
　波城は「病院から電話します」とすぐに応えた。

5

　波城は指定病院の廊下の椅子に腰を掛け、小一時間ジッとしていた。
　先ほどのこと、救急車に乗ったはいいが、なかなか出発しようとはしなかった。低くなったストレッチャーの上の患者桑田の心肺はとりあえず安定しているようだった。
「あの、どうしてすぐに出ないんですか、救急患者ですよね」と、しびれを切らして目の前の救急隊員に聞いてみた。
「あちこち連絡をして受けてくれる病院を探しています」
「もし、こうしている間に亡くなりでもしたら、どうするんです？　いえ、この場のことではなく一般論ですけど」
「そうならないよう努めています」と彼はなぜか頭を下げた。
　ふと気が付くと看護師が前に立っていた。
「先生がお話したいそうです、こちらへどうぞ」

導かれたのは三つ先のドアだった。彼女の後ろから中に入ると、半ば白髪の医師がモニターを前にして椅子に掛けていた。

「先生、ありがとうございました」何も分からないうちに礼を言った。

「失礼ですが身内の方ですか」傍の椅子に掛けるようにと手で示してくれた。

掛けてから「いえ、偶然現場で救急措置をした者で、旅館に宿泊していただけです。波城広志と申します。そこの女将さんに同伴を依頼されまして」

「そうですか、それはご奇特な」

医師が左の口元だけで笑ったような気がした。

「すぐに手術か何か必要なのでしょうか」

「いえ、患者さんの状態についてはお話しできません。国民健康保険証をお出しになったでしょ、そこが住所だと思いますのでご家族の方に連絡を取ってください」

守秘義務ということだと波城は理解した。偶然ながら患者の住所は、波城が買い損ねた物件の所在地と同じ市内だった。つまりかなり遠方になる。

「分りました、赤の他人ですものね」

「では、その身内の方と一緒に桑田さんも再来院してということで。けっこうですよ、連れて帰っていただいて」

「えっ、病院で看護していただいて、その間に身内の人を呼んでくる、それではだめなのでしょうか」

心肺停止があって搬入されたのだ。風邪や腹痛とはわけが違う。波城は意外な言葉に正直なところムッとした。

医師は前髪を少しいじってから「君、説明して」とドアの処に控えている年配の看護師に言った。

「宿泊先が旅荘あけぼのですよね、過去何回も医療費不払いの患者が出てましてね、当病院としても自己防衛の必要があるんです。ちなみに今日の救急対応の費用はどうなりますかしら。救急隊員はなぜ出動したのか記録する義務がありますから、必然的に先生に所見を求めます。医師には応召義務もありますから、すでにそれなりの検査はしているんです。

ここから先は本人の承諾や身内の承諾が必要なんですよ。さらに率直に言いますとお支払いいただけるのかどうか、ということなんです」

「桑田さん承諾するかどうか迷っていましたしね」医師がそう付け加えると、看護師も「聞いても返事をしないと言い換えましょうか」と口を歪めた。

「なるほど。では戻って桑田さんの身内に連絡を取るとして、その間、いくら預けたらここに置いてくれるのでしょうか」

結局金次第、保証金の問題だと波城は解釈した。病院内で緊急事態の再発なら、病院側は対応せざるを得ない。旅荘ではもう対応できそうも無かった。

「その保証金、私が納めても構いませんか」

「意思表示ができるほどに明瞭になった本人の事前承諾もなくかつ身内の承諾も取れていないうちに、院内で心停止が起こったとしたら、できることは限定的ですが、それでいいなら」と看護師が波城の目を見詰めた。

メスは入れられないと念を押したいらしい。それが通常なのか、合法なのかは知らない。それでも連れ帰るより安全なはずだ。波城はそう思った。

医師が看護師に向けてうなずいた。

「二十万、お願いします。もちろん手術などの分は入りません」と看護師。

何日預かることになるかは分からないが、とりあえず請求総額百万前後の場合を想定してという腹がみてとれる。

「近くのＡＴＭで下ろして来ます、一旦外出します が」

「君、鍋田君」と医師が看護師に向かって顎を挙げた。

「ご案内します、この病院の中にありますから」

「なるほど」見事なほどの連携だと感心した。私がそのまま逃げると、常識的に判断している。「では参りましょう」と応じた。

「つくづくご奇特な方だ」と医師がなぜか、肩をすぼめた。

病院の廊下を鍋田という看護師の後ろについて

ＡＴＭに向かいながら波城は、自分自身をお人好し過ぎると呆れていた。ここの医師同様、世間も笑うだろう掛け値なしのバカだと。それでも、そういう自分を好きだと思う、もう一人の自分がいる。そう、こうして二十万を失うために歩いている一人がその自分だ。

驚いたことに院内には、コンビニも喫茶店も、一般食堂もあった。ＡＴＭが無い訳がない。看護婦に従って手続きを終えると、「一応桑田さんの病室にご案内しておきます」と彼女が一礼をした。この急変はなんだろう、金を入れたとたんだった。

ついていくと病棟に向かう。

「ＣＣＵとかいう緊急対応のできる所じゃないんですか、桑田さん心臓ですよね」

「先生、連れて帰ってもいいと言いませんでしたか」

「あくまでも所見はおっしゃらない」

「ですから！」

「はいはい、赤の他人です。看護婦さんも相当激務ですね」皮肉を混ぜた。

「看護師です」とまた一本取って来た。

着いてみて目を見張った。個室だったのだ。連れて帰っていいと言った患者なのに、支払い能力を疑った患者なのに、なぜ個室なのか。波城は首をひねった。

「ちょうどいい空きがありませんでしたので、患者様にはここで吉報を待っていていただきます」

もう馬鹿馬鹿しいので彼女への皮肉は止めた。辛い立場なのかもしれないからだ。

「なるべく短い時間でお願いします」と看護師は去った。

ベッドサイドに器具があり何か点滴をしていた。近づくと、桑田は穏やかな笑顔を作ってくれた。

「初めまして」一瞬、変な挨拶だと思った。「波城広志です」営業をやっていたので、フルネームで名乗る習慣がついている。

「桑田です、お礼を言います、助けてくれて、立て替えまでしてくれて」

身を起こそうとするので、掌を前に出して大げさ

に止めた。
「病院がどうしても身内の人をと言うものですから、これからお住まいに電話をして」
「家に電話はありません」
「いまは携帯電話の時代ですからね。では訪ねていこうと思っています、保険証の住所でいいんですよね、さっき看護婦について行ってメモしました」
桑田は哀しそうな目をしてしばらく黙っていたが、意を決したように言った。
「ええ。一度見てもらった方がいいかもしれません」
「見る？」
「いえ…宿の私の部屋にバックパックがあります、預かってくれますか」
「もちろん、六月いっぱい、あと十八日間はあそこに泊まっていますから」
「そうですか、良かった。万一私に何かありましたらですが、その中身を波城さんに差し上げますので、嫌がらずに受け取ってください。ほんのお礼です」
「ありがとうございます、頂戴しますが、万一なんて考えちゃあいけません。ご家族だってきっと」ここで胸がチクリとした。無責任なこの俺が何を言うのかと。
「いい人に出会えて良かった」
気が付くと桑田の目に涙が溜まっていた。病気のせいではないらしい。
「最後に手を握ってくれませんか」
「なにが最後ですか、お宅を探してすぐ戻ってきますよ」波城は桑田の手をしっかりと握ると、もらい泣きなのか、目頭が熱くなった。
「すみません、そろそろ出ていただいていいですか」
女の声の方へ眼をやると、先ほどの女とは雰囲気が全く違う若い看護師が入口に立っていた。笑窪もある。
「あ、はい。すぐに」と波城は握っていた手を離した。
「波城さん、あとは手紙に書きます、ありがとうございました」
「じゃ、遅くとも明朝、あの住所を探しに」

「お願いします」桑田が小さな笑みを返した。
「ごめんなさいね」と言ってすれ違った看護師から微かに薬の匂いがした。消毒薬だろうか。不思議なことに嫌だとは思わなかった。

6

良治は兄波城広志からの定形外郵便角形四号を受け取ってすぐに切手の消印を見た。速達になっている。おそらく確実に手渡される簡易な方法として選択したのだろう。かすれた部分があって明確ではないが郵便局は特定できた。ただ裏の差出人の住所は無かった。日付の数字は「6-10」。
「よかった、生きてる」
何よりも自分宛てに通信してくれたことを、良治は嬉しく思った。
事務鋏で封を切ると使い込んだノートと送り状と思しき一枚の紙が出てきた。紙は何と片面刷の新聞チラシだった。
「元気で世の中をさまよっている。老人禁錮刑を終えて出てきたシャバは刺激的過ぎて困っている。送った大学ノートは、たまたま出会った青年のものだ。彼は人生に行き詰まり自殺を企図したときにこの記録を書き始め、実行する前日まで継続している。縁あって知らぬ間にこのノートを託されていた。公にはしたくないという。浮草の俺が持ち歩くのは守秘義務の上からも問題があるので、良治に保管を頼むことにした。生で公にはできないし、してほしくないが、文筆の世界で生きる良治のこと、きっと何かを摑んでくれるだろうという期待はある。俺は全文を熟読したが、正直涙が出た。礼儀正しくユーモアも教養もある凛々しい若者が、なぜ自殺を選ばなければならなかったのか。その社会的な背景や人間心理に、俺は迫れなかった。良治ならやるだろうと、そう思った。ちなみにこの青年の遺体が発見されたのは五月二十三日だ(テレビ報道)。行旅死亡人になった。この年になって、いまようやく「社会」というものを見ている。広志」

「まあ、ぎっちりと良く書いたものだな」とついつい笑った。
そのあとで目頭が熱くなった。
「全てを失い、終末を見据えて社会勉強かよ、いまやっと活き活きしてるのかよ」
パラパラとノートをめくりながら、「それでも偉いよ」と、口にした。

7

波城が桑田次郎の死去を知らされたのは、桑田の身内に会うために保険証記載の住所を訪れた帰途、駅のプラットホームだった。六月十三日午後五時。携帯電話の向こうで『あけぼの』の女将は言った。
「今しがたよ、病院から電話があって今朝、まだ暗いうちに息を引き取ったって。病院内の霊安室に移したので、身内を寄越してほしいって。いま一緒なの？　桑田さんのお身内の人と」
なぜ昨日の今日で死なすのか。救急病院ではないか、しかも入院したばかり。胸が痛んだ。「なぜ死んだのか、そこのところは連絡された中にないんですか」
「つまり身内に全て伝えるという話なのよ、それはそれで解かるけど。だから波城さん、連れ出せたの、誰か」
「いない、誰も居なかった」
「え？　だって桑田さんのうちでしょ、奥さん、買い物でお留守とか？」
「もぬけの殻みたい。ここ数か月誰も居なかったようですよ、たまたま通ったご近所さんに聞いたんですけど。住所地の戸建の表札は間違いなく桑田次郎さんでしたけどね」
「で、どうなるの、この先のいろいろ」
「私に聞かれても…」急に疲れがどっと出た。現地の駅からの往復で六キロも歩いたのだ。
「そうよね。とにかく早く帰ってきてくれる。主人は地元の人間なので警察にもどうしたらいいか聞いてくるって言ってるけど。病院は波城さんに一緒

に行ってもらわないと、事情がつながらないでしょ、だから」

「わかりました。駅に着いたらタクシーで帰ります。じゃ」

帰り次第すぐに、桑田が言っていたバックパックの中を見てみようと決めた。ふと思ったのだ、袋の中に事情の全てが隠されているのではと。桑田はこう言った、「一度見てもらった方がいいかもしれません」と。さらには「…嫌がらずに受け取ってください。ほんのお礼です」と。

昨日のあれこれを思い起こせば彼は、積極的に生き延びようとしていなかったようにも見える。自分の家に身内など一人もいないことを知っていて、波城に見に行かせた理由もそうなら腑に落ちる。しかし、彼が自殺でも図らないかぎり、つまり病気が原因なら、病院は少なくとも救命措置をとるはずなのだ。

波城は首を傾げながら上り電車に乗り込んだ。

翌日女将と二人で霊安室に入り、桑田の遺体と対面をした。病院は死亡確認直後に警察に連絡を取ったという。『あけぼの』から病院に運ばれるまでの経緯を把握しきれないというのが理由だ。地元警察はその以前に『あけぼの』に赴き女将や同室だった山崎に事情を聴取し、救命隊員の証言もとっていたので、指定病院の死亡診断書には何の疑いも持たなかったらしい。死相は苦痛に満ちた様子はなく穏やかだった。

波城は身内でもない桑田の死に顔を見詰めながら涙を流した。

結局手術はしなかったのだろう。彼は事前に承諾をできなかったのだ。

昨夜女将と一緒に開いた彼のバックパックには、安宿に籠っている事情の数々が解かる書類が詰まっていた。妻との離婚が解かる戸籍謄本、それは転籍していった子どもが皆無であることも証明していた。相続に関係する直系尊属の不存在を称する謄本類があり、兄弟姉妹が一人も存在しないことも分

かった。つまり天涯孤独になっていたことになる。齢七十四、心臓発作を現地で一回経験した彼は、自宅で誰にも知られずに孤独死することを恐れ、小川が落ち合う処、半ば地目山林の土地に建つ山小屋風の自宅を後にしたという。彼は付箋でこう記していた。「心臓発作のあと、妻は強引に離婚へと突き進んだ」と。所有不動産に関するあらゆる公的書類もファイルされていた。実印と有効期限内の印鑑証明書まで具備されている。きっと誰かに売却し、放浪資金にしようとしたのだろう。現金は二万円しか残っていなかった。売れなければ誰かに贈与と、そんな準備とも思える所持品ではある。

そして今日、病院事務所で手渡された波城あての封筒には、その戸建ての所有権を波城に贈与する旨の正式文書も入っていた。ただし自署ではあるが押捺されているのは認印だ。おそらくあの可愛い看護師に文具ともども頼んだのだろう。メモが添えられている。『病院に残れた事情を看護婦から聞きました。あなたのような人に会えて、この世を去っていくことが少し惜しくなりました。ありがとうございました。桑田』

「いきましょうか」と女将が波城の肩を叩いた。

「そういえば…」

「何か思い出したの？」と女将が目頭を押さえて言った。

「同じような言葉に接したような気がする」

波城は入水自殺した大河内玄との会話を思い出したのだ。

エレベーターで「受付・会計事務」をするフロアで降りたとたんに見つけた若い看護師。波城はすぐに追いつき、前に回ってから声を掛けた。

「看護師さん、一昨日桑田さんの病室でお会いした波城です」

目をパチクリさせたあとで笑窪を見せた。「ああ、はい。あの、なにか」

声を掛けられたことに戸惑いがある。そんな感じだった。

「いえ、桑田さんから文房具とか印鑑とか頼まれま

せんでしたか」
あの日の桑田は現金を持っていない。気になった。
「ええ。売店で揃えて差し上げました」
「その代金、お支払いしたいんです。教えてくれませんか」
「それなら、わたしではありません。確かにお立て替えしましたが、主任に見つかりまして、叱られはしませんでしたが、わたしではいけないと言われて、わたしは主任に返してもらいました」
「その主任さん、どこにいらっしゃるのですか、いま」
「無理です、いまは手術室で、難しい心臓手術のスタッフとして入っていて、それも何時間かかるか分かりません」
「もしかしたら婦長さんみたいな立場の方？」
「ええ補佐ですけど、お会いになってます、たしかお預かり金の件で。主任から聞きました」
「ああ、あの」と二の句を継げなかった。あの不愉快な看護師だとは。
「なるほど、預り金の方で清算できますね」
「だと思います」
「あと、桑田さん、手術受けられたのですか、それでも亡くなられたとか」
「すみませんが、それは申し上げられません」
身内の壁に、またもや波城は撤退させられた。
「忙しいのに、すみませんでした」
再び笑窪を見せてから彼女は去った。
それでも彼女は見せてしまった、潤んでしまった瞳を。なぜなのかは聞くまでも無かった。昨日の桑田さんの件は、それが全てだ。
「波城さん」
呼ばれて振り返ると真後ろに女将が居た。一緒に来ていたことすら忘れていた。
「居られる間だけでもいいからうちの旅館、手伝ってくれない？　そうしてくれると安心だわ、何があっても。主人は足が悪いし、わたしはこんな女だし。勝手なこと言うようだけど、うちが、あけぼのが変わるような気がするのよ」

「唐突ですね、驚きました」それでも笑顔になれた。必要とされることは、何よりも嬉しいからだ。
「あなたみたいな人、めったにいないわ」
「それは、あきれたという意味で良く言われます」と苦笑いで返したが、これは受けなかった。女将は真剣だったのだ。
「すぐじゃなくてもいいの、考えてくれる」
前払いした宿泊期間がまだ半分残っている。そういう意味だととらえた。
「分りました」
フロアの患者の動きがようやく激しくなっていった。

8

東京という巨大な街は、昼間より夜の方が美しいような気がする。何十年も前に、すでに使い古されていた「七色のネオン」という言葉が、ひそかに更新されて目の前にある。良治はこの街のもつ猥雑さが好きだった。ほろ酔いの叶令子と腕を組み、べったりとくっつきながら歩きたい雰囲気なのだが、隣にいるのはむさい編集長の大久保満夫だった。二人とも少し前に路地の屋台で下地を作っている。
「君は締め切りを破った」と大久保が蒸し返してきた。
屋台で謝ったばかりなのに、酒を飲むとこの男はしつこくなる。
「だから、次から厳格に守るって、さっき指切りしたろ」
「した覚えはないけどな。それはあのルポ記事の中の女とだろ？」
「してねえよ、誰とも。子どもじゃあるまいし、ものの例えだから」
大久保は悪酔いをしているフリで言いたいことをぶちまけるプロでもある。良治は「油断できない男」だと踏んでいる。これはこの街、この出版界では高評価を意味する。
「男も女もシャワーを浴びる。いったい何を浄化し

ているのか。互いに肌をまさぐり、性を舐め、熱い汗を混ぜる。互いの中の何を料理し、どう味付けしようというのか。二人の間に日常の食卓は無い。そして繋ぐ、二本のレールの如く決して交わりはしないはずの男と女の粘膜を。それで通い合えるというのだろうか互いの心と心が。沸騰したいまと冷めたあしたの温度差に立ち尽くし、顔を覆うのは誰だろう。四方を囲んだ大鏡が絡みつく二人を八人にして笑っていた。…じっさいしびれたよ、俺は。もっと続けようか、暗記しちゃったんだな、中学生みたいに」

大久保は、良治が書いたルポを大声で諳んじた。

「声でかい、大久保さん、すれ違う人がみんな笑って見てるよ」

「かまやしねえよ、だれがホモの会話だと思うんだ、この文章を」

「内容だよ、それは文字で味わうものだよ、声でじゃない」

「ああ、舐めた性の性はさがであり性器でありセックスという行為でもある。載せたかったなぁ。それが君のせいで一か月遅れだ」

「まだ言ってる。はいはい、着きましたよ、会場に」

と軽く流した。

居酒屋『ののさま』は、入口の両脇に狭い盛土部分があり鑑賞用の亀甲竹が植わっている。揃って暖簾をくぐり、女将や板前の挨拶を受けながら奥へと進む。

縦長の十畳ほどのスペースには、すでに三人のむさくるしい男が長方形の卓の周りに陣取っていた。と言っても全員が高齢ではなく、大久保と良治を除けばむしろバリバリの三十代なのだが、見た目の年齢は三人とも五十代なのだ。

「長老は奥ね、良治さんはいつも通りの入口側と」

三十歳と一番年若な御厨忠男がそれぞれに席の移動を促した。

大久保によれば彼は私立大学医学部附属病院に勤務する内科医だが、院内では駆け出しにすぎないらしい。

「長老なら良治だろ、俺より二つも上だ」と大久保が目をむいた。
「いや顔色とか髪の毛の量とか、どうみても良治さんの方が若い」と三十四歳の居候弁護士高橋信義が良治の座布団を整えた。
　これも大久保からだが、有名私学卒ではあるが、司法試験合格が遅くなり、弁護士兼代議士の大先生の下で実務を習得中とのこと。公務員の初任給程度の月収なので自由にできる小遣いは少々だそうな。もちろん独身のままでいる。
「しかし何ですねえ、ここに妙齢の女性が欲しいところですよねえ」
　ケースワーカーをしている小松則男三十三歳が、少しばかり首をひねった。
　福祉事務所の生活保護担当課勤務だ。いい年をして正義感が強すぎ、職場で浮いているらしいと大久保が笑っていた。
　早い話が金銭的には豊かになれそうもない専門家ばかり。ただ、生きる姿勢が大久保好みなのだとか。良治は良質のグループだとの印象を持っている。
「良治、怒るなよ、例の彼女呼べないかな、こんな席で何なんだけど。俺、めちゃめちゃ会いたいんだよ」
「そんな彼女、いるんですか、凄いな」と年長の高橋が目を輝かせた。
「まさかその人、良治さん、六十代じゃ…」と御厨が首をすくめた。
「ばぁか、二十も年下の熟れた果実だわ」と大久保が座椅子に反り返った。
「僕はかまわないけど、お三方にはあうかなぁ、雰囲気的に」
　若手三人と大久保が揃って拍手をした。
　たしかに野武士襲来を恐れての村の対策会議よろしく「華」が無い。良治は、どうせ断られるだろうと予想して携帯を手にした。いわゆるガラケーだ。
　全員が聞き耳を立てては悪いと気を使って、やれ酒だ、ビールだ、とりあえず枝豆だと、小声ではあるが打ち合わせを続けている。

「来ますよ。三十分はかかるそうだけど」
叶令子のオーケーには良治も驚いた。二人きりでない場面では初めてのことになる。いつ、どこで呼んでも来るというのは変わることが無いらしい。
言い出しっぺの大久保が「まさかの承諾。恐れ入りました」と正座になって、良治に頭を下げた。顔がニヤついている。
他の三人はなぜか声を失っている。呼んでも来ないと踏んで、良治を酒の肴にするつもりだったらしいのだ。
とりあえず生ビールの大ジョッキが五つ並んだ。
「イソ弁さん、音頭を一つ、今日は先生の番です」と御厨。
「では、我が良治先輩の若い彼女にカンパイ！」
それぞれが声を断ってジョッキの半ばに至るまで一気飲みをした。
「で、いつもの懇親会のつもりでいてもらった上でのことなんだけど」と大久保が大きめの声で話し出した。良治が間髪を入れず正座をした。簡にして要を得た三分ほどの説明の後で大久保は、「この先専門的なことを良治が聞いてきたら、気持ちよく相談に乗ってやって欲しい。頼む。それだけを最初に、つまり酔っ払わないうちに」と頭を下げた。
「すいません、何かの折に電話するかもしれませんが」と良治も辞儀をした。
全員で「どうぞ、待ってます」と、声を揃えた。
「ありがとうございます」良治は心底嬉しそうな顔になった。
酒の肴がぼちぼちでてきた頃、居候弁護士の高橋が、テレビ報道で知った珍しい刑事事件のことを話しだした。別に当該事件の弁護を請けたわけではないらしい。もっとも引き受けていたら職業倫理で話題にもしないだろうが。
高橋によると、川沿いの繁華街の路地で深夜、八子神利雄六十八歳が全身数か所を包丁で刺され出血多量でショック死をした。通行人が警察に連絡。警官が現場に駆け付けたところ、衣服が血まみれになっている老女八子神伸子こと村瀬伸子六十五歳

が呆然として座り込んでいたので、殺人未遂の疑いで身柄を確保した。
「老夫婦の離婚後のいざこざかい。パワーあるなぁ、婆さん」と小松が口火を切った。
「げに恐ろしきは女の恨み」と御厨も調子を変えてつなげた。
「ところがね、遺体に刺さっていた凶器には彼女の指紋は無かったんだ。それでも警察には私が殺したと自白している。しかも積極的な自白」
「数か所とはアバウトだけど、まあ、報道だからお約束か。創口の全てが同一の凶器のものなのかな、どうなの？」と良治。
「なるほど、致命傷は別の凶器でそれは川底ってことも」小松がうなずく。
「検視の結果凶器は一つ、刺さっていた出刃包丁と断定」と高橋。
「御厨さん、時間経ってても凶器の同一性って判るんですか。だって刺して抜いてる傷口、皮膚と肉なわけで深さも違うだろうし」小松が今度は首をひねった。
「司法解剖の結果でしょうから、間違いないと思いますよ、専門家ですから」
「なるほど内科の先生では無理でも」と小松は人が悪い。
「きついなぁ、言いますか、普通そこまで」御厨も笑うしかない。話、なのだから。
「陪席は節度のある言い方を」と大久保が大真面目で言った。裁判長のつもりらしい。
「もう種明かしをしますね。刺した奴は別にいるらしいです。老女伸子さんは刺された元夫にかぶさって血まみれになったのではないかと」
「なんだ、らしいかよ。種明かしにならないじゃん、高橋さん」と小松。
「いい話じゃないの、違うの？」と大久保が瓶ビールを三本頼んだ後で言った。
「ところが彼女は殺したと言い張っている。だからすぐに通報もせず、助けを呼んだりもしなかった。彼女は冷静な目で、元夫の体のあちこちから血が出

て行くのを見ていたと。報道ではここまでリアルに伝えていません。知る人ぞ知る人の間で話題になっている所以です」

「いい話だなあ」と良治が腕を組んでうなずいた。

大久保が笑ってうなずいた。

「良治さん、正気ですか」と高橋弁護士が大きな目をあけた。

「容疑者伸子の行為ばかりを見ていると、げに恐ろしきは女、になるけどね。僕は彼女にそうまでさせた八子神という男の生前の行為に目を向けるね。一旦は見ていられなくて身を捨ててかばった彼女が、犯人が去った後で思い出したのが、彼から受けた仕打ちの数々。きっと地獄のような毎日だったんじゃないかな」

「さすがだな、良治は」と大久保は何度もうなずき、「良心から逃げずに捕まって、自ら罪を背負う道を選んだ。俺なら彼女に賞状を渡すね」と言った。

「で、どうなるの、その伸子さんの罪」御厨の顔は高橋に向いた。

「不作為の殺人が成立するかどうかだね」

「だからさ、成立するのかって聞いてる」と小松もせまる。根がせっかちなのだ。

「では言います」

「おお」と御厨と小松。大久保と良治はジョッキを顎に載せて空にした。

「もう少し当該事案についての詳細な情報が必要です」

件の二人があからさまに落胆して天井を仰いだ。

数秒後、全員がクスクスと笑いだした。この話が何になるのかと共通の疑問が湧いてきたのだった。

このとき、店の入口の引き戸がゆっくりと開いた。

「良治、来たんじゃないか、彼女が」と大久保が指差した。

良治にしてみれば不思議だった。人の女に何を期待しているのかと。

「遅くなりました、叶令子と申します。諸先生方、みなさん初めてです。よろしくお願いします」

居酒屋の名を言っただけだったが、座敷だと分っ

ていたのだろうか。パステルカラーで統一したコーディネイトで下は脚の線を崩さない程度の細さでパンツルック、上は、肌面積を少なめにしつつ女を感じさせる工夫をしてきた。ほつれ毛まで演出している。ファッションにはそれほど興味も知識もない良治だったが、うまいものだと関心をした。電話で簡単に会合の説明をしてはいる。紅一点で複数の男の目に晒されることを予測していた装いだといえるだろう。なんにせよ三十代前半にしか見えない。

「良治さん、どんな騙し方をしたんですか。教えてくださいよ」

着くとすぐ一礼をしてジョッキが空になっている大久保の席に移り瓶ビールを注ぎ始めた令子を見ながら高橋が軽口を叩いた。

大久保は真っ先に注いでもらうためにジョッキをやめていたのだ。策士である。

「法律の先生、残念でした、惚れて騙したのはわたしの方です」

「なぜ僕が法律だと?」高橋も急いでジョッキを空け、コップを持った。

「ワイシャツのボタンが一番上まできちんと」と令子は微笑した。

「何のことは無いさ、当てずっぽうだ」と良治は楽しそうに笑った。出しゃばったかもという令子の危惧をそれとなく払拭するためだった。良治は何も言わずに来てくれたことを感謝していた。男社会は往々にしてつまらない面子で成り立っているからだ。一面識もない四人の小難しい男たちの中を回り、適度な色気と満面の笑みをふるまっている令子を見ながら、一層魅かれていく自分を感じていた。それでも、この女も早晩静かに自分の元を去っていくだろう、それを当然なこととして、微笑の中で見送れる自分でありたいと思った。

「よーし、今日はいつもと違う。とことん飲むぞ」と小松が右拳を突き上げた。

「ぼくはダメだぁ、明日早く出る必要がある、ついてない」と御厨が、変顔を作って大袈裟にしょげてみせた。

令子も含めた全員が明るい声で笑う。そのさなかに、令子とアイコンタクトをとった良治がいた。

9

「かあさん手伝ってよ、わたし一人じゃはかどらないからぁ」と砂絵が、大掃除でも始めるような格好で邦子に言った。

波城が家を出てからすでに一か月以上経ったのに、新しいアパートの中は引越して来た日とたいして変わらない状況だった。和室の一つが波城用の段ボール箱で片付かないからだ。

「いいわよ、もうすぐマンションに戻るんだから」と邦子が顔を出す。「また詰めなきゃいけなくなるでしょうに」

「まだ言ってる。もう富永に売ってしまったでしょ、忘れたの？」

開梱は半分ぐらい進んでいる。せめて段ボールから中身を出して、空になった箱を畳んでくれたらと思うのだが、邦子は人が変わったように動かない。虚ろな目をして椅子に座ったり、窓の外を見て涙を流したり、窓から這入って来た野良猫に餌をやったりで、いつも家事に類する動きはほとんどしていないのだ。ジュエリーの営業をしていたころのはつらつとした母親を思い出して砂絵はため息をついた。

「ねえ砂絵、お金返して帰ろうよ、元に戻りたい」

「だから、そのお金はかあさんの老後の生活のために必要な資金なの。みんなで考えて、いい？　それしかないからマンション売ったのよ。自分の持ち物だったと言ってもマンションは管理費だとか修繕積立金だとかいろいろあって、ひと月にいまここのお家賃ぐらいのお金が出ていくのよ、それならマンションを売ってお金に換えましょうってことだったの。分かった？」

邦子は強度のストレス症候群かもしれない。哀しいけれど砂絵はそれを認めざるを得なくなった。息子が嫁を貰い、家を建て孫が育っている中、今度のことで娘が結婚し、夫は出て行き、自分自身も仕事

を失った。誰も居ないアパートで、何一つ張り合いのない毎日が症状を強めていくのだ。そう思った。

「広志はきっと生きて帰ってくるよ、死んでなんかいないって」

「うん、オヤジ、生きてるよ。消印がある郵便物が良治叔父さんの処へ届いたもの」

「じゃ、何で迎えに行かないの、砂絵、何で」邦子の顔が迫って来た。

「どこにいるのか、分らないのよ。叔父さんが付近の旅館、ホテルに電話しまくったけど、どこにも泊まってなかったって。消印は扱った郵便局を教えてくれただけなの。でもオヤジは一か月以上生きてた、その日まで暮らしてた。とりあえずそれだけでも嬉しいじゃない、かあさん。さ、手伝って。この部屋にオヤジ来るかもよ」

砂絵は、話しているうちに涙が出てくるのを抑えられなかった。

「やるよ、出せばいいのね」と邦子が動き出した。

作業している部屋の隅に置いた小さな置き時計が十時を指している。あと一時間半で株取引の前場が終わる。一応丸一日かかるかもとは言ってきたが、富永の元へ戻り昼食を共にしなくてはと砂絵は考えていた。新婚なのにこのひと月の間、夫の厚意に甘えて放っておき過ぎたとの後悔もある。

「ねえ、砂絵」と邦子が作業の手を休めた。

「かあさん、手は動かして。話は聞くから」

「広志が出て行ったわけが知りたいのよ、ずっと考えているんだけど、全然分からないの。ここの家賃と買ったマンションの維持費がほとんど同じなんでしょ、だったら二人の預金を併せて五百万をしっかり保存して二人の年金で食べていくって出来るじゃない、違う?」

全然理解していなかった。砂絵は気づいた、邦子は何と夫の年金額を知らないのだ。分っていたら計算はすぐにできただろう。その結果「無理」だということも。

「オヤジのひと月当たりの年金受給額って十万円ちょっとだよ。かあさんの年金額は当然知ってるで

しょ、はい、暗算して」
「そんなに広志の年金少ないの」
「理解したでしょ、オヤジはかあさんの老後を護るためにマンションを売って二千万というお金を作ることに同意したのよ。そのお金で護るべき対象に自分は入れずにね」
邦子はそれでも首を傾げた。
「分るわよ、でもね、いま広志がここで一緒に住む方が家計も楽じゃない」
老人惚けではないらしい。その通りだった。邦子の国民年金だけでは家賃すら賄えない。さらに食費も光熱費もかかるのだ。つまり二千万の貯金は日々目減りしていく。二人で住んでも減ることは減るが金額が違う。砂絵の説明は当然ながら破綻した。父親が出て行った本当の理由はお金だけではなかったのだから。
「やっぱり女なんだわ、きっと」と邦子がまた手を休めた。
紫乃という女の人を知ってからの砂絵は以前とは違い、そんなことはあり得ないと強く否定できなくなっていた。自分の中にも同じ疑念があるのだった。
「六十九よ、オヤジ」それだけしか言えなかった。
「老いらくの恋はあるわ、ドラマで老人ホームでさえもめごとが多いって言ってたし」
「とにかく待とうよ、ここ、この部屋ちゃんと準備して。そうしよう」
「砂絵、何か隠してることぐらい分かってるんだから、かあさんは」
「じゃあ、そう思ってなさい、疑う耳は真実を聴かないって本当ね」
早めに引き上げた方がいいと、砂絵は急に時計を指差した。「あ、いけない、今日は富永と外食の約束があったんだ。ごめん、かあさん悪いけど帰るわ」デイトレーダーの夫は、出前をとることはあっても外食をしに出かけたりはしない。しかしいまの邦子なら嘘だと気づかないだろう。砂絵は自分の凡ミスに肩をすぼめてから立ち上がった。

「あとはできるだけやっておくから行きな、離婚されたらどうするの」
「それだけはかあさんに言われたくない」と舌を出した。

砂絵はコンビニで気の利いた弁当を二つ買うとマンションまで走った。
エレベーターを降り、外廊下を小走りに入り口に向かった。十一時半は過ぎている。砂絵は息を整えてからドアの鍵を開けた。
「ただいまぁ、ごめん、きょうはお弁当で」と踏み込んだとたん息を呑んだ。真っ赤な女の靴が足元にあったのだ。しかも揃えてもおらず、片方が横に倒れている。急いで駆け込んだのだろうか。
「うそぉ、何」と、靴を脱ぎ捨てて中に走り込んだ。
もとは父波城の部屋だった富永の仕事部屋、並んだ三台のモニターにはいずれも登録銘柄の株価推移を表示するマーケットボードが映っていた。値動きは当然止まっている。その真ん前の床で富永と見知らぬ女が全裸で絡んでいた。激しい動きを止めようともしない。脱ぎ捨てられ床全体に散らかっている男と女の衣類が、二人の欲望の迸りの激しさを物語っている。
砂絵の手からコンビニの白い袋が滑り落ち、床でグシャッと音を立てた。

10

旅荘「あけぼの」は夜でも入口は開いている。昔ながらの電球色でボールと呼ばれている直径三十センチほどの玄関灯に小さな蛾がまとわりついていた。
頭がもう少しで器具に届きそうな長身の三田村悟が、バック・パック姿で重そうなコンビニ袋を下げて中に入って行く。
「こんばんは。失礼します」
「こんな時間に珍しいですね」
波城はそう言うと、三田村にではなく傍の女将に

一礼をした。
「三田村君、その袋の中、もしかしたら」と女将が嬉しそうに笑った。「ほんとに君は気が利くわ。前からずっと感心してたのよ、はやく出して、飲み物」
「すかさず略奪ですか」と三田村も負けていない。
「中腰の間に頼んじゃうわ、うちの宿六さんも呼んでやってよ」
女将が手を合わせると三田村は、笑って奥へと向かった。
「調子が出たころにうちの諸々も出すからさ、大いに飲もうよ、波城さん」
「やります俺が、広げますから」と、何が何だか良く分からないが、波城も乗り気になって白い袋の中身を出し始めた。
二人で話し込んでいたのが、あっという間に四人になった。
「やっぱりコップは出そうか」と女将が立とうとした。
「このままでいいですよ」と波城が止めた。
「キャンプみたいで楽しいじゃないですか、ね、社長」三田村も賛成だった。
「そうだな、畳藺草という草もあるしな」と奥山社長が洒落を飛ばした。
波城がこれに「ええ、このササクレの多さなんかいい風情ですしね」と応じた。
四人が笑いながら一斉に缶ビールに手を伸ばした。
飲み会の目的が無いのでさすがに「乾杯」の声は無い。
「あんた、さっき波城さんから聞いた話なんだけど、ここを大都会難民の避難所風にしたらどうかって言うのよ」
「こんな宿でもいちおう経費があるしなぁ、無料は勘弁だなぁ」
「いえ、極端な言い方をすると、旅荘あけぼのをあけぼの荘にするだけなんです」
「なるほど、社長、ホームレスみたいになった人が働き口を探すときに一番困ることって何だかご存

知ですか」と三田村がつないだ。
「そりゃあ、当座の金だろう」
「あ、そっち行きますか。じつは住所と電話なんです。正式な履歴書とまでは言わなくても必須ですよね、住所不定で連絡不可能なんて人間を雇いませんから。雇われて働ければ賃金が入ります。入れば宿泊代という名の部屋代が払えます」
波城が何度もうなずいている。自分より説明がうまいので任すことにした。
「ここの住所にあけぼの荘をくっつけると、まるで住んでるみたいってわけね。それはいいわぁ、おとうさん、任せてみない二人に」女将は早々と乗って来た。
「そうするとしてだ。何をすればいいんだ、具体的に」
「波城さん、お願いします」三田村は、さすがにそれは波城だと振ってきた。
「徳子、なんかあるだろ、つまみと、追加の酒持って来いよ。なんだかおもしろいことになってきた」
「あら、わたしだって聞きたいわよ。そのあとでたっぷりもてなすわ」
波城は、粗削りですがと、断ってから説明をした。
玄関先に「あけぼの荘」という看板を新設する。これは波城が作れる。同時に大き目のポストを買って設置する。これも波城が賄う。入ってすぐの壁に利用規則を掲げる。これも掲示板そのものは波城が作る。現在使用中の電話を玄関の上がり框の近くの廊下に移動する。電話機は留守電機能があり、着信履歴が表示されるものにする。短期、長期双方の利用ができるように六部屋あるうち一番大きな部屋を短期宿泊者として固定する。貴重品を入れる施錠可能なロッカーを設置する。必要な什器備品は順次決めていく。経営者が高齢であることから、一泊料金と相殺する形で希望者に、一日ごとに旅館の仕事をさせることができるルールを考える。たくさん金がかかることはやり始めてから成果を見てすればいい。
「なんか出来そうね、それくらいなら。ねえ、おと

うさん」
「うん、いまこのときも客は前払いの波城さん一人。旅館とは名ばかりだからな。旅館のままだと消防署や保健所が改善を求めて来てうるさいし。ま、こんなじゃ当然なんだろうが、事実上の貸室業か、なるほどな」
桑田が心臓発作で倒れた時に同室だった山崎老人は、事件の三日後に立ち去っている。以来宿泊客は波城一人だった。
「まあ、シェアハウスにも立ち入り検査はありますけどね。ここは二階建と低層ですし、中はがらんとして広々した造りなので」と三田村が捕足した。
「がらんとして広々はきついな」と奥山は笑いながら禿げた頭を撫でた。
「すみません、つい」と三田村も悪びれることもない。
「じゃ、追加で小宴会の用意をします」と女将が立った。
「ところで波城さんは長く居てくれるのかね、あと十日で一か月契約は終わってしまうが」
「何か特別なことが起こらない限り、更新させてもらいます」
「そうか、徳子も安心だろう、ありがとう」
四人で午後十一時ごろまであれこれ話し合った後でささやかな宴会はお開きとなった。奥山社長と女将が上機嫌で奥に入ると、急に静寂が訪れ、波城と三田村は二人並んで横になり、垂れ下がった蜘蛛の縦糸が揺れている天井を見ていた。
「一度大掃除をしないとだめですね、ここ」
三田村が半ば笑いながら言った。
「俺一人でもできるけどね、この程度の建物なら」
「波城さん、すごく充実していますよね、このごろ特に」
「二年間何もして来なかった反動かなぁ、疲れて眠るのが何だか嬉しくて」
「解かります、僕もそうだったんです。人間て不思議ですね、楽が苦痛になるなんて、青春時代には想像もできなかった」

「まだ青春でしょう、三十二歳なんだから」
「いや、おっさんですって女子高生に聞いてみてくださいよ」
「あいにく知り合いはいない」と波城が笑う。
「そりゃそうでしょ、孫なら別ですけど」と三田村は屈託がない。
「何か用事があったんじゃないですか、今日」
三田村がハッと思い出したように自分のバックパックから紙切れを取り出した。
「これ、例の彼ですよね」
受け取った紙は官報の切れ端だった。項目『行旅死亡人』
波城は息を呑んで読みだした。
『本籍、住所、氏名不詳の男性、身長１７５㎝くらい、体格痩身、年齢３０乃至３５歳と推定、服装青地のＴシャツにジーンズ、所持金無し、遺書らしき短いメモあり、携帯品バックパック、中身半ば膨らませたポリ袋のみ、上記の者は…水死体として発見された。５月２２日死亡と推定。ご遺体は火葬に付し遺骨を保管しています。お心当たりの方は申し出てください』
「東京湾で発見ですか…。ありがとうございます」と波城は頭を下げた。三田村はずっと大河内玄の事件を気にかけてくれていたのだ。
「もう一つ情報があるんです」と三田村は正座をした。
「うかがいます」と波城も膝を揃えた。
「もう報道でご存知かもしれませんが、八子神モータースの八子神利雄が街中で何者かに出刃で数か所刺されて死亡しました。死体のそばに血まみれの元奥さんがいて自分が殺したと言っているとの報道でしたが、警察は自白に疑問を持っていて引き続き捜査中だそうです」
「知らなかった。ここにはテレビ無いから。浮世離れが過ぎたかもしれないな、このところ」
犯人は闇金融だろうと波城は直感した。八子神伸子ではない。殺すつもりなら彼女は、街中などではやらず、とっくに実行していたはずだ。いずれにせ

よ、貸した金のことなど表面には出てこないだろうと踏んだ。

「お知らせすることもなかったですかね」と反応の鈍さに三田村がうなだれた。

「とんでもない。彼の最期を知らされてホッとしている自分がいます。元奥さんのためにもね」それでも見知った相手だけに合掌はした。出会ったころ、ホームレスを異常なほど言葉でかばっていた八子神。それは、早晩自分が落ちていく先だと認識していたからかもしれない。そんなことも思った。

「三田村さん…」口が勝手に呼びかけてしまった。

「はい、何でしょう」

二人とも呼応したように再び並んで天井を見ていた。

「このふた月ほどの間に、直接間接に五人の死を見聞きしているんだけど、これは何なのかと、ふと思ってね」

波城は、飯坂恵美子、飯坂寿郎、大河内玄、桑田次郎、八子神利雄の名前を口にして指折り数えた。

「そんなに、ですか。何かそこに共通点でもあるんですかね」

六人とも、殺してもいないし自殺幇助もしていない。ただ自分が通る道筋に居て、袖擦り合っただけでそのまま去ったというにすぎない。それなのに、なぜか罪の意識が生まれ、自責の念すら薄っすらと感じている不思議。波城はそれを口にした。

「例の入水自殺の男性を除けば、全員が俺の老後の蓄えを減らしていく役割を果たしているってことかな、共通しているのは」

「もしかしたら導かれているってことですか」

「さすが鋭いですね」

「まだ自死願望は捨てられませんか、まだやれること、張り合いのあるしごと、あるじゃないですか。人にも求められていますし」

三田村の声音が優しかった。

「事実上の死人を起こさないでくださいよ、困惑する」と軽く笑って、「自分で最終的に引導をわたす日が少し先に動くだけ。そんな感じかな」と続けた。

「急がなくても人間、必ず死にますよ」
「急いだほうがいいって死が、人間にはあるよ」
「このまま並んで眠りましょう」
「ああ、そろそろいいですね」
間髪を入れず三田村の穏やかな寝息が聞こえてきた。
「しょうがないなぁ、梅雨寒だっていうのに、この人も疲れてるなぁ」と波城は、部屋の隅から薄い布団を持ってきて三田村に掛けた。
夜中に起きたら潜り込めるようにと、布団を二組敷いたあと、三田村同様畳の上で眠りにつくことにした。なぜかそうしなければ狡いとでもいうように。
「ここは外気と直接つながってるんだよ、すごいな」とつぶやく。玄関を閉めていないのだ。考えてみれば摩訶不思議な宿だった。

波城は翌日から動き出した。三田村から一日だけ車を借りて川に沿っている道路を上流方向へと走りホームセンター赤金を訪れた。最初から大きな準備をすることはできない。創意工夫の範囲で、具体的には昨夜社長夫妻に語ったプランの小さなものから実行する。説明をしたもの以外で購入した物は、看板を照らすソーラー灯、とりあえずだが十畳用の上敷き二枚、特殊な清掃用具に玄能、鋸、ドライバーなど重要な木工用具、その他の小物だ。
駐車場での積み込みの最中に、前の車の老人がチラチラこちらを見ているので気になって仕方がなかったのだが、いよいよ帰途につこうとして運転席側のドアを引いたときだった。
「やっぱり波城、波城広志じゃないか」と近寄って来た。
髪も口髭も真っ白で波城としては誰なのか見当がつかない。
「何だよ、忘れちゃったのかよ、俺だよ、峰岸誠、剣道部で一緒だったじゃないか。もっともこの真っ白けじゃ無理か」と両肩に手をかけて無遠慮に唾を飛ばしてくる。
「あ、ああ、はいはい、えげつない籠手の名手。あ

の峰岸か」
「ははは、えげつないは余分だわ、コノヤロ」
「いやぁ、久しぶり。五十年以上になる、お前この辺に住んでるのか」
「おう、向陽台ってとこ、カントリークラブの近くだ。お前は？」
「住所は俺も一応都内だ、川のこっちには親戚の家の買い物で来た、今日明日だけだけどな」
嘘をついた。詳細に説明すべきことでも、相手でもない。
「俺も急ぐんだけど、波城今年は参加するんだろ、海の日の同窓の集い。いつだったか小桜が残念そうだったぞ、出てやれよ、付き合ってたんだろ、お前たち」
小桜は東山紫乃の旧姓だ。確かに高校時代の紫乃とは公然の恋人気取りだった。
「今年の海の日は七月十六日だ、来いよな、案内行ってるはずだぞ」
案内は見たし日時も場所も憶えてはいる。老いて自死寸前の姿をさらすのが嫌で迷っていただけだ。
「ああ、たぶん行けるよ、いや、今回は絶対参加するわ、俺」
波城は自分自身に約束をした、今生の別れに小桜紫乃に会おうと。
「お前、自分のこと俺って言ってたっけ、昔。僕だったろ？」
「もう他人さまのシモベは止めたんだ、だから」と笑って返した。
「なるほど、奥が深い。じゃあな！」
「おう、当日、声かけてくれよな」
自分の身の回りに起こることはみんな自分にとって意味がある。偶然にこのタイミングで同窓生に遭遇した以上、この流れは大事にしたいと思った。

四　奔流

1

紫乃の母親小桜朱美は誤嚥性肺炎が原因で俄かに他界した。享年九十二歳だった。

公式見解では施設側に落ち度は無いということだった。

紫乃には亡母朱美が十九のときに産んだ小桜治という七十三歳になる実兄がいる。現職の市議だが、およそ融通の利かない真四角な男で、実母の朱美とも紫乃とも縁を断ったままでいる。ここでも紫乃の嫁ぎ先東山家との確執が絡む。紫乃と東山博行との婚姻のあと、紫乃の父小桜和男は市長選に二度も落ち、東山家の目論見は外れてしまったが、小桜治が市議になると姻戚を理由に東山家は小桜治をコントロールしようと動き出した。これを簡単に蹴飛ばされたのが原因で両家は対立、兄妹の交流は自然に無くなっていった。紫乃を溺愛していた朱美は当然紫乃の側についた。

それでも朱美の葬儀は世間体もあり、長男治が喪主になって執り行われた。

東山敏弘、博行親子は自分たちが欠席するだけではなく、紫乃の葬儀参列も断固として許さなかったが、紫乃は無視して金五万円の東山名義の香典を携えて通夜、告別式ともに親族の席についている。

告別式のあと、紫乃は収骨室まで付き合ってくれた東山美佐の誘いで美佐宅へ同行をした。途中駅前でスイーツを買うことは忘れない。

部屋に入るやいなや二人は窮屈な和の喪服を脱ぎ去って白い肌襦袢姿のまま足を伸ばした。まだ梅雨は開けていないし、晴れれば蒸し暑い。

「麦茶でいい？」と美佐が立った。

「うん、冷たければなんでも」

「冷たいって言えばさ、紫乃ちゃんはいつまで我慢するの、オヤジと兄貴、東山家の二人のゲス野郎の世話。あ、会社の経理の世話も入るか」

「そうねぇ、せっかくかあさんが助けてくれたしね」

盆に麦茶のペットボトルとコップ二つを載せて美佐は一瞬驚いた顔を見せた。

「やっぱりそう思ったんだ、紫乃ちゃんも」

「読経を聞いてて思い出したの、もうすぐ自由にし

てやるからって、かあさんがボソッと言ったこと」とコップへ麦茶を注いで微笑をした。
「親だねぇ…その唇の左側が腫れたの、またあのバカ兄貴の暴力？」
「キスで噛まれたなんてことはありえないでしょ。親の敏弘はエロ、息子の博行は暴力。美佐ちゃんの前で悪いけど、確かに限界に近いわねぇ」
ここで少し美佐の顔が曇った。紫乃はその意味を知っている。紫乃が東山を出て行けば身内の美佐に負担の矛先が回るからだ。
「でも耐えていればかなりの遺産が」と美佐は軽めな対応をして来た。
「お義父さんはいまでも、あらゆる資産につき博行名義にしていないわよ、経理だから知ってるけど。だからあの状態のお義父さんの言いなりで我慢するしかないの。ワルの格が違うわ。博行の方は弱い立場の人間をいたぶるのが関の山。かあさんが死んだことで一番慌てているのは博行かも。わたしが出て行かないという保障がなくなるから」
「さすがねぇ、お見通しか。それならもう少しの間だから堪えますか、いろいろ」
「美佐ちゃん、わたしこんな生活をして何歳まで生きたらいいわけ」と紫乃は微笑して、「だいいち」と言って黙った。
「第一？」と美佐が覗き込む。
「何にも欲しくないのよ、もう。心穏やかな日々が望みなだけ」
さすがに子どもの頃の病気が再発しているかもとは言えなかった。自分だけが覚悟をしていればいい、紫乃はそう思っている。
「そう、そこまで物欲を捨て去っているわけかぁ」
「批難しないでね、美佐ちゃんだけは」
「わかった、祝福する」
「それにね、黙っているつもりだったけど、これ美佐ちゃんだけに言うわね、特にお義父さんの下の世話のことで心配でしょうから」
「紫乃ちゃんがいなくなったら兄貴が施設に叩き込むわよ、きっと」美佐が紫乃の口を遮るようにし

て言った。
「それは甘いわよ」
「ええ！　そこまで兄貴、ケチるかなぁ」
「博行にはまだお金の実権がないわ。それにね、さっき言った秘密のこと。お義父さん、頭は少し傷んでるかもしれないけど糞尿のことは仮病よ」
美佐が口にした麦茶を少し吹き出して眼を剥いた。
「仮病って…だって医者も往診に来て」
「あの医者もお金は大好きでしょ、たぶん」
「あ、ごめん」と手拭いで噴き出した麦茶を拭き取った美佐。小刻みに身体が揺れている。「震えがきちゃった」
紫乃はそれに動じもせず、買ってきた大判焼きを袋から出した。
「知ってて、ねえ、それを知ってオヤジのちんちんやお尻拭いてやってたの？」
「あ。いま、食べてるところ」
「そうね」と美佐も大判焼きを手にして「紫乃ちゃんて凄いわ」と唸った。
「途中でよ、それも最近、お義父さんと先生と偉い人二人をじっと観察していて気づいたの。嘘でやっていると言動がパターン化するのよ。毎度少ない脱糞に漏れ程度の排尿、変でしょ。まるでいつ嘘に気づくか楽しみにしているみたい。ごめんね、言っちゃうけどゲスの極み」
「あのバカオヤジ。それでも耐えたのはお母さん、朱美さんのためか、まいったなぁ」
「一度も不思議に思わなかった？　美佐ちゃんは」
「何のこと」
「私が外出している間に　病気で糞尿が排出されたとしてよ、いったい誰がお世話してたのかしら」
「ああ、そうよね、今回だって昨日の通夜の日の昼間からこの時間まで」
「さらにだけど今日もね、二つ先の駅の傍のビジネスホテルに泊まることになってるの。さあ、ほぼ三日間、だれがお世話するのでしょう」
「紫乃ちゃん、なんだか怖い、いつもと違う人みた

い」
「だから美佐ちゃんには下の世話は回ってきません。はい、麦茶のおかわり」
紫乃は、ほくそ笑みながらペットボトルを手にした。「何もないって、強いのよ。たくさん失うものを持ってる人は大変ですね」
「仮病ってこと、ゲス兄貴も知ってたのかな」
「知らないわね、一回もお義父さんの部屋覗いたことないし」
「もう決めたの？」美佐がゴクリと嚥下してから目を大きくした。
「うん。気持ちよく私を叩き出せるようにしてあげるつもり」
美佐の喉がまた、ゴクンと音を出した。二度目の嚥下は唾らしい。

結婚してから初めて外で二泊した紫乃は、帰宅してすぐに玄関先で夫博行に殴打された。よろめいた紫乃は京壁にぶつかり、首を振って意識を持ち直した。博行の目を直視し小さく笑うと、車椅子の後ろに回り勢いよく押しだした。
「おい！　何の真似だ、紫乃、バカはやめろ」と血相を変えて博行が振り返る。
無言のまま真正面の壁に向かって車椅子をぶつけた紫乃は、より力の出る利き腕で博行の髪を引き、車椅子ごと後ろに引き倒した。
床に転がり、ただ大きく目を開き恐怖におののく博行に向かって紫乃は、静かに口を開いた。その口元から顎へと一筋血が流れている。
「お義父さんに抱き起してもらって、いま呼ぶから」
上半身で車椅子にしがみついた博行は、「バカ言ってんじゃねえ、半身不随のオヤジに何が出来るってんだ、クソがぁ」と顔を歪めた。
「這ってくるとでも思ってるの」
「オヤジが俺を助けるって発想がバカだって言ってるんだよ」
「そうね、大声で笑うかも。ここまで歩いて来て、見下ろしてね」

「お前狂ったのか、オヤジはなあ！」
「あら、知っていたんですか、お義父さんの下半身不随が仮病だったこと」
「何、なんのことだ」
「わたしがいない間、一度でもベルが鳴りましたか？」
博行がきょとんとした。そのあとで顔色が変わった。
「医者が言ってんだぞ」
「グルなの医者も。先生へ支払う金額、異様に高額ですよ。可哀そうに、あなたはお義父さんにピエロにされていたの。もしかしたらあなたの不随も嘘？だったら一人で立ちなさいよ」紫乃は車椅子からスッと離れた。
「さあ、お立ちなさい。あのお年で、卒寿越えで、お義父さんは立ちますよ」
「じゃ、じゃあ、お前がそうしてやってたのか、ええ！」
紫乃は嘘をついた。ゲス親子にまともに付き合う必要は、もう無いのだった。義父敏弘は嫁入りしてきた頃からずっとお気に入りだった紫乃に触ってもらいたかっただけなのだ。それが「若さ」を保つ手段だったらしい。それにしても発想が性的なことにしかつながらないのだろうか。言葉のトラップに即刻陥った博行がいた。敏弘は絶対いまでも一人で歩ける。誰も部屋に寄り付かないのをいいことに、紫乃を呼ぶとき以外の時間は自由に室内を動き回っているのに違いない。紫乃は不審に思ってから敏弘の腿やふくらはぎの筋肉に注目し始めた。不随患者にしてはしっかりしすぎていた。
「紫乃、一体何を考えている」と博行が目を据えた。
「かあさんの葬儀をよくも無視してくれたわね、参列の邪魔までして恥を知りなさいよ」
「いままでババアの金の面倒を見たんだ、何が不服だ、図々しい」
「私を奴隷化する目的でそうしていただけ、知らないとでも？　奴隷の前は監禁してたわよね、新婦のわたしを。結婚してから長女の博美が生まれるまで

ずっとよ。ゲスの勘繰りで私が別の男と関係していると疑って。いっそ何から何まで世間様に公にしましょうか、週刊誌かなんかを利用して」
「よせ、それはやめろ」と博行が急にうろたえた。
「まあ、いいわよ、もう、この腐りきった東山の家のことなんて」
「口だけなら大阪の城も建つ。貯金一つ無いお前に何が出来る」
「ご自分がそうだからといって人も同じだとは思わないことね。ここを出た後でも戦えるわよ、いろいろ」
「離婚するぞ、いいのか」
「有難いわ、いそいでくれます？」
「いまお義父さんに報告してきますから、それまでに自力で車椅子に腰掛けていることね。わたしに倒されたなんて恥ずかしいでしょ。第一信じないわよ、きっと」
「お前オヤジをお義父さんと呼ぶのはなぜだ、以前から不思議だったんだ。オヤジが仮病だと知っていてなぜ面倒を見ていたんだ？　金だろ、目的は。そんなお前がここを出て行ってどうする。猿芝居はやめろ」
「じゃ教えてあげるわよ、お義父さんはエロジジイだとは思うし、間違っても尊敬はしないわよ、でもね、人間としての優しさはちゃんと持っているわ。何の実力も無いのに、弱みを握った相手にだけ威張り腐って暴力を振るうあなたとは天と地の差があるの。醜さにも程度ってものがあるのよ」
　言いきったところでフッと力が抜けた。その紫乃に向かって横に倒れた車椅子が滑って来た。博行が力一杯押し出したのだった。それでも途中で逸れて階段の上り口の柱にぶつかって止まった。
　紫乃は小さく笑って回り込んだ。
「じゃ、お義父さんにご挨拶をしてきます。長らくお世話になりました」
「待て、待ってくれ、オヤジの介護はどうなる」
「言いましたよ、さっき仮病だって。あなたと違って、ご自分で何でもできます」

「俺は、俺は誰が世話するんだ、お前が出て行ったら」
「恥を知りなさいよ、奴隷にそんなことを涙声で聞く王様がどこに居ます？」
「俺に実権は無い、王でも何でもないんだ」
「言う相手を間違えています、お義父さんにあなたの介護人とこの家のお手伝いさんを雇ってくれるように泣いて頼んだらいかが」
「会社の経理も放り投げていく気か、無責任だろ。お前らしくもない」
「それも同じ。経理会計のプロを頼めばいいことです！　甘ったれるのもたいがいになさいな、かあさんとわたしを乞食扱いしておきながら。もう一度言いますね、恥を知りなさい、男なら」
紫乃は二の句が継げなくなった博行を後に敏弘の部屋に向かった。
「お義父さん、入りますよ」と大きな声を掛けた。
「何、呼んでないぞ、待て、待て、少し待て」と、敏弘の慌てた声が面白い。
紫乃は無視をして中に入った。
「お義父さん、ひどいじゃありませんか！」と立っている敏弘の下半身に飛びついた。
仮病のことかと敏弘に色を失わせる一策になる。
「博行に殴られてたったいま離婚されました、出て行けと。これってお義父さんのご指示なんですか、ひどいです、あんまりです！」下からすがるような目で敏弘を見上げた。口元の血は拭ってもいない、そのままだ。
「バカな、俺が言うか、そんなこと、博行！」と紫乃の手をほどいて玄関の方へと自力で歩き出した敏弘。「博行、バカかお前は！」
「違います、紫乃が自分で」「言い訳は言い」あとは聞き取れなかった。怒号とドタバタと争う音が混ざって聞こえてきた。
紫乃は敏弘介護用の階段で二階の自室に行き、葬儀に出かける前に用意をしていた荷物二つを手にして、同じ専用階段を降りた。勝手口から外に出ると、待たせていたタクシーに飛び乗る。

「さっき乗せてもらった場所まで戻って」
「承知しました。お荷物トランクに移しましょうか」
「よろしければ、このままで。とりあえず出してお願い、身に危険が迫ってるの。ミラーに映ってるなら見て。殴られて口の中切れてるの」口元には赤い血の痕がある。腫れあがってもいた。第一まだ和の喪服のままなのだ。緊迫感が半端ではない。
決して大袈裟ではないと紫乃は思った。自分でも不思議なくらいの演技だった。これしかない。これで狂った家から解放される。彼らは絶対警察沙汰にはしない。
疾走する車の中で紫乃は、もう一つ確信を持っていた。夫博行は必ず、偽造してまでも離婚届を出すと。なぜなら妻にしたままでは暴君敏弘が贈与や遺言で紫乃宛てに何か財産を渡してしまうかもしれないと恐れるからだ。その程度の男でしかない。
ミラーで紫乃の顔を何度も確認したのか、ドライバーが興奮気味に言った。「任せてください、後なんかつけられっこないですよ、誰に聞かれたってお届け先なんて教えやしません、安心してください」
行き先はとりあえず美佐の処だった。僅かだが蓄えた「へそくり」は大型のキャリーケースの中だ。一般的に言えば危険な避難先だが紫乃は美佐を信じていた。いや、一人ぐらい信じていたかった。
紫乃は牢獄から出たような解放感に浸っていたが、走り去っていく景色を見ているうちに、まるで意識を失うようにして眠りの中に入った。

2

砂絵が富永の浮気現場を目撃して邦子の処へ逃げかえってから十日が過ぎた。女の肩越しに目と目が合った以上、富永は美佐に見られたことを知っている。それなのに、スマホを使っての弁明も謝罪もなく、日めくりカレンダーだけが更新していった。
邦子は言う、「だから言ったでしょ、男の人の胸の中と見せている態度は違うのよって」と。それでも温かい目で接してくれた。そもそも娘の無理な結婚

は、自分たち夫婦の破綻から始まったのだ。そう思ってのことだろう。砂絵は母親の自責の念をこれ幸いと、甘えることにした。

ただじっとしていたわけではない。砂絵はコミック作家の助手一本に絞って、常時働かせてほしいと頼み、仕事を得た。もう一週間勤めている。当面の報酬は月に十五万だが、食住を丸ごと親にぶら下がることは避けられる。

「たしかにわたしのせいだ。富永を責める資格は無い」そう思った。

砂絵は新婚らしい配慮を夫のためにしたのか。家事だけを取り出して見ても主婦らしい日々を送ったのか。問われるまでもない。独身のときと何ら変わることのない自分でしかなかった。

変わらないと言えば、今回のことで心身の動揺が少ないのには驚いている。

「かあさん、わたしね、富永に悪いことしたって思い始めてる」

テーブルの上のマグカップを取りながら砂絵は言った。

「なるほど、そう思える砂絵が、かあさんとしては怖いわ」

邦子はトーストにマーガリンを塗りながら、寂しそうな表情を見せた。

「怖い？」

「心から好きで結婚したい。そうは思っていなかった人と結婚させちゃった罪。犯したのはわたしってことだから」

砂絵はハッとした。あの弱々しい、呆けたような母親はどこにいったのかと。

「罪なんて、よしてよ。わたし大人だよ。自分の不始末に決まってるじゃん」

「お陰で和室片付いた」と邦子が部分入れ歯を見せて笑った。

戻って来た日とその翌日、砂絵は狂ったように部屋を片づけた。体を動かすことで何かを変えようとしていたのかもしれない。

「やさしいね。こういうとき、親は怒って叩き出す

んだよ、ドラマじゃ」
「いま、今年になって身の回りに起こってることって、全部現実なんだよ、砂絵。コミックには無いの？こういう筋書き」
「ある。たくさん、でもコミックだから」なぜか目がうるんできた。
邦子が気を回して白い布を差し出した。
「それ、布巾だから」それでも受け取った。
「不謹慎？」
「ばか、くそダジャレじゃん」
「どこで何してるのかね、広志」突然邦子はオヤジを出してきた。
「うん…」
一緒に暮らしていたときは、居ても居なくても気にもしなかったほど存在感が無かった父親。とりとめのないバカ話が唯一親子の接点だった。それがいま、重さを伴って懐かしい。口にするコーヒーの苦みが少しだけれど目を潤ませた。
「わたし、ココアだったよね、少し前まで」

3

梅雨が明けたとたん猛暑で、気のせいか外気が焦げ臭くなった。もっともまともな住環境下で暮らせない人には恵みの季節到来かもしれない。まず厚着の必要が無いので数少ない衣料で済む。室内ならトランクスとランニングシャツ一枚で足りるのだ。雨さえ降らなければ野宿も乙なもの。一番感激するのは水道水の旨さだ、アイスクリームもビールも要らないレベルになる。
奥山夫妻が経営する「旅荘あけぼの」を宿屋ではなく貸室を基本にする「あけぼの荘」に小規模改装する作業は一週間で終わった。もちろん資金がほとんどいらないものばかりだ。経費は波城が立て替え、七月の自分の部屋代の一部と相殺する形をとった。一部屋を丸ごと交歓の場とする当初は無かった構想も実現した。そこにはリサイクルショップで買った中型テレビも設置してある。

利用者集めは口コミが主になるが、三田村には、活動中に見知った住所不定者で仕事を探す意欲のある人間にあけぼの荘を紹介してもらう約束を取り付けてもいる。三田村の提案にはツイッターやユーチューブの活用もあったが、資金面で時期尚早となった。最初から大勢来られては不備が目立つし、対応が追いつかないからだ。

七月一日、この日は二、三泊の短期利用が二人いた。それでも最初の計画通り短期と長期の部屋をきちんと分けたので、波城の居る長期部屋は一人だった。

波城はテレビを視る部屋には行かず、独り缶ビールを飲んでいた。ホッとしたせいか疲れを感じている。まだ一缶なのに目の周りが熱い。

「波城さん、ちょっと入るわよ」と女将の声がして、戸襖が滑らかに開いた。

鍵こそ掛からないが、客が利用することになった部屋の順に清掃済みの戸襖を戻すことにしたのだ。とりあえず視覚面でのプライバシーは護れる。

「やっぱり一人で飲んでる。あ。いいのよ、邪魔はしないから。お疲れさまでした、有難う。ほんと、また言うけど、こういう人に出会ったの初めて」

「いえ、とりあえずのところまで」と首筋を叩いた。

「これ、おつまみにして。いつも乾きものじゃ、寂しいじゃない」と女将は手にした大皿を畳の上に置いた。

小ぶりのちくわに胡瓜を通したもの、小鉢に入ったイカの塩辛、エシャレットと味噌、焼いた鰯二尾に三角チーズ。内容に統一性は無いが気持ちが嬉しかった。

「美味しそう、すみません、気を遣っていただいて」

「じゃ、おやすみなさい」と言葉通りすぐに去った。

「もう一缶、必要だな」とポケットの小銭を確認した。飲み物の自動販売機は、玄関を出て二十メートルほど行けばある。

外に出ると生暖かい風が頬を撫でた。見上げても星一つ見えない。ふと気づくと足元のアスファルトが、かなりの範囲で濡れている。

女将が、黄昏時に水打ちをしたのだ。ここに来て初めて見るおもてなしだった。

「女将も昔を思い出したか」

わざわざ口に出して言ってみた。何となく気持ちよかった。

五百ＣＣの缶ビールを買って戻り、玄関前に立った。濡れた道路が一部水溜りになっていて四千円の入口灯が映っている。直近の街灯が照らしだす「あけぼの荘」という集合材製の立て看板もなかなかいいと、手前味噌にどっぷり浸かった。玄関に入ると大型のホワイトボードに手書きで利用規則が記されていて、末尾に他の施設には無いだろうと思われる郵便番号、住所、館名、電話番号(呼出)が書かれている。個人的な負担での履歴書用紙の買い置きも考えている。

「ほんとは全文活字で掲示したいよなぁ」と思わず口に出した。

いまはそこまでの資金が無い。というよりは最終的な費用負担者である館主が「実績をみてからにしたい」と判断したからで、立替役の波城に現金が無かったわけではない。実績が上がらなければどうなるのか。自己判断の立替分が寄贈になるだけのこと。波城は最初から覚悟の上でやっている。自分自身のためだと思っているからだ。

波城は更なる改善を考えながら備え付けサンダルを脱いだ。

「さて、女将手製のオードブルでもいただくか」

4

「良治、ラブホの手記は良かったが君が言いだした企画の方はどうなってる?」

鼓吹社の大久保編集長が電話で進捗状況を聞いてきた。実は良治、この企画については行き詰まっていた。兄波城広志の足取りはほとんどつかめず、通信は、送られてきた第三者の筆になる自殺への道のりを記したノートだけだったからだ。本音を言えば「悪魔的な方向転換」は可能だった。死ぬ気で出

奔した老人の家族に起こる様々な出来事を赤裸々に描くことがそれだ。モデルは実兄の家族。しかしそれをやったらおしまいという抑止力が良治にはあった。それならと覚悟を決めて、くだんのノートを参考にして、若年の自殺と老人の自死に何か共通する原因があるのではと、解析をする手もある。だが、兄に無条件で信頼された身としてはこれもためらわずにはいられない。なぜノートを持っているのか、自殺幇助ではないのかと、最終的に波城広志が、刑事犯罪の容疑者になる恐れすら否定できないからだ。

「資料もあるし、具体的なプランも固まってるので、もうそんなに待たせないつもり」

良治はある覚悟を迫られているのだ。いまは言い逃れるしかない。

「そうか悪かった。立場上確認しただけだ。今度のルポも面白いし意味が深い。頼むぞ、期待してるからな」

海の日の同窓の集いが分かれ道になると、良治は思った。「しのちゃん」と波城の出会いが何かを起こす。それは確実だが、どちらかが欠席すれば先は見えなくなる。当日は現場に張り込むし、すくなくとも波城が来れば捕まえて話が聞ける。金になりそうな記事と良心を天秤にかけて後者を採っている所以だ。

大河内玄の日記は衝撃的だった。書かれている内容だけではない。地元有志に壮行会を開いてもらい、さらに百人を超す見送りを得て、法曹を目指し地方から東京に出てきたというだけあって、文章も文字自体も秀逸だったのだ。巷に氾濫する愚痴や自虐満載の日記とは違い、自分がつまずくたびにその原因と対策を熟考していた。客観性がある。できればそのまま出版したいとさえ思う。

「それもこれも兄貴に会ってからだな」と良治は自分に向かってうなずいてみた。

良治はこのところずっと、自分の中の不思議を見詰めている。叶令子に会うたびに自分の中での彼女の重さが増していくのだ。離婚してから今まで女に

対しては冷めた目でしか見ていなかった。狡くて汚くて邪魔な存在として認識していた。何が変化をもたらしたのか。それを突き止めようと逢瀬の頻度は上がった。必然的により多くの金が必要になってくる。

ある日、良治は金を欲しがる自分を嫌っていないことに気づいた。それは金が女というものに直結していたからだった。抑止力を失った自分は怖い。

叶令子という女は、良治を丸ごと変えようとしていた。

5

砂絵は兄孝之と一緒に富永のマンションを訪ねた。新婚だった砂絵が自分の夫の居場所に帰るのに訪ねたというのは変だが、砂絵の中ではすでに離婚は成立していたのだ。邦子も孝之も最終的には賛成をした、孝之が付いてきたのは直談判をするためではなく、富永が妹に暴力をふるうのではないかとの危惧からだった。とにかくはっきりさせなければならなかった。

二人の顔を見ると、予想していたのか富永は穏やかな表情で「どうぞ」と鎖錠を外した。妻はもう戻らないと踏んでいた。ドアの鎖がそう言っているようなものだ。

中に入るとテーブルのあるキッチンに通された。かつて家族で富永との結婚話をした部屋だ。良かれと思って急いだ結婚だが、結果的に一家は破綻してしまい狙いは早々に狂った。砂絵は虚しささえ感じていた。

「離婚をするつもりで…」と砂絵が立ったまま口を開いた。

「いいよ、条件があれば言って、砂絵さん」と富永は、最後まで聞かないうちに承諾をした。悪びれもせず、結婚を決めた時と寸分違わぬ理性的な顔だった。あの日見た獣のような行為は、目の前の富永からは想像もできない。

富永が「砂絵」と呼び捨てにしないのは終わった

からだろう。
「一応座ってくれるかな」と自分から先に椅子を引いて座った。
「君にとっては結婚も遊びのひとつなのかな?」孝之の口調も静かだった。
兄妹は富永の返事を待たずに、揃って椅子に腰をかけた。
「質問の意味が良く分かりませんが。遊びで結婚する人っているんですか」と富永は背筋を伸ばした。
「妹は知りませんが、僕には今の反問の意味が読めません」
「砂絵さん、聞き忘れたけど、家族に言われて離婚を決めたのかな、それとも自分で?」
「自分で決めたわ、兄は私を気遣って同伴しているだけです」
「殴るとでも?」
「そういう人じゃないと、知ってるつもりだけど…」
「あの日のセックスを見て怖くなったか」
「ていうか、あなたが分からなくなった。一緒に暮らせる人じゃないなと」
「それだけ確かめればいいや。届け出は二人で行くか」
「うん、そうしたい」
「わかった、市役所のロビーで明日待ち合わせよう。午後一時。それならお兄さんも安心だろうしな」
「間違いなく、一人で行きます」
砂絵はよどみない仕草で部屋の鍵をテーブルの上に載せて返した。
孝之は砂絵と約束をしていた。役目はボディガードだけにすると。こうなると腕組みをして黙っているしか手が無かった。
富永は静かに立ち上がると「少し待って」と中廊下に出た。
「砂絵、本当にいいんだな。もっと言いたいことがあるんじゃないか」と孝之。
「ううん、いいの。これはお互い大人の判断なんだから。感情的になるのは、醜いだけよ」それでも目が潤んできた。

富永はすぐに戻って来た。
「僕の方はすでに書き込んである、今日はこれを持って帰って砂絵の方で完成させてくれ。君があの日、怒鳴りもせずにだまってドアを閉めたときにこうなると思ったよ。いつ来るか、それは分からなかったけどね」
砂絵は届出用紙を受け取って、うなずいた。
「余計なことかもしれないけど一言謝罪とか無いのかな」と孝之が言った。
「砂絵以外の女とここでやったこと?」
「ああ、ほかにもあるのかな」孝之が富永の目を捉えた。
「結婚する前からずっとそうだったから、裸で組み付かれたからいつもどおりに」
砂絵の頬を涙が流れ落ちた。「前からずっとなんだ…」
結婚する前、自分は富永にとって特別な存在だと自惚れていた。
「一日単位の株取引で百万とか儲かると性欲が溢れだすんだよ、それがだめな人なら結婚生活は無理だと知ったんだ。考えてとか、理性的にとかじゃないんだよ。株をやらない人には分からないだろうけどね」
「その爆発の相手方が妻ではだめだとでも言うのか」
「タカ、やめて」いわゆる地雷を踏む言葉だと直感した。
「だって居ないだろう、居ないことが多いだろう、結婚前も結婚してからも。前場や後場の後でマスでもかいていろとでも? それこそ異常だろう」
砂絵は、富永の理解ある言葉に甘えすぎたと思った。邦子は何度も忠告していた、男の人は言葉と胸の中とは違うのだと。
「君が呼ぶから来るんだろ、その女は。偶然じゃなくて。そこが…」
「お兄さんと僕は違う、何人もそういう女がいて、性癖を知ってるから時間をみて来るんだ、向こうから。呼んでるわけじゃない。第一呼んで来るのを待

ってたら、その気も興奮もなくなってしまう。そういうこと」
「もう、言葉もない」と孝之が立った。
「タカ、帰ろう」と砂絵も倣った。もう、少しはあった妻としての罪悪感は消えていた。
「飾りを捨てて聞くけど、ここが欲しかっただけなのか」ドアノブに手をかけてから振り返り、孝之が聞いた。
「じゃあ、僕も飾りを捨てて聞くよ、砂絵さん、ここを僕に売りたかっただけなのか」
砂絵が膝から崩れそうになって孝之にすがりついた。
「どうぞ株に戻って。邪魔したね」
孝之は砂絵を抱くようにしてドアの外に出た。
「砂絵、あいつの言う通りだと舌を出して耐えろ。そうすればすぐに立ち直れる」
孝之はもう一度砂絵を抱き寄せた。
後ろでドアが開く音がして富永が言った。「砂絵さん、明日、必ず時間守ってね、これからの君のためにも」なぜか笑顔だった。
「明日は絶対胸を張って届け出ろ。お前は、砂絵は、みじめじゃないんだ」
砂絵は涙も拭わず、何度も孝之にうなずき返した。

6

車窓から見る景色が眠気を誘ってくる。かなりのスピードで後ろに飛んでいく風景とはいうものは催眠効果があるのだろうか。紫乃は半眠りの頭で思い出していた。
「紫乃ちゃん、いつまで眠ってるつもり」どこかで声がした。
目の前が真っ赤で毛細血管まで見えているような気がして、イヤイヤと首を振った。瞼をようやく上げると、強烈な光が襲ってきた。日差しが顔に当たっていたようだ。
「もうお昼だよ」美佐の声だった。

「あれからずっと？」と紫乃は質問から始めた。
「そう、タクシーで逃げて来て。喪服脱いで、落ち着くようにってビール飲ませたら、ぐったりしちゃったから布団に寝かせたの。それからずっと。二十時間近く、よくもまぁ目が溶けなかったわ、ほんと」
「嘘みたい」と紫乃は上体を起こした。
「それはわたしの台詞。口元が腫れてたから、血の痕も…。何にも聞かなくても事情は察したわよ、いい決断だわ。よく頑張ったものね」
横を見るとお膳に朝食らしきものが並んでいる。暑苦しい外の日差しとのアンバランスが可笑しかった。
「とにかく腹拵えしなくちゃ、お茶も淹れるからね。布団は今畳むと埃になるから食べるのを先にしよう」と美佐が、起きろとばかり背中をポンと叩いた。
白いご飯に、即席味噌汁、梅干し、焼き海苔、胡瓜のお新香、目玉焼き。さらに緑茶が加わった。
「ふふっ、旅館の朝みたい」と梅干を口にして酸っぱい顔をした。
「だからこの時間じゃ、朝じゃなくて昼ご飯になってるって」と美佐が笑った。
「ありがと…」うっかり涙が出そうになった。
「その旅館みたいって言葉で言いやすくなったんだけど、紫乃ちゃん、なるべく早く亜矢の処へ隠れな」
「アヤって、うちの父さんの隠し子で中学生のときにやっと認知したあの小桜亜矢ちゃん？」
「そう、了解も得ないで事情を話しちゃったんだけど、理解してくれて。いつでもいいからと言ってくれた」
紫乃の九歳年下になる。一緒に暮らしたのは亜矢が大学に入るまでの六年間だけだった。ちょうど難しい年ごろだったのと、年齢が離れていたので、それほど姉妹として仲が良かったわけではない。半島に居ることは知っていた。今回の母朱美の葬儀には参列していなかったので、名前が出たのは意外だった。
「何で美佐ちゃんと亜矢が、親しかったの？」

「うーん、この年になったからいいかな、昔は秘め事だったけど、いまは時代のお陰で恥ずかしいことでもなくなったし」
「何よ、もぞもぞして」と言いながらご飯を口に入れた。美味しいお米だった。
「一時期女同士の、ほら、レズだったのよ、亜矢とは」
あんぐりと口を開けた紫乃。
「ごはん、口から落ちるって」
紫乃が口を閉じるのを待って、「若い頃紫乃ちゃんの結婚式で知り合ってさ、その後何度も逢って、七つ年下なんだけど可愛くてね。それと男嫌いが一致して」
美佐が六十六という年になっても照れているのが可愛かった。基本的に独身主義者という理由を聞いて、紫乃も納得がいった。
「何年ぐらい続いたの」
「濃密だったのは十年ぐらい。あとは手紙とか電話だけの付き合いが長くて、年をとってから訪問も時々」
「へーえ、おどろいたなぁ。いつでもいいってことは、いまも独身なの」甘えられるかどうかはここで決まる。
「陶芸家の先生のお宅の傍で自炊生活してるのよ、貧しい山小屋風。誤解しないでね、今は全然そういう関係はないの、わたしたち」
「ちなみにだけど、その先生って男性？」
「ああ、なるほど。女流陶芸家として有名で八十過ぎてもかくしゃくとしているって話よ。つまり亜矢は内弟子ってことかな」
そこも長くは居られないだろうと、紫乃は思った。同時になぜ、美佐の処ではだめなのかが気になった。
率直に聞いたところ「昨日ね、一つ忘れてたこと、思い出しちゃったのよ」と美佐は意外なことを言った。「一度だけここに来てるの、ひろみ。うっかりしてたわ、ごめんね、あの子も佳乃と一緒で兄貴べったりでしょ、もちろんお金絡みで」
ひろみは紫乃の長女で三十八歳になっているが

独身だった。

「博行にはお金の力はないけど、確かに二人とも父親の力だって勘違いしてるわね」

「家出が騒ぎになれば、きっとここが隠れ家の一つだとバレルと思うのよ」

「確かにあの子ならご注進は確実」

紫乃は結局、美佐の忠告に従うことにした。

「聞いていい？」と突然美佐が正座をした。「子どもと永久に別れることになっても、心の方は痛まないの」

迷いがないと言えば嘘になる。しかし悔いがあるとも言えない。

「もう母と子じゃないわ。理性的な打算で離れていった段階でもう子どもじゃないのよ、ある意味立派な処世術だし。とっくに保護する対象でもないし。こうして、まるで敵側の人間みたいに母親を裏切ることもあらかじめ分かってて受け容れてるし…」紫乃は哀しいけれど、そう思うしかなかった。

「ごめん、やっぱり聞いちゃいけないことだったわ」と美佐が淋しそうな顔でコクンとうなずいた。

本線からの乗り換え駅に着いたころは、もうすでに亜矢宅居候の次を具体的に考えている紫乃だった。大きい方の荷物を出発駅の大型ロッカーに入れてきている。短期間と思わせるのは亜矢に対する礼儀だと思ったのだ。長期間甘えられるかどうかは実際に会ってみないと分からない。

「とりあえず海の日までの宿として頼もう」

どうせ、同窓の集いには横浜に戻って参加するのだから。そう思った。

亜矢の住処は外海を一望できる高台にあった。

美佐は何度か訪れたということで最初は地図を書いてくれたのだが、思い直したように到着時刻を決めたうえで駅まで迎えに来て欲しいと亜矢に電話を入れた。本当に親しい間柄なのだと紫乃は話し方で納得をしたものだ。

駅前でミニのジープに乗り込んだ時に、何十年ぶりかの亜矢に「十日ほどお世話になるね、よろしく」

と短く挨拶をした。
「うん」と言っただけの亜矢。それでも嫌がっている感じはなかった。芸術家特有の寡黙さなのだろうか、紫乃が話しかけなければ何もしゃべらない。亡き父に似たのだろう、横顔をじっと見つめたが、いい顔立ちだった。
小ぶりのログハウスの中はあらゆるものが散らかっていた。それなのになぜか紫乃は落ち着きを感じた。料理は得意でないらしく、台所はかなり悲惨な状態だった。紫乃を遠方からの客だと位置づけ事前に片づけて置くなどとは考えていない。かえって嬉しくもあった。
「これ着なよ、ここに居る間」
亜矢が出してくれたのはエビ茶色のジャージだった。
「おしゃれしても誰も見てくれる人いないし、ここ長い間掃除してないし」と頭を掻いて笑った顔が、還暦が近いのに少年のようで可愛かった。美佐との過去では男役だったのかもしれない。そんなことを思った。
「あしたから、整理してあげるから指図してね」と、流れに乗って言うと、「人生の大整理をしてきた人に頼める作業じゃないでしょ」と、また笑みを返してくれた。
「でも、好きにしていいよ」と、冷蔵庫から冷たいペットボトルのお茶を出して渡してくれた。
「あ、嬉しい。ありがと」自然な形でお辞儀をしていた。
「何にもかまってあげられないけど、勘弁してね。東京で開く先生の作陶展をひと月後に控えていてさ、心の余裕ゼロなので」
「うん、お客さんで来てないから大丈夫。何か調理するから、食べてね」
「いいけど、買い物遠いよ、近くの小さなスーパーまで往復四キロもある」
「だって時間だけはたっぷりあるもの。それに歩きたいから、景色いいし」
「ふーん、美佐と仲がいいの、何だか解かった」

「そう言ってくれると嬉しい」
「その嬉しいって言葉、あることすら忘れてたわ」
何度も見たいと思える微笑みがまた出た。
新たな出会いのこの日。亜矢が作業場から帰って来たのは午後八時だった。
寝床はセミダブルベッドが一つ。亜矢は帰宅するやいなや、ツナギのような作業服を脱ぎ捨てると夕食も取らずにその上にのって、すぐに寝入ってしまった。
紫乃は、ベッドに腰かけて亜矢の寝顔をジッと見詰めた。五十九の女が極限まで働いて自分の安息、眠りの中に落ちていった。これこそ充実感というのだろうか。亜矢が半ば口を開けて、紫乃さんは何か成したいものがあるの、と問いかけている。そんな気がした。
紫乃はゆっくりと首を振った。「全てを失ったから、もう…」
原木の木口を利用したテーブルの上には、紫乃が台所で見つけた卵と玉ねぎを使った玉子丼が二つ、手つかずのまま並んでいた。
「明日、歩いて買い出しに行こう。荷物の重さで大汗をかこう」そうでもしなければ自分がみじめすぎると思った。
この日の亜矢は紫乃を迎えるために大事な時間を犠牲にした。仕事の中身は知らない。ただ午後の煮詰まった過酷な仕事ぶりは、目の前の寝顔が物語っている。
堪えていた涙が突然許しも得ずに溢れ、紫乃の頬を伝いだした。
どれくらいベッドの端に腰かけていただろう。
「紫乃さん」という亜矢の声でハッと覚醒した。座ったまま半眠りだったのだ。
「ごめん、起こしちゃった」紫乃は反射的に謝った。
「ベッド、ここだけだから、一緒に並んで寝て。美佐にもそうしてもらってた」
亜矢は小柄だ。確かに二人でも眠れる広さはある。
「あなたの寝顔見てたら何だか幸せそうで、羨ましくなっちゃって」

「わたしが？」静かに聞き返した亜矢。
「打込むものがある人の人生って歳を重ねて一層輝くじゃない、だから」
　亜矢が身を起こして言った、「好きなもの見つけて自分を慰めてただけだよ。語弊覚悟で言えばわたしの場合、マスターベーション」
「自慰で芸術品を創っちゃうわけ？」
「芸術なんてわたしには無縁。今日やっと先生の作陶展に参加させてもらえた程度」
　やはり大事な日だったのかと、紫乃は心が痛んだ。
「でもそれ凄いじゃない、専門的なことは解からないけど」
「落語で言えば前座。展示の端っこに弟子のコーナーがあってね、そこに一点」
「人が感動するものを創る。そういうお仕事なんだから素敵よ」
「素敵かぁ、久しぶりに聞いたなぁ、その言葉。でも芸術品としての陶器を創っているのは薪の火、熱と炎だよ、私たち人間じゃない」
「そうなの」紫乃は子どもの目をして問い返した。
「確かに偶然が出やすい環境づくりは人間がするんだけど、それだけ」
　支配出来たらそれは偶然なのだろうか。紫乃は少し首を傾げた。
「あ。うちの先生の持論だから。これ請け売り」
「なんだ」とわざと口にしたら、二人で笑えた。
「ところで紫乃さん、ここを出たあと、どうするの」
　急に亜矢が直球を投げてきた。一番聞きたかったことなのかもしれない。
「美佐の話を聞くと、わたしなら自殺するしかない情況なんだけど」
　直球どころか紫乃の深層心理を突く剛速球だった。
「それも当然視野かな。でもね、予感がしてるの、昔三回も偶然に一緒になった男性と同窓の集いで会えるって。覚悟を決めるのはそれからにしようって」
「ちょっと少女趣味」と亜矢が紫乃の顔を覗き込ん

だ。
「わたしってね、結婚してからずっとだけど、少し先の楽しみを見つけて、それを張り合いとか支えにして生きてきたの。亜矢さんとは真逆かもね」
「今回はその偶然の彼氏が気持ちの支えなのね」
「うん、もう何にも残ってなくてね、火葬前なのに燃え残り」
「あ、それいただき！　作品のタイトルになりそう」
「嘘ぉ」と紫乃も笑顔で応じた。
「ねぇ食べよう、あの玉丼。お腹空いた、チンはあるのよ」
「うん使った」と笑い、「大丈夫かな、味の方」と動き出した。
「わたし、父に認知されたときから燃え残りだったんだ、じつは」
ベッドから下りて亜矢はテーブルの前に座った。
「そんな感じはあったわ。でも何にもしてあげられなかった」
「認知ってさ、わたしを産んだ女に精液を提供したのは俺だって認めただけの話じゃない。感謝はしたわよ、高校も大学も出してくれたし、紫乃さんたちと一緒に住まわせてくれたし」
電子レンジがチンと鳴った。紫乃は寡黙なはずの亜矢の独白を途切れるまで聞こうと思った。幸い食べるために少しは動いていて沈黙が許される。
「でも子種提供の責任はとってくれたけど、実は小桜家の子どもじゃなかった。とくに朱美おばさんはあからさまに差別してきた。みんな紫乃さんの方を見てた。わたしも眩しい目で九つ上の紫乃さんを見てた。その恵まれてたあなたが自殺さえ考えてここに居る。わたし轆轤の回転を見ながら考えちゃった。親って何、結婚していったい何、実の子どもっていうけど何なのって。家族って一体何なのって」
再びレンジが鳴いた。「できたわよ」と紫乃は笑顔をつくった。
「ごめんね、嫌味を言ったわけじゃないのよ、ほんとに疑問だったのよ」
侮辱や嫌味でないことは解かった。亜矢の目が潤

んでいたからだ。
　亜矢が発した疑問を現実のものとして感じているのが、何を隠そう紫乃だった。
「いただきます」と口に入れて自分ではマアマアの味だと思った、実は調味料の種類が極端に少なかったのだ。流しの横のゴミ箱を見ると、レトルト食品とインスタントラーメンの空き袋がたくさん詰まっていた。独りということで言えば自分も亜矢も同じなのかもしれない。紫乃はそう思った。
「おいしいよ、レトルトの玉丼よりずっといけるわ」亜矢の評価も良かった。
「ありがとう」東山家では何を作って出しても「おいしい」の声は無かった。
「ねえ、その意中の彼氏に会えなかったら」
「え？」
「死んだりしないで戻ってきて。わたし料理なんかできないから」
　うっかり涙が出そうになった。
「テレビでも映画でも主役は死なないものよ」と亜矢。その口元にご飯粒が一つくっついていた。
　紫乃はゆっくりとうなずいた。しかし持ち出した資金は十万円ほど、経済的にみればその金額を超える先というものは、紫乃にはなかった。
　亜矢が箸でご飯を掻き集めるようにして食べ終えた。
「明日スーパーで食材仕入れてくるね」と二つの丼を持ち上げたときだった。
「紫乃さんの分だけでいいよ」
　亜矢の目が一瞬吊り上がったように見えた。
　別に食材の少なさを皮肉ったわけではない。来て最初に口にした予定を確認しただけだ。紫乃は直感的に二人を含めた室内全体の空気が変わったと思った。
「明日、先生のお供で東京に行くの」
　ああそれでと、紫乃の力がフッと抜けた時だった。
「一週間かかるから、それまでここに居て、わたしが帰ってくるまでに出て行ってくれる」
　少し前に言ってくれた内容とは真逆ではないか。

紫乃はゆっくりと二度、目を瞬いた。心のどこかで、やっぱり、と声がした。

「これ大昔、朱美さんに言われた台詞なの。亜矢さん大学へ入ったらここを出て行ってね、きっとよって。高校三年生だった。どこかに下宿してなんて話じゃないのはすぐに分ったわ。学生になって寮に入って、いまの先生の処にアルバイトに来て衝撃を受けたから、必死で弟子入りを懇願したの。決まれば内弟子だから小桜の家に戻らないでも生きていける、そう思ってね。何度か抱かれもしたし、卒業まで足繁く通ってようやく認めてもらえた。私の人生を変えた朱美さんのひと言って訳。かつて家族じゃないと放り出された私の処に、家族の犠牲になって、壊れて逃げ出した紫乃さんが人生の最後に転がり込んできた」

胸を大きく広げて吐き出した言葉が、こうして結ばれる。

「悪いけどあの朱美さんの娘、紫乃さんに悔しさと感謝をぶつけることにする。今夜は仲良く寝ましょ、久しぶりにおいしいもの食べたわ」

そうなら美佐から誘われたとしても朱美の葬儀に来るわけがない。初めて聞く話だった。亜矢が知っている東山家での紫乃の歴史は、以前から美佐が話していたものだろう。明日亜矢が出発した後でここを出よう。紫乃は行くあてもないのにそう決めた。

「ありがとう、今夜は泊めてもらうわ」

亜矢の口元が小さく笑ったような気がした。

7

あけぼの荘はここ数日、三田村の紹介で来るひと月単位の客も含め十人ほど宿泊している。もちろんこの中に波城自身も入るのだが、計画通りに集客が出来たら、それはそれで問題が出てくる。宿泊施設としてのサービスの充実が求められてくる。洗顔、トイレ、シャワー設備などはよせられる苦情の上位だ。女将に言っても夫の奥山にと逃げられ、奥山社長もまた好発進は認めたものの、その継続性には懐

疑的で、経費を増やすことになる申し出には一切応じなかった。

七月七日の午後七時過ぎ、波城は唯一テレビのある部屋で、三十代と思しき男性客二人とニュースを視ていた。二人は七時半から視たい番組があるが、それまではどうぞと譲ってくれたので胸を張って視聴できたのだった。

「大岡川沿いの路上で起きた元中古車販売会社社長八子神利雄殺人事件で捜査本部は、現場に居て犯行を自供している元妻の村瀬伸子容疑者が犯行の動機について語った内容を公開しました。債務不履行で倒産寸前だった被害者が五月二十九日当時アルバイトで雇っていた老人から五十万円を無利子で借り受け、月末に迫っていた闇金融からの債務の高利を弁済できた。その直後販売目的で所有していた全ての軽自動車が大手の業者に買い取られたので、村瀬容疑者が善意で助けてくれた老人に全額返還するよう八子神社長に迫ったところ、お人好しに返す金は無いと言われて何度も殴られたため犯行の機会をうかがっていたとのことです。捜査本部としては、くだんの老人につき名前その他詳細な供述がないこと、また、凶器の包丁に容疑者の指紋が無かったことなどから引き続き事件の全容を解明したいとのことです」

「バイトが社長に五十万も金貸すってアニメかよ」

「そんなお人好しがいたらお目にかかりたいね、フェイクだろ、この女の話」

二人の客の反応を聞いて波城は腰を上げた。「ありがとう、もういいからお好きなチャンネルに回してください」

「どうも。ふざけたニュースですもんね、これ」とアニメと言った男性の方がチャンネルを切り替えた。

自分の部屋に戻って波城は、「このままでいいのか」と腕組みをした。

あの夫人は殴られた恨みを殺人で晴らすような女ではない。路上で包丁というのも変だ。一体彼女は何を隠しているのか。いや、何を護ろうとしてい

るのか。自分としての問題は、後半はともかく動機に繋がったとされる五十万云々の前半については彼女の供述を補強すべきではないかということだ。そこから辿り着ける真実もありそうだ。しかし自分の名前がマスコミに出る可能性が高いが、それでいいのか。波城は二者択一を迫られた。

利息だけで五十万、では元本はいくらだったのか。元本まで闇金融に要求されたとしたら、八子神は何を考えるだろう。例えば中古車の売却代金で何とか払えるというとき、かたくなに借りた金を波城に返せと訴える元妻に負け、五十万を控除して闇金融に元本を払おうとして逆鱗に触れた？　そうだとすれば彼女が、八子神が殺されたのは自分のせい、私が殺したのも同じと考えることは十分考えられる。一方で、凶行が闇金融の手でおこなわれたと供述したらどうなるか。彼女はその日から八子神のように殺されるという悪夢を毎日見ることになる。村瀬伸子もまた、ギリギリの二者択一を迫られているのかもしれない。

もう少しで「海の日」が来る。どうせそこで自分は終わる。

波城は自分の良心に従うことにした。

翌日捜査本部のある所轄署に出頭した波城は、「八子神事件の容疑者村瀬伸子さんに会わせていただけませんか」と、ちょうど二階から降りてきた中年の男二人に声を掛けた。もちろん彼らが刑事かどうかは知らない。

「誰だ、お前は、まあいい、ちょっと一緒に来い」と一人が言った。

凶器らしきものを所持していないか体をサッと確認された後、強烈な力で右手を引かれた。二階の突き当りの部屋に押されて入ると、後を追うようにしてもう一人の背広姿の男が入って来た。

「なぜ担当刑事だと分った」手を引っ張って来た男が訊いた。

もう一人の男がドアを背にして仁王立ちをしている。

「建物の中に入ってすぐに見つけた人、つまりあな

た方に聞いただけです」静かに応えた。
「名前は？　それと免許証を持っていたら出せ」質問するのは片方の男だけらしい。
「波城広志です」と素直に免許証を出して、手渡した。
「座れ」と免許証を見ながら椅子を引いた。もう一人はドアの処のままだ。
「容疑者の身内とか知り合いとか。要するに面会目的か」
「テレビ報道を見て来ました。伸子さんが容易に名前などを明かさない老人というのが私です」
「ほぉーお」
「確かに五十万は彼女を通して懇願され、八子神利雄が借金の支払いに使うと知りながら、彼女宛てに無利子無条件で貸しました」
「借金の相手は八子神ではなく伸子、そういう意味か」
「お察しの通りです」
「お互いに老人だ、色恋でもないだろうに、なぜそうした」
「面子があるからと自分では借りに来られず、彼女を殴って使いをさせたからです。そんなゲス野郎に貸す義理はありません」
「もう一つ良く分らんが。これ、コピーしろ」とドア側に立っている男に免許証を渡すと、続けて「結局八子神に金が渡る、使われる、戻らないとなると一緒だろ、実際」
「いえ。そのときは彼女に贈与したと考えて諦めがつきます。むしろそうなってしまう確率が高いと承知の上です」
「なるほど。誰が八子神を刺し殺したかは別にして、結局波城さんには金は返せない。そのことは変わらないとしてなぜ彼女は自分が殺したと自供したのか、そこに繋げろと言いたくて、あんたは出頭してきたってわけだ」
「ええ、推測にすぎませんが、真犯人は月末の高利を受け取っておきながら残り貸金の全部を弁済しろと迫った。ところが伸子さんの説得で五十万だけ

は私に返す気になってしまった」
「一旦残債の全部弁済を通知されていた奴らが激怒してということか…」
「このほかに伸子さんが自分で殺しても居ないのに、わたしがやったと言う理由が出てこないんです」
「いいだろう、上に了解をもらって容疑者に会わせてやる」
「ありがとうございます」と波城は深々と辞儀をした。
「ところで波城さん、いまは何をしているんだね」
刑事の口調が少しソフトになった。
「風来坊、だと思います」
急に刑事が笑い出したのと、もう一人が戻って来たのとが重なった。
「只野警部補、何か？」
「いや、失うのを覚悟で他人に五十万も貸す七十近い爺さんが風来坊だと。これが愉快でなくてどうする。しかも自分を騙した奴の片割れが冤罪にならないように、頼まれもしないのにのこのこ捜査本部に来るってどうだ、島野。何十年も警察に居るけどこんなお人好しな人間知らんわ」
波城も苦笑して頭を掻くしかなかった。
免許証を返してくれた刑事は、事情が呑み込めず「はぁ」と一つ吐いて瞬いた。
「しかしなぁ、波城さん。いまあなたが説明した中にはだ、あなたを真犯人だと推定する要素がかなり入ってる。このこと分かってるよね」
警部補の目つきは急に獣を追うような鋭さになった。
「ええ、それが解からないでここに来る私ではありません。どうぞ進めてください。でも、もっといい方法がありますよ、マスコミに伸子さんの容疑が晴れたと発表するんです。きっと真犯人は自分から名乗り出てくると思います」
「そうきたか。闇金融のさらに上の組織が動くというわけか」
「いえ、そこまでは言いませんが」
「島野、波城さんを取調室に案内して、一緒に待っ

ていろ。上に言って村瀬伸子と会わせる手続きをしてくる」
「はい、では、こちらへ」と島野という刑事が手招きをした。

取調室で村瀬伸子は、プレハブで最後に会ったときと同じような顔をして波城を見詰めている。
只野警部補はなぜか二人だけにした。もちろんマジックミラーで隣室から監視し、盗聴もしているだろうが、ある程度波城を信用しているのかもしれない。
「なぜ川沿いの路上なんです？　現場が。しかも凶器が包丁だなんて創られ過ぎてる気がしてね」のっけから正面突きで迫った。声は極力穏やかにしている。
「チンピラやくざの指定でした、あそこ、時間によっては案外人通りが少ないんです」
「ご夫婦で、いや失礼、八子神と一緒に行ったのはなぜなの？」
「わたしはしつこくあなたの分は先に返せと言い張って付きまとうようにして現場まで行ったんです」
「お金は元利合計払えるだけはあったってことですか」
「まずあなたの五十万で月末に迫った高利と延滞金は払ったんです。ところが軽を全部叩き売りしたことが中古車屋経由で金融業者に知れて、全部返せと迫られたんです。今後の弁済は不可能との判断でしょう。でも法律的には、あなたに全額返して、残ったお金で再起を図って、最初の契約通りに分割で奴らに返していく道もあったんです。その道こそ人の道です、とりあえず命が助かったんですから。無条件で危なっかしい相手に金を貸してくれたあなたに対する最低限の誠意です」
「でも返そうとしても、俺はお二人に居場所を知らせてないよ」
「実際にすぐ手渡せるかどうかは問題じゃないでしょ、あなたは必ず私たちを捜し出すと思っていま

した、そういう自信があるんだと。それにあなたが車を売りに来たときに八子神が車検証と免許証のコピーを取っています。ただ、今も住んでいるかどうかは疑問でしたけど」

波城はコピーの件はすっかり忘れていた。

「で、彼は現場であなたの言った弁済プランを口にした」

伸子の目が急に涙で膨らみ、次いでゆっくりとうなずいた。

「目の前で八子神が何度も刺されて仰向けに倒れ、チンピラは八子神のバッグを盗って逃げ出しました」

ほとんど推定通りだったが、波城は一番聞きたかったことを口にした。

「じゃ、なぜあなたが殺したと自供したんですか、すぐに救急車を呼んでいたら助かったかもしれないじゃないですか」

伸子は言う。血だらけの八子神に抱きつくようにして名前を連呼していたが、自分の中の悪魔がささやきだしたと。身勝手で暴力をふるい続けた元夫だ、自業自得、そのままにしておけと。離れて八子神の体から血が流れだすのを見ていたら、自分自身が恐ろしくなって呆けてしまったと。

「人の道なんか説かなければ、すぐ一一九番していれば、…結局わたしが殺したようなものです、だから」

その通りかもしれない。しかし波城は自分でも意外な言葉を口にした。

「嘘が隠れてる。これはあなたを批難して言うんじゃないけど。結局自分を護ろうとした。それだけですよね。人の道を説いたのは自分の良心が傷つくから、自分が犯人にならなければ、巡り巡ってヤクザに自分が殺されるから。あなたは八子神の、血まみれでのたうち回る姿を見て、恐怖におののいただけなんじゃないですか、理由は後付けのような気がするんですけど。もう楽な気持ちになったら？　伸子さん。少なくも八子神に渡った俺の金はいいよ、手渡すときにあなたへの贈与だと思っていたんだか

ら」

「ですからその優しさが、いえ、波城さんの、そのお人好し加減が罪なんですよ、こんな世の中じゃ…勘弁してくださいよ」

伸子がテーブルに突っ伏して泣き出した。

それは上半身が上下するほど激しいものだった。

翌日の午後、警察発表として村瀬伸子の容疑は晴れたとマスコミが報じた。さらに翌々日のテレビ報道によれば、組織の命令だったのかどうか、真犯人は所轄署に自首をしてきたという。組員ではないチンピラで、しかも十九歳の男だった。

解決したのはいいが、この事件は波城の日常を急変させることになった。

あけぼの荘の奥山社長が波城に「前家賃」の一部を返した上、「もうここには出入りしないでくれ」と言ってきたのだ。

「そりゃあね、波城さんが犯罪に直接関係してるなんてこれっぽっちも思わないよ。これでも人を見る目はある。だけどここは名ばかりとはいえ宿泊施設だ。警察に取り調べを受けた人に常時居られたんじゃあ、困るんだよ、近隣の眼もあるし」

「女将さんも同じ意見ですか」と思わず言ってしまった波城。すぐに臍を噛んだ。奥山のコンプレックスを刺激する最大のものだったからだ。

「徳子ぉ？　徳子が何だ、ここは先祖からずっと奥山のものだ。社長も俺だ。だいいちあんたは、ここをどうする気で自腹を切ってた？　ねらいは改善でも改装でもなく乗っ取りか。そうならスッキリと分かる。飾りはいろいろ持ってる、優れた知恵もあるだろう、だけどな、結局根無し草のフーテンだろ？　違うか、どうなんだ」

「そういうこと、ですか…なるほど」

フッと以前勤めていた会社の、事実上の解雇通告を思い出した。

「部長、解雇される本当の理由は何ですか。自慢めきますが、買い取り関係で利益を上げたランキング

では上位でしたよね。勤怠記録にも傷はないはずです。聞いたから法的に争うなんて恥さらしは絶対しませんから耳打ちしてくださいよ、後生だから」

波城には心当たりがあった。設立当初、数十年も前になるが会社はいわゆる原野商法で基盤をつくり、その後の発展を確かなものにした。一部社会問題化した際に時機を逃さず手を引き、健全な土地建物の買取業に転換して大きくなっていった。それなのにまた、形を変え規模を変えて同様の戦略を検討しているという。波城は支店幹部会で、この案に反対意見を述べたのだ、企業の社会的責任に反するのではないかと。

それが原因かと尋ねると部長は口を結んで首を縦に振った。口に出しては言えないということらしかった。

「波城、おまえ、反対する前に立案者が誰なのか調べなかったのか」

「…まさかＣＥＯ」

「そういうことだ」

もう何を言っても駄目だと思った。人の想うことは止められない。他人の性格も素養も同様に如何ともしがたい。

「立て替えてもらった金だが、あんたが勝手にやった分は返さないからな」

フッと口元で笑った。波城にとっては最初から想定内のことでもある。

「分りました。一時間以内に退去します」腹も立たなかった。

奥山が一瞬、瞬きをやめた。この男は恐る恐る物言いをするときは、しきりに瞬きをする癖があるのだ。基本的に御曹司なのだろう、気は小さい。なにしろ波城は警察の車で丁重に送られてきた不可解極まる男なのだ。多少ビクついていたに違いない。

波城は畳の上に剥き出しで置かれた返戻金を丁寧に拾って立ち上がった。

「お世話になりました」

海の日まであと何日も無い。当日に紫乃に会えな

ければ自分に始末をつける。四度目の奇跡が怒らなければ、もうほかに思い残すことはない。さてその日を待つ間、どこで何をしているかと波城は想いを巡らし、とりあえず三田村に連絡を取ることにした。村瀬伸子のこれからを見てやって欲しいと頼む都合もある。重要な証人なので、放免後の居場所はきっと警察が知っている。

8

いつもどおり鼓吹社の倉庫のような別室でだが、大久保編集長は小さく唸った。

「これ、事実か？　ドキュメンタリー小説ということか」

良治は右手で左肩を揉みながら下を向いた後で応えた。「自殺した本人の手記をベースにして再構成したもの。事実に基づいた記事と思ってもらっていい」

「ふむ。それで終わりに、働き盛りの孤立と高齢者の孤立の同質性を投げかけておいて、次号原稿に結びつけるわけか」

「その予定でいる」

「良治、入手先はどこだ、公表はしないが編集長としては知っておきたい」

良治は一瞬ためらった。これを言えば肉親ではなくなる。裏切った弟になる。それでも言うしかなかった。「失踪中の実の兄、波城広志」

「前に言っていた兄貴か。良治、まさか兄貴が手を掛けたとか、無いだろうな」

「あり得ない。自殺するとは知らずに一度だけ会話を交わして、これを託されてしまったとか。正直に言えば非公開が希望だった」

大久保の目が鋭く光った。

「それでも出すってか。君も変わったな、もしかしたらあの女のせいか」

「たぶん。失いたくないものができた。そんな感じかな」

「二人の生活の安定のために一念発起か。女ねぇ…」

「いけないか」なぜか自分で口を覆った。
「いや、世の中も人間も、まぁそんなもんだ。それを輪切りにして俺たちは食ってる」
「じゃ、採用ということで」
「ああ。実の兄貴より女ねぇ」と大久保は顎を撫でながら上目遣いで良治を見た。
「兄は我々肉親の如何に関わらず早晩自死してしまうので」
「ほんとなのかそれ。人間そう簡単に…」
「大久保さん、実は、兄はもう死んでる。あとは肉体的な死でそれを追いかけるだけ。彼はそういう男、インテリぶったぐらつきやすい長塚良治とは違う」
良治は、海の日が一つの境になると踏んでいた。
「しのちゃん」に同窓の集いで会えようが会えまいが、波城は思い残すことなく逝く。まるでその確認のためにさすらっていたかのように。
「よし、分った、言っておくがこの長文の記事は君の名において載せる。後日名誉毀損その他遺族からの抗議があったとしても、当社は君を護れないぞ。いいんだな」
「もとより承知だ。それにノートの著者自体、本籍、住所、氏名、生年月日その他本人を特定できるデータはどこにもない」
「つまり預けた方はすでに自殺、預けられた方は近々に自死。考えてみれば、空恐ろしい記事だな」
大久保は大袈裟に震えて見せた。
「さらに信頼されたはずの弟は裏切って金を得る」と良治は自嘲した。
「最初、兄貴絡みは無償と言ってたが、これは別口か？」
「悪いな、別にしてくれるか」
「まあいいよ。所詮、魑魅魍魎がうごめく社会だ、気にするな。たったいま君は、俺が密かに尊敬する対象から外れて近しい仲間になった。それだけのことだ」
大久保はうなずくと、良治の背中に手を当てて、ドアを開けた。
編集部の喧騒が一気に二人を取り巻いた。

9

亜矢のログハウスから滞在一日で都市部に戻った紫乃は、キャリーケースを駅のコインロッカーから引き出すと同窓会場からそう遠くないビジネスホテルで、とりあえず三連泊を申し込んだ。素泊まりで一泊当たり四千四百円だ。初日は午後三時にチェックインをしている。なぜこの場所なのか。同窓の集いの会場に近いからだった。

真っ先に、入館前に購入した布製バッグを広げ、キャリーケースから和の喪服セットを取り出して詰め込んだ。美佐の住所に宅配で送るためだった。結果的に亜矢との間を取り持ってもらったことは奏功しなかったのだが、皮肉でも何でもない、これを受け取れば全て事情が分かるはずだと踏んだのだ。今回のことで邪推はしない、恨みもしない、悪口も言わない。自分も亜矢も美佐も壊れかけの独りなのだ。だから根っこの処で最期まで信じていたい。そう思った。

次いで身に着けなくなって久しい結婚指輪を取り出し、ブランド品の買取店を探しに外出をした。今は質屋とは言わないらしい。電話帳で調べたら、それぞれモダンな名前が付いている。ジュエリーは素人だから店の言い値でいい。当面動ける資金は多くしておく必要があった。程度の低いプラチナリングに〇・三カラットのダイヤが付いている。最も距離が近いと思われる店で六万五千円になった。

その足で同窓の集いに参加する際の上下を揃えた。高いものは買えないがコーディネイトには気を配って靴も買ったので、この日手にしたお金は三万ほど消えた。残金は十一万円弱。紫乃は経済的にも覚悟を迫られている。いや、覚悟しているからできる買い物だった。

夜。商店街の中華の店で天津丼を食べて部屋に戻った。なぜ卵なのか。深夜の亜矢との食事を思い出したからだった。息もつかぬような速さで食べ終わると、薄っすらとだが涙目になった。睡眠不足と粗

食、いったいどれほどの年月続いたのか。紫乃は心身共にむしばまれてボロボロになっていた。

波城はあけぼの荘を出てすぐに貴重品を駅のコインロッカーから出し、同窓会場の所在地へと向かった。貴重品の中には亡くなった桑田次郎からの書類一式もある。ネットで調べてかなりの安宿を見つけてある。素泊まりで四千円、あけぼの荘と大差はない。ビジネスホテルに到着してから三連泊を希望した。それ以上泊まるには実際に宿泊して施設の程度をみなければという気持ちがあった。シングルベッドに小さなテーブルと椅子一脚、テレビはもちろん料金制だった。バスルームにシャワーはあったが、利用する気にはならなかった。最寄りの銭湯かスーパー銭湯をスマホで探そうと思った。

「いよいよ人生の大詰めだな」

波城は、ベッドで手足を伸ばし、なんの変哲もない白いビニールクロスの天井を見ながらそう思った。五月十日に家を出て都内の住所地を去ってからほぼ二か月、良治の忠告通り、老人が真っ直ぐに生きようとするには余りにも辛口の世間だった。それでも、と思う、「生きているという実感は十分すぎるほどあった」と。

あらゆる意味での疲れがドッと出て、波城はいつの間にか眠りに落ちた。

ただの高校時代の同窓の集いが複数の人間の人生や生活を左右するかもしれない。国民の祝日、七月十六日海の日がやって来た。

正規の開始時間は午後四時だが、年齢的にも暇な日を送っている人たちだけに、早々と会場の海ホテルさざなみ会館に来る者がかなりいた。ラウンジは海浜公園通りに面していて、人が通るたびに同窓生の誰それではと、当てるのを競うグループさえ出て来ている。

波城は、一人離れたところで通りを見ていた。朝から落ち着かなかった。何を着ていくのかで迷った。世間を彷徨っている身で正装など望めないし、そも

そもこの日の会の趣旨からすれば平服だろう。結局午前中に理髪店に行って髪を整え、無精ひげをきれいに処理するにとどめた。おしゃれをして効果のでる自分とも、今の生活とも思えない波城だった。

「もしかして波城君？　そうよね」と遠い昔に聞いた懐かしい声がした。

立ち上がるとゆっくりと声がした方へと顔を向けた。

「紫乃ちゃん」と名前を呼んだものの、しばし絶句した。白髪混じりで薄くなった髪、おでこの皺、削げた頬、細くなった首、痛ましいほどの変わりようだったのだ。それでもくっきりした目と、淡い紅を引いた唇にははっきりとした面影があった。ふわりと巻いたネッカチーフが齢を重ねた首の半ばを隠している。

「そんなに変わった？　わたし」と紫乃は自覚しているのに聞いた後で眼を丸くしている波城に小さく微笑んだ。予想はしていたものの、哀しさが自分の中で広がっていく。

「もう四十数年も経つからね、お互いに」

世辞を言い合うほど心の距離は離れていないだろうと波城は思った。自分も別人のように映っているはずだからだ。「元気だった？」と笑顔をつくると右手を差し出して座ろうと促した。

すると紫乃は、座るのではなく近づいて波城の右手を両手で包んだ。

「高校一年で偶然同じクラスになったとき、こうしてみんなの前で手を握ったの、憶えてる、波城君」

波城も、もちろん忘れたことはない。

「ああ、あのときは何かちょっと恥ずかしかった」と目の先にある他のテーブル周りを、わざと気にする仕草をした。

「ごめん、座ろ」と紫乃は手を放して椅子に腰かけた。

会話がというか、言葉遣いがすでに爺婆のものではない。青春時代のそれだった。

二人の「四度目」という言葉が期せずして重なった。七十年近い人生の中で、小学生、高校生、初め

ての会社員、そして高齢者でと実際に四回出会ったことになる。
「期待はしてたけど、どこかでもう無いかなって思ってたわ、わたし」
「同じ。きょうも逢えたらいいけど、逢えなくてもしかたないかなって感じで」
「この会合って、何十回もあったのに、不思議ね」
波城はむしろ避けてきた。人妻になった紫乃を見たくは無かったのだ。
「あれから、すぐ会社辞めたんだっけ」
「あれからの、あれって、あの夜だよね」
紫乃は波城の目を見詰めながらうなずいた。
「みんなの好奇の目が何となく疎ましくて辞表を出した。紫乃ちゃんは幸せになれたんだろ」
「全然、真逆よ」とすぐに否定したものの、それ以上に地獄だった過去を言い募れば、自分が醜くなるだけだと紫乃は思った。
「まさか離婚してたり？」
「そう最近も最近。九十二の母が他界したのをきっかけにね」
博行は自分のために、勝手に創ってでも離婚届をすぐに出したはず。紫乃の中ではすでに届は受理まで されていた。
「紫乃が我がまま言ったんでしょって、あのお母さん、亡くなったのか」
「へえ、憶えてたんだ、あのときの母の台詞」
「まあ、後でかなり長い間引きずってた」と波城は少しはにかんだ。
「認知症の気が出たあとでも、ううん、死ぬまで波城君とわたしが結婚するんだって思い続けてたわ、親戚中にあの夜のこと言いふらしたりしてた、不思議な母ね」
「じつはこっちも終わっていてね、離婚した。ご同様でごく最近」
「だからきょう出られた！」また二人の言葉がシンクロした。
良治の手紙で紫乃は知っていたが、ここでは手紙のことは口にすまいと思った。彼の弟はこの会合の

ことを知っている。もしかしたらどこかで二人を見詰めているのかも。そんな気がした。ただ、万一の場合に備えて「お兄さんは参加しました」という通知は、何らかの形で良治宛てに出そう決めた。つまりまだ無事だとの知らせを。

通りを見ていた数人が、二人の「合唱」に驚いてこちらを見ていた。

「きょうはどこに帰るの、紫乃ちゃんは」

「どこにも…」と俯いた。「波城君は？」

「こっちも同じ。いまこの時からの先は、これから考える」

二人はなぜか揃ってうなずいた。

そのとき「波城、もう来てたのかぁ」とラウンジの入口の方で声がした。

郊外のホームセンターで偶然出会った峰岸誠だった。近づいてくる。

波城と紫乃はまたうなずき合った。プライベートな話は後で、という意味だ。

レストランでの宴もたけなわを過ぎて女性を中心にパラパラと帰り始めた。本宴は午後五時からだったので二時間は優に経過している。その間波城と紫乃はずっと隣り合わせで座っていた。高校時代からカップルとして有名だったせいか、誰もが妙に納得していたようで、非難する者もからかう者もいなかった。二人は二人で回りを気にして二人の時間を犠牲にするという発想が無かった。参加を決めたのは二人とも最近だが、あの夜の別れから計算すれば四十五年近くも、心のどこかで再会することを願っていたのだから。

「トイレに行ってから外に出る」と紫乃に耳打ちすると波城は席を立った。

しばらくして紫乃も臨席の元級友に同様の耳打ちをした。彼女は「幹事にはあとで言っとくから」と、ウインクをしてうなずいてくれた。

波城がトイレで用を足していると峰岸が入ってきて並んだ。

「お前ら、相変わらずいいよな、これからラブホか」

と峰岸が左肘で脇を突いた。
「バカ、歳を考えろ。第一俺たち、一度もそういう関係になってないよ」
「うっそだろう、波城。それはない、そんなこと許せないよ」
「キスも無い」
肌は一部触れ合ったことがある、子どものころ、火事の中で。それだけだった。
「いまはさすがに歳だけど、あのころの紫乃ちゃんにキスもしないって、もはや犯罪だな、乙女侮辱罪」
「峰岸、ひっかかるよ、まっすぐ前を見ろ」
峰岸が言われた通り姿勢を戻した。放物線を忘れるとはよほど意外だったのだろう。
口にしてみて波城自身、なぜ何も無かったのだろうと、首を傾げた。
「これからも仲良くしろよな、波城」
出て行くときに、峰岸の温かい声が追いかけてきた。

公園の海側を二人で歩いた。ぼんやりとした港周りの景色が、暗くなるにつれて灯りたちの力を借りて明暗のはっきりとした、美しいものに変わっていく。
「思い出しちゃった、あの夜」
紫乃は公園内に入ってからずっと波城の右腕に腕を絡めていた。
「何を言おうとしてたの、紫乃ちゃんは、一緒に歩いていた間。着いた時のお母さんの言葉を聞いた帰り道、少し気になった」少しというのは見栄だ。
「少し、だったの？」紫乃が足を止めた。
「だって分からないだろ、君の結婚式の前夜だぞ」
「前夜ってことは、もう可能性が無いってことでしょ、わたしには」
実は波城、紫乃があの夜二人の想い出を創りたがっていたのは察知していた。だから、誘わなかった。結婚に至る事情は紫乃から聞いてはいたが、結婚式を挙げる前日に他の男と平気でセックスができる女って何だと、紫乃への疑問が生まれたのだ。相手

の男にしたら堪えられない行為だろう。同じ男としてそう思った。だから黙った。本音を言えば抱きたいに決まっている。式なんかやめろと言いたいに決まっている。だが、それが現実的なものでないことは明らかだった。だから歩いて送るだけにした。

何日か経って、あの日はきっと、性交しても妊娠しないと確信できる日だったのだろうと気が付いた。しかも母親はそれを承知で娘を応援していたのだ。なんという母子関係なのか。一時、身震いまでした。

「してもぜったい安全だったわけか」ついに口にした。

「バカね、その反対よ」と紫乃は前に回って波城の顔を見詰めた。

紫乃がそれほどの仕打ちをできる結婚相手とはどんな男なのか。退職後数か月した頃、偶然出会った経理課の女子事務員からその答えを聞いた。件の新郎は挙式後ひと月以上に亘って紫乃を家の中に軟禁したという。男の程度はそれだけで十分わかった。

「もうよそうあの日に遡るのは。告白しても抱き合っても、あのときの二人の事情は何一つ変わらなかったと思う」言い訳ではなく客観的にそうだった。

海からの生暖かい風が二人の間を通って行った。

「結婚できないっていう意味なら、そうね。でも、もしそれがあったら、その後の何に対してでも笑って耐えられたような気がする」

暗くなったからか、紫乃の目から大粒の涙が落ちるのを街灯の光を得て捉えた。思わず紫乃を抱きしめた波城。

まるでしがみつくような強い力で紫乃が応えた。

「もうずっと、一緒にいたい」

低めの岸壁で波が少し大き目な音を立ててはねた。

良治は、海の日の前日から二日の予定で会場の海ホテルに宿泊していた。

さらに変装をしてまでささなみ会館で波城と紫

乃の行動を注視していた。波城が失踪したころの良治なら、とっくに声を掛けて親しく話し、これからどうするのかと問い詰めることもできただろう。しかし信頼を裏切り、預かったノートを利用して金に換えた今となってはそれもできない。長い原稿が雑誌『鼓吹』に載るのはまだ先だが、波城がこの裏切りを知らなかったとしても、実兄の顔をまともに見ることはできなかった。

卑屈な想いで二人の後をつけている良治には、波城と小桜紫乃の長年月の空白を超えた逢瀬が、抱擁が、たとえようもなく綺麗なものに見えた、羨ましくもあった。午後十時二人が拾ったタクシーを別のタクシーで追いかけ、この日紫乃が泊っているホテルと波城が泊っているホテルを確認したあと、うしろめたさに堪えられず、海ホテルには戻らずに叶令子を呼び出し、ラブホテルで狂ったように女の体をむさぼった。良治の惨めさが増幅したのは言うまでもない。

翌十七日、良治は令子と別れた後、自分の記事の最終的な校閲のため鼓吹社を訪ねたので、波城と紫乃の動きを追うことはできなかった。いや正確には、これ以上関わりたくなくなった。苦しいからだ。自死に向かって進んでいる兄をやっと現実に見つけて、止めもしない、いや、顔を合わせることもできない。そんな自分に何が出来るというのか。

自分の住処に戻ると良治は、砂絵に連絡をとった。

「この報告で終わりにしよう」

砂絵が出る前に、口に出して自分自身にそう言い聞かせた。

「はい、砂絵です」

「おう、元気な声だな。兄貴は無事だ、少なくとも昨日の夜までは」

「何それ、どういうこと?」

「同窓の集いの海ホテルの前でタクシーに乗るのを見たんだ。街灯の灯だったけど、顔ははっきり確認した。すぐに別のタクシーで追いかけたけど見失った。今日のところはこの程度の報告しかできない」

嘘をつくしかなかった。生きていることを知らせる。それだけでも違うだろう。そう思った。
「パーティには参加したのね」
「間違いないよ。会場前に居たわけだから」
「紫乃さんは参加したのかな」
「そこまでは摑めない。確認できたのは兄貴一人だった」
こんな嘘が何になる。喉が渇いた。
「じゃ、また、連絡する」この件ではもうしないつもりで切った。間際に砂絵が何か言ったような気がした。
這うようにして冷蔵庫の前に行き、庫内の缶ビールを取り出した。扉を閉めると、そのまま寄りかかってガブ飲みをした。口から溢れた冷たいものが喉を伝って胸に達した。「これで名実ともに俺は独り」と、良治は苦い口で言ってみた。

五　散華

1

七月十八日、波城はビジネスホテルを出ると、フロント係に聞いたとおりの最寄りの営業所で乗り捨てタイプのレンタカーを借りた。何のことはない紫乃が泊まったホテルは直線にして一キロも離れていない。時刻を打ち合わせていたので、チェックアウトした紫乃をすぐに拾った。
「暮らすのに最低限必要なものは途中で買う。物件のある現地まで真っ直ぐに向かうからね」
「途中まで妹の亜矢の処へいくのとルートが同じだわ、そこ」
紫乃はまた亜矢のことを思った。最後に会った身内になるからだ。父親だけが同じという妹。どんな器を焼いているのか。観てみたかったと今にして思う。
「いい温泉地でもあるんだよ」
「おととい聞いた話、本当なら不思議。いまどきそんなおとぎ話があるとはねぇ」

「着いたら関係書類も見せるよ、でも移転登記して自分のものにしようなんて考えてないんだ。いまは、亡くなった桑田さんが二人のために一時的にくつろぎの場所を貸してくれた。そんなふうに考えることにしてる」波城の本音だった。
「わかった。大丈夫。信じて付いてく」
車は大きな国道に入った。
「ねえ…」と波城は気になることを確かめようと決めた。「健康診断、どこのでもいいけど、いまも受けてる？」
質問の意味はすぐに分かったが、紫乃はしばらく黙って前を向いたままでいた。
「二人だけだから大丈夫だよ。酷く痩せているので心配になったんだ、ほかの意味はないよ」
「経理やってたあの会社の定期健診が最後だわ」
健康診断無しの月日が四十年を優に超えている。エックス線撮影はもちろんしていない。紫乃はその間自分の健康を気遣う余裕すらなかった。
「俺は意外に医者通いをしてるけどいまは糖尿病だけ。でも自覚症状としては老いてあちこちボロボロだけどね」
「わたしは自分の体がどうなっているか、まったく分からないわ。でも今はもう、どうでもいいの。どうにもならないでしょ、あっちこっち傷んでいても」すでに喀血もしている。
「二人を最初に結びつけたのも病気だったしね、それほど嫌ってないかな、俺も」
もう聞かなくてもいいことだと、波城は考え直した。
「俺って自分のこと、いつから？」
「ははは、峰岸にも同じこと聞かれたよ。僕はシモべって読むだろ、もう誰の僕にもなりたくないんだ、だからごく最近だけど、使わなくなった」
「そうなんだ。わたしもかあさんのお陰でやっと東山家の奴隷から解放されたんだけど、わたしはわたしだわ、抜け出せない」と肩をすぼめた。
「じゃ、わたしをやめて、自分のことを紫乃って言ったらどうだ？」

「紫乃、お腹空いたぁみたいに?」と言って笑った、「子どもみたいねぇ」と。

「いいんじゃないか、子どもみたいでも、これから二人きりだし」

紫乃は波城には分らない程度で小さくうなずいた。こうして二人で車の中に居ること自体が信じられないことだった。

「二人きり…不思議ね、もう終わるころに叶うなんて」

紫乃も、波城が自死の機会探しの旅をしていることを知っている。良治の手紙によれば、それは哲学的な死なのだそうな。

「そう終わる、ほんとだね」この後言葉が続かなかった波城。このままなら、もう少し生きてみたいと揺れ始めた自分がいる。

桑田次郎の家に着くと預かっていた荷物の中から鍵を取り出して差し込んだ。波城は動作を止め、万一これで開かなければ、どこかガラスを割るしかないと思った。

カチャッと音がして開いたときは心底ほっとした。前回訪れた時は中まで入っていなかったのだ。新しい何かが始まる、そんな気がした。

驚いたことに内部は、そのまま売りに出せるほど綺麗だった。いわゆる居抜きに近い家具の配置だ。薄っすらと白い埃が見える場所もあるが、それは桑田がここを出てからの月日の長さのせいで、彼自身の何物をも傷つけない。

紫乃が窓という窓を開け放った。雑木林の中をくぐって来た風が部屋の壁や建具を撫でて反対側の窓から出て行く。

はたきは紫乃が担当し、後を追うように箒で波城が掃き出しにかかった。巻き上がった細かな埃を外に追い出すのは入り込んだ風の役割りになる。個人的な必需品はそれぞれが昨日買い揃え、共通の物は途中、国道沿いのホームセンターで購入してきたのだ。

処分されずに残っていた二組の寝具には、真新しい掛布団カバー、毛布カバー、ピロケースが紫乃に

よって施された。電気、ガス、水道の点検とバスルームの水洗は波城の担当だ。
二時間ほどかかったろうか、二人は雑木林側の縁に腰かけ、買ってきた食品の中からペットボトルのお茶を出して喉を潤した。
「ほんとに夢を見ているみたい。ドラマでもこんな急展開無いかも」
集いの会で見た時よりも頬に赤みが差していて紫乃が少しだけ若返った。
「ここプロパンだから操作して風呂を沸かせるようにしてみるよ。明日車返すとき業者に立ち寄って正式に利用再開を告げてくる」
「無理しないで、今晩ぐらいお風呂なくても」
「そうだけどね、水洗トイレ使う前にたくさん水を使いたいんだ、トイレのロータンクにはストレーナがあるからゴミで詰まらないように」
「そういえば不動産会社だったわね、二人とも」
「あ、そうそう。経理課の紫乃ちゃんに説教されたことある」
「説教？」
「財形貯蓄とかなんとか盛んな頃でさ、ほかにも計画的に貯金しなさいよって」
「うっそー、そんな偉そうに？」
「言ったって、まるで主婦みたいな怖い顔でさ」
「二十四で主婦かぁ…」紫乃は急に黙った。
波城は雑草の中に下り、落ちていた粗朶を拾って林の方へ投げた。
「結婚したかったなぁ、貯金なんかどうでもいいから、あのころにさ」と紫乃。
「だから無理だった…」波城が抗議でもするようにドスンと縁側に座った。
「そうだけど。紫乃は勇気が無かった、親の言いなりなんていつの時代の話だって」
「ほら、わたしって言うより可愛いよ、その使い方の方が」
「バカ、六十八だわ、その可愛い紫乃は。古来希なりまであと少しの老婆よ」
「勇気が無かったのは俺だよ、かっさらって、こん

なふうに紫乃と道行きすればよかったんだ。先のことなんて誰だって分からないんだから」
「道行きって、それこそいつの時代に生きてるの、君は。浄瑠璃でしょ？　それ」
「うん、心中ものだね、多くの場合」
二人の間を少しだけ疾い風が吹き抜けた。
「咲きつつも何やら花のさびしきは散りなんあとをおもう心か。心中ってこの先にあるのかもしれないな」
「まさか、紫乃ちゃんの創作じゃないよね」
「江戸初期の吉野太夫だったかな、あれ、安土桃山かな？　それともう、紫乃でいいよ、紫乃ちゃんと呼ばれたぴちぴちの時代は遥か遠くだから」
「照れるな」
「どうして」
「夫婦みたいじゃん、ふつうに」
「いやなの？」
「まさか。じゃ、紫乃、続きをやってしまおうか、もうすぐ夕方だ」
「はーい、わたしは拭き掃除専門です、ほかはよろしく」
「誰か前を通ったらびっくりするだろうな、きっと」
前回来た時も近所の人が通った。波城は「それもいいかな」と動き出した。
コンビニ弁当中心の夕食前に、違法なのかもしれないが何とかいじってガス風呂を沸かした。
「紫乃、先に入れよ」
「旦那様が先でしょ、ふつう」
「そ、そうか…じゃ先に」波城は嬉しそうに脱衣室に入った。別荘タイプだが、かなり建物はきちんと造られていた。脱衣室は独立していて、洗濯機などは置いた形跡もない。奥の壁には姿見が埋め込まれていた。若い頃なら一回りして体を点検しただろう。いまの自分では直視に堪えない。
湯加減は良かった。浴槽はゆったりとしていて尻を落とし両足を真っ直ぐに伸ばせる。小さな子どもでもいれば一緒に入れる広さだ。洗い場も浴槽面積以上の広さがある。しっかりと温まったころ、洗い

場で垢を落とし始めた。年寄りのことだ、新陳代謝は盛んではない。本来ならほとんど垢などでないはずだが、この日は違った。

「広志、入るわよ」と紫乃が脱衣場に来た。気持ちだけは「新婚」もどきだったが、まさか入浴まで一緒とは思わなかった。照れくさいので浴槽の方を見て泡立てていると、紫乃が後ろに来た。

「背中流すわ。たぶん、背中だけは何年も垢落としてないでしょ」

紫乃は着衣のままだった。当たり前なのだが、波城は少し残念に思った。

「石鹸は流しますよー、固絞りのタオルでゴシゴシいくからねぇ」

さすがに垢が落ちる音はしないが、背中の皮が剥けるような強さで擦られた。

「けっこう力あるんだね」

「そのかわり持久力が無いの。すぐ疲れちゃって咳き込むし」

「もっと手抜きしていいから」と顔をしかめた。痛いのだ。

その言葉に気を悪くしたのか、手が止まり、波城がそばに置いておいた洗面器を取ってお湯を背中に流した。紫乃の指先が肩を優しく撫ぜている。

「どうしたの？」

「これ、あの時の火傷の痕ね、もう半世紀以上経っているのに、ずっと波城君は背負ってたんだ…」

紫乃の両手が前に来て、後ろから抱かれる形になった。

「ごめん。いまさらだけど、ありがとう」

紫乃の唇が肩の傷痕に触れるのが解かった。

「ありがと…」また言った。

紫乃が落とした涙が波城の肩まで届く。その音が聞こえるような気がした。

波城は感動で心ごと小さく震えた。

2

翌日、軽い朝食をとった後で波城は、レンタカー

の系列営業所へ車を返すべく八時に家を出た。着いたその日に返しに行くことも出来たが、それでは到着早々見も知らぬ家で独りぽつんと紫乃に居てくれと頼むことになる。かといって一緒に連れて行けば疲れを増幅させることになる。そんなことを考えてのことだった。

「じゃ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

どこの家でも毎朝繰り返されているだろうやり取りなのだが、波城も紫乃も新鮮な気持ちになれた。それぞれが特別な想いの中で嬉しさに浸った。

昨夜はシングルの敷布団を二つピタリと付け、並んで床に就いた。紫乃がそうして欲しいと頼んだのだ。一度も男と女の関係にならなかった二人。床を同じに出来たときはすでに性別を超えた人間の領域に入っていた。

それでもきつく抱きしめキスをしてくれた波城。紫乃は大きな安らぎの中で眠りに落ちることができた。

紫乃は、それぞれが自由に動き回る日と決めた十七日に婚家の所在地に向かい、所轄戸籍役場で離婚が成立しているかどうかを確認した。やはり博行は、紫乃が家を出た三日後には届け出を済ませていた。特別な感情は無い。想定内だった。証人二名は娘の佳乃と博行の妹美佐だろう。美佐は当然承知してくれたに違いない。紫乃の代わりに「自署」をしたのは間違いなく長女ひろみだ。紫乃の字に一番似ているからだ。法的には偽造で犯罪だが、東山の家は常に無法地帯だ。気にもしないだろう。そんなことを想った。

離婚成立の確認、同じことを波城が考えていたとしたら、ふとそんなことを思った。少しためらったが、それでも振り切って波城のバックパックを開けてみた。昨日は故桑田次郎がこの家を生前波城に贈与していた証拠書類を二人して確認した。そのとき他にも何か複数の文書があった様な気がしたのだ。これから一緒に住むとしたら一番大事なことでもある。

やはり十七日発行の戸籍謄本があった。波城広志と邦子は当日付けでは夫婦のままだった。もちろん受理されていても戸籍事務が遅れることはあるだろう。でもそうなら、不動産会社で当時調査もしていた波城なら離婚届の受理証明を求めるはずだ。それもここに無いとすると、波城が残した離婚届を見た妻が、まだ受ける意思を固めていない。そう解釈できる。波城が嘘を言うタイプではないと信じれば信じるほど、妻邦子のためらいが、紫乃の胸に重くのしかかって来た。彼の中だけで決着がついている。客観的にはそれだけのこと…。紫乃は、そのほかの未知の書類は見ずに全てをバックパックに戻した。

「…ここで一緒に住むとしたら？」

自分で、心の中で使った言葉に、紫乃はつまずいた。

ほとんど一銭も残っていないのに等しい。何が生活なのだ、どう生活するというのだ。一個の人間として波城と対等に接し合うならば、自分一人でも生きられる力が不可欠だろう。もし彼に頼るだけだとしたら、自分は彼の足手まといになるだけなのだ。そう思った。フッと美佐や亜矢の顔が浮かんだ。もう誰にも迷惑をかけたくなかった。

テーブルの上のコーヒーの空き缶を二つ手にして流しに立った。蛇口をひねって缶の中を水洗した。

「ふふっ、分別処理のこと考えてる、こんなときに」

缶を二つシンクの中で転がしてみた。バラバラに転がしても必ず二つはくっついた。何回試してもそうだった。「あはは、不思議…」小さく笑った。それなのになぜか目に涙が溜まって来た。

掌で涙を拭うと紫乃は、入り口のドアと縁側に続くサッシ戸を除くすべての開口部を開け放った。敷布団だけでも窓から下げて日光に晒したかったのだ。

二枚目の敷布団干しを済ませ、八畳の和室に戻ったときだった。胸の中から何かが押し上げられるような感覚がして、同時に畳の上に倒れた。

ゴボッと鈍い音がして血を吐いた。鮮血だ、垂れた血は真っ赤だった。「やっぱりだ」と言葉にしよう

としたが、こみ上げてくる、より大きな動きを感じて仰向けになった。心ではなく体が悩みを解決しようとしている。そう感じた。

肺からくると分っていながら横向きや下向きに姿勢を直すことはしなかった。「ありがとう、波城君、先に行くね」爆発しそうな胸の中でそう言った。おおきな血の波が口の中に押し寄せた。口を閉じ、敢えて血が外に出るのを止めた紫乃。苦しさにゴホゴホと血を含んだままに咳き込んだ。

タクシーに乗って来て、大荷物を抱えた波城が玄関前に立ったのは午後一時だった。新聞紙大のポリ袋が三つ。電気釜が入った四角い箱まである。昼はまた弁当だが、これは仕方がない。料理が可能になるのは夕食からだ。

ドアを開けて荷を上り框の先に並べた時に気づいた。それは異様な臭いだった。

「紫乃、遅くなってごめん。おーい、紫乃、紫乃ちゃん」

少しおどけた感じで戸襖を開けた波城は衝撃を受けて固まった。

「なに、紫乃、何だよ、何だよー！」

顔の周りを血だらけにして倒れている紫乃。死んだ瞳で見ているのは天井だった。

紫乃に寄っていって心肺を確かめるまでも無かった。死後何時間か経っている。波城は素人ながらそう思った。

バックパックに走り寄り桑田関係の書類を引き出して見ながらスマホを操作した。まだ現場の住所すらよく憶えていない。まず救急、次いで警察に緊急連絡をした。

頭がまともに動かない。窓から誰でも入れる。まさか事件？　いや自殺？　疑った上で、いや違うとようやく冷静さが戻った。

離れたところに少なめな鮮血、口から溢れて顔を染めているのも鮮血、ただ口からの血にはほんの少しだが変色した血が混じっている。いずれにしても喀血だと思った。消化器からの吐血ならもっと暗い

赤だ。
「再発と悪化だ。ここまで放っておいたなんて…」
先に着いたのは消防署の救急車。救急隊員が紫乃の心肺停止を確認した。本来なら死亡した人間に救急は要らない。それでも医療の人に確認してほしかった。
次いで警察の車が二台着き、数人が中に入って来た。
救急隊員の話を聞くと、警察によってすぐに現場の保存が図られた。紫乃は異状死体なのだ。
「あなたは？」と年配の刑事が寄って来た。波城の後ろにも一人立っている。
「きのうからここに居る同居人です。結婚、するはずでした。買い物に行って帰宅したらこの状態で。連絡したのは私です」
フラッシュがたかれている紫乃の遺体が、刑事の向こう側に見える。警察への通報では死んでいる旨をそのまま伝えたのだった。
波城の目は堪えきれずに涙を溢れさせた。

3

「砂絵、ちょっと来い、速く！」
アパートの和室で邦子とテレビを視ていた孝之が、キッチンで洗い物をしている砂絵を呼んだ。いつもの低い落ち着いた声ではなかった。
「何よ、びっくりするじゃない」と部屋に入った砂絵は、ドスンと両膝を突いた。夕方五時のニュースショーに父親の顔が映っていたのだ。
「もっと音、大きくして」と邦子が顔を歪めた。
「…今日午後一時過ぎに血まみれの心肺停止状態で発見された小桜紫乃さん六十八歳の死亡が確認されました。現場から通報をして来た自称婚約者の波城広志六十九歳は、所轄警察の捜査員によって死体遺棄の容疑で身柄を確保されています。現場での取材によりますと、波城容疑者は犯行を全面否認しており引き続き取り調べ中、被害者小桜さんは死体検案中で、司法解剖になるかどうかは未定です、言

うまでもありませんが、現場は立ち入り禁止となっています。詳細が分かり次第この番組内でお送りします。ここまでは現場記者からの第一報です」
「何かの間違いだよ、オヤジは人殺しなんて絶対無理。第一否認してる」と砂絵。
「ねえ、婚約者って何なの、砂絵、小桜さんて誰、何か知ってるんでしょ？　良治さんと連絡を取り合ってるんだから」
「オヤジが横浜の同窓会に参加したことまでは聞いてるけど」
「さっきからその話でしょ、そもそも今日集まったのもそれ。そのほかにってこと！」
「砂絵、一緒に居たのか同窓会場に、その紫乃さんも」
「オヤジ一人だったって、あと、タクシーを追いきれなくて見失ったとか言ってた」
「だから紫乃さんて誰！」
「小学校時代からの女友だち、でいいと思う」と砂絵が小声で言った。
「遺体の傍に居た。通報もした。第一発見者を疑うのは捜査の鉄則だから、それで取り調べるってことだろう、それにしてもこの段階で名前出すかなぁ、信じられない、無罪の推定どこ吹く風だな」
「名前出たら最後、それこそ根掘り葉掘り，有る事無いこと血祭りよ、マスコミに」
「ここにも来るの、ワイドショー」
「かあさん、応対しちゃだめだよ、絶対」と孝之が邦子を指差して言った。
「出ないわよ、電話にも。顔なんか出すもんですか」
「ちょっと待って」と砂絵が急に眉をひそめた。「ニュース、小桜紫乃って言ったわよね、紫乃さんの姓は東山のはずじゃない？」
「でも警察の発表みたいだよな」
「離婚してるんだ、婚姻前の氏に戻る旨の届出」と砂絵がうなずく。
「さすが、ごく最近の経験者だ」と孝之がからかった。砂絵も富永と離婚して復氏している。
邦子が難しそうな顔で首を傾げた。

「でも紫乃さんが独身でオヤジもいまは独身。それはいいんじゃない」と砂絵。
「かあさん、オヤジからの離婚届、出してるよね、役場に」
邦子は首をすくめたあとで、明確に横に振った。
「ええっ、じゃ、オヤジは殺人容疑をかけられた上に不倫かよ」
「なぜなの、かあさん」
「だって、離婚しちゃったら広志が病気になったって死んだって、引き取れなくなっちゃうじゃないの、それだけ。そんな女がいたこと、知らないもの」
砂絵も孝之も全然予想していなかったわけではない。波城が家を出て行ったことに対して、邦子に怒りが無かったからだ。
「まずいな、オヤジは独身になったと思ってる。戸籍なんてマスコミが調べればすぐ分かる。警察を含めた世間というものをおちょくったことになってしまう」
「いい、わたし警察に行ってくる」砂絵が急に立ち上がった。
「行ったって会えないよ、捜査中、取り調べ中だろ。第一何でお前なんだよ」
「かあさんは心理的に無理だし、タカは仕事忙しいし」
「分った、それなら承知する。ただし良治さんに相談してからにしろ。面会っていったってタイミングがあるんだ」
そう言われても砂絵は、良治の心変わり的な変化を感じていた。もう信じきれない部分がある。第六感でしかないのだが。

4

良治は報道で事件を知ってすぐに、満良会仲間として紹介された高倉信義弁護士に電話を掛けた。まだ若い居候弁護士だが、そこは仕方がない。高倉は事件を報道で知っていたので、容疑者が自分の実兄であることを告げて、協力を求めた。紫乃との関係

も、波城からの情報で知る限りのことは話した。
「概要は分りました。所轄署に出向いて直接様子を見て来ますが、人脈があるうちの先生に電話を入れてもらうことにします」
「お願いします。兄に人殺しはできません。ましてや小桜紫乃さんは子供時代から無二の親友、共通の病歴があって療養所学校でも一緒でした」
恋人でも愛人でもない、親友だと良治は解釈していた。
「病歴？　と言いますと」
「昭和二十年代の肺結核。十一歳のときに要注意も解除され、治っています」
「二人とも？」
「二人ともです」
「だとすると、大量の血は喀血と考えられますね、故人がその後再発していたりして」
「兄の方は最近の調査でも再発はしていませんけどね。彼女の方は知りません」波城のパソコンを精査して得た検査結果だった。
「念のため、この前一緒に飲んだ御厨先生にも電話を入れておいてくれますか。調査から刑事弁護にまで発展したとすると医師の協力が欲しいので」
「わかりました。このあとすぐに」
「ところで、言い難いんですけど、手弁当だとしても二十万はいただくことになります。そうでないと動けないんです、現在居る事務所の規則でして」
「当然です、先払いですか」貯金はいくらか増えて七十万はある。明日中に振り込めと言われても大丈夫だ。良治は頭の中で確認を済ませた。
「経理と相談しますから、明日以降連絡がいくと思います。僕は明日の朝一番で現地へ向かいます、もちろん入金確認は二の次で、あなたを信じてますから」
「ありがとうございます」良治はスマホに向かって頭を下げた。
「この後ですぐ法律事務所宛てにメールを入れてください。事案の概要。依頼の種類。良治さんの住所、電話番号。あ、僕は名刺をもらっていますが、

一応事務所に明確な形で依頼するということです。事案説明の小桜紫乃さんと波城広志さんも同様ですが、記載の住所は住民登録地のものでお願いします。とりあえずよろしく」

「承知しました」

引き続き掛けた電話では、御厨忠男医師が「肺からの大量喀血で窒息死というのはあるよ」と詳しく解説をしてくれた。

「絶対それが原因だ、殺しじゃない」良治は声に出して言った。

5

「離婚まで考えての実家行きか、はっきりしろ」と、孝之は玄関先で郁美の腕を左手で押さえて目を据えた。

郁美のスカートを両手で摑んで六歳の美穂が孝之を見上げている。おびえているようにも見えた。

「もうたくさんなのよ、お義父さんの家出、お義母さんとの離婚騒動、砂絵さんの離婚、それで今度は何！　放浪の挙句に老女を殺した容疑って何、血まみれの遺体だって、一体どういう家系なのよ、冗談じゃないわよ、恥さらし、ほんとにみっともない」

孝之が郁美の口を右手で挟んだ。

郁美の目が大きく膨らんだ。何か言おうともがいている。

「だまれ、それ以上は言うな。世間が何と言おうと確証がないうちは信じようとする集団が家族だ。お前は、もうだいぶ前から家族じゃない、世間以上に波城の家に敵対している。美穂も洗脳した。この子が僕を見る目で解かる。止めてわるかった。もう何を言おうと構わない、好きなようにしろ、出て行け、お前の言う恥さらしの家から」

そう言うと孝之は、両方の手を郁美の体からゆっくりと離した。

「ありがと、これでまともになれるわ」郁美が手の甲で口を拭った。

「内輪で済む話を、世間に何度もばらまいてたのを

知らないとでも思うのか、郁美。まともじゃないのはお前の方だ」
「パパ、美穂ねぇ、ここのほうが…」と続けて何か言いかけた。
郁美が美穂を押し出すようにして外に出た。
「わたし弁護士付けるから」
「好きにしろ。何度も言わせるな」
玄関のドアが、罵り合いをいさめるかのように、静かに閉じた。
音を立てて尻を床に落とすと孝之は、両手で髪を掻き毟った。
「あ、美穂」慌ててドアに飛びつくと、勢いよくノブを引いた。
すでに二人の姿は無かった。美穂はたしか、何かを訴えようとしていた。まだ追いつけると思ったが孝之は追いかけようとはしなかった。いや、出来なかった。
「オヤジ、もしかしてこれが狙いかよ、自分が無視された復讐かよ、知性に基づく覚悟の自死じゃなかったのかよ」

6

小高い丘の上にある警察署を出るとパトカーで来た時には気づかなかったが、家並みの向こうに海の青が見えたので、方角だけを頼りにひたすら前を向いて歩いていたら防波堤の根元に近い場所に辿り着いた。決して大きくはない漁船が岸壁に尻を向けてだいぶ先まで並んでいる。人影はなく、たまたまなのかは分からないが防波堤の先端に至るまで釣り人も居なかった。
「ここでもいいな」とそんな気がした。「彼、大河内君と同じなら、ここで偶然俺みたいな誰かに出遭うはずだな」と芝居じみた動きでもう一度周囲を見渡してみて、小さく笑った。
自分の家から去って行こうと決めた日からこの日まで、いくつもの人の死に直接間接に関わってきた。病院の屋上から身投げをした問題の土地建物の

売主飯坂寿郎、その彼に事実上殺されていた妻恵美子、川に入水し自死を遂げた青年大河内玄、病院で死に至った放浪の人桑田次郎、チンピラに刺殺された中古車販売の社長八子神利雄、それでも大きくは心動かされずにいた。自分の心が冷めたいからではないと、いまでもそう思う。自分もその場所へ行くために彷徨っていたからだと。目指す場所に先に辿り着いた人を本気で哀しむ勇気が無かっただけなのだ。哀しめば自分の行く道を否定することになるからだ。

その勝手な思い込みを責めるかのようにして、喀血を機に自死を選んだ紫乃、これでも波城君は哀しみませんかと。

「彼らの死と紫乃の死は一緒じゃない」

波城は防波堤を背にして紫乃の最期の場所へと歩を進めた。

畳に染み込んだ血の痕は既にシミの程度にしか残っていなかった。時を置かずして消毒されたのに違いない。まるで冒険でもするような気持ちで初めてこの家の中に踏み込んだ時とほとんど変わっていなかった。買って来た荷物も戻されてそこにあった。がらんとした景色の中で足りないものは一つだけ、紫乃の姿がそれだった。

トイレのドアを開け、浴室の中を覗き、雑木林側のサッシ戸を引いて縁側に出てみた。母親を探す幼児のような確認の仕方に、自分で自分を笑い飛ばした。こんな時にも笑顔になれるのはなぜだろう。答えを知っている波城は無意識にうなずいていた。もう一度会える場所は一つ、そこに至る途も一つだ。

中に戻ってキッチンのシンクを見た。空き缶が二つ中央で仲良く並んでいる。中を水で濯いだのだろう、もう分別収集に気が廻っていたのかと思ったとたん、目が潤むのを感じた。それが意味するものは、二人の日常的な暮しだからだ。二缶とも右の手指で取り上げたとたん落としてしまった波城。一旦別れた缶はすぐさま転がって中央部で引っ付いた。

「紫乃、大丈夫だ、警察を出たときにもう決めてるよ」と心の中で言って、一つだけ缶を指で突いた。

本当は誰にも迷惑が掛からない方法で逝きたかったのだが、どこでどう死んでもそれは不可能だろう。内輪で済む場所はここしかない。故桑田次郎のお陰で二人の共通の場を得た。心中となると、多くの場合どちらかが先に手を下すという哀しい作業が要るが、紫乃の病死はそれさえも避けてくれたことになる。

波城はホームセンターで仮設の物干し用に買って来たロープをポリ袋から取り出し畳の上に投げた。眼は押入れの方を見ている。

メモをしたためた。遺したい言葉は家を出る際に書いている。すでに事実上死んだあの日に帰っていまさら何を書くというのか。自死だと語る一言で足りた。

次いでトイレで用を足し、浴室に移りシャワーホースを使って体中を洗った。遺体は出来るだけ醜くしたくなかった。だからだろう、その動きに淀みは無かった。

小さな目的を持った放浪の果てに、まだ少しは人のためになれる自分だと確認が出来た。さらにあろうことか時機を逃さず紫乃が身をもって導いてくれた。波城は、これ以上は無いという落ち着きの中で、実行の「いま」の意義を噛み締めている。

7

「良治さん、お待たせ」

高倉弁護士が襖を開けて入って来た。

良治はあえてすぐに弁護士の後を追うことはせずに、高倉が出張した翌々日に現地に入った。報道に接した当日の夜、砂絵から連絡が入っていたので現地で待ち合わせることにしたのだった。姓が違う弟である自分よりも波城の娘という直系血族がいた方が警察相手で有効だという事情もある。もろもろ調査中の高倉と電話で打ち合わせたところ、本署に近い川沿いのホテルに泊まって動き回る基地にしているという。二人がすぐに同じホテルに入った所以だ。

「え？　こちらの方は…」
　障子の先のサッシ窓から外を見ていた砂絵が振り返ってお辞儀をした。
「波城広志の娘で波城砂絵と申します。この度は大変お世話になりまして」
「ほほっ、これは、これは。良治さんに、そういえば少し似てるかな。高倉信義です」
「アバウトな性格は瓜二つです」
　良治がニコリともせずに返した。
「失礼。波城広志さんは逮捕されずに返されることになりました。結論から申し上げれば本件の異状死体、小桜紫乃さんの死亡に関する事件性が検案の段階で否定されました。もちろん司法解剖もありません」
　砂絵が感極まって泣き出した。よほど張りつめていたのだろう。良治はうなずくことで慰めた。
「報道の容疑者云々の報道はどうなるのかな、兄の名誉はあれで失墜してしまった」
「タカの嫁も実家に帰ってしまいました、離婚も視野です」砂絵が口を尖らせた。
「波城広志の長男の家の話です」良治が補足をした。
「そのことも照会しました。捜査当局としては容疑者扱いしたことはないとのコメントです。現場で警察官が一般的な質問に対してどこかの記者に言ったことが曲解されたらしいとのことで。因みに重要参考人として任意で来てもらった上で、当日から二日間、現場検証と捜査資料の裏取りの結果を総合してそもそも逮捕に踏み切ってはいないと」
「高倉さん、その判断材料の詳細、分りますか」と良治は、砂絵に冷蔵庫を指差してうなずきながら言った。
「あ。はい」と砂絵は庫内から缶ビールを取り出して、「たいしたつまみはないわね」と言いながら飲ませる用意をし始めた。
「先生は明日までここで詰めるはずでしたよね」とようやく相好を崩した良治。すぐ帰るならアルコールは少々まずい。ただ慰労の気持ちは出したかった。
「では、ここからは友人と言うことで」と高倉はス

ーツの上着を脱いだ。
良治の気持ちは通じたらしい。
高倉は質問に応えるべくかなりのスピードで並べ始めた。
まず現場の小さな血痕の方には泡状のものがあったこと。遺体の傍や口腔内にあった血は肺からの出血、つまり喀血だったこと。他に外傷の類は何一つなかったこと。一番注目されたのは喀血があれば通常、反射的に顔を下向きないし横向きにして喉に詰まらないようにするところ、ご遺体はむしろ口をつぐみ仰向けになって、血が口の外に排出されないようにしていたと考えられる。そこに、死者の強い意志の存在が感じられること。
「つまり、従容として、いや、むしろ積極的に窒息死を受け容れた」
「良治さん、それ！　病変を利用した自殺。死亡する前に医師の診断でも受けていれば死亡診断書もとれて事件性はすぐ消失したんですが、今回の場合は当局の指示で、翌日市立病院でＣＴスキャンをして確認をとった。結果、肺臓は壊滅状態だったそうです。御厨さんに電話で聞いたんですけど、普通はエックス線撮影で肺結核罹患の有無を判断するのは経験を積んだ医師でないと難しいらしいんです。でもスキャンならすぐ判定できるだろうとのことでした。もっとも今回のように重篤な場合はどっちでも明白かもしれませんがね」高倉はここで息をついた。
要するに喀血が何らかの波城の行為で惹起されたのではないということだった。
「そのほかにもたくさん」と高倉は続ける。
当日の波城の行動は第三者の記録としてレシートその他の打刻で正確に残っていること。レンタカーの返却事務で精算時八時二十五分というのに始まって、買い物でホームセンター、スーパーマーケット、郵便局。タクシー料金領収書まで。
買い物の中身が、これから一緒に生活するという気持ちがまっすぐに表れていたこと。つまり殺害後に波城が外出をしたなど到底思えないこと。電気釜、

調理用包丁、俎板、中性洗剤、大小のボウルとザル、物干し用のロープ等々。加えて米三キロ、味噌、醤油、ネギ、レタス…。

「現場に置かれた買い物袋の中身とレシートの記載内容も完全に一致していたそうです」

「わかった、もういよ」と良治が微笑んで、「ほんとに詳細だった」とうなずいた。

「重かったでしょうね、あちこち回るのに」砂絵が、「どうぞ」とビールを勧めてから言った。安心したのだろう、顔に赤みがさしている。

「それがずっと同じ個人タクシーに頼んでいて」

「ああ、なるほど兄貴らしい」良治も飲みだした。高倉への配慮だった。

「何が言いたいかというと、死亡時刻に現場に居なかったという確率が百パーセントに近い。死後硬直との関係なので厳密には百にならないけれども好材料にはなったということでしょう。あ、そうそう市役所にも寄ってます」

「市役所ですか」と砂絵が顔を曇らせた。まだ波城の方は離婚が成立していないということを思い出したのだ。

「婚姻届の用紙を求めたんです、波城さん」

高倉が、ここでしんみりとした顔つきになった。良治も砂絵もしばらく言葉が出なかった。

「それで父はまだ警察署ですか」砂絵は一刻も早く父親の顔が見たかった。

「もういい加減出してもいいだろう」良治も高倉の顔を見た。

「すみません、先に言うべきでした。しばらくの間日常の生活圏内に居てくださいとは言ったそうですが、帰宅させたそうです」

「新居に？　紫乃さんの血がそのままの家に？」

「立ち入り禁止のテープは現在第三者用のものなので」

「そういうことじゃない」と良治は声を荒げた。第一立ち入り禁止は保健所関係でも起こるはずだ。

「砂絵ちゃん、フロントに電話してタクシー呼んでもらって、一台、乗客三名。なるべくすぐにって」

「はい！　でも行き先の住所とか分からないけど、どうするの」
「いや、僕が警官に案内されて一度現場に行ってるけど、どういうこと、良治さん」
「兄貴は紫乃さんを絶対殺してはいない、だから全面的に否認した。犯人に間違えられたことなんかにはこだわらないと思う、潔白は自分で知ってるから。でもね、後追いはする、紫乃さんの遺体を見てるんだから、二人とも死に向かっていたんだから、人生の最後に心をつないで！」
「きつい、それはないよ、無罪放免の線で一所懸命関係者に迫っていたんだから」
「あ、そうですか、すぐに降りますので」砂絵が涙目で振り返り「叔父さん、車すぐ来るって」と言った。
「とにかく高倉さん！」
「ええ、急ぎましょう」
「砂絵、これはただの外出だからな、フロントで取り乱すなよ」
「わかってる」砂絵は慌てて手の甲で涙目を拭ってみせた。
　降下するエレベータの中で高倉が何かハッという感じで良治の名を呼んだ。
「東京の区役所から警察署に照会があったとかで、伝えておきます。長塚良治さんがそちらに伺っていませんかと。良治さん、これ何のことだか分かります？」
「分る」と言った良治の顔が強張った。関係した区役所が、入水自殺した大河内玄に関する良治の記事から波城広志の取り調べ報道に結び付け、現地警察に長塚良治の訪問如何を照会してきた。この謎を解くには鼓吹社の大久保編集長の絡みが不可欠だ。ほかには誰も知る人がいない繋がりなのだ。何が起こったのかと、良治は不安になった。
「とにかくいまは、兄貴のことに集中しよう」自分への忠告でもあった。
「ごめん、とりあえず伝えたよ」
　ロビーの階に着いて、三人はフロントカウンター

に向かって駆け出した。

良治は高倉に「建物から少し離れた路上で降りよう」と耳打ちをした。

高倉は意味を理解して広い道路から勾配の付いた一車線道路への分岐点で、タクシー運転手に「ここでいいよ」と告げた。砂絵と高原が降りた後で良治が料金を払った。

「会社名刺くれる？　また何度か利用したいので」

「ありがとうございます」運転手が笑顔をつくった。

良治は降りる前に目を瞑った。「おそらく兄貴は…」

三人は道一杯に広がって百メートルほど歩き、玄関前に着いた。

良治がドアノブに手を掛けゆっくりと回した。回ったと驚くべきか、施錠していないのだから。砂絵は高倉の後ろに居る。

意を決してドアを開けた。

「高倉さん砂絵を止めて、入れないで！」中に入るやいなや叫んだ。

予測していたのか砂絵は高倉の制止を振り切って飛び込んできた。「オヤジーっ！」

「待て！　見るな」

抱き寄せようとした良治の配慮も虚しく、砂絵は目を丸くして膝から崩れた。

和室正面の押入れが半ば開き、おそらく天井裏から吊ったのだろうロープに、ぶら下がっている波城が居た。

天井裏に小屋組みがあることを知っているのは元不動産屋だからか。

良治と高倉がほとんど同時に合掌をした。

砂絵はと見れば、声も出ずにしゃくりあげている。

「高倉さん、警察に電話、お願いします、僕がするよりいいと思いますので」

「解かった」と若い弁護士は窓辺に寄った。

良治は近くの畳の上に紙切れがあるのに気付いた。

紙はそのままにして字だけを読んだ。きっと鑑識

が来るので、配慮したのだ。

何もかも終わったな、良治。

あとを頼む。

紫乃のところへ行くから。

砂絵、ありがとう。　広志

最初の一行は、終わったのは兄の命、兄弟間の信頼、それとも「弟よ、お前も終わりだ」という意味かも知れない。良治は多重的にとらえた。長く説明したりはしていない、警察も読むからだ。身内しか分からないあらゆるものが、このダイイングメッセージの中にある。良治はそう思った。

「砂絵」と遺書の傍まで良治は導いた。「さわるなよ」ボロボロと涙を落としながら、拭っては読む、それを繰り返す砂絵。

「お待ちしています」と高倉が警察への電話を切ったと同時に、砂絵の嗚咽は号泣に変わった。

「…負けたよ、兄貴」

良治は思った。冷静にこれから起こることに対処しよう、それが裏切り者の責務だと。「あとを頼む」は、それでもまだ少しは残っている弟への信頼の証なのだと。

8

同じ日の午後七時、孝之のもとを突如訪れたのは郁美の父親である福山保だった。

定時で帰宅してシャワーを浴び、レトルト食品で独り飯をしていた孝之は少しく慌てた。父親が出て来た用件は想像がつく。胸を張って応対したいのに寂しい食事風景を見られてはいささか都合が悪いからだ。インターホンで声を聞くやいなや、トレーナー姿で玄関へと飛び出した。

「突然すまんが是非もなくてね、勘弁してほしい」

規模は小さいが会社のオーナー経営者である福山は、玄関の中に入ると、のっけから言わば頭を下げて挑んできた。

機先を制され孝之は一瞬にして防御側に立たされた。「いえ、こちらこそ騒ぎを起こしまして恥じ入

っています、あ、お義父さん、散らかしていますが和室の方へどうぞ」
　正直なところ郁美も美穂も連れて来なかったことに驚いたので、うかつにもそのまま口を滑らせてしまった。
「お一人でというのには少し驚きました」
　勧めた座布団を外して正座をすると福山は、言葉を選ぶようにして切り出した。
「単刀直入に話したくて来たんだ。離婚すると言って郁美が帰って来たから理由は何だと、いきさつを細かく聞き出した。娘が君からもらった言葉の数々も全てだ。君の処へ嫁に出したのだから、父親だとはいえ君の妻の顔を引っ叩くわけにはいかんが、こんこんと諭した、バカはお前だと言ってね。すまなかった。一人っ子で甘やかしすぎた」
　孝之も郁美に同じ言い方で面罵したのだから、社交辞令的に「とんでもない」などと否定はできない。小さくうなずくことで話の先を促した。
「本人も一緒に来たが外で、最寄りの喫茶店で待つように言ってある。むろん美穂も一緒だ。君の許しを得たら本人からも謝らせるつもりだ」
　解かってくれればそれでいい。福山の来宅の動機如何はともかく騒動の火の元は波城家の側にあるのは確かなのだ。それに落ち着いてから心配になったのは美穂のことだった。
「解りました、とりあえずここに呼んでもらえますか、僕も言い過ぎた点はありますし」
「その前に」と義父は右の掌を突き出した。
「はい、何でしょう」と構えた。
「郁美と一緒に離婚届を出してもらえんかね」
「はい⁉」孝之はおちょくられたのかと不快感をあらわにした。
「いや、最後まで聞いてほしい。郁美を福山姓に戻した上で、すぐに妻の氏を夫婦の氏とする再婚をしてほしいんだ。美穂の氏は子の氏を変更する手続きで済むと思う。つまり福山家の婿養子になってもらいたい、どうだろうか」
　娘や孫の幸せというより家名の存続に重きを置

いているのかもしれない。そう思った。
「波城の家も男は僕だけですから、それですとこちらの家名が消えますけど」
「いや、お宅はまだ妹さんがいる。この度離婚なさったとか、再婚という氏保存の可能性がある…うちは郁美だけなので」福山は腹中を言い当てられて、声のトーンは下がった。
父親の広志は本人の言葉通りなら間もなく自死をしてしまうだろう。さらに自分が婿養子になれば波城の家名は消滅に向かう。あとは各人が個人として存在するだけだ。長男としてそれでいいのか。孝之は福山の申出での身勝手さに少しく呆れた。おそらくかつて一度は諦めた婿養子の件を蒸し返すチャンスと捉えたに違いない。
「君が名実ともに我が家に来てくれれば、この家作をいまアパートに住んでおられるお母さんに使ってもらえるのではないかな」
「いや、まだ父は」生きていますと言いかけて止めた。紫乃という人の死後どうなったのかはもうすぐ分かるが、砂絵からはまだ電話が入っていない。
「聞いたよ、郁美から。娘には到底無理だが、波城広志さんといくつも歳が違わない六十五の私には理解できる。おそらく自分で自分の始末はなさるだろうとね。私は見事な方だと思う」
「ありがとうございます」うっかり礼を言ってしまった孝之だった。
「いまから郁美を呼んでもいいかね？　このこと娘には提案してあるし、女房も承知だ、じつは律枝も一緒に待たせているんだ」
郁美の母親まで動員しているところに福山の本気度があらわれている。
「解りました。僕も郁美と美穂に直接聞きたいことがあります」
「そうか。何もすぐに返事をとは言わんよ。君の答えが出るまで孫ともども預かっておくから良く考えて決めてくれ。良い返事を待っている」
福山が席を外すと孝之は、腕組みをして目を瞑った。

郁美の父親は、父広志が他人を殺したとは頭から思っていないらしい。ただ自死の方はすると踏んだ。さらに、その気持ちは解かると言う。いずれにせよ波城姓にはある種の汚点が付いたと思ったに違いない。その汚点は娘にも孫にもついて回ることになる。無理な迂回を承知で養子縁組と氏を変える再婚の組み合わせを思いついた所以はきっとそれだ。孝之は当初の反発がようやく消えていくのを感じていた。

「十五分ぐらいで着くよ」と福山が携帯を仕舞いながら玄関から戻って着て続けた。「お願いしたことを承知してくれればいろいろメリットがあるように思うんだ」

福山は例示をした。邦子さんが君の家に移れば家賃その他住居関係の費用が出て行かないことで老後の備蓄に余裕が生まれる。孫の美穂も遊びに通いやすくなる。妹砂絵をはじめ親戚や友人との交流も余裕で可能になる。つまりよりいっそうの親孝行ができると。

福山の言葉にフッと思い出した砂絵の台詞。「オヤジとかあさんを引き取るのも嫌、二人の扶養もできない。もしそうなら都合つけて飛んできて」それは父親抜きで家族三人が初めて善後策を話し合う日のことだった。

あの日から父母のことでほとんど役立っていない孝之の気持ちは大いにぐらついた。

9

小桜紫乃については公衆衛生の見地からも現地火葬場でと決まった。

良治は現地警察と協力してまず東山博行に連絡をとった。「離婚している。当家には関係ない女だ」と遺体の引取り、火葬その他一切の協力を拒否するとの回答だった。次いで紫乃の実家を調べ上げ、紫乃の兄にあたる現職市議の小桜治に連絡をとったが、「家出騒ぎで嫁ぎ先から抗議を受けて全て承知している、恥さらしなその女は当家の者ではない」

と、これまた拒絶をした。どちらも「当家」と言った。兄弟姉妹、子どもたちも含めて同意見と釘を刺したつもりなのだろう。結局病死なので、感染症予防法の諸手続きが済み次第だが、長期間遺体を安置することはできないとの判断が下されたのだ。

火葬許可証が出て直接に火葬場に送られる直葬だったが、最終的には三人が立ち会う形になった。

長塚良治は、兄広志に代わってという気持ちだった。波城砂絵の方は、邦子が紫乃の顔を見たいと言い張ったのを必死に止めて、代理的な立ち位置での参列らしい。そこに一人、知らない老女が喪服で現れた。棺が押し込まれる直前に来て、二人に名乗る前に係員に紫乃の顔を見せて欲しいと懇願したのには驚いた。

点火された後で彼女は、「東山美佐と申します、東山博行の妹にあたります」とほぼ直角に体を折って頭を下げた。

収骨に至るまでの間に良治と砂絵は、東山家に嫁いだ紫乃がどのように扱われ、老母の死を契機にな

ぜ心が解放され東山家を去ったのかについて、美佐からつまびらかな情報を得ることが出来た。美佐は、紫乃に最後に会った東山家の人間は自分だと言い、遺体は引き取れなかったが遺骨は大事に自分の許で保管したいと言った。

「お家の方針に反しても、ですか？」と良治は半ば意地悪く問い返した。美佐の話によれば紫乃は、まさに東山家の屋台骨的存在だったのだ、それを死者に鞭打つ何という扱いなのかという怒りがある。

「はい、わたしは早々に家を出て独り暮らしをしておりますので。それと、生前も嬉しいことに紫乃ちゃんは、わたしの処を避難所にしてくれていました、ですからお骨もぜひ預からせてください、お願いします」

「失礼ですが、それでは誰から今日のここのことを？」

「亡くなったことはテレビ報道で知りました。遺体引取りを兄が拒否したことは紫乃ちゃんの長女のひろみからです、それからこちらの市役所の方へ何

度か連絡をしまして」
「わかりました、当方に異論があるわけがございません。役所の方に了解をとってそうしてください。無縁仏同然はひどすぎます」
美佐がゆっくりと頭を下げた。
「あの…」と砂絵がその美佐に問いかけた。「聞くのもはずかしいんですが、父と紫乃さんは過去に男と女の関係があったのですか、もしご存知なら」
「砂絵、失礼だぞ、気持ちは分かるけど」と良治が一応たしなめたが、おそらく母親邦子が一番知りたがっていることだろうから一種の忖度なのだろう。そこは理解した。
「それは紫乃ちゃんに直接聞いています、一度も無いと。セックスだけではなくキスすらしていないと言ってました。人生の中で何度も偶然に出会って、きっと唯一無二の和む相手だったんでしょう、大好きだったんでしょうね」
良治は砂絵の顔を見てうなずいた。何もなかったからこその、永遠の存在。そんなものかもしれないと。
急に良治の頭が再生を迫ってくるのが解かった。
「初めてだな、断わられたのは」自分の声だった。抑揚が変だ。
「つまらない人になっちゃったのよ、良治さんが」
「高齢だし、金も持ってないし、何も変わってないぞ」
「ううん違う。以前は孤高の人だった。凛として世間の評価なんか糞食らえという、不動の自信を持っていたわ。落ち着いていて、温かくて、大きくて。だから特別な人に抱かれてる気持ちで、興奮できた。誘いを断るなんて思いもよらないことだった」
「だからどこがどうだと聞いてる」
声まで震えてる。良治はこのごろ何かに怯えていた、たぶん自分自身にだと思う。それを言い当てられた。しばらく返事を待ったあとで、応えやすいようにと直前の自分の言葉に重ねた。「セックスに飽きたってことだろ、次を探す、そんな感じか」
「そこまで惨めになる？　セックスだけが目的な

ら何人も候補はいるわよ、良治さんはそんな遊び相手なんかじゃない、何かを持ってた。さよなら、もう連絡しないで」
「おい、待てよ、令子」
良治は無意識に頭を振った。
「叔父さん、係の人が何かおっしゃってるよ」
砂絵の声に良治は我に返った。
「お骨を拾うことになります」と美佐が、小声で言った。
大きなトレイに載った白い紫乃が出てきた。
「胸を病んでいらしたのですね」と係りの人が改めて合掌をした。
「お分かりになるんですか」と美佐が小声で聴いた。
「肋骨のところで…失礼をしました」
良治は美佐の横顔が泣いているのを見詰めている。

10

波城広志の葬儀は邦子の住所地に一番近い斎場で家族葬として執り行われた。喪主は邦子、葬儀委員は良治が担当した。報道で一旦容疑者扱いされたため、ひっそりと済ませたかったのだ。
「いくら小さな葬儀といってもねえ、良治叔父さんと家族二人だけとは寂しいわね」と砂絵が、つぶやいた。
「孝之が通夜に来ないって本当の理由は何？　父親の葬儀より大事な要件て何なの、砂絵」
邦子は急な用事が出来たという理由付けに改めて疑問を呈した。
「明日のお別れには間に合うって言ってたから直接タカに聞いたら」
「昔はみんな自分のうちで通夜、葬式をやったんだよ、縁ある人はじっくり故人の話を聞かせてくれたというし。いまは何だか香典のやり取りの場としか思えない」
良治はほとんどつながらない話に切り替えた。この話題には深入りは禁物との判断だった。

「そうそう、叔父さん、オヤジのバックパックを点検していたら、生命保険証書が出て来てね、びっくりしちゃった。オヤジ、解約していなかったの。保険料は口座振替で支払われてたし」
「ほう、兄貴らしいな。それおそらく自殺、おっと自死でもいいタイプだね」
「一年以上経過した後なら大丈夫で、下りるって。受取人は配偶者、かあさんになってた、これが一千万。それと葬式費用、上限百万で実際にかかった額が補償の対象なの。保険会社に照会電話を入れた時にオヤジの離婚届の件はもちろん言ってないけど」
「離婚届置いて出て行って、保険の解約忘れるってどういうこと」と邦子が言った。自分が放った孝之の話がどこかに飛んでしまっている。
「ちなみに離婚は届出がなされていない以上不成立だよ。いまも義姉さんはれっきとした配偶者だ」
良治は、波城が家族の元に保険証書を残して去っていないことに或る種の意味を感じ取ったが、それは口にしないことにした。
「戸籍上だけはまだ妻ってことね、きついわね」邦子は唇を噛んだ。
「昨日もタカに電話で言ったんだけど、オヤジ、忘れたのかなぁ、違うよね、叔父さん」と、砂絵は続ける。「この証書目立つし、このパック何回も開け閉めしてるわけでしょ」
「はっきり言ってあげなよ、邦子さんに」と良治が笑った。
「なに、なに、何なの」
「だってオヤジ、小桜紫乃さんと同窓会で会える確信無かったでしょ、もちろん逢って再婚なんてことも。紫乃さんが離婚されたのも知らないわけだし」
「だからどうなのって話！」邦子がとうとう焦れた。
「かあさんが離婚届を出さない場合も想定していたのよ、オヤジは」
「えっ？」
「叔父さんの言う兄貴らしいなは、そういう意味でしょ、きっと」と、砂絵はやっとまとめた。
「人が幸せになれるコツの一つ。選択肢が複数ある

ときは良い方を採る」
　良治はそう言うと、多少の苦さを感じながら笑顔をつくった。
「おめでとう、かあさん」と砂絵は邦子の肩をポンと叩いた。
「義姉さんは喜んでないよ、一緒に死ぬ相手として選ばれなかったんだから」
　良治は皮肉を言ったつもりはなかったが、そう取られても仕方がない言い方だった。
「何だか、居なくてもいい、居ても存在感がない、オヤジのことそんなふうに思ったり言ったりしてたけど、実際に出て行かれちゃったら家族全員が狂っちゃったものね。やっぱり大きかったんだよ、オヤジの存在」
「そうね」邦子は力なくうなずいた。
「明日、火葬する日、真っ青に晴れるといいね」砂絵が天井を見ながら続けてボソリと言った、「お骨になれば首の傷痕、消えるよね」と。
　家族葬の家の扉が静かに開いた。本来なら開けておくのだが、あまりにも会葬者が来ないので自然に閉めておく形になっていた。
　入って来たのは和の喪服姿の美佐だった。
「ご焼香をと思いまして」
「どうぞ」と良治が眉一つ動かさずに導いた。
　砂絵は、美佐が焼香をしている間に良治に視線を動かすかたちで「どうして」と聞いてみた。
「僕が頼んで来てもらった」と良治は近づいて耳打ちで返した。
　砂絵は、きっとこの場が荒れると思い、少しく動揺した。
　邦子は首を傾げながらも普通の会葬者と思っているらしい。美佐の背中をジッと見ていた。
「東山美佐と申します。この度はご愁傷さまでございます。どうかお力落としなさいませんように」と改めて邦子に弔辞をのべると、「お顔を見せていただいてお別れをいたします」と、棺の覗き窓から波城の顔を見詰めた。
　空気が張ったような不思議な時間が流れた。

その中で砂絵はしっかりと見た。美佐の目から涙がこぼれているのを。

「きっと逢えて嬉しがっていると思います。ありがとうございました」

何事も無かったように美佐が立ち去ろうとしたとき、邦子が尖った口調で訊いた。

「どなた様が主人に会いに来てくださったのでしょうか？」

誰かの代理だということを念頭に置いた質問だと解かる。

良治が美佐に向かってうなずいた。言ってもいいですよという意味だ。

「この喪服は親友の小桜紫乃が今生の別れ際にわたしに預けたものです。お知らせいただいたご厚意に感謝いたします」

紫乃が母親の葬儀で着たものだった。波城を近しい親族として扱いたかった証になる。それが和装の意味なのだ。

「家族葬じゃなくて普通のお葬式にすればよかったわね」

邦子のつぶやきに砂絵は肝を冷やした。美佐の弔問への皮肉とも貧弱な葬儀を悔いる見栄ともとれる。そのどちらもが母親の品位を落とすからだ。

良治が文字通り両者の間に立ち、「そこまでお送りしましょう」と美佐に言った。

邦子の醜い場面を増やさせまいとする良治の機敏さに、砂絵は舌を巻いた。同時に、あの棺の中に落ちた涙は紫乃のものなのかもと、あらためて思いもした。

ドアの外は近くに外灯が三本あるためか比較的明るかったが空気は湿っていた。雨が降る前触れかもしれない。

「今夜はどこかで泊まりですか」と良治は訊いた。受け取り方次第ではかなり微妙になる。二人とも老人なので誤解される可能性はゼロに近いが。

「いえ、この先の乗り換える駅で直通電車に乗ってしまえば一時間以内で着く自宅なので、このまま」

「ご家族がお待ちでしょうし、そうですよね」

会話がブツ切り気味だが、じつは良治、喫茶かカフェレストランで、小桜紫乃のことをもう少し詳細に訊きたかったのだ。

「家族はいませんから」

「え、美佐さんはおひとりなんですか」

「ええ。ですから、逃げて来た紫乃ちゃんをわたしのところで匿い続けることはできたんです、それを、それなのに、ずるい女です」

美佐は急に立ち止まり掌で口を覆った。あのとき自分は、紫乃が追跡されると踏んだ。だからこそ他の東山家の人間は知らない亜矢のところへ避難させたのだった。しかしそれが紫乃を余計追い込む形になってしまった。宅配便で送られてきた喪服を見たとき、「わたしのためにこれを着て」との紫乃の覚悟を感じたのだった。大きな悔いが残った。罪の意識すら抱いた、本当に紫乃のためを想って亜矢の処へ送り出したのかと。いや違う、自分の身の安全のためだと。

良治は予想できない反応に言葉を失い、取り乱して涙している美佐を見詰めていた。

スーツ姿の歩行者が首だけをこちらに向けて擦れ違った。

「長塚さんは円満なご家庭をお持ちなんでしょ」

うつむいたままだが、ようやく言葉が出た。

「いえ、私も結婚早々に離婚して、それから数十年間独りです」

兄波城広志の家庭も傍からは円満に見えていたはずだが、それでも壊れていたとして括られるに違いない。それも一面正しい視点だろう。円満を装うために堪えていた誰かがいた。良治の目にはそう映るのだった。兄を追い込んだのは、じつは家族という魔物だと。

「失礼しました、もうここで」と美佐が頭を下げた。

人前で泣いたことを恥じてのことだろう。良治はうなずくことで了解した。

「ふたりが新しい世界でつながれるといいですね」

「ありがとうございます。紫乃ちゃんだからきっと離さないと思います」

「今夜はお構いも出来ませんで。それと、さきほどの施主の失礼はご容赦を」
「とんでもない、失礼は今夜の私の存在、向こう様にとってはそうなりますかと」
「ではまた、お会いできましたら」良治の本音だった。
夜道を去っていく美佐の後姿が少しだけ左右に揺れていた。

11

区役所経由で照会のあった行旅死亡人について、葬儀等の都合があり一週間後に両親と区役所内で面会したいと回答していたその日がやって来た。
良治は、会う前に区役所の担当者に電話で話を聞いた。それによれば、
長塚良治と記者名を明示した記事『或る青年の自死が語る現代の孤立について』を高齢の定期購読者が読み、その地域で英才として有名だった大河内玄の両親に知らせた。両親は記事の中の行旅死亡人に息子の姿を感じ取り、連絡先の区役所を訪ねた。役所は掲載雑誌『鼓吹』の編集部に照会、大久保編集長は記事の責任は執筆者にありとして良治が出向いている現地の市役所に連絡を入れさせた、それが経緯だという。
良治と大久保は約束の時間より少し早めに区役所に着いた。
「大丈夫か、うちに尻を持ってくるなよな」
「事実は話すけど、どこにも誰にも責めが来ないようにするよ」
「たいした自信だな、頼れるぅ」と大久保がおどけて見せた。
担当者に会うと、両親の服装の目印まで決めてあることを知らされた。
波城広志に自死当日までの手記を託して入水した青年の両親、大河内忠雄と同静香は、ピタリと約束の時間に現れた。自己紹介をし合い、四人で所内の喫茶に入った。

「まずお預かりしている息子さんの手記、記事のもとになったノートをお返しします」
大学ノートを手にした父親は、すぐさま冒頭の何ページかを読んだ。
「玄の字です、出だしの内容からして息子に間違いありません」
母親もノートを受け取って開き文字を見るとすぐに閉じて瞑目をした。
「どうして長塚さんの手に渡ったのか、教えてくれませんか」と父親が覗き込むようにして言った。
「そのご説明のためにこうして参りました」
良治は意識して簡潔に、次のような説明をした。
入水したと思われる問題の川の岸辺にたまたま居た私の兄とご子息が会話を交わして意気投合し、一時別れた。同日後刻、もう一度会うために戻ってみるとノートと書き置きが岸辺に残されていた。彼の入水と東京湾での水死体発見を兄はテレビの報道で知った。兄はノートを読んでどうしたものかと思案したうえ、雑誌社に関係するフリーのライターである弟の私に郵送をした。返したくても宛先が不明だと。私はここに居る編集長に、記事を書くことで行旅死亡人となる青年の関係者の目に触れるかもしれないからと協力を求めた。大久保編集長は雑誌『鼓吹』はどちらかというと高齢者向きだが故人のためになるなら構わないと了解をしてくれた。結果こうして無事ご両親のもとに遺品が戻るということに。私たちも嬉しく思いますと。
一部嘘があるのは承知している。しかし、関係者が誰も疑われず、傷つかない説明をするためには仕方がなかった。兄波城広志の氏名も伏せている。
「解かりました。編集長さんにも感謝します」
大久保は神妙な顔つきで頭を下げた。声は出なかった。
「あと、できればですが、そのお兄さんにも出会いのときのお話を伺いたいのですが」
「すみません、その後亡くなりましたので」
「あ。ご葬儀…そうでしたか、お兄さんの。失礼しました」

「いえ」
良治は、砂絵がバックパックを整理していて見つけたというメモを受け取っていた。しかしそれは渡せない。青年の免許証の存在が記されているからだ。
「何か心が通ったんですね、お兄さんと。良かった」と彼は何度もうなずいた。
母親は唇を固く閉じたままずっと、涙をハンカチで拭っている。
「それにしても、なぜ息子は死ぬ前に相談してくれなかったんでしょうね」
「助けてって、言えなかったんじゃないですか」ノートを読んだ良治ならではの返しだった。彼の双肩に重い荷物を負わせたのはあなたがたではないかと。子どもの挫折は望まない、認めない、許さない、そうなら最終的に子どもの心が帰れる場所にはなりえない。
「ですからなぜ…親子じゃないですか」、母親が声を出して泣き出した。
なぜどこもかしこも孤立と孤独の悲劇なのか。その指摘の指先が自分にも向いていることを良治は知っている。
「その命を削るようなご子息の手記を全部通してお読みになれば、きっとお分かりになると思います」
それ以上言える立場にはいないと、良治は自分を抑えた。
帰りの下り線ホームで大久保が言った。
「君はほんとに脱皮したようだな、清濁併せ呑むと言えば大物風だが、怖いと言えば怖い。今までは真正面から君を見てあれこれ決裁できたけど、今後は裏もあるという前提で気を付けることにする。言っとくがこれはこの世界のプロとしての極上の誉め言葉だ、無彩色の人間は罠にはまり易い。これで君は自分を玉虫色に見せる技でカオスの中で生き抜くことができる。今後の君に大いに期待する、今日も見事だったな」
良治は応えようがなかった。忸怩たる思いの方が強い。
電車の中ではほとんど会話をしなかった。他の乗

客に聞かれていい内容の方が少ない以上、黙っている方が賢い。
　良治が乗り換えをする駅に近づくころになって大久保が言った。
「で、どうする？　君の狙い通り波瀾万丈の兄貴になったわけだが、形は任せるとして、いまでも書く気はあるのか。記事を見た上でだが金は払うぞ、当社は」
「書くことが兄の遺志に合致すると思う。週末までには最初の一本を持っていくから、辛口で対応してくれ。有償ならこっちも助かる」
「うん、それでこそだ。じゃあな」と大久保は降りる準備に入ったあとで唐突に、小声で言った、「例の女とは終わったようだな」と。
「なぜ分かる」
「君の凄味が増したからさ、女は男を弱くもする」
　電車のドアが、会話を切るタイミングで開いた。

12

　父親の失踪から首を吊った自死までの時の流れと、流れ着いた先としての今を想い砂絵は、結露したグラスを何度も揺すっている。まるでカラッと音がするのを面白がっているようにも思えて、そんな子供っぽい自分が笑えた。「事件」の現場から帰宅してすぐに衝動的に買い求めたブランデーの瓶だけが横に居る。瓶は瓶であって決して別れた富永ではない。ではなぜ思い出のブランデーだったのか。母邦子は葬儀で一滴の涙も流さなかった。彼女にはこれからの生活のことしかなかったのだろうか。一方で父広志は数十年におよぶ心の関係を保ちながらキスすらしなかったという幼馴染小桜紫乃と落ち合い、まるで後追い自殺でもするかのように死んでいる。
「結婚、夫婦、男と女、それって何だろう…」
　砂絵は声に出してみた。つまりそのことだった。
　邦子はいそいそと孝之の家に泊りがけで出掛け、今頃は床の中だろう。兄孝之は郁美と離婚した後で

日を置かずして再婚するという。離婚した相手、つまり直前婚の配偶者との再婚には待婚期間という制約はない。孝之の姓は福山になってしまい、波城姓は邦子と自分だけになる。婿養子孝之は福山家に引っ越し、その後孝之の家に邦子が移り住むことに決まったのだ。聞いたときは頭が混乱したが、「それもありかな」と今はむしろその手立てに感心をし、納得もしている。最後に自分は遺産分割協議の結果、二人の人間が亡くなった場所の土地建物と父親が使い残した金の全部を得ている。

金と言えば邦子は、マンションの代価に加え生命保険金が入るので三千万の老後資金を確保しえた。これは素直に安心材料だと思った。住居費でそれが大きく減り続けることも無くなった。

「めでたし、めでたしなのかな…」

口にしたとたん急に涙がたまってきた。

「そんなわけないじゃん！」両の握り拳でドンとキッチンテーブルを叩いた。

揺れに慌ててグラスを押さえ、その流れでオンザロックを飲み干した。何かが違う。今回もまた、三人の合議だけで父親がそこに居ないのだ。もちろん死者は入れないが、父親が居たらどう想い、何を考えるのかという配慮が無かった。自分も含め、誰の口からもそのことに対する注意喚起がなかった。

「オヤジ、ごめん。わたしも最低」

いつの間にかグラスは再びブランデーで満たされていた。

13

「孝之にこんなことが出来るなんてびっくりしたわ」

寝間着姿の邦子が孝之宅の居間のソファーで深呼吸をした後で言った。

「案外策士なのかなって笑っちゃった」

「成り行きに任せただけさ、ヘタレな男だよ、相変わらず」

孝之は紅潮した風呂上りの顔をバスタオルで一

拭きしてから苦笑いをした。
「じつはお通夜でね、なぜ孝之が来ないのって砂絵に文句垂れちゃったの、ごめんね」
「いいさ、福山さんの都合で無理筋は向こうだったし、葬式を理由にして断れる流れじゃなかった。かあさんにはそういう説明すらしなかったんだから」
「正直なところあの時点で説明されてもたぶん信じなかったわ。こうして泊りに来てみて現実だって納得した」
「良く賛成してくれたね、婿養子の件」
「世間の波城に対する評価はあの小さな家族葬の姿のとおりよ。むしろ福山さんが救ってくれたと感謝しなくちゃ」
孝之の表情が曇った。一番気にしていることだったのだ。
「かあさん、それ、オヤジに対する非難、攻撃になっちゃう」
波城姓でいることが恥になると考えて行動したと世間に思われては立つ瀬がない。そのおそれを乗り越えて決断したのは何のためなのか。母親に誤解されてはなおさらのことだ。
「恥でいいじゃない。広志の自殺は或る程度覚悟してたけど」
自殺じゃない、当初から覚悟を持っての自死だ。孝之は心の中で即座に否定した。
「覚悟してたけど、何」言葉が少し強めになった。
「愛人との心中みたいになって、しかも代理の女がお通夜にも来たりして図々しい」
孝之もその件は砂絵から詳しく聞いていた。叔父の良治の考えも絡んでいると。
「かあさん、飲もうか」
「コーヒーならわたし淹れようか」
「お酒だよ、いいだろ？　たまには」そう言うと、片隅にあるサイドボードから大吟醸の日本酒を取り出した。郁美の父親からお土産に持たされた逸品だった。
邦子はキッチンに行き、小さめのコップを二つ下げて戻った。飲むことへの同意になる。

孝之は邦子にとってはきついことを言おうとしていた。砂絵と二人で波城のバックパックの中身を検めたときに分かったことで、ずっと黙っていようと決めたのだが…郁美との諍いの原因にもなったこともある女という者の感覚、物事にたいする捉え方への不満が再燃したのだ。

乾杯の意味でグラスを合わせてから一気に飲み干し、一息をついた二人。

「オヤジはかあさんが離婚届を出していないことを知ってたよ」

「良治さんからかな？　謄本とったりして」

「いや、もちろん砂絵でも僕でもない、オヤジが死に場所へ行く前にここの市役所で謄本をとっていたんだ。確認したかったんだろうね、きっと」

「じゃあ、一度近くまで来たってこと？」

「そうなるね」

「ずいぶんね、お酒！」と催促して邦子は唇を噛んだ。

孝之は注ぎながら「それなのに紫乃さんと行った先の市役所で婚姻届の用紙をもらった。これは砂絵が良治さんと一緒に弁護士から聞いているから確かなんだ、なぜか現場には残っていなかったらしいけど」

「重婚なんて受理されないでしょうに。広志は何考えていたのかしら」

もしかしたら邦子は夫に再婚させないために届出を先延ばしにしていたのかもしれない。さして驚きもしない母親を見て、孝之はそんなことを思った。

「二人で届出用紙に署名することが必要だったんだよ」

「だから無駄でしょ、受理してもらえないなら」語尾が強くなった。

やはり邦子は動揺していたのだ。十六度近い冷酒をまた飲み干したことで分かる。

「かあさん…」

「なによ」と孝之を睨んだ目が少し潤んでいた。

「これが解からないとすると女の気持ちを棄てたのかい、だとしたらいつごろから？」

「棄ててないから口惜しいんじゃないの、バカにされて頭に来るんじゃないの」

孝之は小桜紫乃の死因を知ってから、つまり結果からその前の二人の気持ちを考えてみた。父波城広志は紫乃の命が短いことを知っていたのだ。自分もまた人生の終着駅に向かっている。だから婚姻届に二人してサインをしようと考えたのに違いない。きっと先々も届が受理され正規の結婚生活ができるとは思っていなかったのではないか。そしてそのことはいま確信に近い。

「死期が近い紫乃さんに対するオヤジの優しさなんだよ、それが」

「こっちの家族ことはどうでもいいわけ？　こっちへの優しさはないわけ？」

「家族への想いがあるから去って行ったんだよ、まだ理解できないの」当初郁美もひたすら反発をしていた波城の行動。やはり性の違いから発想として無理なのかもしれないと思った。

先日も娘からの情報だけでは不十分だと思ったのか福山は、波城に関する孝之と郁美夫婦間の喧嘩の内容を確認してきたが、結果は、古来弱いからでもなく貧しいからでもない自分の命の処し方というものが世の中にはあると、娘を改めて諭すことになったという。

「だって我が家をバラバラにしただけじゃない、違うの？　孝之」

「オヤジが出ていく前はバラバラじゃなかったとでも言うの」

「え？」と邦子は目を丸くした。

「結果をみてもオヤジの死は家族全員のこれから先を、それぞれの暮しを安定させてくれたんだよ、冷静になって考えれば解かるだろ、かあさんだって」

「いい結果はほとんど偶然からじゃないの。それより知らない女と心中されてしまったこっちの気持ちを考えてみてよ」

邦子の想いはそのことから離れないらしい。孝之は意識して穏やかな声でこう返した。「じゃあ、聞くけど…かあさんは何をしてあげたの？　オヤジの

心に対して」
　自分のコップに酒を注いでから顔をあげると、目の前の邦子の顔が涙で濡れていた。
「そうなのよね」
　邦子の唇が細かく震え出した。
「かあさんはここで安心して暮らせばいい。もちろん家賃は要らないし何かあったら僕ら福山家が面倒みるから」
　孝之は、これ以上同じ話題で時間を過ごすのを止めたくなって酒をあおった。
「明日郁美が来るし引越業者も来る。あっちに移すものと残すのもの、二人で相談して。そろそろ寝るよ」
「おやすみ」邦子が身を固くしたまま小さな声で言った。孝之が放った「ぼくら福山家が」という言葉が胸に刺さっている。
　孝之の方は自室のドアを締めてから福山の言葉を思い出していた。
「孝之君、郁美を責めないでやってくれ、自分と子どものことを第一に考えるというのは女に備わった自然な機能、言わば本能だ。そうなら捨てろとも言えないしね」

14

　どうやら畳の上で、半ば口を開けて寝ていたらしい。口の中がひどく乾燥してしまい、舌と歯茎が貼り付いているような気がした。身を起こして頭を振ると流しに向かって這った。蛇口を開けてすぐの水は温い。それでもカップに水を満たし口の方から迎えに行って吸い込んだ。普通にあおれば口元から溢れてしまうと思ったのだ。水を得た舌が勝手に動き回り言葉がやっと口からでた。
「終わったんだったな」良治はそう言ってから顔を洗った。
　そこで初めて気づいた。水を飲んだカップが歯磨き専用だったことに。
　大久保編集長に大見栄を切ったせいで、丸二日寝

食を忘れて原稿と格闘した。最低でもと求められた二十枚という長さで言えば騒ぐことはない。現に三十一枚で脱稿した。困憊した原因は仮名で描いている兄波城広志との対話だ。他のことと違って誤魔化しがきかない。一行書くたびに自分の覚悟が試された。

じつは大河内玄の両親に会う前日に、三田村悟という人物に会っている。彼は彷徨中の兄の言動をつぶさに伝えてくれた。ホームレスビレッジの人々に贈与した軽トラの件、八子神モータースとのあれこれ、とくに村瀬伸子との心の交流、あけぼの荘の改装・改革などは衝撃だった。三田村も雑誌『鼓吹』の定期購読者だった。ここでもまた連絡ルートで大久保が絡む。

「やっぱり兄貴だな、自死する前に活き返っていたんだ…以前の自分に戻してから自死をした」

良治はこのとき打ちのめされた、自分とは覚悟が違うと。

原稿書き一日目の夜、三田村の存在を背景に描く場面で、この衝撃が蘇ったあとでのことだった。原稿を中断してビールをあおり、庫内に一缶も無くなるとブランデーの残りを思い出し、それも瓶を空にしている。自暴自棄にかなり近い。

着信音が響いた。砂絵からだった。

「どうした？」

「相続の話し合いでね、例のオヤジと紫乃さんが亡くなった場所、土地建物をわたしが受けることになったの。タカがね、自分はオヤジの相続に口出しする資格がないなんて訳の分からない理屈で引き下がったの、相続放棄。だから、自動的にわたしに」

「ほう、邦子さんも同意かい」少し気になって聞いた。

「そうなの、タカがかあさんの面倒を見るってことで、いまのアパートも出るって決まったし」

「なるほど、同時に砂絵ちゃんも自由になったわけだ」

「うん、あれもこれも、いろいろ準備が大変みたいだけど…」

ここでなぜか、砂絵が言い淀んだ。
詳しいことは良治も興味が無かった。一家で片づければ良いだけの話ではある。
「たしかに事件物件で売るに売れないし、誰も引き取らないと無主の不動産として国庫に帰属してしまう、いいじゃないか、砂絵ちゃんが怖くないなら」
「大丈夫、出て来てもオヤジと紫乃さんでしょ、話し合える」
「話し合えるはよかったな」と思わず笑った。その後で砂絵なら大丈夫そうだと踏んだ。「ひとつ頼みがあるんだけど、いいかな」
「うん、何でも」
「兄貴と紫乃さんが最期を迎えたあの建物の裏庭に二人の供養墓を建ててくれないかな、すぐでなくてもいいけど。実質は二人を忘れないための記念碑だけどね。邦子さんはあの家には間違っても行かないと思うし」
良治は、せめてそれだけは叶えてやりたいと思った。
「ああ、そういうことね、了解です。でも具体的にどうしたらいいか分からない」
「兄貴が入る波城家代々の墓がある深遠寺のご住職に詳しく聞いて。紫乃さんの遺骨を預かってる美佐さんには僕から協力を頼んでおくから」
「分かりました。じゃ土地建物の件の方、具体的になったら相談にのってください」
「はいはい。これからも家族三人で仲良く頑張ってな」
「なんか変」
「何が？」
「叔父さんの声、優し過ぎる」
二人そろって笑った。
「じゃ、切るよ、砂絵…」と目を瞑るようにして通話を終えた。無意識で呼び捨てにしていた。ここに至って唯一の身内と感じたからだろう。そう思った。
良治は完成稿をプリンタで打ち出し、電子データを同封して郵便のパックに詰めた。時計を見ると午前十時を回っている。鼓吹社に持参するはずだった

が、体が思うように動かない。このところの諸々で心身共に疲れきっていた。

やっとの思いで最寄りのポストに投函した後、意識が遠のくような感じでその場に崩れ落ちた。陶酔さえ呼び起こす首への締め付け感。それは兄広志とは違い縄によるものではない。では何が？　良治自身にも解からなかった。

車のタイヤと路面が擦れる音が何度も近寄り、例外なく遠退いていった。それは眠気を催すメトロノームのように心地よかった。

―まだ呼ぶなよ、兄貴、書き残したことがあるんだから…

唇は動かしているつもりだったが、もう言葉にはならなかった。

「ね、どうなさったの、大丈夫？　あ、だめ、救急車呼ばなくちゃ、もうやだ、ついてない」

遠くで誰かが困ったような声を出している。それだけは聞こえたような気がする。

目覚めると良治は病院のベッドの上にいた。

「あ、目を開けた。叔父さん、分る？　砂絵だよ、砂絵」

砂絵の顔の向こうに真新しい白衣を着た中年の看護師が立っている。

「砂絵、どうしてここに？」

「叔父さんの携帯の中で最も新しい着信履歴ということで病院から連絡が入ったの」

「誰が助けてくれてここに運び込んでくれたのかな」

良治はそう言いながら身を起こそうとした。

「あ、だめ、大丈夫ですか、起き上がっても」と砂絵が看護師に聞いた。

彼女は微笑をして「点滴中だから今はなるべくそのままで」と言った。

頭を枕の上に戻した良治は、ポストの傍で意識を失ったことをようやく思い出した。「看護師さん、もしご存知でしたら教えてください」

「救命の方の話によると救急車を呼んだ女性は名

乗らずに急ぎ消えたそうです、もちろんあなたを救急の手にきちんと委ねてからですが。なぜ意識を喪失したのか、原因にもよりますが、もしかしたら命拾いしたかなと。まだまだ捨てたものじゃないですね、いまどきの若い女性も」

看護師はなぜか砂絵の肩をポンと叩いて微笑んだ。

「あとで先生が倒れた時の状況とか、それ以前の体調など問診されると思います。それによっては精密な検査になると思ってください」

良治は神妙な顔でうなずいた。確かにここしばらく心身のストレスは激しいものがあった。

「じゃ、私は先生のもとに参りますので安静のままでお待ちください」

そう言うと「いいわね」というように砂絵の眼を見てから部屋を出て行った。

「わるかったね、来てもらって、仕事中だった？」

「大丈夫、緊急の呼び出しだし、普通の勤務形態じゃない仕事なので」

良治は自嘲気味に笑って「やっぱり病気や事故でこうなると身内が呼ばれるんだな」とため息をついた。それは自分が兄の波城の消息を負う理由でもあったのだった。

「だって身内じゃん、わたし。しかもいまは実質女独りの暮しになってるし、叔父さんとたいして変わらなくなっちゃった」暗くならないようにと砂絵は笑顔で締めた。

「そうか、そうだったな…じゃあ、ずっと仲良しでいようか」

「そう、今以上にね」

砂絵はゆっくりとした動作でベッド脇の椅子に腰かけた。外の青空と雲が、くすんだ窓ガラスのせいでぼやけて見える。「窓開けていいのかな」と言ってみた。

良治が「だめだろう」と応えて微笑んだ。

あとがき

厚生労働省・警察庁発表の平成二十八年度中における自殺の状況によると、「六〇歳以上の自殺者数は八八七一人、この内六〇から六九歳は三六二六人、七〇から七九歳は二九八三人、八〇歳以上は二三六二人」である。この中で冷静で理知的な判断で自死を選択した事例がどれほどあるかは知る由もない。高齢者以外の自死に付いても同様である。

なぜ自ら死を選ぶのだろう。その「なぜ」の中に良くも悪くも「いまそこにある社会」の全てがある。そんな気がする。死にゆく者の数だけ「なぜ」がある。そうとも言える。しかし当初からそれを真四角になって描こうとは思わなかった。ごく小市民的な幸せの中にあった男が、自分というものを確かめるために家を出て死に向かって独り歩き出す。一方で奴隷の如く耐えて家族に尽くした女が老母の病死を契機に着の身着のまま同然で家から逃走し、やむなく行き先を死と定める。二人は心身の彷徨の果てに導きあうのだが、私はそれ自体を書こうとしたのではない。失踪されてしまった家族をはじめとする周囲の混乱でもない。ではいったい「何を」…、矛盾するようだが実は自分でも確かなところは分からない。「家族って何」、もしかしたらそんなちっぽけなことかもしれない。違うかもしれない。読者の方が、教えてくださる。そう思っている、ずるい自分がいる。これは解答を摸索している小説のような気がする。もちろん解答が無いという「終着駅」であることすら覚悟して。